

八幡一遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第233集



2019

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



や わ た い ち
八幡一遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第233集

平成31年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター





須恵器小型壺 290 出土状況（北東から）



※おおよそ実物大

須恵器小型壺 290（底部裏面に「佛法爲」と刻書）

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、八幡一遺跡^{やわたいち}の調査成果をまとめたものです。

八幡一遺跡は、山形県南部に位置する東置賜郡川西町^{ひがしおきたまぐんかわにしまち}に所在します。遺跡は最上川に注ぐ元宿川西岸に位置しており、周辺には古代から中世の遺跡が数多く存在しています。

この度、一般国道 113 号梨郷道路の建設工事に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される八幡一遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、「佛法爲」と刻まれた須恵器や板碑、五輪塔、相輪、木棺墓などが発見され、古代から近世にかけて仏教に関する施設が周囲に存在することが分かりました。また、井戸も数多く発見されたことから、近隣に住む人々が給水地として利用していたことも分かりました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 31 年 3 月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 廣瀬 渉

凡 例

- 1 本書は、一般国道 113 号^{りんごう}梨郷道路改築事業に伴う「八幡一遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の作成は、水戸部秀樹が担当し、齋藤稔、黒坂雅人、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第 X 系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。
SK…土坑・木棺墓 SE…井戸 SD…溝 SP…柱穴・ピット SG…川 SX…埋没樹
RP…登録土器 RQ…登録石器 RM…登録金属製品 RW…登録木製品
- 7 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。
- 8 遺物に関する文中で扱われる単独の数字は、遺物番号である。
- 9 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。
- 10 発掘調査、整理作業および本書を作成するにあたり、下記の方々から御指導と御助言をいただいた。（敬称略）
吉田 歆（山形県立米沢女子短期大学）
三上 喜孝（国立歴史民俗博物館）
- 11 本書の執筆分担は、以下のとおりである。
第 I ～ III 章 水戸部秀樹
第 IV 章 第 1 ～ 4 節 株式会社古環境研究所
第 5 節 株式会社吉田生物研究所
第 6 節 株式会社上田墨縄堂
第 V 章 水戸部秀樹

調査要項

遺跡名	やわたいち 八幡一遺跡						
遺跡番号	382 - 194						
所在地	山形県東置賜郡川西町大字西大塚字やわたいち八幡一						
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所						
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター						
受託期間	平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日			平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日			
	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日			平成 30 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日			
現地調査	第 1 次 平成 26 年 5 月 20 日～12 月 19 日			第 2 次 平成 29 年 7 月 3 日～9 月 5 日			
調査担当者	平成 26 年度	調査課長	齊藤敏行				
		課長補佐	須賀井新人				
		主任調査研究員	水戸部秀樹（調査主任）				
		調査研究員	市川光紀				
		調査員	高柳俊輔				
		調査員	渡邊安奈				
	平成 27 年度	整理課長	伊藤邦弘				
		調査員	渡邊安奈（調査主任）				
	平成 29 年度	業務課長	伊藤邦弘				
		調整主幹（兼）課長補佐	須賀井新人				
		主任調査研究員	水戸部秀樹（調査主任）				
		調査員	五十嵐萌				
	平成 30 年度	業務課長	伊藤邦弘				
		専門調査研究員	水戸部秀樹（調査主任）				
調査指導	山形県教育庁文化財・生涯学習課						調査協力 川西町教育委員会
業務委託	基準点測量業務	有限会社大地測量設計事務所（平成 26 年度）					
	遺構測量業務	株式会社パスコ（平成 26 年度）					
	遺物保存処理業務	株式会社吉田生物研究所（平成 27 年度）					
	遺物保存処理業務	株式会社上田墨縄堂（平成 30 年度）					
	理化学分析業務	株式会社古環境研究所（平成 27 年度）					
	理化学分析業務	株式会社加速器分析研究所（平成 30 年度）					
発掘作業員	嵐田久雄	井上芳子	今井絹子	歌丸美津夫	江袋吉男	江袋伸一	大平晶一
	大武 繁	尾形貞一	小倉幸次	金子雄一	菅野孝作	齋藤公一	齋藤政彦
	佐藤哲朗	佐藤美秋	佐藤孝一	佐藤秀造	佐藤昌一	島貫三喜男	東海枝桂子
	高橋和夫	高橋貞夫	武田一彦	竹田國夫	戸田よし子	長谷川力	船山 健
	舟山たみ子	丸山福彦	三浦 弘	渡部 淳	渡部健一	渡部信子（五十音順）	
整理作業員	伊藤さくら	井上和誉	井上真理	加藤志佳	木村由紀子	黒坂孝一	小林美喜
	設楽 淳	廣瀬真理子	渡辺智美（五十音順）				

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の経過と方法	1
3 整理作業の経過	2
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
III 調査成果	
1 概 要	9
2 遺 構	9
3 遺 物	17
IV 理化学分析	
1 放射性炭素年代測定 (1)	35
2 放射性炭素年代測定 (2)	38
3 蛍光 X 線分析	45
4 塗膜構造分析	46
5 樹種同定 (1)	47
6 樹種同定 (2)	48
7 樹種同定 (3)	49
V 総 括	
1 はじめに	51
2 遺 構	51
3 遺 物	52
4 まとめ	53
引用・参考文献	53
遺構実測図	54
遺物実測図	107
報告書抄録	巻末
調査区全体図	付図

表

表 1 遺跡地名表…………… 7	表 11 分析対象…………… 45
表 2 土器…………… 26	表 12 かわらけ付着物の半定量分析結果 (mass%) …… 45
表 3 土製品…………… 30	表 13 金・銀の組成比 (mass%) …… 45
表 4 石器・石製品…………… 31	表 14 分析対象…………… 46
表 5 金属製品…………… 32	表 15 生漆の赤外吸収位置とその強度 …… 46
表 6 木製品…………… 32	表 16 塗膜分析結果…………… 46
表 7 測定試料および処理…………… 35	表 17 八幡一遺跡出土木材の樹種同定結果一覧…………… 47
表 8 測定結果…………… 35	表 18 樹種同定結果…………… 49
表 9 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值) …… 39	表 19 樹種同定結果…………… 49
表 10 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值・暦年較正用 ^{14}C 年 代・較正年代) …… 40	

図 版

第 1 図 調査区概要図…………… 2	第 26 図 調査区壁土層図と川 SG2 のセクションポイント配置図 …… 66
第 2 図 地形分類図…………… 4	第 27 図 調査区北壁土層図 a - a' (西半部) …… 67
第 3 図 遺跡位置図…………… 6	第 28 図 調査区北壁土層図 a - a' (東半部) …… 68
第 4 図 調査区全体図…………… 10	第 29 図 調査区東壁土層図 b - b' …… 69
第 5 図 刻書…………… 22	第 30 図 調査区北・東壁土層図 a - a'・b - b' の注記 …… 70
第 6 図 「爲」の書体 (『五體字類』より) …… 23	第 31 図 川 SG2 土層断面図 c - c' …… 71
第 7 図 暦年較正結果 (1) …… 36	第 32 図 川 SG2 土層断面図 d - d' (北半部) …… 72
第 8 図 暦年較正結果 (2) …… 37	第 33 図 川 SG2 土層断面図 d - d' (南半部) …… 73
第 9 図 暦年較正年代グラフ (参考) ① …… 41	第 34 図 川 SG2 土層断面図 e - e' …… 74
第 10 図 暦年較正年代グラフ (参考) ② …… 42	第 35 図 木棺墓 SK101 …… 75
第 11 図 暦年較正年代グラフ (参考) ③ …… 43	第 36 図 井戸 SE75 …… 76
第 12 図 暦年較正年代グラフ (参考) ④ …… 44	第 37 図 井戸 SE77 …… 77
第 13 図 漆器塗膜の赤外分光スペクトル図 …… 46	第 38 図 井戸 SE6・311 …… 78
第 14 図 調査区全体図 1 …… 54	第 39 図 井戸 SE93 …… 79
第 15 図 調査区全体図 2 …… 55	第 40 図 井戸 SE316・317, 土坑 SK304 …… 80
第 16 図 調査区全体図 3 …… 56	第 41 図 土坑 SK305・310・313・318, ピット SP306 …… 81
第 17 図 調査区全体図 4 …… 57	第 42 図 土坑 SK3・5・7・8・10 …… 82
第 18 図 調査区全体図 5 …… 58	第 43 図 土坑 SK16・18・33・36 …… 83
第 19 図 調査区全体図 6 …… 59	第 44 図 土坑 SK37・41・63・73・74 …… 84
第 20 図 調査区全体図 7 …… 60	第 45 図 土坑 SK76・78・80・81 …… 85
第 21 図 調査区全体図 8 …… 61	第 46 図 土坑 SK91・92・99・100・102 …… 86
第 22 図 調査区全体図 9 …… 62	第 47 図 土坑 SK103・104・112・130・164 …… 87
第 23 図 調査区全体図 10 …… 63	第 48 図 土坑 SK167・170・172・177・190, ピット SP171 …… 88
第 24 図 調査区全体図 11 …… 64	第 49 図 土坑 SK315・319・329・337 …… 89
第 25 図 調査区全体図 12 …… 65	第 50 図 溝 SD1・219～221, 川 SG2 …… 90

第 51 図	溝 SD1・219～221, 川 SG2	91	第 86 図	井戸 SE311 出土の丸太材, 井戸枳縦板	126
第 52 図	溝 SD52	92	第 87 図	井戸 SE311 出土の井戸枳横棧	127
第 53 図	溝 SD68・69	93	第 88 図	井戸 SE6・316・317, 土坑 SK304 出土の須恵器, 石製品, 木製品	128
第 54 図	溝 SD72	94	第 89 図	土坑 SK80・81・99・315 出土の板碑, 須恵器, 陶器	129
第 55 図	溝 SD82・222	95	第 90 図	溝 SD1 出土の須恵器, 土師器, 陶磁器	130
第 56 図	溝 SD223	96	第 91 図	溝 SD1 出土のガラス製品	131
第 57 図	柱穴 SP25・84・114・121～123・135	97	第 92 図	溝 SD1 出土の板碑	132
第 58 図	柱穴 SP141・146・147・153・161・163・169	98	第 93 図	溝 SD1 出土の石製品, 金属製品, 木製品	133
第 59 図	柱穴 SP174～176・178～180・182・183・228	99	第 94 図	溝 SD69・72・82 出土の土師器, 須恵器, 陶磁器, 石器, 石製品	134
第 60 図	柱穴 SP184・195～197・201・307・308, ピット SP229	100	第 95 図	溝 SD83・219 出土の須恵器, 磁器, レンガ	135
第 61 図	柱穴 SP312・314・320・323・324・326・330・ 332・334	101	第 96 図	溝 SD220 出土の須恵器, 黒色土器, 陶磁器, ガラス製品, 石製品, 銭貨	136
第 62 図	ピット SP13・14・28・30～32	102	第 97 図	溝 SD221・301・302, ピット SP87・88・132・200・ 206 出土の土師器, 須恵器, 陶器, 石器, 石製品	137
第 63 図	ピット SP34・35・40・42～45	103	第 98 図	川 SG2 出土の土師器, 須恵器	138
第 64 図	ピット SP46・49～51・54～56	104	第 99 図	川 SG2 出土の須恵器	139
第 65 図	ピット SP57～61・65・66	105	第 100 図	川 SG2 出土の須恵器壺・甕	140
第 66 図	ピット SP67・134・309・321・322, 埋没樹 SX38	106	第 101 図	川 SG2 出土の土師器, 赤焼き土器, 陶磁器, 青磁	141
第 67 図	仏教に関する遺物および領主を示唆する遺物の集成図	107	第 102 図	川 SG2 出土の石器, 石製品	142
第 68 図	木棺墓 SK101 出土の肥前磁器小皿, 寛永通寶, 木棺側 板木棺底板	108	第 103 図	表土・攪乱出土の土師器, 須恵器, 赤焼き土器	143
第 69 図	木棺墓 SK101 出土の木棺下枳, 唐破風状木製品, 花文付木製品	109	第 104 図	表土・攪乱出土の陶磁器, かわらけ (金付着), 土製品, ガラス製品	144
第 70 図	井戸 SE75 出土の曲物, 木槌	110	第 105 図	表土・攪乱出土の剥片, 板碑	145
第 71 図	井戸 SE77 出土の陶器甕, 砥石, 曲物, 井戸枳縦板	111	第 106 図	表土・攪乱出土の五輪塔火輪, 相輪, 銭貨	146
第 72 図	井戸 SE77 出土の井戸枳縦板	112			
第 73 図	井戸 SE77 出土の井戸枳縦板	113			
第 74 図	井戸 SE77 出土の井戸枳縦板	114			
第 75 図	井戸 SE77 出土の井戸枳縦板	115			
第 76 図	井戸 SE77 出土の井戸枳縦板	116			
第 77 図	井戸 SE77 出土の井戸枳縦板	117			
第 78 図	井戸 SE77 出土の井戸枳縦板	118			
第 79 図	井戸 SE77 出土の井戸枳縦板	119			
第 80 図	井戸 SE77 出土の井戸枳縦板	120			
第 81 図	井戸 SE77 出土の井戸枳縦板	121			
第 82 図	井戸 SE77 出土の井戸枳隅柱	122			
第 83 図	井戸 SE77 出土の井戸枳隅柱, 横棧, くさび	123			
第 84 図	井戸 SE311 出土の須恵器小型壺, 曲物	124			
第 85 図	井戸 SE311 出土の木製皿, 棒状木製品, 挟入木製品, 板状木製品	125			

写真図版

- | | | | |
|---------|--|---------|--|
| 巻頭写真 1 | 須恵器小型壺 290 | 写真図版 34 | 土坑 SK7・8・10 |
| 写真図版 1 | 第 1 次調査区遠景 | 写真図版 35 | 土坑 SK16・18・33 |
| 写真図版 2 | 完掘後の調査区全景 | 写真図版 36 | 土坑 SK36・37・41 |
| 写真図版 3 | 第 1 次調査区東部北側・南側遺構検出 | 写真図版 37 | 土坑 SK41・63・73 |
| 写真図版 4 | 第 1 次調査区東部完掘 | 写真図版 38 | 土坑 SK74・76・78・80・81, 板碑 136 出土状況 |
| | 第 1 次調査区中央部北側遺構検出 | 写真図版 39 | 土坑 SK91・92・99・100 |
| 写真図版 5 | 第 1 次調査区中央部南側遺構検出, | 写真図版 40 | 土坑 SK102～104・112・130 |
| | 第 1 次調査区中央部完掘 | 写真図版 41 | 土坑 SK164・167・170・172, ピット SP171 |
| 写真図版 6 | 第 1 次調査区西部北側・南側遺構検出 | 写真図版 42 | 土坑 SK177・190・315 |
| 写真図版 7 | 第 1 次調査区西部完掘 | 写真図版 43 | 土坑 SK319・329・337 |
| 写真図版 8 | 第 2 次調査区東部・西部遺構検出, | 写真図版 44 | 溝 SD1・52・219～221, 川 SG2 |
| | 第 2 次調査区完掘 | 写真図版 45 | 溝 SD52 |
| 写真図版 9 | 調査区北壁 a - a' | 写真図版 46 | 溝 SD68・69・72 |
| 写真図版 10 | 調査区東壁 b - b', 川 SG2 断面 c - c'・d - d' | 写真図版 47 | 溝 SD72・82・222・223 |
| 写真図版 11 | 木棺墓 SK101 断面・木棺出土状況 | 写真図版 48 | 柱穴 SP25・84・114・121～123・141 |
| 写真図版 12 | 木棺墓 SK101 木棺下枠・磁器・唐破風状木製品・
花文付木製品出土状況 | 写真図版 49 | 柱穴 SP135・147・146・153・161 |
| 写真図版 13 | 木棺墓 SK101 完掘, 井戸 SE75 断面 | 写真図版 50 | 柱穴 SP163・169・174～176・228 |
| 写真図版 14 | 井戸 SE75 完掘, 曲物 (21・20) 出土状況 | 写真図版 51 | 柱穴 SP178～180・182・184 |
| 写真図版 15 | 井戸 SE77 井戸枠検出・断面 | 写真図版 52 | 柱穴 SP183・195～197・201・307・308・312,
ピット SP229 |
| 写真図版 16 | 井戸 SE77, 曲物 (25・26) 出土状況 | 写真図版 53 | 柱穴 SP314・320・323・324・326・330・332・334 |
| 写真図版 17 | 井戸 SE77 井戸枠内部完掘, ほぞ接ぎ状況 | 写真図版 54 | ピット SP13・14・28・30 |
| 写真図版 18 | 井戸 SE77 北側縦板検出 | 写真図版 55 | ピット SP31・32・34・35 |
| 写真図版 19 | 井戸 SE77 北側縦板・隅柱検出 | 写真図版 56 | ピット SP40・42～44 |
| 写真図版 20 | 井戸 SE77 西側縦板・隅柱・横棧検出 | 写真図版 57 | ピット SP45・46・49～51 |
| 写真図版 21 | 井戸 SE77 西側縦板・南側縦板・隅柱・横棧検出 | 写真図版 58 | ピット SP54～59 |
| 写真図版 22 | 井戸 SE77 南側縦板・隅柱・横棧検出 | 写真図版 59 | ピット SP60・61・65・66 |
| 写真図版 23 | 井戸 SE77 東側縦板・隅柱・横棧検出 | 写真図版 60 | ピット SP67・134・309・321・322, 埋没樹 SX38 |
| 写真図版 24 | 井戸 SE311 断面・横棧検出 | 写真図版 61 | 木棺墓 SK101 出土の磁器, 銭貨, 木棺部材 |
| 写真図版 25 | 井戸 SE311 横棧検出 (拡大)・完掘 | 写真図版 62 | 木棺墓 SK101 出土の木棺底板, 木棺下枠,
唐破風状木製品 |
| 写真図版 26 | 井戸 SE6 | 写真図版 63 | 木棺墓 SK101 出土の花文付木製品 |
| 写真図版 27 | 井戸 SE93・316 | 写真図版 64 | 井戸 SE75 出土の曲物, 木槌 |
| 写真図版 28 | 井戸 SE316・317 | 写真図版 65 | 井戸 SE77 出土の陶器甕, 砥石, 曲物 |
| 写真図版 29 | 井戸 SE317, 土坑 SK304 | 写真図版 66 | 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 |
| 写真図版 30 | 土坑 SK304・305, ピット SP306 | 写真図版 67 | 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 |
| 写真図版 31 | 土坑 SK305・310, ピット SP306 | 写真図版 68 | 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 |
| 写真図版 32 | 土坑 SK310・313 | 写真図版 69 | 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 |
| 写真図版 33 | 土坑 SK3・5・318 | | |

- 写真図版 70 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板
- 写真図版 71 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板
- 写真図版 72 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板
- 写真図版 73 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板
- 写真図版 74 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板
- 写真図版 75 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板
- 写真図版 76 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板
- 写真図版 77 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板
- 写真図版 78 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板
- 写真図版 79 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板
- 写真図版 80 井戸 SE77 出土の井戸枠隅柱
- 写真図版 81 井戸 SE77 出土の井戸枠隅柱
- 写真図版 82 井戸 SE77 出土の井戸枠横棧
- 写真図版 83 井戸 SE77 出土の井戸枠横棧, くさび
- 写真図版 84 井戸 SE311 出土の須恵器小型壺, 曲物, 木製皿
- 写真図版 85 井戸 SE311 出土の木製品
- 写真図版 86 井戸 SE311 出土の井戸枠縦板, 横棧
- 写真図版 87 井戸 SE311・6・316・317, 土坑 SK304 出土の木製品, 須恵器, 石製品
- 写真図版 88 土坑 SK80・81・99・315, 溝 SD1 出土の板碑, 須恵器, 陶器
- 写真図版 89 溝 SD1 出土の須恵器, 土師器, 陶磁器
- 写真図版 90 溝 SD1 出土のガラス製品
- 写真図版 91 溝 SD1 出土の板碑
- 写真図版 92 溝 SD1 出土の石製品, 金属製品, 木製品
- 写真図版 93 溝 SD69・72・82 出土の土師器, 須恵器, 陶磁器, 石製品
- 写真図版 94 溝 SD82・83 出土の須恵器, 陶磁器, 剥片, 石製品
- 写真図版 95 溝 SD219 出土のレンガ
- 写真図版 96 溝 SD220 出土の須恵器, 黒色土器, 陶器
- 写真図版 97 溝 SD220 出土の陶磁器, ガラス製品, 石製品, 銭貨
- 写真図版 98 溝 SD221・301・302, ピット SP87・88・132・200・206 出土の土師器, 須恵器, 陶器, 石器, 石製品
- 写真図版 99 川 SG2 出土の土師器, 須恵器蓋・無台坏
- 写真図版 100 川 SG2 出土の須恵器無台坏
- 写真図版 101 川 SG2 出土の須恵器無台坏
- 写真図版 102 川 SG2 出土の須恵器無台坏・坏
- 写真図版 103 川 SG2 出土の須恵器有台坏・双耳坏・高坏・鉢
- 写真図版 104 川 SG2 出土の須恵器小型壺・長頸壺・壺
- 写真図版 105 川 SG2 出土の須恵器壺・甕
- 写真図版 106 川 SG2 出土の土師器, 赤焼き土器, 陶器
- 写真図版 107 川 SG2 出土の陶磁器, 石器
- 写真図版 108 川 SG2 出土の滑石製石鍋, 砥石, 球状石製品
- 写真図版 109 表土・攪乱出土の土師器, 須恵器
- 写真図版 110 表土・攪乱出土の須恵器, 土師器, 赤焼き土器
- 写真図版 111 表土・攪乱出土の陶磁器, 内耳土鍋, 瓦質土器, かわらけ(金付着)
- 写真図版 112 表土・攪乱出土の陶磁器, 土製品, ガラス製品, 石器, 板碑
- 写真図版 113 表土・攪乱出土の板碑
- 写真図版 114 表土出土の五輪塔火輪
- 写真図版 115 表土出土の相輪, 銭貨
- 写真図版 116 蛍光 X 線分析と塗膜構造分析
- 写真図版 117 樹種同定(1)の光学顕微鏡写真
- 写真図版 118 樹種同定(2)の光学顕微鏡写真①
- 写真図版 119 樹種同定(2)の光学顕微鏡写真②
- 写真図版 120 樹種同定(2)の光学顕微鏡写真③
- 写真図版 121 樹種同定(3)の光学顕微鏡写真①
- 写真図版 122 樹種同定(3)の光学顕微鏡写真②

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

八幡一遺跡の第1・2次発掘調査は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所による一般国道113号梨郷道路改築事業に伴って行われた。

梨郷道路は、長井市今泉を起点とし、南陽市竹原に至る全長7.2kmの自動車専用道路である。地域高規格道路「新潟山形南部連結道路（延長約80km）」の一部として計画され、今泉交差点の渋滞緩和や事故削減を図るとともに、東北中央自動車道と一体となって地域間交流の促進や置賜地方活性化などの効果が期待される。

八幡一遺跡は平成25年度に山形県教育委員会が行った試掘調査の結果により遺跡であることが確認され、山形県遺跡地図に遺跡番号382-194として登録された。

試掘調査は平成25年9月10日と18日の二日間行われた。掘り下げた9本の試掘トレンチの内、7本から土坑・溝・ピットなどの遺構、あるいは土師器・須恵器などの遺物が確認されている。

試掘調査の結果を受け、事業区内については記録保存を目的とした発掘調査を行うことになった（第1図）。

2 発掘調査の経過と方法

A 発掘調査の経過

第1次調査は平成26年5月20日から開始した。調査区の面積は9,900m²である。油圧ショベルによって表土除去を行い、同時に遺構検出を進めた。

調査区周囲に排土置場を設置する場所がなかったため、排土は調査区西側に仮置きした。東側の調査が終了した後に、排土を西側から東側へ移し、西側の除去した表土も東側に置いた。その後、西側の調査を行った。

7月26日に川西町国際交流協会が遺跡見学に訪れた。出土遺物・現場の見学、発掘体験を行った。参加者数は50名であった。

8月28日に業務委託（株式会社パスコ）によるラジオコントロールヘリコプターを用いた空中写真撮影を行い、

調査区東側の全景写真・俯瞰写真などを撮影した。

11月7日にも同様に空中写真撮影を行い、調査区西側の全景写真・俯瞰写真などを撮影した。同日、川西町立大塚小学校4年生児童が現場見学に訪れた。

11月9日に現地において調査説明会を開催し、調査成果を一般公開した。参加人数は40名であった。

調査は、平成26年11月19日までに終了し、現場事務所も撤収した。調査期間最終日は12月19日としているが、これは調査終了後に行った調査区内の埋戻しに要した期間を含めたものである。

第2次調査は平成29年7月3日から開始した。調査区の面積は300m²である。第1次調査区中央部の北側に接しており、第1次調査実施時は未買収地だったために調査できなかった箇所である。

7月5日から10日にかけて油圧ショベルによって表土除去を行った。同時に遺構検出を進めた。その後、遺構の掘り下げ、図面作成、写真撮影を行った。

8月29日にドローンを用いた空中写真撮影を行い、調査区の全景写真・俯瞰写真などを撮影した。

9月2日に現地において調査説明会を開催し、調査成果を一般公開した。

9月4日に調査を終了し、撤収作業を行った。同日から調査区の埋戻し作業を開始し、翌5日に終了した。

B グリッドの設定

調査区内に設定したグリッドの方角は、平面直角座標系第X系（世界測地系）に沿う。グリッドの名称は、ハイフンによってつながられた二組の数値（例：44 - 428）で表した。この数値は座標値を省略したものである。つまり、南北に増減するX軸の数値の下2桁と、東西に増減するY軸の下3桁の数値の組み合わせでグリッドの位置が表されるようになっている。また、本来はX軸、Y軸とも負の値であるが、ここでは自然数の値に置き換えて使用した。例えば、Xの値が“-216,744”、Yの値が“-67,428”を示すグリッドならば、“44 - 428”と表されることになる。グリッドは4mおきに設置しているので、隣接するグリッドに

移動すると数値が“4”ずつ増減する。グリッド名が示す範囲は、X軸とY軸の交点の第一象限（北東側）となる4m四方の16m²である。

遺物の出土地点の記録については、遺構から出土したものは、遺構と層位とグリッドにより、遺構外から出土したものは層位とグリッドによった。

第1次調査で検出した遺構の登録番号は1（例：SG2）から、第2次調査で検出した遺構の登録番号は301（例：SK310）から付した。同様に遺物の登録番号は第1次調査で出土したものは1（例：RP127）から、第2次調査で出土したものは701（例：RW717）から付した。なお本書内の遺物番号は、遺物の掲載順に新たに付したものである。

3 整理作業の経過

発掘調査終了後から整理作業を開始した。出土遺物には洗浄後に注記を行った。遺跡名として第1次調査で出土したものは“ヤワタイチ”を、第2次調査で出土した

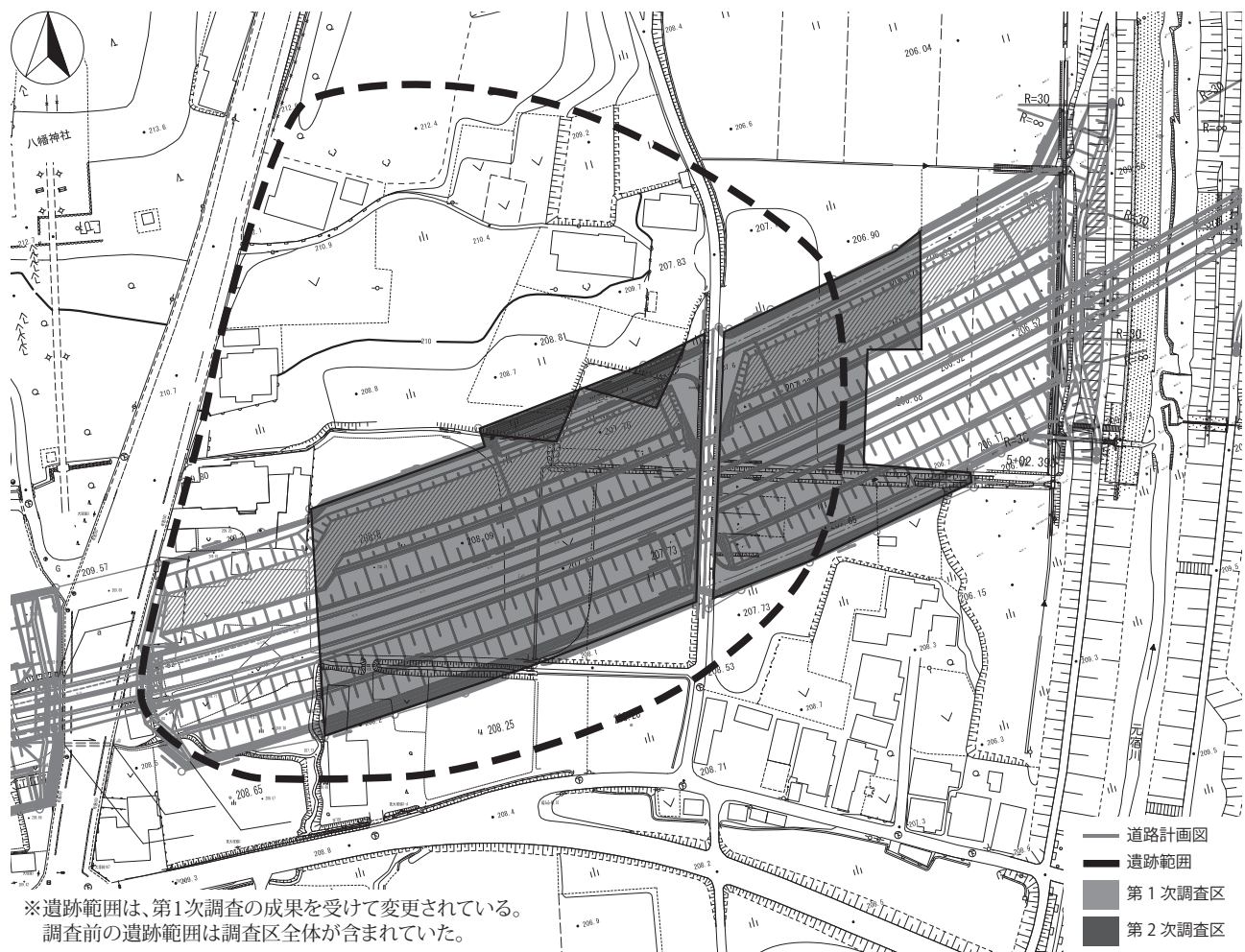
ものには“ヤワタイチ.2”を記し、さらに遺構名、グリッド名、層位名を記した。なお、出土した年月日は省略した。

次に遺物の復元、実測図作成、拓本作成・写真撮影を行い、すべての作業が終了した後にコンテナへ収納した。

有機質遺物のうち重要なものについては業務委託により保存処理を施した。処理方法は、第1次調査で出土したものについては高級アルコール法（株式会社吉田生物研究所）、第2次調査で出土したものについては真空凍結乾燥法（株式会社上田墨縄堂）による。

業務委託による理化学分析では、放射性炭素年代測定（株式会社古環境研究所・株式会社加速器分析研究所）、蛍光X線分析（株式会社古環境研究所）、塗膜構造分析（株式会社古環境研究所）、樹種同定（株式会社古環境研究所・株式会社吉田生物研究所・株式会社上田墨縄堂）を行った。分析報告は第IV章に掲載した。

出土遺物は、報告書に掲載したものと掲載していないものを分けて収納している。なお、報告書に掲載した遺物については、遺物番号を注記に追加した。



第1図 調査区概要図 (S=1/2,000)

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

八幡一遺跡は、山形県東置賜郡川西町大字西大塚字八幡一に所在する。町の北端部付近に当たり、標高は約207.4mである。

川西町は、山形県南部にある米沢盆地の北西部から、米沢盆地西側の玉庭丘陵にまたがって位置しており、面積は166.46km²である。

最上川は町の北東端を北に向かって流れており、町の東端を北上する鬼面川おものがわや、町内を北に向かって流れる犬川・黒川・誕生川などが、これに合流する。八幡一遺跡の東側を北流する元宿川も同じである。八幡一遺跡は、これらの河川の間形成された低地に位置している。調査区の現状は水田であった（第2図）。

町の人口は約16,000人、主な産業は豊かな自然を利用した農業で、県内では庄内平野に次ぐ米どころである。また、良質な米と水から生まれる地酒や、米沢牛の生産も高く評価されている。

気候は盆地特有のもので、寒暖の差が激しく、積雪も多い。

八幡一という字名は、遺跡の西側に鎮座する八幡神社に由来するものであろう。旧社格は郷社とされている。創建は康平年間（1058～1064年）と伝えられているが定かではない。

2 歴史的環境

川西町には、旧石器時代から近世までの196か所（2019年1月現在）の遺跡が分布している（第3図、表1）。

旧石器時代では、尼カ沢遺跡・大林遺跡の存在が知られているが、詳しい調査は行われていない。

縄文時代では、下小松にある千松寺遺跡において、県内では検出例の少ない早期に属する住居が見つかった（川西町教育委員会1980）。

町内では、現在まで弥生時代の遺跡は見つかっていないが、八幡一遺跡からは弥生時代に属する遺物が少量出

土している。周囲から調査区内に流れ込んだものであり、近くに弥生時代の遺跡が存在することをうかがわせるものである。

古墳時代前期には、米沢盆地平野部に比較的大型の古墳が築造されるようになる。米沢盆地中央部に前方後方墳の宝領塚古墳（米沢市）、北部に前方後円墳の稲荷森古墳（南陽市）、西部に前方後方墳の天神森古墳（川西町）が分布する。

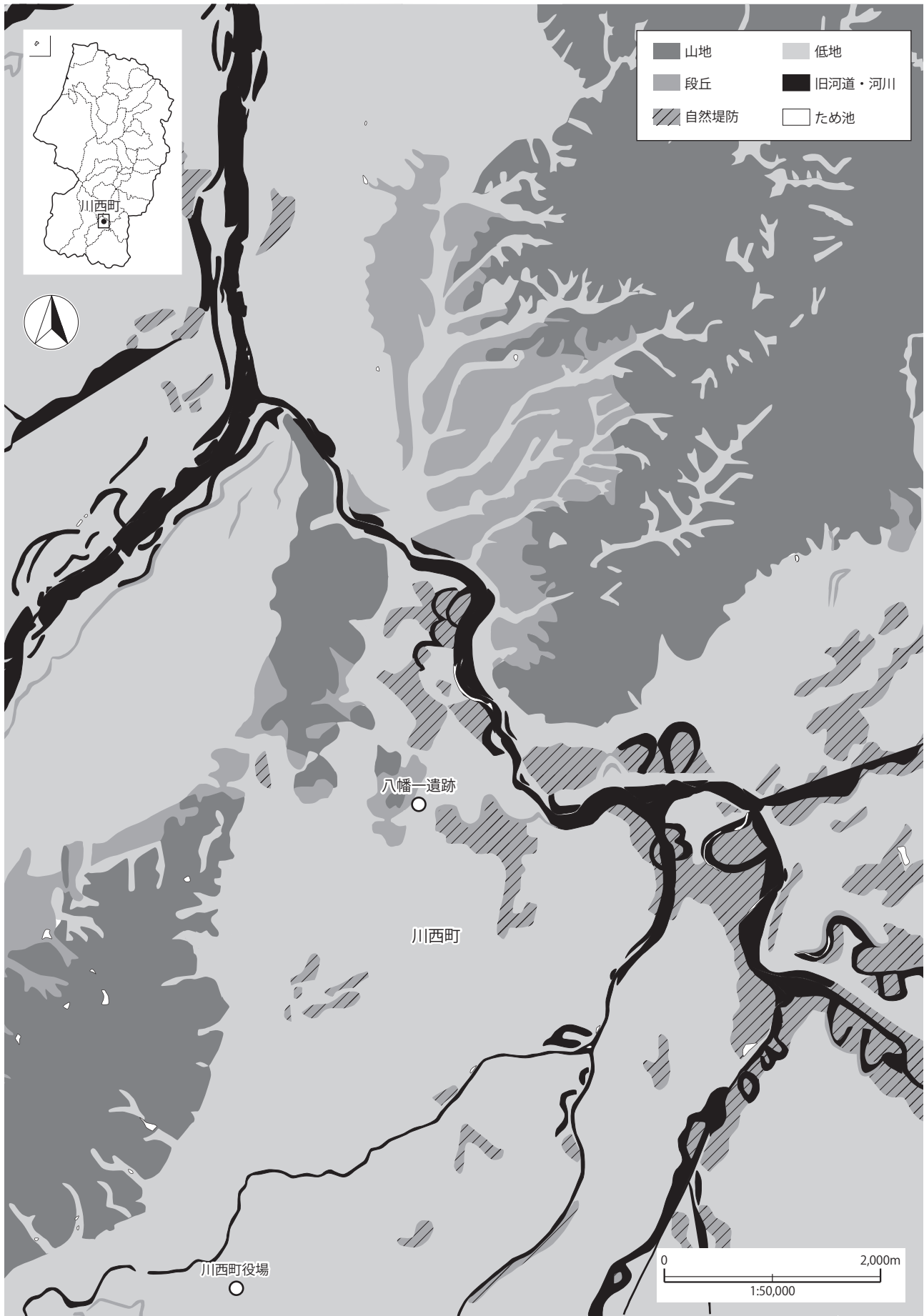
川西町西部の玉庭丘陵には、約200基の古墳からなる下小松古墳群がある。前期の永松寺支群、中期の鷹待場支群・薬師沢支群・尼カ沢支群、後期の小森山支群・陣が峰支群の計6支群が継続して築造されたと考えられている。町では明治大学の協力を得て、これらの古墳群の調査を継続的に実施している。

犬川に合流する黒川の左岸の低位段丘上には、穴塚墳丘群がある。未調査のため詳細は不明であるが、終末期古墳の可能性も考えられている。

古墳時代の集落遺跡では、大塚にある治兵衛館遺跡から、前期～中期の竪穴住居4棟が検出された（川西町教育委員会1999）。後期では、時田にある太夫小屋たゆうごや2遺跡で竪穴住居37棟が検出されている。内21棟からは炭化材や焼土が確認されており、住居が焼失したことを示すものと考えられる。祭祀遺構からは手づくね土器やミニチュア土器がまとまって出土している（財団法人山形県埋蔵文化財センター2001）。

古代の遺跡では、下小松にある道伝遺跡が調査され、9世紀後半から10世紀前半頃の置賜郡衙の比定地の一つと考えられている。圍繞施設や大規模な建物群が検出され、多数の墨書土器のほかに「寛平八年」（896年）と記された木簡などが出土した。また、「四天王」・「観世音経」と記された木簡や「佛」と記された墨書土器なども出土しており、郡衙内でなんらかの法会を行った可能性が示された（川西町教育委員会1981）。

太夫小屋1遺跡からは、筏地業いかだちぎょうを施した建物が検出されている。布掘筏地業建物ぬのぼり3棟、大型礎板を敷設した掘立柱建物6棟を含む計13棟の建物が、規則的に配置さ



第2図 地形分類図

れていた。筏地業や大型礎板の敷設は、軟弱な地盤上で大型建物が沈むのを防ぐための工夫だと考えられている。

遺物では円面硯 34 個体、風字硯 14 個体が出土している。陶硯の出土数では県内最多である。これらのことから、太夫小屋 1 遺跡は 8 世紀末から 9 世紀中頃における置賜地方の中心的な官衙であると推定されている。

川西町時田にある壇山窯跡、隣接する米沢市下小菅にある大神窯跡では、8 世紀中葉から操業していたと考えられる 10 基あまりの窯跡が確認されている。これらの窯跡で焼成された須恵器は、米沢盆地内の官衙関連遺跡から多く出土しており、置賜郡衙が所管する窯だった可能性がある。

長井市今泉にある加賀塚窯跡は、9 世紀第 3 四半期頃の操業、隣接する長井市河井にある蛇崩窯跡（財団法人山形県埋蔵文化財センター 2006）は、9 世紀後半の操業と考えられている。

集落遺跡では、治兵衛館遺跡で 9 世紀代と考えられる竪穴住居・溝・土坑が検出されている。隣接する元宿北遺跡では井戸・土坑などのほか、川跡から 8 世紀後葉の土器がまとまって出土した。中には円面硯 3 点が含まれていた。

太夫小屋 2 遺跡では、平安時代の竪穴住居や掘立柱建物、太夫小屋 3 遺跡では、8 世紀後半から 9 世紀後半の竪穴住居 2 棟が検出された。

中世以降の調査事例は少ないが、歴史的に著名な官人や武將らに関わりの深い土地柄であることから、彼らに関わる遺構、遺物などの発見が期待されている。

鎌倉幕府設立の功労者である大江広元には、出羽国寒河江庄と長井郷（置賜）が与えられたという。寒河江庄は長男親広が領有し、長井郷は二男時広が領有した。時広が長井氏を名乗ることになった。

天授 6 年（1380）には、陸奥国伊達郡の領主であった伊達宗遠（8 代当主）が、置賜に侵攻し制圧した。

治兵衛館跡（治兵衛館遺跡）は、川西町立大塚小学校の敷地内にある。八幡一遺跡から東へ約 300m の距離である。伊達政宗（17 代当主）の時代に大塚氏に仕えた那須治兵衛の居館とされる。発掘調査では堀や井戸・土坑などが検出され、石臼などが出土した。隣接する元宿北遺跡からも中世の井戸や曲物などが見ついている。川西町には他にも多数の城館が存在しているが、詳しく調査

された事例はまだない。

天正 19 年（1591）、伊達政宗は岩出山城に移り、置賜は蒲生氏の領地となった。豊臣秀吉が、伊達氏の領地であった伊達・信夫・置賜を蒲生氏郷に与えたのである。蒲生氏が宇都宮に転封となった後は、置賜は上杉氏の領地となった。

慶長 6 年（1601）に上杉氏は徳川家康から領地の大半を取り上げられ、伊達・信夫・置賜の三郡、30 万石が上杉領とされた。上杉景勝は米沢に入部し城下の整備を行った。以後、川西町は江戸時代を通じて米沢藩領となっている。

徳川幕府が慶応 3 年（1867）に大政奉還によって終焉した後、旧幕府軍と官軍による戊辰戦争が始まり、米沢藩も巻き込まれていった。明治元年（1868）に米沢藩は官軍に降伏した。同 4 年（1871）には、廃藩置県によって米沢藩は廃止され米沢県となり、同年 11 月に置賜県と改められる。

明治 9 年（1876）、山形県・鶴岡県・置賜県が統合され現在の山形県となった。同 11 年（1878）に郡制を敷き、川西地区は東置賜郡に入ることになる。

昭和 30 年 1 月 1 日、小松町・大塚村・犬川村・中郡村・玉庭村の 1 町 4 村が合併して、現在の川西町となり今に至る。

II 遺跡の位置と環境



第3図 遺跡位置図 (S=1/50,000)

表1 遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	八幡一遺跡	集落跡	奈良・平安・中世	65	根岸屋敷跡	城館跡	
2	治兵衛館跡	集落・城館跡	古墳・平安・戦国	66	内館跡	城館跡	
3	元宿北遺跡	集落跡	奈良・平安・中世	67	玉館跡	城館跡	
4	牛谷館跡	城館跡	中世	68	古館跡	城館跡	中世
5	大塚遺跡		中世	69	道伝遺跡	官衙	奈良・平安
6	八幡館遺跡		縄文	70	招城跡	城館跡	
7	大塚城跡	城館跡	中世	71	押川遺跡	集落跡	平安
8	伊勢屋敷跡	城館跡		72	谷地在家跡	城館跡	中世
9	坂井屋敷跡	城館跡		73	佐野屋敷跡	城館跡	中世
10	藤内屋敷跡	城館跡		74	小森山・舞台山古墳群	古墳	古墳・飛鳥・奈良
11	平館跡	城館跡		75	佐野遺跡	集落跡	平安
12	加藤館跡	城館跡	中世	76	六角遺跡	集落跡	平安
13	林崎館跡	城館跡	中世	77	片町東遺跡	集落跡	平安
14	嶋津館跡	城館跡		78	小松嶋貫屋敷跡	城館跡	
15	寺嶋館跡	城館跡	中世	79	飛行壇跡		中世
16	皆川館跡	城館跡	中世	80	尼力沢遺跡		旧石器・縄文
17	寒河江館跡	城館跡	中世	81	尼力沢土壇		中世
18	黒沢館跡	城館跡	中世	82	尼力沢経塚	経塚	中世
19	荒小屋遺跡	包蔵地	古墳	83	下小松山墳丘群(尼力沢支群)	古墳群	古墳
20	仲沖遺跡	散布地	平安	84	千松寺遺跡	集落跡	古墳・飛鳥・奈良
21	仲沖館跡	城館跡	中世	85	カノウ壇跡		中世
22	龍蔵北遺跡	集落跡	奈良・平安	86	千松寺南遺跡		平安
23	八幡西遺跡	集落跡	奈良・平安・中世・近世	87	千松寺遺跡	集落跡	平安
24	大林遺跡		旧石器・縄文・平安	88	尼が沢古墳群	古墳群	古墳・飛鳥・奈良
25	土白館跡	城館跡	中世	89	尼力沢南遺跡		中世
26	朽谷館跡	城館跡		90	正安寺古墳群	古墳群	古墳・飛鳥・奈良
27	菅原館跡	城館跡	中世	91	下小松山墳丘群		古墳～中世
28	梅津館跡	城館跡		92	塩の沢遺跡	散布地	縄文
29	田制館跡	城館跡		93	井上館跡	城館跡	中世
30	清六清水遺跡	遺物包蔵地	奈良・平安	94	小松城跡	城館跡	中世
31	安海壇遺跡	墳墓	中世	95	天神森古墳	古墳	古墳前期
32	壇場遺跡			96	天神南遺跡	散布地	縄文・平安
33	南八ヶ森遺跡	祭祀跡	不明	97	船山館跡	城館跡	中世
34	根岸館跡	城館跡		98	大内屋敷跡	城館跡	
35	原前屋敷跡	城館跡		99	原田城跡	城館跡	
36	大津賀館跡	城館跡		100	平野地遺跡	集落跡	縄文
37	北八ヶ森遺跡	散布地	旧石器	101	平谷地古墳群	古墳群	古墳・飛鳥・奈良
38	今泉広窯跡群	窯跡	平安	102	大光院経塚	経塚	中世
39	加賀塚窯跡	窯跡	平安	103	置賜山土壇		中世
40	蛇崩窯跡	窯跡	平安	104	東陽寺遺跡	散布地	平安
41	源徳原館跡	城館跡	中世	105	平谷地遺跡	集落跡	縄文
42	河井山古墳群(河井山遺跡群)	古墳	旧石器・古墳	106	片倉館跡	城館跡	中世
43	東峯山遺跡	集落跡	旧石器・奈良・平安	107	金堀清水洞窟		中世
44	界斎遺跡	散布地	縄文	108	羽山館跡	城館跡	中世
45	古屋敷遺跡	城館跡	中世	109	八幡原遺跡		縄文
46	時庭館跡	城館跡	中世	110	北館南館	城館跡	中世
47	黒沢北館跡	城館跡	中世	111	緒形館跡	城館跡	
48	黒沢館跡	城館跡	中世	112	穴塚墳丘群	墳墓	奈良?
49	黒沢中館跡	城館跡	中世	113	太夫小屋1遺跡	官衙跡	平安
50	歌丸館跡	城館跡	中世	114	太夫小屋2遺跡	散布地	古墳・平安
51	今泉館跡	城館跡	中世	115	太夫小屋3遺跡	集落跡	奈良・平安
52	二ツ壇跡	塚跡	不明	116	大門屋敷跡	城館跡	中世
53	陣ヶ峰館跡	城館跡	平安	117	田中館跡	城館跡	
54	添川古館跡	城館跡	中世	118	柳沢館跡	城館跡	中世
55	添川館跡	城館跡	中世	119	柳沢館	城砦	戦国
56	下小松古墳群(陣ヶ峰支群)	古墳群	古墳	120	茨虫屋敷跡	城館跡	
57	下小松山墳丘群(永松寺支群)	古墳群	古墳	121	飛尻坂館跡	城館跡	中世
58	下小松山墳丘群(永松寺支群)	古墳群	古墳(4世紀)	122	西相馬山遺跡		縄文
59	下小松山墳丘群(中間支群)	古墳群	古墳	123	馬伏屋敷跡	城館跡	
60	下小松山墳丘群(永松寺支群)	古墳群	古墳	124	山口遺跡		縄文
61	下小松山墳丘群(薬師沢支群)	古墳群	古墳	125	南相馬山遺跡		
62	下小松山墳丘群(中間支群)	古墳群	古墳	126	相馬山遺跡		
63	下小松山墳丘群(小森山支群)	古墳群	古墳	127	大西屋敷跡	城館跡	
64	下小松山墳丘群(尼力沢支群)	古墳群	古墳	128	申洗遺跡		縄文

II 遺跡の位置と環境

番号	遺跡名	種別	時代
129	虚空蔵山遺跡	散布地	縄文
130	壇山古窯群	窯跡	平安・奈良
131	虚空蔵山B遺跡	集落跡	縄文
132	下沖館跡	城館跡	中世
133	雲珠田館跡	城館跡	中世
134	石塚館跡	城館跡	中世
135	東堂館跡	城館跡	
136	上高江館跡	城館跡	中世
137	笹田館跡	城館跡	中世
138	上沖館跡	城館跡	中世
139	石橋館跡	城館跡	中世
140	西在家館跡	城館跡	中世
141	館在家館跡	城館跡	中世
142	鍛冶作館跡	城館跡	中世
143	田嶋在家館跡	城館跡	中世
144	堀金館跡	城館跡	
145	館之在家館	城館跡	中世
146	東江股	集落跡	縄文(晩期)
147	台之南館跡	城館跡	中世
148	錦戸館跡	城館跡	中世
149	尾長島館跡	城館跡	中世
150	橋本館跡	城館跡	中世
151	香坂屋敷跡	城館跡	
152	尾長島唐屋敷跡	城館跡	
153	小形屋敷跡	城館跡	中世
154	江上屋敷跡	城館跡	
155	与惣兵衛屋敷跡	城館跡	
156	高豆蔻館跡	城館跡	中世
157	平賀屋敷跡	城館跡	
158	長谷部屋敷跡	城館跡	中世
159	近藤屋敷跡	城館跡	
160	茗部屋敷跡	城館跡	中世
161	黒川遺跡	集落跡	平安
162	樋口館跡	城館跡	中世
163	十左衛門屋敷跡	城館跡	中世
164	黒川遺跡	集落跡	平安
165	岡崎御殿跡	城館跡	中世
166	四谷遺跡		平安
167	大坊遺跡		中世
168	大坊屋敷跡	城館跡	平安
169	伊藤伝屋敷跡	城館跡	
170	黒川遺跡	集落跡	平安
171	長澤屋敷跡	城館跡	中世
172	八日町屋敷跡	城館跡	中世
173	大河原屋敷跡	城館跡	
174	林在家跡	城館跡	
175	青木館跡	城館跡	
176	馬場屋敷跡	城館跡	中世
177	布施館跡	城館跡	中世
178	津右衛門屋敷跡	城館跡	中世
179	畑中館跡	城館跡	中世
180	大橋遺跡		古墳
181	洲島唐屋敷跡	城館跡	
182	高山島貫屋敷跡	城館跡	
183	庄左衛門屋敷跡	城館跡	
184	瀬兵衛屋敷跡	城館跡	
185	地藏塚跡		中世
186	三十郎屋敷跡	城館跡	中世
187	善之丞屋敷跡	城館跡	中世
188	吉田館跡	城館跡	中世
189	吉田中遺跡	集落跡	古墳
190	主計館跡	城館跡	中世
191	吉野在家跡	城館跡	
192	孝右衛門屋敷跡	城館跡	

番号	遺跡名	種別	時代
193	乱場遺跡		中世
194	角之目館跡	城館跡	中世
195	北徳田遺跡	散布地	縄文
196	梨郷南館跡	城館跡	
197	梨郷小館跡	城館跡	
198	酒町遺跡	散布地	縄文(中期)
199	芹ヶ窪遺跡	散布地	縄文・平安
200	小山B遺跡	散布地	縄文(晩期)
201	小山西遺跡	散布地	平安
202	経塚山南遺跡	散布地	縄文
203	小山A遺跡	散布地	縄文
204	平野古窯跡	窯跡	奈良・平安
205	二本木遺跡	散布地	奈良・平安
206	七拾苅遺跡	散布地	奈良・平安
207	梨郷古墳群	古墳群	古墳(終末期)
208	中島平遺跡	集落跡	縄文(前期)
209	平野A遺跡	集落跡	縄文
210	平野C遺跡	散布地	縄文
211	平野B遺跡	散布地	縄文
212	平野山田遺跡	散布地	奈良・平安
213	長峰遺跡	散布地	縄文
214	竹の俣遺跡	散布地	奈良・平安
215	小関館跡	城館跡	中世
216	稲荷前遺跡	散布地	縄文
217	水上遺跡	散布地	縄文
218	小伊佐沢遺跡	散布地	縄文
219	菅沢遺跡	散布地	縄文
220	下伊佐沢館跡	城館跡	中世
221	中屋敷遺跡	散布地	縄文
222	河井山Ⅱ遺跡	集落跡	旧石器
223	西前遺跡(河井山遺跡群)	遺物包蔵地	縄文
224	井戸尻三間屋敷館跡	城館跡	中世
225	河井山古墳群	古墳群	古墳
226	又ヶッポ遺跡	集落跡	縄文(早・前期)
227	蔭畑遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安
228	雨沼B遺跡	集落跡	縄文(後・晩期)・奈良・平安
229	龍樹山館跡	城館跡	
230	竜樹山古墳群	古墳群	古墳
231	稲荷山古墳群	古墳群	古墳
232	経塚山古墳群	古墳群	古墳
233	宮城遺跡	集落跡	縄文(早・前・中期)・奈良
234	宮城墳墓	火葬墳墓	平安
235	梨郷上館跡	城館跡	
236	稲荷林遺跡	集落跡	平安・中世
237	円行寺遺跡	散布地	中世
238	松木壇遺跡	散布地	平安
239	蔵庭遺跡	散布地	
240	天王山古墳群	古墳群	古墳
241	下大作遺跡	散布地	平安
242	井島遺跡	散布地	奈良・平安
243	割田館跡	城館跡	
244	山田遺跡	散布地	平安・中世
245	白山田遺跡	散布地	平安
246	石ヶ窪A遺跡	集落跡	縄文(前・中期)・奈良・平安
247	金山遺跡	散布地	縄文(早期)
248	牛ヶ首A遺跡	集落跡	平安・中世
249	羽黒堂遺跡	散布地	縄文
250	治兵衛壇遺跡	散布地	平安
251	梨郷新館跡	城館跡	
252	竈山館跡	城館跡	中世
253	片岸遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
254	片岸館跡	城館跡	
255	赤松山館跡	城館跡	

Ⅲ 調査成果

1 概要

A 調査区の設定

調査区は、道路改築事業の施工範囲と試掘調査の結果を受けて、山形県教育委員会の指示通りに設定した。幅70m、長さ209mで、北東から南西に延びる平行四辺形状の調査区である。

第1次調査区の面積は9,900m²、第2次調査区は300m²である。現行の用水路や町道などにより8区画に分断されている。

遺構検出を行った地山面の標高は、調査区の東端部で206.5m付近、西端部で207.9m付近である。西から東へ向かって緩やかに下っていく地形であり、約70m先には元宿川が北へ向かって流れている。

遺構の分布範囲は、調査区の北側と南東側については、外に続いて行くことは間違いない。一方東側については、調査区の東端部が当遺跡の東限に相当すると見て良い。西側と南西側については、遺構の数は少ないが、遺跡の範囲を確定するには、さらなる調査が必要だろう。

B 基本層序

調査区の北壁（第26～28・30図、写真図版9）と、東壁（第29・30図、写真図版10）の断面図が基本層序に相当するものである。調査区内は、厚さ約20～60cmの表土（耕土）に覆われている。表土を除去し遺構が確認できる層位を地山とした。地山はシルトだが、砂質や粘質のところもある。

地山とした層は周辺の地形と同じく東へ向かって下がっていく。しかしこれらの層の傾斜はとても緩やかであり、ほぼ水平に堆積していったといえるほどだ。流れ込んだ水も滞留しやすく、湿地のような状態だったと考えられる。

C 遺構と遺物の分布

調査区全体図を第4・14～25図に掲載した。また、各図を統合した全体図は、付図として巻末に収納している。

遺構の配置・番号などは、これらの図を参照されたい。

調査区の全景写真は、写真図版1～8に掲載した。遺構の検出状況と完掘状況がある。

調査区の中心では、南西から北西に向かって川SG2が検出された。調査区総面積のおよそ3分1の面積をもつ遺構である。川といっても常に水が流れているようなものではなく、雨水などが集まったときだけ水が流れるような流路程度のものであったと考えられる。

川SG2の北側に井戸や土坑・木棺墓・柱穴などが検出されている。また、南東側にも井戸や土坑などがわずかに検出された。ほかに現代の遺物を含んだ溝や土坑なども多く見つかっている。むしろこれら現代の遺構（攪乱と呼ぶ）の方が、数の上では優勢であり、調査区内の遺構の配置を見る上では注意が必要であろう。

出土遺物は、縄文時代のものから現代のものまで多種多様であるが、遺構については状況が異なる。縄文時代から古墳時代の遺構は検出されておらず、古代の遺構も確実なものはない。攪乱を除けば、中世から近世の遺構が主体となる。

遺物の多くは川SG2の北岸付近から出土したものである。攪乱からも各時代の遺物が出土している。もともと付近に埋没していた遺物が、用水路などを埋める際に一緒に入ってしまったものである。

掲載した遺構の平面図において、柱穴と判断した遺構内には柱痕跡を破線で示していることがある。この場合、図が煩雑にならないよう下端線を割愛したものもある。なお、柱穴内の土色・土質変化部分を柱痕だと判断した場合でも、柱を抜き取った痕跡である可能性は残る。

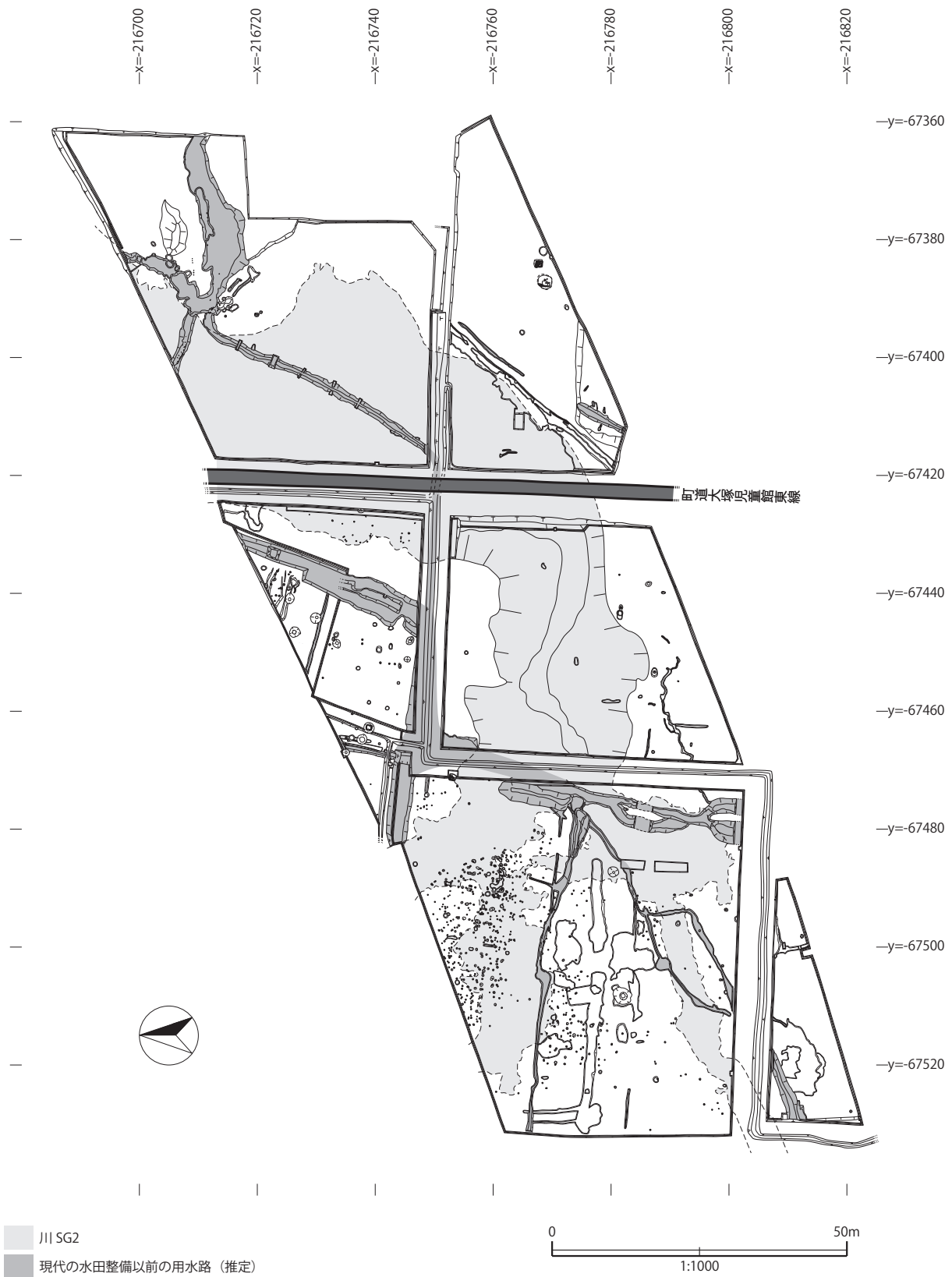
2 遺構

A 木棺墓

木棺墓 SK101（第35図、写真図版11～13）

調査区西半部北側の52-472グリッド付近に位置する。平面形は長方形で、規模は南北1.2m、東西1.1m、深さは検出面から48cmである。底面上に木棺が納められて

Ⅲ 調査成果



※縮尺 1 : 250 の調査区全体図は付図として巻末に収めた。
また、同図を分割したものを第 14 ~ 25 図に掲載した。

第 4 図 調査区全体図 (1 : 1,000)

いたことから、木棺墓であると考えられる。木棺墓内の土壌の分析は行っていない。

木棺は底部付近が残っているだけで、ほかは腐食して分解されてしまったようだ。木棺は3枚の底板の脇に側板を立てて作られていた。蓋は残っていなかった。底板と側板の接合は木釘を使用している。

木棺の下には、はしご状に組まれた枠が配置されていた。遺体を入れた木棺の重量を支持するための枠であろう。枠の大きさは木棺と完全に一致しており、枠も木棺の一部だと考えられる。

枠の下には装飾の施された板が4枚出土した。唐破風状木製品と花文付木製品と名付けたものが2枚ずつである。花文付木製品19は2つに折れている。何らかの葬送儀礼に用いたものを副葬したのではないかと推測している。ほかに2か所を打ち欠いた肥前磁器の小皿1と寛永通寶3枚(2～4)が出土した。いずれも副葬品であろう。寛永通寶は3枚のみだが、六道銭の一部と考えられる。

出土遺物から、木棺墓SK101に遺体を埋葬したのは16世紀後半以降である。

B 井戸

井戸は7基検出された。井戸の底は帯水層である砂層まで達しており、湧水を確認できた。7基のうち、3基には井戸枠が備えられていた。しかし、そのうち2基からはほとんどの井戸枠材が抜き取られていた。

井戸 SE75 (第36図、写真図版13・14)

調査区南東端の68 - 388グリッド付近に位置する。上端の平面形は楕円形だが、これは井戸枠を抜き取った際に広げたためであろう。下端の平面形は方形であり、本来の井戸の位置はこの下端が示すとおりと考えられる。

規模は長軸2.45m、短軸2.35m、深さは検出面から1.36mであり、湧水を確認できた。

内部の外周部分などから多数の木片が露出しているが、これらは地山内に入り込んでおり、当井戸の出土遺物ではない。地山形成時に流れ込んだものである。

内部は井戸枠を抜き取る時に大きく攪乱されており、井戸構築時の掘方の形状も失われている。

遺物は、曲物20・21と木槌22などが出土した。曲物は集水施設として井戸底に設置されたものが、抜き取られて廃棄されたものの可能性がある。

最下層(7層)から出土したスギの木片を放射性炭素年代測定で分析したところ、およそ14世紀代という結果であった。

井戸 SE77 (第37図、写真図版15～23)

井戸SE75の東隣に位置する。上端と下端の平面形はおおよそ方形であり、これは井戸の掘方の形状が残ったものである。規模は南北1.48m、東西1.3m、深さは検出面から1.0mであり、湧水を確認できた。

井戸枠は内側に傾いている箇所はあるが、抜き取られてはいなかった。ただし、井戸内から井戸枠の部材と見られる木材も出土していることから、井戸枠の上半部を切り取って回収し、不要な木材を内部に廃棄したと考えることもできる。井戸枠の上端部は腐食しており、本来の高さは分からない。

この井戸は、縦板組隅柱横棧どめ井戸と呼ばれるタイプである。井戸底の四隅に隅柱を立て、それぞれを横棧でつないでいる。つなぎ方は、ほぞ継ぎであり、隅柱にほぞ穴を開け、横棧の両端部にほぞを作り出している。ほぞ穴が貫通する“通しほぞ”という技法である。また、横棧のほぞ部分の中心にくさびを打ち込み連結を強固にしている。なお、隅柱106と横棧110の接合部分にも、くさび114が打ち込まれていた。

隅柱と横棧で組んだ枠の外側に縦板を幾重にも並べて井戸枠としている。縦板は幅も厚さもさまざまで、多いところでは4枚重ねにされていた。

最終的には井戸は壊され、内部に部材が廃棄されて土砂で埋め戻されている。井戸枠以外の出土遺物は陶器甕23、砥石24、曲物25・26などがある。曲物は集水施設として井戸底に設置されたものが、抜き取られて廃棄されたものの可能性がある。

2点のスギの縦板を放射性炭素年代測定で分析したところ、およそ10～12世紀前半という結果であった。分析に用いた試料は製材された縦板であるため、木の伐採年代を正確に知ることはできない。分析には樹皮に近い部分を試料とする必要がある。分析の結果からは、10～12世紀前半に生育していた木を使用したということは言える。陶器甕23は13～14世紀の所産と考えられる。井戸SE77の廃絶時期はこのあたりであろう。

井戸 SE311 (第38図、写真図版24・25)

調査区中央部北端の40 - 464グリッド付近に位置する。

上端と下端の平面形は円形である。規模は直径 1.76m、深さは検出面から 2.35m であり、湧水を確認できた。

井戸枠はほとんどが抜き取られていたが、縦板数枚と井戸底に設置した横棧が残されていた。内部からは、埋め立て時に廃棄されたと見られる縦板やその破片、横棧の破片も出土している。

井戸底の横棧のうち、北側と南側のものの両端には、ほぞ穴が開けられ、東側と西側の横棧の両端はほぞとなっている。三枚ほぞ差という組み方である。くさびは横棧 128 の片方のほぞの先端にのみ打ち込まれていた。

断面図の 4～9 層が井戸枠の裏込め土、6 層が井戸枠抜き取り後に井戸内に埋められた層、1～3 層が井戸枠を抜き取るために掘り込んだ層である。井戸の廃絶時の状況が良く理解できる土層であった。井戸底の横棧は、抜き取るのは困難だと判断され残されたのだろう。縦板 123・124 も井戸内に残されていた。

遺物は、井戸枠の部材のほか、須恵器小型壺 115 や曲物 116、木製皿 117 などの木製品が出土した。曲物は集水施設として井戸底に設置されたものが、抜き取られて廃棄されたものの可能性がある。

裏込め土から出土した小枝片を放射性炭素年代測定で分析したところ、およそ 7 世紀後葉から 8 世紀後葉という結果であった。古代の遺物も出土したが、曲物や井戸枠、周囲の遺構の状況から、この井戸は中世の所産だと考えられる。115 や小枝片は付近に存在したものが、井戸の構築時、または廃棄時に混入したものであろう。

井戸 SE6 (第 38 図、写真図版 26)

調査区中央部北端の 32 - 448 グリッド付近に位置する。平面形は上端が不整形で、下端が円形である。規模は長軸 1.53m、短軸 1.31m、深さは検出面から 3.33m であり、湧水を確認できた。

井戸 SE6 の上半部は上に向かって広がるが、下半部はほぼ真っ直ぐな円筒形である。最終的には、検出面まで埋め立てられていた。

内部から井戸枠の部材は出土しなかったため、素掘り井戸ということになる。井戸枠なしでは内部の壁が崩れるのを防げたかどうか疑問であるが、長期間の利用ができたかどうかは別として、井戸として使用することはできただろう。

遺物は須恵器蓋 130 などが出土したが、これも混入し

たものであり、周囲の遺構の状況から推察すると、やはり中世に構築された井戸だと考えられる。

井戸 SE93 (第 39 図、写真図版 27)

調査区西半部の 84 - 512 グリッド付近に位置する。平面形は上端が不整形で、下端が円形である。規模は長軸 4.24m、短軸 2.74m、深さは検出面から 2.74m であり、湧水を確認できた。やはり素掘り井戸である。

上半部が大きく開く形状となっているが、これは大型の土坑が重複しているためである。土坑部分の覆土は現代の遺構と同じ様相であった。本来の井戸 SE93 は、土坑の下に伸びる円筒形の部分のみである。

時期の分かるような出土遺物はなかったが、周囲の遺構の状況や、ほかの井戸との類似性から推測すると、この井戸 SE93 もおそらく中世に属するものと考えられる。

井戸 SE316 (第 40 図、写真図版 27・28)

調査区中央部北端の 28 - 448 グリッド付近に位置する。平面形は上端が不整形で、下端が円形である。規模は長軸 1.8m、短軸 1.68m、深さは検出面から 3.03m であり、湧水を確認できた。

内部から井戸枠の部材などは出土しておらず、素掘り井戸だと考えられる。上半部は上に向かって広がっているが、下半部は徳利状である。最終的には検出面まで埋め立てられていた。

遺物は、炭化物が付着した台石 131 と指物 132 などが出土した。一緒に出土した小枝片を放射性炭素年代測定で分析したところ、およそ 13 世紀後葉から 14 世紀末という結果であった。

井戸 SE317 (第 40 図、写真図版 28・29)

調査区中央部北端の 24 - 440 グリッド付近に位置する。平面形は上・下端とも円形である。規模は長軸 1.84m、短軸 1.5m、深さは検出面から 3.21m であり、湧水を確認できた。

内部から井戸枠の部材などは出土しておらず、素掘り井戸だと考えられる。上半部は上に向かって広がっているが、下半部は円筒形である。最終的には検出面まで埋め立てられていた。

遺物は砥石 133 などが出土した。一緒に出土した小枝片を放射性炭素年代測定で分析したところ、およそ 14 世紀代という結果であった。

C 土 坑

土坑は大きさも形状もさまざまであるが、SK304・305・310・313・318などは、前述した素掘り井戸に形状が似ている。いずれも帯水層まで深さが達しておらず、湧水はない。井戸の試し掘り痕跡の可能性はある。

出土遺物は少なく、時期の判断ができる土坑は少ない。

土坑 SK304 (第 40 図、写真図版 29・30)

調査区中央部北端の 36 - 468 グリッド付近に位置する。平面形は上端・下端とも円形である。規模は直径 1.2m、深さは検出面から 2.38m である。形状は前述した素掘り井戸 (SE6・93・316・317) と良く似ているが、湧水はない。最終的には検出面まで埋め立てられていた。

遺物は須恵器無台坏 134 と木製工具 135 などが出土した。134 は 9 世紀後半頃の所産と考えられるが、同時に出土した加工材の破片を放射性炭素年代測定法で分析したところ、およそ 11 世紀前半から 12 世紀中頃という結果であった。134 は土坑 SK304 の埋め立て時に混入したのと考えて良いだろう。

土坑 SK305・ピット SP306 (第 41 図、写真図版 30・31)

土坑 SK305 は調査区中央部北端の 36 - 464 グリッド付近に位置する。平面形は上端が楕円形で、下端が円形である。規模は長軸 1.08m、短軸 0.93m、深さは検出面から 1.88m である。形状は円筒形で井戸と似ているが、深さが帯水層におよばないため湧水はない。最終的には検出面まで埋め立てられていた。

時期の分かるような出土遺物はなかったが、周囲の遺構の状況や、ほかの土坑との類似性から推測すると、この土坑 SK305 もおそらく中世に属するものと考えられる。

ピット SP306 は井戸 SE305 に重複する浅い遺構である。ピット SP306 の方が先に掘り込まれていた。

土坑 SK310 (第 41 図、写真図版 31・32)

調査区中央部北端の 36 - 464 グリッド付近に位置する。平面形は上端・下端とも円形である。規模は直径 1.68m、深さは検出面から 1.69m である。形状は井戸と似ているが、深さが帯水層におよばないため湧水はない。最終的には検出面まで埋め立てられていた。

時期の分かるような出土遺物はなかったが、周囲の遺構の状況や、ほかの土坑との類似性から推測すると、この土坑 SK310 もおそらく中世に属するものと考えられる。

土坑 SK313 (第 41 図、写真図版 32)

調査区中央部北端の 44 - 468 グリッド付近に位置する。平面形は上端・下端とも楕円形である。規模は長軸 0.84m、短軸 0.74m、深さは検出面から 1.84m である。形状は円筒形で井戸と似ているが、深さが帯水層におよばないため湧水はない。最終的には検出面まで埋め立てられていた。

時期の分かるような出土遺物はなかったが、周囲の遺構の状況や、ほかの土坑との類似性から推測すると、この土坑 SK313 もおそらく中世に属するものと考えられる。

土坑 SK318 (第 41 図、写真図版 33)

調査区中央部北端の 24 - 440 グリッド付近に位置する。平面形は上端・下端とも楕円形である。規模は長軸 0.73m、短軸 0.67m、深さは検出面から 0.84m である。形状は円筒形で井戸と似ているが、深さが帯水層におよばないため湧水はない。最終的には検出面まで埋め立てられていた。

時期の分かるような出土遺物はなかったが、周囲の遺構の状況や、ほかの土坑との類似性から推測すると、この土坑 SK318 もおそらく中世に属するものと考えられる。

土坑 SK3 (第 42 図、写真図版 33)

調査区中央部北側の 48 - 448 グリッドに位置する。平面形は楕円形だが、断面形は不定形であり、人為的な遺構ではないことも考えられる。倒木痕の可能性もある。

土坑 SK5 (第 42 図、写真図版 33)

調査区中央部北側の 40 - 448 グリッドに位置する。円筒形の土坑である。覆土を見ると掘り下げた後に、あまり時間をおかずに検出面まで埋め戻していることが分かる。

前述した井戸の試し掘り痕跡の可能性のある土坑に比べて規模は小さいが、この土坑も同様の遺構かもしれない。

土坑 SK7 (第 42 図、写真図版 34)

調査区中央部北側の 40 - 452 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。検出面まで埋め戻されている。

土坑 SK8 (第 42 図、写真図版 34)

調査区中央部北側の 36 - 452 グリッドに位置する。平面形は円形で、浅い土坑である。

土坑 SK10 (第 42 図、写真図版 34)

調査区中央部北側の 44 - 460 グリッドに位置する。円

筒形の土坑で、検出面まで埋め戻されている。土坑 SK5 と同じく、井戸の試し掘り痕跡かもしれない。

土坑 SK16 (第 43 図、写真図版 35)

調査区中央部北側の 44 - 456 グリッドに位置する。平面は円形で、浅い土坑である。

土坑 SK18 (第 43 図、写真図版 35)

調査区中央部北側の 40 - 444 グリッドに位置する。土坑 SK5 と同じく、井戸の試し掘り痕跡かもしれない。

土坑 SK33 (第 43 図、写真図版 35)

調査区中央部北側の 36 - 428 グリッドに位置する。調査区壁に接しているため西半部のみ調査した。開口部がやや広がる形状である。土坑 SK5 と同じく、井戸の試し掘り痕跡かもしれない。

土坑 SK36 (第 43 図、写真図版 36)

調査区中央部の 68 - 436 グリッドに位置する。川 SG2 の底で検出した。平面形が不定形の浅い土坑である。

土坑 SK37 (第 44 図、写真図版 36)

調査区中央部の 76 - 452 グリッドに位置する。川 SG2 の底で検出した。箱型の土坑であり、内部には数本の木材が廃棄されていた。

土坑 SK41 (第 44 図、写真図版 36・37)

調査区中央部の 56 - 452 グリッドに位置する。平面形は円形で、浅い土坑である。

土坑 SK63 (第 44 図、写真図版 37)

調査区中央部南側の 88 - 452 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は漏斗状である。下端部から 3 本の木材が突き出ている。木材を打ち込んだ何らかの施設であろうか。

土坑 SK73 (第 44 図、写真図版 37)

調査区東部南側の 64 - 396 グリッドに位置する。平面形は円形で、浅い土坑である。

土坑 SK74 (第 44 図、写真図版 38)

調査区東部南側の 72 - 392 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、浅い土坑である。検出面まで埋め戻されている。

土坑 SK76 (第 45 図、写真図版 38)

調査区東部南側の 68 - 380 グリッドに位置する。形状は円筒形で、深さ 0.92m である。検出面まで埋め戻されている。付近に井戸 SE75・77 があることから、この土坑も井戸の試し掘り痕跡の可能性が有る。

土坑 SK78 (第 45 図、写真図版 38)

調査区東部南側の 72 - 384 グリッドに位置する。調査区壁に接しており、北半部のみ調査した。形状は円筒形に近く、検出面まで埋め戻されている。付近に井戸 SE75・77 があることから、この土坑も井戸の試し掘り痕跡の可能性が有る。

土坑 SK80 (第 45 図、写真図版 38)

調査区西部北端の 52 - 488 グリッドに位置する。川 SG2 の埋没後に掘り込まれている。平面形が不定形の浅い土坑である。板碑 136 が出土した。

土坑 SK81 (第 45 図、写真図版 38)

調査区中央部北側の 48 - 476 グリッドに位置する。円筒形の土坑で、土坑 SK5 と同じく井戸の試し掘り痕跡かもしれない。

遺物は須恵器無台坏 137 などが出土した。周囲の遺構の状況から判断すると、137 は後世に混入したものと考えられる。

土坑 SK91・99 (第 46 図、写真図版 39)

調査区西部北端の 52 - 496 グリッドに位置する。両者とも平面形は円形である。断面図から、ほぼ同時に埋め戻されたと考えられる。

遺物は須恵器系陶器壺 138 などが出土した。

土坑 SK92 (第 46 図、写真図版 39)

調査区西部北側の 60 - 488 グリッドに位置する。平面形が円形の浅い土坑である。

土坑 SK100 (第 46 図、写真図版 39)

調査区西部南側の 80 - 488 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。川 SG2 の埋没後に掘り込まれている。

底付近から出土した漆器碗を塗膜構造分析で調べたところ、炭粉漆下地および透明漆層 2 層が確認された。詳しくは第 IV 章第 4 節を参照されたい。漆器碗は遺存状態が悪いため図化しなかったが、おそらく近世以降の所産だと考えられる。

土坑 SK102 (第 46 図、写真図版 40)

調査区西部北端の 56 - 508 グリッドに位置する。円筒形の土坑で、土坑 SK5 と同じく井戸の試し掘り痕跡かもしれない。

土坑 SK103 (第 47 図、写真図版 40)

調査区西部北側の 56 - 508 グリッドに位置する。円筒

形の土坑で、土坑 SK5 と同じく井戸の試し掘り痕跡かもしれない。

土坑 SK104 (第 47 図、写真図版 40)

調査区西部南側の 00 - 492 グリッドに位置する。平面形が楕円形の浅い土坑である。

土坑 SK112 (第 47 図、写真図版 40)

調査区西部北側の 60 - 488 グリッドに位置する。平面形が円形の浅い土坑である。

土坑 SK130 (第 47 図、写真図版 40)

調査区西部北側の 60- 492 グリッドに位置する。円筒形の土坑で、検出面まで埋め戻されている。土坑 SK5 と同じく井戸の試し掘り痕跡かもしれない。

土坑 SK164 (第 47 図、写真図版 41)

調査区西部北側の 48 - 488 グリッドに位置する。平面形が円形の浅い土坑である。

土坑 SK167 (第 48 図、写真図版 41)

調査区西部北側の 56 - 500 グリッドに位置する。平面形が楕円形の浅い土坑である。

土坑 SK170 (第 48 図、写真図版 41)

調査区西部北側の 60 - 492 グリッドに位置する。平面形が隅丸長方形の浅い土坑である。

土坑 SK172・ピット SP171 (第 48 図、写真図版 41)

調査区西部北側の 56 - 496 グリッドに位置する。土坑 SK172 は平面形が隅丸長方形の浅い土坑である。重複するピット SP171 の方が後に掘り込まれている。

土坑 SK177 (第 48 図、写真図版 42)

調査区西部北側の 64- 500 グリッドに位置する。平面形が隅丸長方形の浅い土坑である。

土坑 SK190 (第 48 図、写真図版 42)

調査区西端部北側の 80- 520 グリッドに位置する。平面形が円形の浅い土坑である。

土坑 SK315 (第 49 図、写真図版 42)

調査区中央部北端の 32- 444 グリッドに位置する。平面形は上端・下端とも円形で、断面形は逆台形状である。

周囲には井戸が多く検出されており、井戸の試し掘り痕跡と見られる土坑も多い。この土坑も井戸の試し掘り痕跡かもしれない。

遺物は須恵器無台坏 139、陶器播鉢 140、信楽焼陶器壺 141 などが出土した。

土坑 SK319 (第 49 図、写真図版 43)

調査区中央部北端の 28- 436 グリッドに位置する。平面形が方形に近い浅い土坑である。

土坑 SK329 (第 49 図、写真図版 43)

調査区中央部北端の 20- 440 グリッドに位置する。円筒形の土坑である。小型だが、井戸の試し掘り痕跡かもしれない。

土坑 SK337 (第 49 図、写真図版 43)

調査区中央部北端の 20- 436 グリッドに位置する。平面形が楕円形の浅い土坑である。

D 溝

溝は数多く検出したが、ほとんどが現代の遺物を含んでいた。現代まで利用されていた用水路が、水田の整備によって新たに掘り直されたために不要となり、埋められたのである。その際に縄文時代から現代までの遺物が多数混入したようだ。

ほとんどの用水路は現代に埋められたが、いつから存在していたのかは不明である。おそらく古くても近世であろう。

これらの用水路を現行の水路とつなぎ復元したものは第 4 図に示した。推定の部分もあるが、大掛かりな水田の整備以前の状況を把握することができる。

溝 SD1 (第 50・51 図、写真図版 44)

調査区北東部を南西から北東に向かって流れる用水路だと考えられる。現代まで利用されて埋められている。現状では、町道大塚児童館東線の西脇を流れる用水路と、調査区東部を西から東へ横断する用水路がその機能を果たしている。

溝 SD1 は北東端で溝 SD220・221 につながる。遺物は、古代から現代のものまで出土している。

溝 SD219 (第 27・30・50・51 図、写真図版 44)

調査区北東部を北西から南東に向かって流れる用水路だと考えられる。南東端で溝 SD221 につながる。また、溝底には多数の杭が打ち込まれていた。

現代まで利用されて埋められており、遺物は現代のレンガなどが出土した。調査区北側の民家がかつてレンガ造りを生業としており、不用品などを廃棄したものだろう。

溝 SD220 (第 29・30・50・51 図、写真図版 44)

調査区北東部を西から東に向かって流れる。西端で溝 SD1 につながる。また、溝脇には数本の杭が打ち込まれていた。

形状は不定形であり、間近に迫った元宿川へ流れ込む水路だったと考えられる。現代まで利用されて埋められている。

遺物は古代から現代のものまで出土した。

溝 SD221 (第 27・30・50・51 図、写真図版 44)

調査区北東部を北東に向かって流れる。西端で溝 SD219・220 につながる。

形状は不定形であり、間近に迫った元宿川へ流れ込む水路だったと考えられる。現代まで利用されて埋められている。

遺物は弥生時代から現代のものまで出土した。

溝 SD52 (第 52 図、写真図版 44・45)

調査区中央部南側に位置する。溝は向きを変えながら西から東へ向かって傾斜している。

遺物は出土しなかった。

溝 SD68・69 (第 53 図、写真図版 46)

調査区中央部北側を南北に流れる用水路だと考えられる。溝 SD68 は溝 SD69 に平行し、北と南の両端部で溝 SD69 に合流する。

溝 SD69 の南端部は、調査区中央部を東西に横断している現行の用水路につながっているだろう。

遺物は中世から現代のものまで出土した。

溝 SD72 (第 54 図、写真図版 46・47)

調査区東部南側を南西から北東に向かって流れる用水路だと考えられる。

遺物は、古墳時代から現代のものまで出土した。

溝 SD82・222 (第 55 図、写真図版 47)

調査区西部南側を南から北に向かって流れる用水路だと考えられる。両者は交差した状態で重複している。

先に曲線的な溝 SD222 が存在し、後に直線的な溝 SD82 に掘り直されたのではないだろうか。大型の溝であり、周囲の水田に水を供給する用水路のなかでも基幹となるものだろう。

遺物は縄文時代から現代のものまで出土した。

溝 SD223 (第 56 図、写真図版 47)

調査区西端部南側を西から東に向かって流れる用水路だと考えられる。東端部の延長上にある溝 SD82 につながる。

遺物は現代のものまで出土した。

E 柱 穴

柱穴は主だったものを第 57～61 図、写真図版 48～53 に掲載した。柱痕、柱根跡、柱抜き痕などが確認できた遺構を柱穴とした。いずれも小型の柱穴であり、その多くは近世に属するものと考えられる。柱穴の配置が規格的なものは少なく、これらを組み合わせた建物などは復元できなかった。

柱穴 SP147・161 の底面には、礎板が敷かれており、柱穴 SP169・201 には柱痕が残っていた。SP147 の礎板 (RW128) は柱を裁断し、中央から 2 つに割ったものだった。この礎板を放射性炭素年代測定で分析したところ、15 世紀後半から 17 世紀前半という結果であった。ほかに時期の分かるような遺物は出土しなかった。

F ピ ッ ト

小型で性格の分からない遺構をピットとし、第 62～66 図、写真図版 54～60 に掲載した。遺物は古代から近世までのものが出土しているが、ピットの多くは中世以降に掘り込まれたものだろう。

G 埋 没 樹

埋没樹 SX38 (第 66 図、写真図版 60)

埋没樹 SX38 のみ図化し掲載した。地山内に埋没している倒木の先端部が、地表に露出しているものではないだろうか。

F 川

川 SG2 (第 26・31～34 図、写真図版 10)

川は 1 本検出した。川 SG2 は調査区の西端、北西端などから調査区中央部に向かって流れ込み、北東へ進路を変えて調査区北西端に抜けていく。最終的には東方を北流する元宿川に流れ込んだだろう。調査区の西端部付近では、後世に行われた地盤の削平により途切れてしまったようだ。

川 SG2 の深さは調査区中央部のところで、遺構検出面から約 1.2m である。調査区中央部は完掘し、調査区東部・西部は遺物が出土する深さまで掘り下げた。

遺物は川 SG2 の北岸付近から出土することが多かった。出土遺物には縄文時代から近世のものが含まれている。

近世のものはわずかな数であり、中世までの遺物が主体である。川 SG2 から出土する遺物は周囲から流入したものがほとんどだと考えられる。北岸付近からの出土量が多いということは、調査区の北側に遺跡の本体となる集落や何らかの施設が存在したことを示唆するものである。

いつ頃から川 SG2 が存在したかどうか、流れ込んだ遺物だけでは判断がつかないが、近世頃までに完全に埋没したようである。川 SG2 の北岸部には、近世の木棺墓 SK101 や柱穴などが掘り込まれている。これらは川 SG2 と重複し、川 SG2 の埋没後に掘り込まれたものが多い。

3 遺物

A 概要

出土した遺物（文化財認定箱数）は、第 1 次調査分が 120 箱、第 2 次調査分が 10 箱（箱の内寸：55 × 39 × 14cm）である。

遺物実測図は第 68 図から第 106 図に掲載した。出土した遺構ごとにまとめている。また、原位置を失っている表土・攪乱から出土した遺物は、後半に一括して掲載した。

掲載した遺物の詳細については、表 2 ～ 6 にまとめている。こちらも併せて参照されたい。

出土遺物には、縄文時代から現代までのものがある。その多くは、川跡の堆積土や溝の埋め立て土から出土している。遺物が廃棄された後、ある程度時間が経過してから遺構の中に流れ込んだものも多いだろう。

第 67 図に出土遺物の中でも注目すべきものをまとめている。仏教に関連する遺物と領主を誰であるかを示唆する遺物である。特に仏教に関する遺物は、各時代にわたってさまざまなものが出土しており、本遺跡とその周辺部どのような営みが行われていたのかを知る手がかりとなるだろう。

B 遺構出土の遺物

木棺墓 SK101（第 68 図 1 ～ 69 図 19、写真図版 61 ～ 63）

1 は肥前磁器の小皿で、内面に呉須による染付が施されている。木棺の下に内面を上にした状態で置かれていた。また、口縁部が 2 か所打ち欠かれていた。17 世紀前半の所産と考えられる。

2 ～ 4 は寛永通寶の銅銭である。2 の裏面には「文」

の字があることから、寛文 8 年（1668）から天和 3 年（1683）に江戸亀戸村で鋳銭されたものと言える。3・4 の裏面に文字はなく、2 と同時期か、より新しいものの可能性がある。木棺墓 SK101 の時期は 17 世紀後半以降と言えるだろう。

5 ～ 12 が木棺の部材で、5 ～ 9 は側板、10 ～ 12 が底板である。13 ～ 15 が木棺の下に添えられたはしご状の枠の部材である。木棺と下枠は木釘によって固定されていたようである。木棺の部材は腐食が進んでいたため、状態の良いものだけを掲載した。出土状況は第 35 図、写真図版 11・12 などを参照されたい。

16・17 を唐破風状木製品、18・19 を花文付木製品と呼ぶことにする。これらを組み合わせ、木釘で固定して使用していたようである。

17 の上に 16、その上に 18 が重ねられていた状態であった。16 ～ 18 には、これらが重ねられた事によってできた痕跡が残っていた。

19 も 18 と同様のものであるが、折れた状態であった。

18 の表面には、墨で花卉と唐草様のものが描かれ、花の中心部は、円盤状の板材を木釘で固定して表現している。また、18 の左右両端の形状も唐草様に作り出している。もし描かれたものが蓮の花と唐草文であれば、仏教との関連が指摘できよう。木棺墓の出土品であり、葬送儀礼に関わるものであれば、その可能性は否定できない。

19 も 18 と同様で、墨で花卉と唐草様の模様が描かれ、円盤状の板材が貼り付けられている。ただし、こちらは木釘を打った穴は残っているが、木釘そのものは失われていた。また、裏面にも墨描きがあるが、位置がずれていることから、下書きであったと見るべきだろう。

10 の樹種はマツ科マツ属（二葉松類）であった。ほかの木棺部材も同じ樹種であろう。

井戸 SE75（第 70 図 20 ～ 22、写真図版 64）

20 は曲物の底板で、一部欠損している。上端と左端には樹皮による縫い留めの痕跡があり、下端には貫通した釘穴がある。樹皮は側板と接合するためのものだろう。樹種はヒノキ科アスナロ属であった。

21 は桶形の曲物である。底板の周囲に 2 枚の側板を巻き付けている。手前と奥の 2 か所を樹皮で縫い留めていた。

22 は柄の部分欠損した木槌である。槌部分だけでな

く、柄も削り出しで作られている。

井戸 SE77 (第71図 23～83図 114、写真図版 65～83)

23は、13～14世紀の所産と考えられる陶器甕の口縁部破片である。

24は、上下端を欠損した砥石である。表裏面・左右両面とも研磨に使用されている。特に裏面に線条痕が多い。

25・26は、桶形の曲物で、作りもほぼ同じである。底板の周囲に1枚の側板を巻き付けている。側板は底板の周りを2周し、1か所で樹皮によって縫い留められていた。側板の内側には、多数の上下方向の切込みが入られ、側板が曲げやすくなるように加工されていた。

27～105は井戸枠縦板で、隅柱と横棧の周囲に打ち込まれていた。全部で108枚が出土したが、遺存状態の悪いものを省いた79枚を図化して掲載した。出土状況は第37図、写真図版18～23などを参照されたい。

縦板の上端はすべて腐食しているため、本来の長さは不明である。幅や厚さはさまざまで、別の用途から転用したものも含まれているだろう。下端部は真っ直ぐに裁断されているもの、斜めに裁断されているもの、逆三角形形状に裁断されているものがあった。

28・75・89の樹種はスギ科スギ属スギであった。

106～109が隅柱で、井戸内の四隅に立てられていた。106が北東隅、107が北西隅、108が南西隅、109が南東隅である。これらには横棧をほぞ継ぎするためのほぞ穴が2か所ずつ開けられている。上端は腐食しており本来の長さは不明である。

106の樹種はスギ科スギ属スギであった。

110～113が横棧で、隅柱と隅柱の間に継がれていた。両端部がほぞに加工されている。隅柱につないだ後に、抜けてしまわないように横棧の両端部にくさびが打ち込まれていた。

112の樹種はスギ科スギ属スギであった。

114はくさびで、隅柱106と横棧110の接合部分に打ち込まれていた。106のほぞ穴が大きかったので補強したものと考えられる。

井戸 SE311

(第84図 115～第87図 129、写真図版 84～87)

115は須恵器の小型壺で9世紀前半頃の所産と考えられる。口縁部のみの少破片である。井戸 SE311は中世に構築されたものと考えられ、115は埋め立て時に混入した

ものであろう。

116は、桶形の曲物で、底板と側板が離れた状態で出土した。実測図はそれぞれ別に作成したが、写真は両者を接合したものを掲載している。

底板の周囲に1枚の側板が一周し、樹皮で縫い留められている。底板と側板を接合するための樹皮による縫い留めも2か所に残っていた。

接合できなかった側板片が多数出土しており、本来はもう1枚、あるいはそれ以上の側板が巻きつけられていたと考えられる。

側板の内側には、多数の上下方向の切込みが入られ、側板が曲げやすくなるように加工されていた。

樹種は底板・側板ともスギ科スギ属スギであった。

117は木製の皿で、轆轤挽きで製作したものと考えられる。表裏面に見える細かい傷は刃物で仕上げをした際に付いたものだろう。樹種はニレ科ケヤキ属ケヤキであった。

118は両端を斜めに切り落とされた角材で、棒状木製品と呼ぶ。用途は不明である。周囲には削り加工が施され、下端部を欠損している。樹種はスギ科スギ属スギである。

119も用途は不明だが、その形状から抉入木製品と呼ぶ。両端と中央部に抉りが入られ、下端部以下を欠損している。枝材を用いており、その両側面、裏面を削り落としている。樹種はバラ科サクラ属である。

120は下端部以下を欠損した板状木製品である。上端部が摩滅していることから、何かの用途に使用したことは分かるが、詳細は不明である。樹種はスギ科スギ属スギである。

121は丸太材で、井戸 SE311に立位の状態で廃棄されていた。上下両端部は斧で切り込みを入れて切断していた。井戸 SE311の取り壊し時に廃棄されたのだろう。樹種はヤナギ科ヤナギ属である。

122は下端部以下を切断された井戸枠縦板の破片である。井戸 SE311の取り壊し時に切断され、廃棄されたのだろう。樹種はスギ科スギ属スギである。

123は全長が分かる井戸枠縦板である。長さは1.82mであるが、井戸 SE311の深さより短い。井戸枠は1段ではなく、複数段重ねて構成されていた可能性がある。樹種はスギ科スギ属スギである。

124は下端部が逆三角形形状に尖る井戸枠縦板である。下端部の表裏面にも削り加工が施されていた。全長は井

戸の深さより短い。樹種はスギ科スギ属スギである。

125 は下端部以下が切断された井戸枠横棧である。SE311 の取り壊し時に切断され、廃棄されたのだろう。井戸底に設置した横棧（126～129）はすべて残っていたので、この125は井戸の上半部に設置された横棧の一部ということになる。樹種はスギ科スギ属スギである。

126～129は井戸底に設置された横棧であり、設置された状態のまま出土した。これらの周りに井戸枠縦板を立てて並べていたと考えられる。出土状況は第37図、写真図版24・25などに掲載している。

126が北側、127が南側、128が西側、129が東側に設置されており、三枚ほぞ差という組み方で継がれていた。126・127の両端部にはほぞ穴が、128・129の両端部にはほぞが作り出されている。くさびは、128の片方のほぞの末端部にだけ打たれていた。樹種は4点ともスギ科スギ属スギであった。

井戸 SE6（第88図130、写真図版87）

須恵器の蓋130が1点出土した。口縁部を欠損している。9世紀前半頃の所産と考えられる。井戸の構築時期は中世だと推察しており、130は埋戻し時に混入したものであろう。

井戸 SE316（第88図131・132、写真図版87）

131は表面に擦痕を有する台石である。上端と左端を欠損し、全面が被熱により黒色化している。被熱は欠損部分にまでおよぶ。裏面には炭化物が付着していた。

132は上方が開く箱型の指物の部材である。上半部を欠損している。左端には側面から2か所の釘穴が開けられ、片方には木釘が残っている。また、右端には表面から2か所の釘穴が開けられ、片方には木釘が残っている。さらに、左右両端に樹皮による縫い留めが行われている。同様の部材4点で箱型の容器を製作したのだろう。樹種はスギ科スギ属スギである。

井戸 SE317（第88図133、写真図版87）

133は砥石で表裏面、左右両面が研磨面となっている。

土坑 SK304（第88図134・135、写真図版87）

134は須恵器の無台坏で、9世紀後半頃の所産と考えられる。

135は先端の尖る木製工具である。上半部の持手部分は円筒形で、下半部は四角錐状になっている。下端部をわずかに欠損している。

土坑 SK80（第89図136、写真図版88）

136は上端部と下半部を大きく欠損した板碑である。額部が突出している置賜型（川崎2013）に分類される。額面と碑面には、何も彫られていない。下端の欠損面は摩滅しており、砥石などに転用したと考えられる。16～17世紀頃の所産と考えられる。

土坑 SK81（第89図137、写真図版88）

137は、須恵器の無台坏で、9世紀第2四半期頃の所産と考えられる。

土坑 SK99（第89図138、写真図版88）

138は、須恵器系陶器の壺で、中世の所産と考えられる。

土坑 SK315（第89図139～141、写真図版88）

139は須恵器の無台坏で、9世紀第1四半期頃の所産と考えられる。

140は陶器の播鉢で、13～14世紀頃の所産と考えられる。内面は摩滅しているが、櫛目は確認できない。櫛目のない部分の破片であろう。

141は信楽焼陶器の壺である。15世紀頃の所産と考えられる。

溝 SD1（第90図142～第93図170、写真図版88～92）

142は須恵器の蓋で、9世紀前半頃の所産と考えられる。内面が摩滅しており、硯に転用されたと考えられるが、墨痕は確認できなかった。

143～147は須恵器の無台坏で、143～145は9世紀第2四半期頃、146・147は9世紀第3四半期頃の所産と考えられる。いずれも底部付近のみの破片試料である。

148は須恵器の長頸壺で、9世紀前半頃の所産と考えられる。

149は須恵器甕の破片を加工して作った盤状土製品である。打撃と研磨により、隅丸方形に整形されているが、下半部を大きく欠損している。

150・151は土師器の甕で、古代に属するものと考えられる。150の内面には黒色処理が施されている。

152は瀬戸美濃陶器の折縁皿で、16世紀末頃の所産と考えられる。

153は瓷器系陶器の播鉢で、13～14世紀頃の所産と考えられる。内面に櫛目が付けられているが、摩滅のために不明瞭である。

154は瓷器系陶器の甕で、13～14世紀頃の所産と考

えられる。

155 は岸窯産の播鉢で、17 世紀頃の所産と考えられる。

156 は陶器の甕で、近世の所産と考えられる。

157 は肥前磁器の碗で、18 世紀後半の所産と考えられる。外面と底部に呉須による染付がある。

158 ～ 162 は現代のガラス製品である。型作りのため、各所にバリが残っている。

158 は万年筆のインク瓶で、底部裏面に「SSS」の浮き彫りがある。大正から昭和の前半頃に、細沼株式会社が製造していた「サンエスインキ」の瓶である。中にわずかにインクの痕跡が残っている。また、ガラスの中には気泡が含まれている。

159 は表面に「浩和オーケッン」の浮き彫りがある薬瓶である。類例には「浩和製薬株式会社」と併記されることもあるようだ。外用鎮痒鎮痛消炎剤の「キンカン」と同様の薬効をもつ薬だったらしいが詳細は不明だ。ガラスの中には気泡が含まれている。

160 は酒類の大瓶であろう。上部に「ゴードー・ゴードー・ゴードー・ゴードー」、下部に「合同酒精株式会社 CONTENTS NET 640cc」、底部に「12」と「円」のような記号の浮き彫りがある。

161 はビールの大瓶で、麒麟麦酒株式会社が製造していた。上部には「キリンビール登録商標」の浮き彫りがある。また、「登録」と「商標」の間には「K」と「B」の合字の浮き彫りもある。底部にはアンダーバーをもつ「14」の浮き彫りがある。昭和 20 ～ 30 年代頃に使用されていた瓶だという（神原 2011）。

162 はビール中瓶で、大日本麦酒株式会社が製造していた。上部に「TRADE ◎ MARK DB（意匠化された文字）」、下部に「DAI NIPPON BREWERY CO LTD」の浮き彫りがある。なお、「CO」の「O」と「LTD」の「D」にはアンダーバーが付く。底部には「◎」を入れた「☆」と「10」の浮き彫りがある。

大日本麦酒株式会社は、明治 39 年（1906）に日本麦酒株式会社、大阪麦酒株式会社、桜田麦酒株式会社が合併して発足した会社である。その後昭和 24 年（1949）に、日本麦酒株式会社と朝日麦酒株式会社に分割された。よってこの瓶は、合併してから分割されるまでの 43 年間のどこかで製造されたものである。

163・164 は板碑で、163 は置賜型、164 は厨子型（加

藤 2008）に分類される。163 は額部が突出しており、額面と碑面には何も彫られていない。頭頂部は欠損しているが、おそらく三角型になるだろう。16 ～ 17 世紀頃の所産と考えられる。

164 は厨子型板碑の中でも単式額部板碑に分類される。厨子の中に板碑を納めた形状を表しているとされる。額部は突出し、額面には 2 条線が彫られている。厨子内に浮き彫りにされたのは板碑全体ではなく、額部だけである。室町時代の所産と考えられる。

165 は石製の陽物である。縄文時代の石棒とは異なり、写実性が高い。

166 は表裏面、左右両面に研磨面を有する砥石である。

167 は銅製の柄鏡の破片である。周縁部の断面形は方形となっている。内面に文様はない。復元径は 112mm である。

168・169 は銅銭である。168 は明の永楽通寶で初鑄年は 1408 年、169 は北宋の治平通寶で初鑄年は 1064 年である。

170 は木製の差歯下駄である。それぞれの歯に 2 つのほぞを作り出し、台部にほぞ穴を 2 か所ずつ開けて接合している。鼻緒を通す穴は先端部に 1 か所、手前に 2 か所開けている。差歯は激しく摩滅している。

溝 SD69（第 94 図 171・172、写真図版 93）

171 は青磁の碗で、外面に鎬蓮弁文が表されている。13 世紀後半頃の所産と考えられる。

172 は砥石で、表裏面、左右両面が研磨面となっている。

溝 SD72（第 94 図 173・174、写真図版 93）

173 は土師器の高坏で、脚部のみの資料である。裾部も欠損している。古墳時代中期頃の所産と考えられる。

174 は須恵器の無台坏で、9 世紀第 1 四半期頃の所産と考えられる。

溝 SD82（第 94 図 175 ～ 190、写真図版 93・94）

175・176 は須恵器の無台坏で、175 が 9 世紀第 1 四半期、176 が 9 世紀第 2 四半期頃の所産と考えられる。

177 は須恵器の壺で、口縁部のみの破片である。9 世紀代の所産であろう。

178 は相馬焼の小碗で、18 世紀頃の所産と考えられる。

179 は唐津焼の碗の少破片である。近世の所産であろう。

180 は陶器の鉢である。岸窯産かもしれない。18 世紀

頃の所産と考えられる。

181 は陶器の播鉢で、内面に 8 本 1 単位の櫛目が施されている。

182 は岸窯産の播鉢で、内面に櫛目が施されているが、摩滅のため不明瞭な状態である。

183 は器種不明の陶器の底部破片である。中央で割れてしまっているが、漆継ぎにより接着され修復されている。漆が内側にはみ出している。

184 は肥前磁器の皿である。17 世紀前半頃の所産と考えられる。

185 は肥前磁器の小碗である。19 世紀頃の所産と考えられる。

186・187 は肥前磁器の碗である。両者とも 18 世紀後半頃の所産と考えられる。

188 は珪質頁岩製の縦長剥片である。当遺跡の北方には旧石器・縄文・平安時代の遺跡とされる大林遺跡が存在する。ほかにも同様の遺跡が存在する可能性は否定できない。当遺跡では縄文時代の石器がいくつか出土していることから、188 も同じく縄文時代の所産だと推察している。

189・190 は砥石で、表裏面、左右両面が研磨面となっている。

溝 SD83 (第 95 図 191 ~ 193、写真図版 94)

191 は須恵器の甕の破片を材料にして作った円盤状土製品である。破片の周囲を打ち欠き、研磨して整形している。甕は 9 世紀代の所産だろうが、円盤状土製品に加工した時期は分からない。

192 は中国産磁器の碗で、16 世紀頃の所産と考えられる。

193 は肥前磁器の碗で、18 世紀後半頃の所産と考えられる。

溝 SD219 (第 95 図 194 ~ 197、写真図版 95)

194 ~ 197 は現代の焼きレンガである。調査区北側の民家がかつて生業として作っていたレンガである。4 点とも破損している。表裏面に“たたら”から切り出した際の糸切り痕が残されている。成形は木製の枠を使用したと考えられる。

溝 SD220 (第 96 図 198 ~ 221、写真図版 96・97)

198 は須恵器の蓋で、9 世紀前半頃の所産と考えられる。

199・200 は須恵器の無台坏で、両者とも 9 世紀第 2 四半期頃の所産と考えられる。

201 は須恵器の稜碗だろう。9 世紀第 2 四半期頃の所産と考えられる。

202 は台部のみの破片であるため、詳細は分からないが、須恵器の有台坏か稜碗であろう。9 世紀第 2 四半期頃の所産と考えられる。

203 は須恵器の長頸壺で、頸部と胴部の境界付近の破片である。頸部の付け根には一周する環状の凸帯が確認できる。9 世紀前半頃の所産と考えられる。

204 は須恵器の壺だろう。底部付近の破片であり、糸切り痕が残っている。9 世紀前半頃の所産と考えられる。

205・206 は須恵器の甕の口縁部破片である。205 の外面には櫛描きによる横線文と波状文が施されている。両者とも 9 世紀代の所産と考えられる。

207 は黒色土器の有台坏で、内面に黒色処理が施されている。9 世紀第 4 四半期頃の所産と考えられる。

208 は須恵器系陶器の播鉢で、内面に 7 本 1 単位の櫛目が施されている。14 世紀頃の所産と考えられる。

209 は瓷器系陶器の播鉢であるが、櫛目が施されている部分はすべて欠損した状態であった。13 ~ 14 世紀の所産と考えられる。

210 は戸長里窯産の陶器の播鉢である。割れ面に漆が付着しており、漆継ぎによって修復をしていたことが分かる。16 世紀末頃の所産と考えられる。

211 は陶器の灯明皿で、近世の所産と考えられる。

212 は陶器の碗で、18 世紀頃の所産と考えられる。

213 は会津本郷焼の陶器の播鉢である。内面に櫛目がわずかに残っている。18 世紀後半頃の所産と考えられる。

214 は陶器の甕で、近世の所産と考えられる。

215 は成島焼の陶器の切立である。19 世紀頃の所産と考えられる。

216 は磁器の皿で、内外面に白濁釉が掛けられている。近世の所産と考えられる。

217 は肥前磁器の碗で、18 世紀後半頃の所産と考えられる。

218 は磁器の天目台で、皿部分は 10 角形になる。近世後半頃の所産と考えられる。

219 はガラス製品の薬瓶である。大幸薬品株式会社が製造したものである。表面に「中島正露丸」、底部裏面に「大

幸製]、「Y」、「2」の浮き彫りがある。

この胃腸薬は、昭和24年(1949)に「忠勇征露丸」から「中島正露丸」に名称が変更され、さらに昭和29年(1954)に「正露丸」に変更された。よって1949年から1954年の6年間の間に製造されたものと言えよう。

220は円形に整形した石に凹みを作り出したもので、凹付石製品と呼ぶことにする。用途は不明である。

221は北宋の天聖元寶で、初鑄年は1023年である。

溝 SD221 (第97図222・223、写真図版98)

222は須恵器の無台坏で、9世紀第2四半期頃の所産と考えられる。

223は弥生時代の所産と考えられる太型蛤刃石斧である。刃部には使用による刃こぼれがある。

溝 SD301 (第97図224・225、写真図版98)

224は土師器の高坏で、坏部と脚部の内面に黒色処理が施されている。古墳時代後期頃の所産と考えられる。

225は転用砥で、須恵器の坏の体部破片を材料とする。周囲に研磨痕がある。

溝 SD302 (第97図226、写真図版98)

226は石臼の上段部分である上臼である。復元径は443mmとなる。中心には芯を通す孔があり、裏面には溝が刻まれているが、激しく摩耗しているため不明瞭な状態である。時期は不明である。

ピット SP87 (第97図227、写真図版98)

227は陶器の平碗で、14～15世紀頃の所産と考えられる。

ピット SP88 (第97図228、写真図版98)

228は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。下地の鉄釉の上に厚手の鉄釉が掛けられている。16世紀頃の所産と考えられる。

ピット SP132 (第97図229、写真図版98)

229は須恵器の甕の口縁部破片である。9世紀代の所産と考えられる。

ピット SP200 (第97図230、写真図版98)

230は砥石で、左側面と裏面を欠損している。残っている右側面と表面には研磨面を確認できる。

ピット SP206 (第97図231、写真図版98)

231は石製の硯である。図の上半部が海、下半部が陸となる。

川SG2

(第98図232～第102図336、写真図版99～108)

調査区を南西から北東に流れる川SG2からは、多数の遺物が出土した。縄文時代から近世のものまで含まれているが、ほとんどが中世までの所産と考えられる。川SG2は、中世までに埋没したと考えて良いだろう。

232は土師器の甕の底部破片である。古墳時代の所産と考えられる。

233～236は須恵器の蓋で、9世紀前半頃の所産と考えられる。234の内面は摩滅しており、転用硯として利用されたようだ。内外面には墨痕が残っている。

237～245は須恵器の無台坏で、9世紀第1四半期頃の所産と考えられる。底部の切り離し痕は、237～241がへら切り、242～245は回転糸切りである。また239の底部には丁寧なナデが施されていた。241の内面には甕の底部が溶着している。窯の中で焼台として使用されたと考えられる。

246～264も須恵器の無台坏で、9世紀第2四半期頃の所産と考えられる。底部の切り離し痕は、すべて回転糸切りである。

249の底部裏面には墨書があるが、少破片のため判読できない。258の底部内面、260の底部外面は摩滅していた。

265～274も須恵器の無台坏で、9世紀第3四半期頃の所産と考えられる。底部の切り離し痕は、すべて回転糸切りである。268を製作したロクロの回転方向は左回転である。ほかの無台坏はほとんど右回転であり、当遺跡内では希少な土器と言える。

275～279は須恵器の坏で口縁部から体部にかけての破片資料である。底部が残っていないため台が付いていたのかどうか分からない。275は大型で底の深い坏であり、9世紀第2四半期頃の所産と考えられる。

276～279は9世紀第2四半期あるいは第3四半期頃の所産と考えられる。

280～286は須恵器の有台坏である。280～285は9世紀第1四半期頃、286は9世紀第2四半期頃の所産と考えられる。

287は須恵器の双耳坏である。耳部の付け根部分のみの少破片である。9世紀第2四半期頃の所産と考えられる。

288は須恵器の高坏である。希少な器種であり、仏具である可能性が高い。9世紀前半頃の所産と考えられる。



第5図 刻書(2倍に拡大)

「佛法」までは楷書で書いてあり、判読も容易である。「爲」は一部書き直しているところもあるため、やや判読しにくい。第6図に「爲」の各書体を掲載した。完全に一致するものはないが、いくつかを組み合わせれば、290の刻書の「爲」を書くことができるだろう。

「佛法」とは仏教とほぼ同義とされており、「爲」が続くことから、この小型壺が仏教の爲の器であることを明記するために刻まれたと考えられる。すなわち当資料が、仏具である水瓶や浄瓶であったと考えられるだろう。

刻書であることから、焼成前に土器に書いたことになる。須恵器の工房で書かれたことは間違いないだろう。工人が書いたか、工房に訪れた僧が書いたかのどちらかだろう。9世紀前半頃の所産と考えられる。

291も須恵器の小型壺である。9世紀前半頃の所産と考えられる。

292～295は須恵器の長頸壺である。9世紀前半頃の所産と考えられる。293の頸部の付け根には一周する環状の凸帯が確認できる。

296～307は須恵器の壺である。さまざまな器種に分かれるとは思いますが、いずれも少破片であるため詳細は分からない。9世紀前半頃のものが主体となるだろう。

298～302は底部付近の破片資料であり、台部が付く。300は台部が剥がれ、本体側の接合部に刻まれた2条の溝が確認できる。台部と本体の接合を補強するためのものだろう。

303～307も底部付近の破片資料だが、こちらには台部が付かない。303の底部内面には、棒状工具による渦巻き状の凹線がある。壺の内部空洞を広げるために粘土を掻き取った痕跡だろうか。

289は須恵器の鉢である。これも希少な器種であり、やはり仏具の可能性が高い。内面にはハケメが施されている。9世紀前半頃の所産と考えられる。

290は須恵器の小型壺で、底部裏面に「佛法爲」の刻書(第5図)が施されている。先端が尖った何らかの工具で文字を刻んだのである。「佛



第6図 「爲」の書体(『五體字類』より)

308・309は須恵器の甕で、9世紀前半頃の所産だろう。308は頸部破片で、外面に2条の櫛描き波状文が施されている。

310・311は土師器の高坏で、内面に黒色処理が施されている。7世紀第4四半期から8世紀第1四半期の所産と考えられる。

312～314は土師器の甕であり、9世紀前半頃の所産と考えられる。312・314の底部裏面には木葉痕が確認できる。

315・316は赤焼き土器の有台坏である。9世紀後半

の所産と考えられる。315の底部裏面には回転糸切り痕がある。

317は赤焼き土器の甕で、9世紀後半の所産と考えられる。

318は陶器の折縁中皿で、14世紀頃の所産と考えられる。

319は須恵器系陶器の甕で、中世の所産と考えられる。

320～323は青磁の碗である。320～322の外表面には鎬蓮弁文が表されている。13世紀後半頃の所産と考えられる。

323は底部付近の破片資料であり、鎬蓮弁文は確認できない。12世紀末頃の所産と考えられる。

324は青磁の皿で、外表面に鎬蓮弁文が表されている。14世紀頃の所産と考えられる。

325は景德鎮窯産の磁器の皿である。16世紀頃の所産と考えられる。

326は陶器の皿で近世の所産と考えられる。

327・328は石鏝である。327は珪質頁岩製で、“なかご”がない凹基無茎鏝に分類できる。先端部を欠損している。縄文時代の所産であろう。

328は鉄石英製のアメリカ式石鏝で、弥生時代の所産である。先端部を欠損し、両側縁に抉りが入れている。

329は珪質頁岩製の石錐で、剥片の末端部を加工して整形されている。右側縁に表裏両面から加工が行われ錐部が作られている。縄文時代の所産であろう。

330は珪質頁岩製の二次加工を有する剥片である。加工は主に表面に対して行われている。縄文時代の所産であろう。

331は滑石製の石鍋である。滑石から鍋を削り出して製作されたものであり、内外面に削りの痕跡が残る。同時に作り出された鏝が胴部を一周しており、鏝付型石鍋に分類される。製作地は山口県・福岡県・長崎県などに限られ、13世紀頃の所産と考えられる。

332～334は砥石であり、表裏面、左右両面が研磨面である。332の上端部には貫通孔が開けられている。334の裏面には敲打痕と線条痕が多い。

335・336は球状石製品で、研磨により成形されている。製作された時期や用途は不明である。

C 表土・攪乱出土の遺物

原位置から移動した状態で出土したので、詳細な出土地点の記録は行わなかった。原位置は、調査区外だったものもあるだろうが、それでも調査区から遠くはなかっただろうと推測している。遺物実測図は第103～106図に、写真は写真図版109～115に掲載した。

337は土師器の甕で、古墳時代の所産と考えられる。

338は須恵器の蓋のつまみ部分の破片である。8世紀第1四半期頃の所産と考えられる。内面は強く摩滅していることから、硯に転用された可能性がある。

339～348は須恵器の無台坏である。339～340の底部裏面にはへら切り痕が、341～348の底部裏面には回転糸切り痕がある。339～341は9世紀第1四半期頃、342～347は9世紀第2四半期頃、348は9世紀第3四半期頃の所産と考えられる。

349～351は須恵器の有台坏である。349の底部裏面にはへら切り痕がある。350の底部裏面にはナデ調整が施されており、切り離し痕は見えない。351の底部裏面には回転糸切り痕がある。

349は9世紀第1四半期頃の、350・351は9世紀第2四半期頃の所産と考えられる。

352は須恵器の皿である。9世紀前半頃の所産と考えられる。

353は須恵器の台が付く小型壺である。9世紀前半頃の所産と考えられる。

354～356は須恵器の長頸壺である。356の頸部の付け根には環状の凸帯が一周する。

357～359は須恵器の壺である。9世紀の所産と考えられる。358・359は台の付く底部破片である。358の底部外面は摩滅しており、硯に転用したと考えられる。

360・361は須恵器の甕で、9世紀の所産と考えられる。

362は土師器の高坏で、坏部の内面には丁寧なミガキが施されている。さらに黒色処理が施され光沢を有している。脚部の手前と奥には貫通孔がある。7世紀第4四半期から8世紀第1四半期頃の所産と考えられる。

363・364は土師器の甕で、363は8世紀代、364は9世紀代の所産と考えられる。

365は赤焼き土器の無台坏で、9世紀第4四半期頃の所産と考えられる。

366は須恵器系陶器の甕で、中世の所産と考えられる。破損後に被熱し、ススが付着している。

367 は瓷器系陶器の播鉢で、内面には 5 本 1 単位の櫛目が施されている。13～14 世紀頃の所産と考えられる。

368 は瓷器系陶器の壺で、表面に菊花状の押印がある。新潟県の笹神古窯で焼かれた可能性が高い。中世の所産と考えられる。

369 は土師質土器の内耳土鍋で、内外面に分厚いススが付着している。16 世紀頃の所産と考えられる。

370 は瓦質土器の播鉢で、内面が強く摩滅している。櫛目は 5 本 1 単位のものが施されている。16 世紀頃の所産と考えられる。

371・372 は青磁の碗である。371 は 15 世紀頃の所産と考えられる。外面に鎬蓮弁文、見込みには花文が表されている。372 は底部破片である。14～15 世紀の所産と考えられる。

373 は土師質土器のかわけで、17 世紀前半の所産と考えられる。口縁部内外面と見込みに黒色の付着物がある。また、口縁部内外面には金が付着していることが、蛍光 X 線分析（第 IV 章第 3 節）によって確認できた。金泥書を作るための金泥を入れた器ではないだろうか。

374 は会津本郷焼の皿である。陶器から白磁器へ至る過程の碎石手と呼ばれるものである。18 世紀後半頃の所産と考えられる。

375 は成島焼の陶器の植木鉢である。中心に貫通孔が開けられている。18～19 世紀の所産と考えられる。

376 は陶器の播鉢である。内面に櫛目が施されている。岸窯の製品だろうか。17～18 世紀の所産と考えられる。

377 は磁器の皿である。漳州窯の製品だろうか。16 世紀末から 17 世紀初頭の所産と考えられる。

378 は土製品の火皿である。七輪の内部で炭を受ける部品である。貫通孔は 7 か所であろう。おそらく近世から現代のものと考えられる。

379 はガラス製品の小瓶である。表面に「名産」・「雲丹」の浮き彫りがある。下関市の名産品である雲丹のアルコール漬けの容器である。明治末頃から製造を開始している。

380 は珪質頁岩製の剥片である。二次加工は見られない。打面付近には打面調整が施されている。石刃である可能性が高い。旧石器時代のものの可能性もあるが、付近で確認されている遺跡と関連するものだとすると、縄文時代のものと考えたほうが良いだろう。

381・382 は置賜型の板碑である。381 は額部より下

を欠損しており、額面には 2 条の横線が彫られている。15 世紀頃の所産と考えられる。

382 は下半部を欠損している。額面・碑面には何も彫られていない。

383 は厨子型板碑の中でも単式額部板碑に分類される。額部だけが突出し、額面には 2 条線が彫られている。額部の突出は上半部が低く、下半部がより高く 2 段階になっている。碑面には何も彫られていない。室町時代の所産と考えられる。

384 は五輪塔の火輪である。上面には風輪を固定するための孔が穿たれている。詳しい時期は分からないが中近世の所産であろう。

385 は宝篋印塔あるいは石塔の最上段に載せられた相輪であり、中でも九輪という部品である。横方向に溝が彫られ 9 つの輪が表現されるはずだが、上段から 3 段分は欠損している。下端には、請花という部品に差し込むための“なかご”が作り出されている。

輪切りの断面は円形になるはずだが、裏面の中心部は真っ直ぐな状態である。これは凝灰岩の角材を横位に置いたまま相輪を削り出したためであろう。

386・387 は銅銭である。386 は唐の開元通寶で初鑄年は 621 年、387 は寛永通寶で、字体などから 1668 年以降に鑄造されたものと言える。

388 は小型五銭白銅貨と呼ばれる五銭硬貨である。成分は銅が 75%、ニッケルが 25%とされる。表には「錢五」、裏には「本日大」、「年十正大」の浮き彫りがある。大正 11 年（1922）年に鑄造されたものである。

Ⅲ 調査成果

表2 土器

※口径・底径の列において数値の前に「-」が付くものは推計値を表す，単位はミリメートル

番号	種別	器種	遺構	グリッド	層	口径	底径	器高	底部調整	備考	登録番号
1	肥前磁器	小皿	SK101		床面	83	37	40	ロクロナデ	内面に呉須による染付，白色釉	RP126
23	陶器	甕	SE77							釉：内外面7.5Y6/2灰オリーブ色	RP509
115	須恵器	小型壺	SE311			-56					RP706
130	須恵器	蓋	SE6	36 - 452					ロクロケズリ		RP2
134	須恵器	無台坏	SK304			-148					RP705
137	須恵器	無台坏	SK81				60		回転糸切り		RP355
138	須恵器系陶器	壺	SK99	56 - 496						外面：ハケメケズリ	RP401
139	須恵器	無台坏	SK315				-84		ナデ	内面に十文字のワラが焼けた痕跡	RP703
140	陶器	擂鉢	SK315				-134		ナデ	内面摩滅	RP701
141	信楽焼陶器	壺	SK315			-191				釉：内外面5YR4/4にぶい赤褐色	RP702
142	須恵器	蓋	SD1	16 - 392					ロクロケズリ	内面摩滅，墨痕なし	RP338
143	須恵器	無台坏	SD1	40 - 408			60		回転糸切り		RP330
144	須恵器	無台坏	SD1				62		回転糸切り		RP311
145	須恵器	無台坏	SD1	48 - 420			66		回転糸切り		RP365
146	須恵器	無台坏	SD1	16 - 392			53		回転糸切り		RP435
147	須恵器	無台坏	SD1	12 - 376			52		回転糸切り		RP357
148	須恵器	長頸壺	SD1	20 - 400		93					RP400
150	土師器	甕	SD1	16 - 404						内黒，スス付着，内面にミガキ	RP444
151	土師器	甕	SD1	4 - 388							RP437
152	瀬戸美濃陶器	折縁皿	SD1			104	60	2	ケズリ	灰釉：内外面7.5YR5/2灰褐色	RP460
153	瓷器系陶器	擂鉢	SD1	32 - 408			84		ナデ	櫛目あるが，摩滅のため不明瞭	RP450
154	瓷器系陶器	甕	SD1	16 - 400							RP441
155	岸窯産	擂鉢	SD1							釉：内外面5Y3/2オリーブ黒色	RP517
156	陶器	甕	SD1				225		離れ砂	釉：外面10YR3/3暗褐色，内面2.5YR5/4にぶい赤褐色	RP633
157	肥前磁器	碗	SD1				39		ロクロナデ	外面に呉須による染付，白色釉	RP591
158	ガラス製品	インク瓶	SD1			18	43	54		底部裏面に「SSS」と「・・・」の陽刻，内面にインクが残る，型作り	RP603
159	ガラス製品	薬瓶	SD1			14	32	107		側面に「浩和オークワン」の陽刻，型作り	RP606
160	ガラス製品	大瓶	SD1			17	65	284		肩部「ゴードー」の陽刻×4，胴部下端「合同酒精株式会社 CONTENTS NET 660cc」と陽刻，底部裏面には「12」と「円」のような記号の陽刻，型作り	RP613
161	ガラス製品	大瓶	SD1	12 - 384		20	64	289		肩部に「キリンビール 登録 「K」と「B」の合わせ文字 商標」の陽刻，底部裏面に「14」とアンダーバーの陽刻，型作り	RP611
162	ガラス製品	中瓶	SD1	12 - 384		16	62	240		肩部に「TRADE ◎ MARK DB(意匠化された文字)」と陽刻，胴部下端に「DAI NIPPON BREWERY CO LTD」と陽刻，底部裏面に「◎」をいれた「☆」と「10」の陽刻，型作り	RP612
171	青磁	碗	SD69			-130				釉：内外面7.5GY7/1明緑灰色，外面に鎬蓮弁文	RP708
173	土師器	高坏	SD72	88 - 412							RP426
174	須恵器	無台坏	SD72	84 - 412		128	70	43			RP349
175	須恵器	無台坏	SD82			131	71	34	回転糸切り		RP306
176	須恵器	無台坏	SD82				60		回転糸切り		RP316
177	須恵器	壺	SD82			158					RP625
178	相馬焼	小碗	SD82			52	23	28	ロクロケズリ	釉：内外面5Y7/2灰白色	RP491
179	唐津焼	碗	SD82							釉：内外面10YR8/3浅黄橙色	RP519
180	陶器	鉢	SD82				109		ケズリ	釉：内面5Y3/1オリーブ黒色，岸窯か？	RP457
181	陶器	擂鉢	SD82			226				8本1単位の卸目，釉：内外面5YR3/2暗赤褐色	RP496
182	岸窯産	擂鉢	SD82				96		回転糸切り	釉：内面に見られるが摩滅のため不明瞭	RP454

番号	種別	器種	遺構	グリッド	層	口径	底径	器高	底部調整	備考	登録番号
183	陶器	器種不明	SD82				76		ナデ	釉:内外面5YR4/3にぶい赤褐色, 漆継ぎで修復	RP503
184	肥前磁器	皿	SD82				65		ロクロナデ	内外面に呉須による染付, 白色釉	RP466
185	肥前磁器	小碗	SD82			68	34	70	ロクロナデ	内外面に呉須による染付, 白色釉	RP570
186	肥前磁器	碗	SD82			88				外面に呉須による染付, 白色釉	RP569
187	肥前磁器	碗	SD82				50		ロクロナデ	外面に呉須による染付, 白色釉	RP566
192	中国産磁器	碗	SD83			80				内外面に呉須による染付, 白色釉	RP580
193	肥前磁器	碗	SD83			40			ロクロナデ	外面に呉須による染付, 白色釉	RP510
198	須恵器	蓋	SD220	8 - 392		146					RP304
199	須恵器	無台坏	SD220	16 - 392		119					RP379
200	須恵器	無台坏	SD220	16 - 380			60		回転糸切り		RP387
201	須恵器	稜碗	SD220	8 - 392		174					RP392
202	須恵器	有台坏	SD220	12 - 376			74		回転糸切り		RP385
203	須恵器	長頸壺	SD220	8 - 392						環状凸帯付	RP399
204	須恵器	壺	SD220	12 - 392			80		回転糸切り		RP367
205	須恵器	甕	SD220	16 - 380						外面に櫛描き横戦文と波状文	RP458
206	須恵器	甕	SD220	16 - 380							RP403
207	黒色土器	有台坏	SD220	16 - 388			70			内黒, 内面にミガキ	RP431
208	須恵器系陶器	播鉢	SD220	12 - 388						7本1単位の卸目	RP453
209	瓷器系陶器	播鉢	SD220	12 - 384		310					RP456
210	戸長里窯産	播鉢	SD220	20 - 384		208				漆継ぎで修復	RP623
211	陶器	灯明皿	SD220	12 - 368		103				釉:内外面7.5YR5/4にぶい褐色	RP459
212	陶器	碗	SD220	16 - 380			46		ロクロナデ	釉:内外面10YR7/4にぶい黄褐色	RP504
213	会津本郷焼陶器	播鉢	SD220	16 - 300						釉:内外面5YR4/2灰褐色	RP513
214	陶器	甕	SD220	12 - 388		133				釉:内外面7.5YR4/2灰褐色	RP462
215	成島焼	切立	SD220	12 - 376		136				釉:内外面7.5YR2/2黒褐色	RP634
216	磁器	皿	SD220	12 - 380		86	35	27	ロクロケズリ	釉:内外面10BG7/1明青灰色	RP465
217	肥前磁器	碗	SD220	16 - 380			34		ロクロナデ	内外面に呉須による染付, 白色釉	RP595
218	磁器	天目台	SD220	12 - 372		43	44	32		皿部分は10角形で口径103mm, 内面に呉須による染付, 白色釉, 型作り	RP520
219	ガラス製品	薬瓶	SD220	12 - 392		22	35	80		側面に「中島正露丸」の陽刻、底部裏面に「大幸製」・「Y」・「2」と陽刻, 型作り	RP608
222	須恵器	無台坏	SD221	4 - 388			64		ヘラ切り		RP391
224	土師器	高坏	SD301				90		ナデ	内黒, 器部と脚部の内面に黒色化处理, 脚部内面にハケメ	RP704
227	陶器	平碗	SP87	56 - 500						釉:内外面5Y6/3オリーブ黄色	RP518
228	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	SP88				45		ロクロケズリ	釉:外面下地5R3/1暗赤灰色, 内外面上掛け:5YR1.7/1黒色	RP502
229	須恵器	甕	SP132	64 - 492							RP407
232	土師器	甕	SG2	64 - 416			70			内外面にハケメ	RP425
233	須恵器	蓋	SG2	12 - 412					ロクロナデ→ロクロケズリ		RP343
234	須恵器	蓋	SG2	48 - 420					ロクロケズリ	内面摩滅, 転用硯, 墨痕あり	RP340
235	須恵器	蓋	SG2	44 - 432					ロクロケズリ		RP329
236	須恵器	蓋	SG2	48 - 452			156				RP398
237	須恵器	無台坏	SG2	48 - 492		146	85	40	ヘラ切り		RP307
238	須恵器	無台坏	SG2	12 - 404		140	78	37	ヘラ切り		RP303
239	須恵器	無台坏	SG2	60 - 420		130	84		ヘラ切り→ナデ		RP334
240	須恵器	無台坏	SG2	12 - 408			66		ヘラ切り		RP382
241	須恵器	無台坏	SG2	48 - 432		128	68		ヘラ切り	甕の底部が融着, 焼台として使用	RP564

Ⅲ 調査成果

番号	種別	器種	遺構	グリッド	層	口径	底径	器高	底部調整	備考	登録番号
242	須恵器	無台坏	SG2	20 - 416			66		回転糸切り		RP326
243	須恵器	無台坏	SG2	40 - 416			70		回転糸切り		RP315
244	須恵器	無台坏	SG2	48 - 412			70		回転糸切り		RP353
245	須恵器	無台坏	SG2	12 - 412			66		回転糸切り		RP342
246	須恵器	無台坏	SG2	40 - 412		131	62	44	回転糸切り		RP305
247	須恵器	無台坏	SG2	56 - 484			60		回転糸切り		RP371
248	須恵器	無台坏	SG2	16 - 412			60		回転糸切り		RP336
249	須恵器	無台坏	SG2	48 - 488			62		回転糸切り	底部裏面に墨書, 判読不可	RP363
250	須恵器	無台坏	SG2	16 - 408			60		回転糸切り		RP347
251	須恵器	無台坏	SG2	20 - 400			60		回転糸切り		RP308
252	須恵器	無台坏	SG2	16 - 404			60		回転糸切り		RP312
253	須恵器	無台坏	SG2	64 - 480			60		回転糸切り		RP332
254	須恵器	無台坏	SG2	20 - 400			60		回転糸切り		RP376
255	須恵器	無台坏	SG2	12 - 408			58		回転糸切り		RP360
256	須恵器	無台坏	SG2	12 - 408			60		回転糸切り	底部が中心から膨らんでいる	RP351
257	須恵器	無台坏	SG2	44 - 428			62		回転糸切り		RP331
258	須恵器	無台坏	SG2	12 - 404			60		回転糸切り	底部内面摩滅	RP344
259	須恵器	無台坏	SG2	16 - 412			58		回転糸切り		RP389
260	須恵器	無台坏	SG2	16 - 416			60		回転糸切り	底部外面摩滅	RP333
261	須恵器	無台坏	SG2	60 - 480			62		回転糸切り		RP386
262	須恵器	無台坏	SG2	20 - 420			62		回転糸切り		RP404
263	須恵器	無台坏	SG2	20 - 416			62		回転糸切り		RP446
264	須恵器	無台坏	SG2	20 - 408			60		回転糸切り		RP356
265	須恵器	無台坏	SG2	56 - 484			56		回転糸切り		RP325
266	須恵器	無台坏	SG2	24 - 408			54		回転糸切り		RP314
267	須恵器	無台坏	SG2	16 - 420			54		回転糸切り		RP383
268	須恵器	無台坏	SG2	12 - 408			56		回転糸切り		RP309
269	須恵器	無台坏	SG2	20 - 404			56		回転糸切り		RP337
270	須恵器	無台坏	SG2	12 - 412			56		回転糸切り		RP380
271	須恵器	無台坏	SG2	16 - 404			56		回転糸切り		RP359
272	須恵器	無台坏	SG2	56 - 480			56		回転糸切り		RP352
273	須恵器	無台坏	SG2	12 - 400			50		回転糸切り		RP318
274	須恵器	無台坏	SG2	44 - 412			54		回転糸切り		RP424
275	須恵器	坏	SG2	32 - 420		155					RP395
276	須恵器	坏	SG2	36 - 408		146					RP302
277	須恵器	坏	SG2	20 - 408		144					RP301
278	須恵器	坏	SG2	44 - 420		130					RP390
279	須恵器	坏	SG2	32 - 420		126					RP362
280	須恵器	有台坏	SG2	36 - 408		152			回転糸切り		RP417
281	須恵器	有台坏	SG2	48 - 488		147	89		ヘラ切り→ナデ		RP127
282	須恵器	有台坏	SG2	20 - 412		140					RP370
283	須恵器	有台坏	SG2	20 - 420			80		ヘラ切り		RP372
284	須恵器	有台坏	SG2	44 - 428			80		回転糸切り		RP324
285	須恵器	有台坏	SG2	48 - 420			82		ヘラ切り		RP348
286	須恵器	有台坏	SG2	16 - 412			64		回転糸切り		RP346
287	須恵器	双耳坏	SG2	48 - 420							RP408
288	須恵器	高坏	SG2	40 - 428		96					RP361

番号	種別	器種	遺構	グリッド	層	口径	底径	器高	底部調整	備考	登録番号
289	須恵器	鉢	SG2	28 - 404						内面にハケメ	RP405
290	須恵器	小型壺	SG2	44 - 432			56		ナデ	底部裏面に「佛法爲」と刻書	RP1
291	須恵器	小型壺	SG2	4 - 396			45				RP436
292	須恵器	長頸壺	SG2	8 - 316		69					RP373
293	須恵器	長頸壺	SG2	48 - 428						環状凸帯付	RP421
294	須恵器	長頸壺	SG2	44 - 420							RP413
295	須恵器	長頸壺	SG2	60 - 476		136					RP411
296	須恵器	壺	SG2	24 - 416		153					RP406
297	須恵器	壺	SG2	32 - 404		146					RP377
298	須恵器	壺	SG2	32 - 416					回転糸切り		RP397
299	須恵器	壺	SG2	16 - 416			110		ナデ	内面にハケメ	RP369
300	須恵器	壺	SG2	48 - 432			114		ナデ	底部に台部接着のための溝が2条巡る, 内面にハケメ	RP445
301	須恵器	壺	SG2	20 - 404			124		ナデ		RP366
302	須恵器	壺	SG2	20 - 408			129		ロクロナデ	内面にハケメ	RP341
303	須恵器	壺	SG2	16 - 412			72		回転糸切り	底部内面に棒状工具による渦巻き状の凹線あり	RP339
304	須恵器	壺	SG2	24 - 412			76		ナデ	内面にハケメ, 外面に平行叩き	RP378
305	須恵器	壺	SG2	60 - 480			80		ナデ	外面にケズリ	RP328
306	須恵器	壺	SG2	32 - 404			96		ナデ	外面に平行叩き	RP375
307	須恵器	壺	SG2	64 - 516						外面に平行叩き→ロクロナデ	RP414
308	須恵器	甕	SG2	32 - 396						外面に櫛描き波状文	RP415
309	須恵器	甕	SG2	40 - 416			150		平行叩き	内面に平行当て具とハケメ, 外面に平行叩き	RP374
310	土師器	高坏	SG2	16 - 420					ナデ	内黒, 器部と脚部の内面に黒色化处理	RP433
311	土師器	高坏	SG2	32 - 396					ナデ	内黒, 器部と脚部の内面に黒色化处理, 外面にミガキ	RP434
312	土師器	甕	SG2	56 - 484			77		木葉痕		RP419
313	土師器	甕	SG2	20 - 400			90			外面にハケメ	RP427
314	土師器	甕	SG2	56 - 480			112		木葉痕		RP416
315	赤焼き土器	有台坏	SG2	12 - 412			62		回転糸切り		RP420
316	赤焼き土器	有台坏	SG2	20 - 416			52				RP428
317	赤焼き土器	甕	SG2	20 - 408			100			内面にハケメ	RP440
318	陶器	折縁中皿	SG2	32 - 396						釉:内外面5Y6/6オリーブ色	RP516
319	須恵器系陶器	甕	SG2	48 - 432			110		ハケメ	外面に平行叩き→ナデ, 内面にハケメ	RP322
320	青磁	碗	SG2	12 - 408		150				釉:内外面7.5Y6/1灰色, 外面に鎬蓮弁文	RP461
321	青磁	碗	SG2	20 - 408						釉:内外面5GYオリーブ灰色, 外面に鎬蓮弁文	RP501
322	青磁	碗	SG2	12 - 408			52		ロクロケズリ	釉:内外面5GY7/1明オリーブ灰色, 外面に鎬蓮弁文	RP455
323	青磁	碗	SG2	16 - 416					ロクロケズリ	釉:内外面7.5Y6/3オリーブ黄色	RP499
324	青磁	皿	SG2	16 - 404			58		ロクロケズリ	釉:内外面7.5Y5/2灰オリーブ色, 外面に鎬蓮弁文	RP495
325	景德鎮窯産磁器	皿	SG2						ロクロナデ	内面に呉須による染付, 白色釉	RP515
326	陶器	皿	SG2	20 - 420			130		ケズリ		RP451
337	土師器	甕									RP439
338	須恵器	蓋								内面摩滅	RP368
339	須恵器	無台坏					76		ヘラ切り		RP335
340	須恵器	無台坏					90		ヘラ切り		RP320
341	須恵器	無台坏					70		回転糸切り		RP313
342	須恵器	無台坏					61		回転糸切り		RP323
343	須恵器	無台坏					60		回転糸切り		RP319
344	須恵器	無台坏					60		回転糸切り		RP317
345	須恵器	無台坏					61		回転糸切り		RP321

Ⅲ 調査成果

番号	種別	器種	遺構	グリッド	層	口径	底径	器高	底部調整	備考	登録番号
346	須恵器	無台坏			表土		-64		回転糸切り		RP709
347	須恵器	無台坏			表土		66		回転糸切り		RP354
348	須恵器	無台坏			表土		-57		回転糸切り		RP707
349	須恵器	有台坏			表土		97		ヘラ切り		RP358
350	須恵器	有台坏			表土		65		ナデ		RP327
351	須恵器	有台坏		48 - 412	攪乱		68		回転糸切り		RP345
352	須恵器	皿			表土	117					RP410
353	須恵器	小型壺			表土		52				RP350
354	須恵器	長頸壺			表土	122					RP418
355	須恵器	長頸壺			表土	136					RP388
356	須恵器	長頸壺			表土					環状凸帯付	RP393
357	須恵器	壺		44 - 412	攪乱	237					RP394
358	須恵器	壺			表土		92		ナデ	底部外面摩滅, 転用硯	RP384
359	須恵器	壺			表土		132		ナデ	内面にハケメ	RP381
360	須恵器	甕			表土					外面に平行叩き, 内面に同心円当て具	RP438
361	須恵器	甕		52 - 476	攪乱				平行叩き	外面に平行叩き	RP402
362	土師器	高坏			表土				ナデ	内黒, 器部の内面に黒色化处理, 内面にミガキ	RP429
363	土師器	甕			表土		90			内外面にハケメ	RP422
364	土師器	甕			表土		120		ナデ	内外面にハケメ	RP423
365	赤焼き土器	無台坏			表土		61				RP432
366	須恵器系陶器	甕			表土				ナデ	外面に平行叩き, 破損後に被熱・スス付着	RP447
367	瓷器系陶器	播鉢			表土		138			5本1単位の卸目	RP452
368	瓷器系陶器	壺			表土					菊花状の押印, 新潟県笹神古窯か?	RP551
369	土師質土器	内耳土鍋			表土					外面に分厚いスス付着	RP463
370	瓦質土器	播鉢			表土					5本1単位の卸目, 内面摩滅	RP449
371	青磁	碗			表土					釉:内外面7.5Y6/2灰オリーブ色, 外面に鑄蓮弁文, 内面見込みに花文	RP514
372	青磁	碗			表土		53		ロクロケズリ	釉:内外面10Y6/2オリーブ灰色	RP464
373	土師質土器	かわらけ			表土	100	58	21.5	回転糸切り	黒色付着物と金が付着, 金泥か?	RP310
374	会津本郷焼	皿			攪乱		76		ケズリ	砕石手, 釉:外面2.5GY灰白色, 内面5YR4/2灰褐色	RP511
375	成島焼	植木鉢			表土		133		ロクロケズリ	釉:外面10YR2/2黒褐色	RP505
376	陶器	播鉢		76 - 412	攪乱				回転糸切り	釉:外面5R4/1暗赤褐色, 岸窯か?	RP448
377	磁器	皿			表土					内面に呉須による染付, 白色釉, 漳州窯か?	RP614
379	ガラス製品	小瓶			攪乱	38	47	103		「名産」・「雲丹」の陽刻, 型作り, 下関市の名産品	RP605

表3 土製品

※縦・横・厚さの単位はミリメートル

番号	種類	器種	遺構	グリッド	層	長さ	幅	厚さ	備考	登録番号
149	須恵器	盤状土製品	SD1			55	58	10	甕の破片を打撃と研磨で隅丸方形に整形, 外面に平行叩き, 内面に平行当て具	RP409
191	須恵器	円盤状土製品	SD83			83	84	16	甕の破片を打撃と研磨で円形に整形, 外面に平行叩き, 内面に平行当て具	RP412
194	土製品	レンガ	SD219			155	104	61	表裏面に糸切り痕, 成形枠使用	RP552
195	土製品	レンガ	SD219			166	103	51	表裏面に糸切り痕, 成形枠使用	RP553
196	土製品	レンガ	SD219			166	104	55	表裏面に糸切り痕, 成形枠使用	RP554
197	土製品	レンガ	SD219			165	102	52	表裏面に糸切り痕, 成形枠使用	RP555
225	須恵器	転用砥	SD301			35	44	6	坏の体部破片を利用	RP731
378	土製品	火皿		12 - 524	攪乱			13	直径106mm, 孔7か所, 七輪内の炭を受ける皿	RP442

表4 石器・石製品

※長さ・幅・厚さの単位はミリメートル, 重量はグラム

番号	器種	遺構	グリッド	層	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考	登録番号
24	砥石	SE77		掘方	103	72	49	411.8	安山岩	左右表裏面が研磨面, 裏面に線状痕多い	RQ480
131	台石	SE316			152	104	62	1455.6	安山岩	未加工, 被熱で黒色化, 表面に擦痕, 裏面に炭化物付着	RQ712
133	砥石	SE317			164	52	42	623.8	緑色凝灰岩	左右表裏面が研磨面	RQ710
136	板碑	SK80			200	251	76	3090.0	凝灰岩	置賜型, 額部作出, 下端部の破面に擦痕, 碑面は無文	RQ469
163	板碑	SD1	32 - 408	攪乱	500	317	148	22500.0	凝灰岩	置賜型, 額部作出, 碑面は無文	RQ498
164	板碑	SD1	12 - 392	攪乱	340	354	87	7850.0	凝灰岩	厨子型板碑, 単式額部板碑, 額部に横線2条	RQ467
165	陽物	SD1			136	36	42	276.4	安山岩		RQ476
166	砥石	SD1	24 - 400	攪乱	91	54	28	147.0	安山岩	左右表裏面が研磨面	RQ474
172	砥石	SD69			37	48	31	72.7	緑色凝灰岩	左右表面が研磨面	RQ484
188	剥片	SD82			61	33	7.5	12.6	珩質頁岩	縦長剥片, 上半欠損	RQ490
189	砥石	SD82			138	37	26	212.0	安山岩	左右表裏面が研磨面	RQ473
190	砥石	SD82			124	50	23	133.6	安山岩	左右表裏面が研磨面	RQ472
220	凹付石製品	SD220	16 - 380		125	138	70	616.0	安山岩	円形, 中心部に凹みを作成	RQ485
223	大型蛤刃石斧	SD221	06 - 388		133	58	43	509.5	緑色凝灰岩	刃こぼれあり	RQ488
226	石臼	SD302			355	231	180	11290.0	凝灰岩	上臼, 裏面に擦痕, 裏面に不明瞭だが溝が刻まれている, 直径443mm	RQ711
230	砥石	SP200	72 - 516		123	39	45	95.7	緑色凝灰岩	右表面が研磨面, ほかは欠損のため不明	RQ482
231	硯	SP206			105	49	11	68.2	粘板岩		RQ471
327	凹基無茎鏃	SG2	40 - 416		24	17	4	1.1	珩質頁岩	先端部欠損	RQ512
328	アメリカ式石鏃	SG2	52 - 412		24	14	4.3	1.0	鉄石英	先端部欠損, 両側縁に抉り	RQ565
329	石錐	SG2	60 - 412		66	40	9	12.9	珩質頁岩	剥片の右側縁の表裏面に加工を施し錐部を作成	RQ492
330	剥片	SG2	28 - 408		59	74	16	51.7	珩質頁岩		RQ493
331	石鍋	SG2	20 - 416					252.3	滑石		RQ486
332	砥石	SG2	08 - 404		62	24	19	45.1	粘板岩	左右表裏面が研磨面, 貫通孔あり, 両側から穿孔	RQ481
333	砥石	SG2	20 - 420		45	42	8.6	17.6	安山岩	左右表裏面が研磨面	RQ475
334	砥石	SG2	12 - 412		135	74	49	568.8	安山岩	左右表裏面が研磨面, 裏面に敲打痕が多い	RQ479
335	球状石製品	SG2	16 - 420		65	60	51	126.0	安山岩	全周に擦痕	RQ507
336	球状石製品	SG2	16 - 492		41	41	33	34.4	安山岩	全周に擦痕	RQ508
380	剥片			表土	100	44	15	48.7	珩質頁岩	縦長剥片, 打面調整あり	RQ489
381	板碑			表土	212	240	90	3440.0	凝灰岩	置賜型, 額部に横線2条	RQ470
382	板碑			表土	364	305	144	12470.0	凝灰岩	置賜型, 碑面は無文	RQ638
383	板碑			表土	336	290	88	6960.0	凝灰岩	厨子型板碑, 単式額部板碑, 額部に横線2条, 碑面は無文	RQ468
384	五輪塔火輪			表土	369	370	194	25070.0	花崗岩	上面に風輪をのせるための凹みあり	RQ497
385	相輪			表土	542	236	220	21690.0	凝灰岩	石塔あるいは宝篋印塔などの相輪, 上の3段分は欠損	RQ500

Ⅲ 調査成果

表5 金属製品

※直径・厚さの単位はミリメートル

番号	種類	遺構	グリッド	層	直径	厚さ	備考	登録番号
2	寛永通寶	SK101			25.0	1.2	新寛永, 背面に「文」あり	RM556
3	寛永通寶	SK101			25.0	1.3	新寛永	RM557
4	寛永通寶	SK101			25.5		新寛永	RM558
167	柄鏡	SD1	30 - 408	攪乱	-112.0	6.0	直径は推計値	RM494
168	永楽通寶	SD1		攪乱	24.5	1.5	1408年初鑄	RM560
169	治平通寶	SD1	44 - 412	攪乱	23.0	1.0	1064年初鑄	RM563
221	天聖元寶	SD220	12 - 392	攪乱	25.0	1.3	1023年初鑄	RM559
386	開元通寶			表土	23.0	1.0	621年初鑄	RM562
387	寛永通寶			表土	23.0	1.1	新寛永	RM561
388	小型五銭白銅貨			表土	18.9	11	1922年初鑄	RM730

表6 木製品

※長さ・幅・厚さの単位はミリメートルである。

番号	器種	遺構	グリッド	層	長さ	幅	厚さ	木取り	樹種	備考	登録番号
5	木棺側板	SK101		床面	648	103	8	板目取り		釘穴3か所, 左端に墨で縦線2条	RW121
6	木棺側板	SK101		床面	754	30	9	板目取り		釘穴8か所, 内3か所に釘が残る	RW530
7	木棺側板	SK101		床面	67	105	9	板目取り		釘穴2か所	RW535
8	木棺側板	SK101		床面	124	148	9	板目取り		釘穴3か所, 貫通しない釘跡1か所	RW534
9	木棺側板	SK101		床面	36	78	7	板目取り		釘穴1か所, 貫通しない釘跡1か所	RW533
10	木棺底板	SK101		床面	212	466	8	板目取り	マツ科マツ属(二葉松類)	釘穴3か所, 内2か所に釘が残る	RW543
11	木棺底板	SK101		床面	490	290	10	板目取り		釘穴13か所, 内2か所に釘が残る	RW544
12	木棺底板	SK101		床面	490	250	10	板目取り		釘穴6か所	RW545
13	木棺下枠	SK101		床面	730	29	7	板目取り		釘穴6か所	RW547
14	木棺下枠	SK101		床面	506	41	7	板目取り		釘穴3か所, 内1か所に釘が残る	RW549
15	木棺下枠	SK101		床面		34	8	板目取り		釘穴2か所, 両方に釘が残る, 長さ485mm以上	RW548
16	唐破風状木製品	SK101		床面	125	767	9	板目取り		釘穴8か所, 内2か所に釘が残る	RW123
17	唐破風状木製品	SK101		床面	142	765	11	板目取り		釘穴8か所, 内1か所に釘が残る	RW637
18	花文付木製品	SK101		床面	181	247	13	板目取り		釘穴3か所, 内2か所に釘が残る, 表面に花の墨絵あり	RW529
19	花文付木製品	SK101		床面	194	243	10	板目取り		釘穴6か所, 貫通しない釘跡1か所, 表裏面に花の墨絵あり	RW124
20	曲物	SE75	72 - 388	埋土	198	139	8	板目取り	ヒノキ科アスナロ属	底板のみ, 釘穴1か所, 樹皮留め2か所	RW3
21	曲物	SE75	72 - 388	埋土				板目取り		直径177mm, 高さ96mm, 樹皮留め2か所	RW4
22	木槌	SE75	72 - 388	埋土	183	189	66	半截削り出し		槌部分・柄とも削り出している	RW129
25	曲物	SE77	72 - 384	埋土				板目取り		直径190mm, 高さ91mm, 樹皮留め1か所	RW40
26	曲物	SE77	68 - 384	埋土				板目取り		直径207mm, 高さ99mm, 樹皮留め1か所	RW42
27	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		674	128	14	板目取り			RW12
28	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		693	109	12	板目取り	スギ科スギ属スギ		RW13
29	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		588	134	17	板目取り			RW14
30	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		623	129	13	板目取り			RW15
31	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		617	187	14	板目取り			RW16
32	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		581	133	12	板目取り			RW17
33	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		682	101	15	板目取り			RW524
34	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		495	147	18	板目取り			RW19
35	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		640	165	20	板目取り			RW20
36	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		490	142	15	板目取り			RW21

番号	器種	遺構	グリッド	層	長さ	幅	厚さ	木取り	樹種	備考	登録番号
37	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		674	146	21	板目取り			RW24
38	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		699	154	20	板目取り			RW25
39	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		855	212	20	板目取り			RW28
40	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		726	134	14	板目取り			RW32
41	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		739	173	25	板目取り			RW33
42	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		352	74	7	板目取り			RW31
43	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		685	208	18	板目取り			RW36
44	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		637	212	11	板目取り			RW37
45	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		632	185	22	板目取り			RW38
46	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		698	177	39	板目取り			RW43
47	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		541	132	12	板目取り			RW44
48	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		625	131	23	板目取り			RW45
49	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		608	128	13	板目取り			RW46
50	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		361	83	11	板目取り			RW52
51	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		707	123	17	板目取り			RW49
52	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		523	79	8	板目取り			RW50
53	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		564	89	6	板目取り			RW54
54	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		674	85	5	板目取り			RW523
55	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		545	79	18	板目取り			RW51
56	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		557	118	18	板目取り			RW55
57	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		637	122	13	板目取り			RW56
58	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		695	160	17	板目取り			RW57
59	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		350	72	6	板目取り			RW53
60	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		610	160	28	板目取り			RW59
61	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		648	155	20	板目取り			RW60
62	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		535	136	17	板目取り			RW61
63	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		521	135	32	板目取り			RW62
64	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		526	137	26	板目取り			RW63
65	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		661	75	16	板目取り			RW64
66	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		379	140	18	板目取り			RW522
67	井戸枠縦板	SE77	68 - 388		563	83	6	板目取り			RW65
68	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		589	209	33	板目取り			RW90
69	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		783	170	24	板目取り			RW91
70	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		555	132	27	板目取り			RW92
71	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		569	157	32	板目取り			RW93
72	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		607	152	13	板目取り			RW96
73	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		664	98	7	板目取り			RW97
74	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		688	91	10	板目取り			RW98
75	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		509	82	7	板目取り	スギ科スギ属スギ		RW95
76	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		630	130	4	板目取り			RW99
77	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		877	196	21	板目取り			RW100
78	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		419	112	17	板目取り			RW101
79	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		550	183	24	板目取り			RW102
80	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		654	175	23	板目取り			RW103
81	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		545	139	19	板目取り			RW106
82	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		576	133	22	板目取り			RW104
83	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		599	141	15	板目取り			RW105
84	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		602	80	5	板目取り			RW107
85	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		595	136	14	板目取り			RW109

Ⅲ 調査成果

番号	器種	遺構	グリッド	層	長さ	幅	厚さ	木取り	樹種	備考	登録番号
86	井戸枠縦板	SE77	72 - 388		395	155	16	板目取り			RW112
87	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		666	136	26	板目取り			RW67
88	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		770	135	25	板目取り			RW68
89	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		616	149	31	板目取り	スギ科スギ属スギ		RW69
90	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		668	131	17	板目取り			RW70
91	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		597	130	26	板目取り			RW71
92	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		392	130	22	板目取り			RW72
93	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		821	175	5	板目取り			RW73
94	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		804	114	16	板目取り			RW74
95	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		713	115	11	板目取り			RW75
96	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		749	100	8	板目取り			RW76
97	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		735	126	13	板目取り			RW77
98	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		701	115	20	板目取り			RW78
99	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		635	95	8	板目取り			RW88
100	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		666	199	15	板目取り			RW83
101	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		598	175	17	板目取り			RW80
102	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		620	167	25	板目取り			RW81
103	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		717	181	25	板目取り			RW82
104	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		663	137	14	板目取り		下端部尖る, 表裏面も削られる	RW84
105	井戸枠縦板	SE77	68 - 384		746	229	25	板目取り			RW86
106	井戸枠隅柱	SE77	68 - 384		1013	107	94	板目取り	スギ科スギ属スギ	ホゾ穴2か所	RW118
107	井戸枠隅柱	SE77	68 - 388		953	108	92	板目取り		ホゾ穴2か所	RW117
108	井戸枠隅柱	SE77	72 - 388		919	97	111	板目取り		ホゾ穴2か所	RW120
109	井戸枠隅柱	SE77	72 - 384		898	83	99	板目取り		ホゾ穴2か所	RW119
110	井戸枠横棧	SE77	68 - 388		951	78	73	板目取り		両端がホゾ, 両端部にくさびあり	RW113
111	井戸枠横棧	SE77	68 - 388		943	75	52	板目取り		両端がホゾ, 両端部にくさびあり	RW116
112	井戸枠横棧	SE77	72 - 388		929	89	63	板目取り	スギ科スギ属スギ	両端がホゾ, 両端部にくさびあり	RW115
113	井戸枠横棧	SE77	68 - 384		937	71	67	板目取り		両端がホゾ, 両端部にくさびあり	RW114
114	くさび	SE77	68 - 384		83	26	11	板目取り		106と110の継ぎ部分に打ち込んだ	RW527
116	曲物	SE311		埋土	235	224	8	板目取り	スギ科スギ属スギ	直径241mm, 高さ94mm, 樹皮留め3か所	RW721
117	木製皿	SE311		掘方					ニレ科ケヤキ属ケヤキ	口径199mm, 底径144mm, 器高24mm, 挽き物, 表裏面に線状の加工痕	RW717
118	棒状木製品	SE311		埋土	526	30	37	板目取り	スギ科スギ属スギ	角材の両端を斜めに削ぎ落としている	RW716
119	挟入木製品	SE311		埋土	253	23	26	芯持ち丸太材	バラ科サクラ属	上下端と中程に抉り加工	RW719
120	板状木製品	SE311		埋土	229	97	16	板目取り	スギ科スギ属スギ		RW715
121	丸太材	SE311		埋土		82.2	82	芯持ち丸太材	ヤナギ科ヤナギ属	上下端は切断加工, 長さ1428mm以上	RW720
122	井戸枠縦板	SE311		埋土	516	82	12	板目取り	スギ科スギ属スギ	下端部を切断	RW729
123	井戸枠縦板	SE311		埋土	1821	106	54	板目取り	スギ科スギ属スギ		RW723
124	井戸枠縦板	SE311		埋土	1655	287	24	板目取り	スギ科スギ属スギ	下端部尖る, 表裏面も削られる	RW724
125	井戸枠横棧	SE311		床面	311	109	68	板目取り	スギ科スギ属スギ	下端部を切断, 井戸の上半部に設置された, 上端部にホゾ受け	RW718
126	井戸枠横棧	SE311		床面	795	85	49	板目取り	スギ科スギ属スギ	両端にホゾ穴	RW726
127	井戸枠横棧	SE311		床面	794	82	65	板目取り	スギ科スギ属スギ	両端にホゾ穴	RW728
128	井戸枠横棧	SE311		床面	874	90	37	板目取り	スギ科スギ属スギ	両端がホゾ, 下端部にくさびあり	RW725
129	井戸枠横棧	SE311		床面	869	87	32	板目取り	スギ科スギ属スギ	両端がホゾ	RW727
132	指物	SE316		埋土	40	190	9	板目取り	スギ科スギ属スギ	枘か? 釘穴4か所, 内2か所に釘が残る, 樹皮留め2か所	RW713
135	木製工具	SK304		埋土	363	21	19	板目取り	スギ科スギ属スギ	先端部四角錐形に加工	RW714
170	差歯下駄	SD1	12 - 386	攪乱	232	112	78	板目取り		鼻緒を通す孔が3か所	RW528

IV 理化学分析

1 放射性炭素年代測定 (1)

株式会社古環境研究所

A はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間の経過とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、八幡一遺跡で出土した井戸跡等の年代を明らかにする目的で、出土した木材を対象に放射性炭素年代測定を行った。

B 試料と方法

測定試料は、井戸 SE75 から出土した井戸跡の木片 1 点 (試料番号 1)、井戸 SE77 から出土した井戸枠縦板 2 点

表 7 測定試料および処理

試料番号	出土地点	登録番号	種類	前処理・調整	測定法
1	井戸SE75 7層		木片(スギ)	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
2	井戸SE77	RW29	井戸枠縦板(スギ)	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
3	井戸SE77	RW35	井戸枠縦板(スギ)	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
4	柱穴SP147	RW128	礎板(ケリ)	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

表 8 測定結果

試料番号	測定No. (PLD ₁)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(西暦)	
					1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	30754	-28.08 \pm 0.23	585 \pm 20	585 \pm 20	cal AD 1319-1351 (51.5%) cal AD 1391-1402 (16.7%)	cal AD 1306-1364 (67.9%) cal AD 1385-1411 (27.5%)
2	30755	-22.83 \pm 0.15	975 \pm 18	975 \pm 20	cal AD 1021-1044 (46.7%) cal AD 1101-1119 (21.5%)	cal AD 1017-1050 (52.0%) cal AD 1083-1126 (34.7%) cal AD 1136-1151 (8.7%)
3	30756	-22.44 \pm 0.14	1103 \pm 18	1105 \pm 20	cal AD 900-922 (31.2%) cal AD 949-976 (37.0%)	cal AD 893-987 (95.4%)
4	30757	-25.90 \pm 0.16	352 \pm 18	350 \pm 20	cal AD 1480-1522 (33.0%) cal AD 1575-1625 (35.2%)	cal AD 1465-1527 (44.7%) cal AD 1555-1634 (50.7%)

※ BP : Before Physics (Present), AD : 紀元

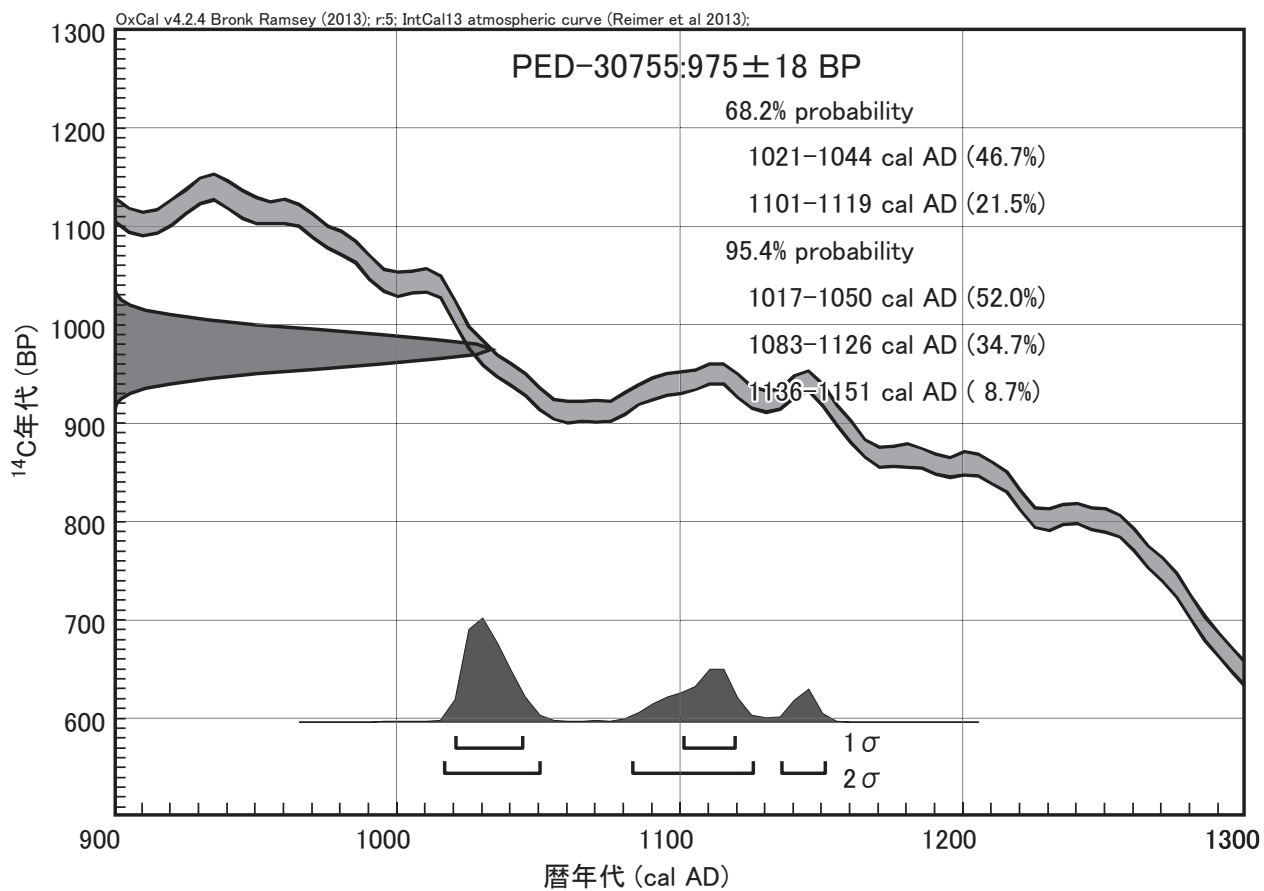
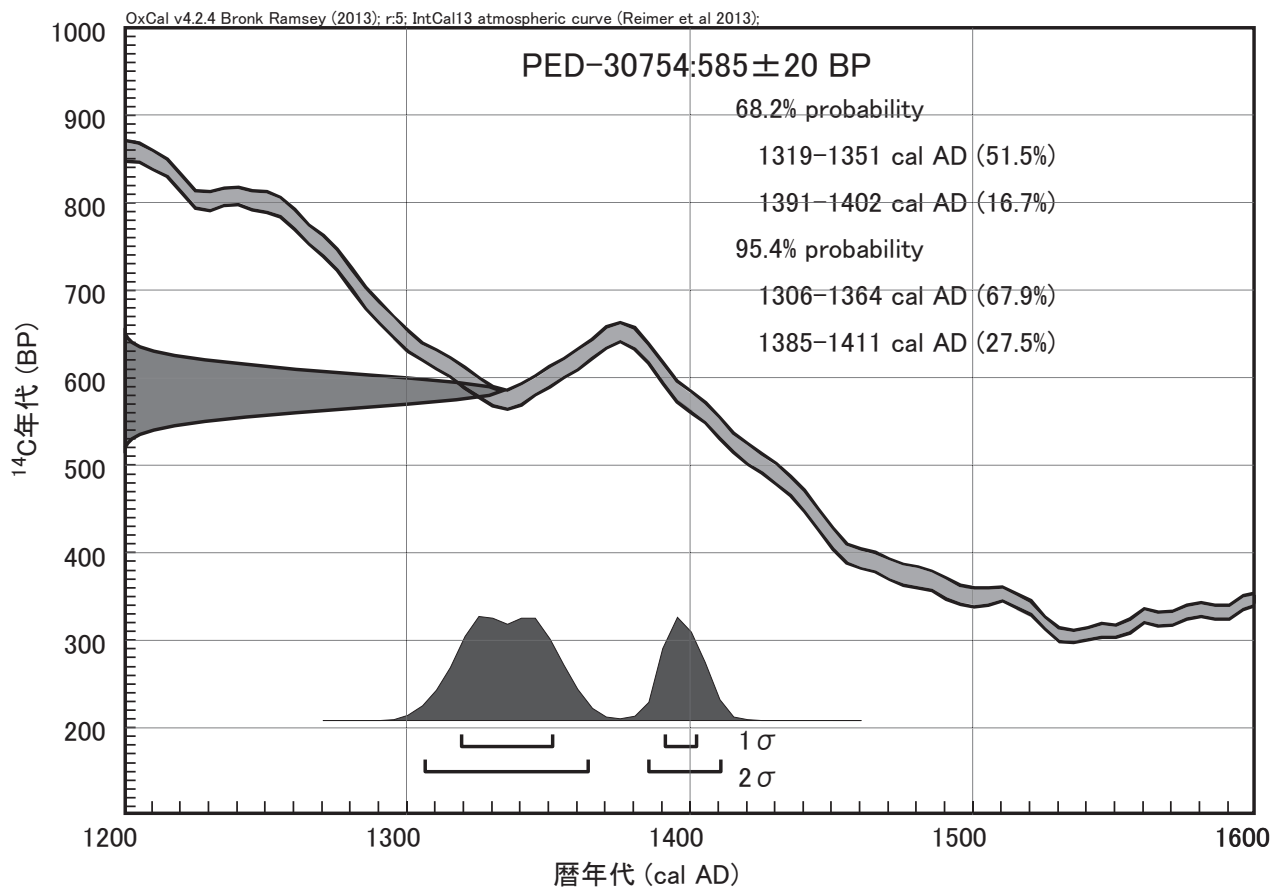
(試料番号 2・3)、柱穴 SP147 から出土した礎板 1 点 (試料番号 4) の計 4 点の木材である。

測定試料の情報、調製データは表 7 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) で測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

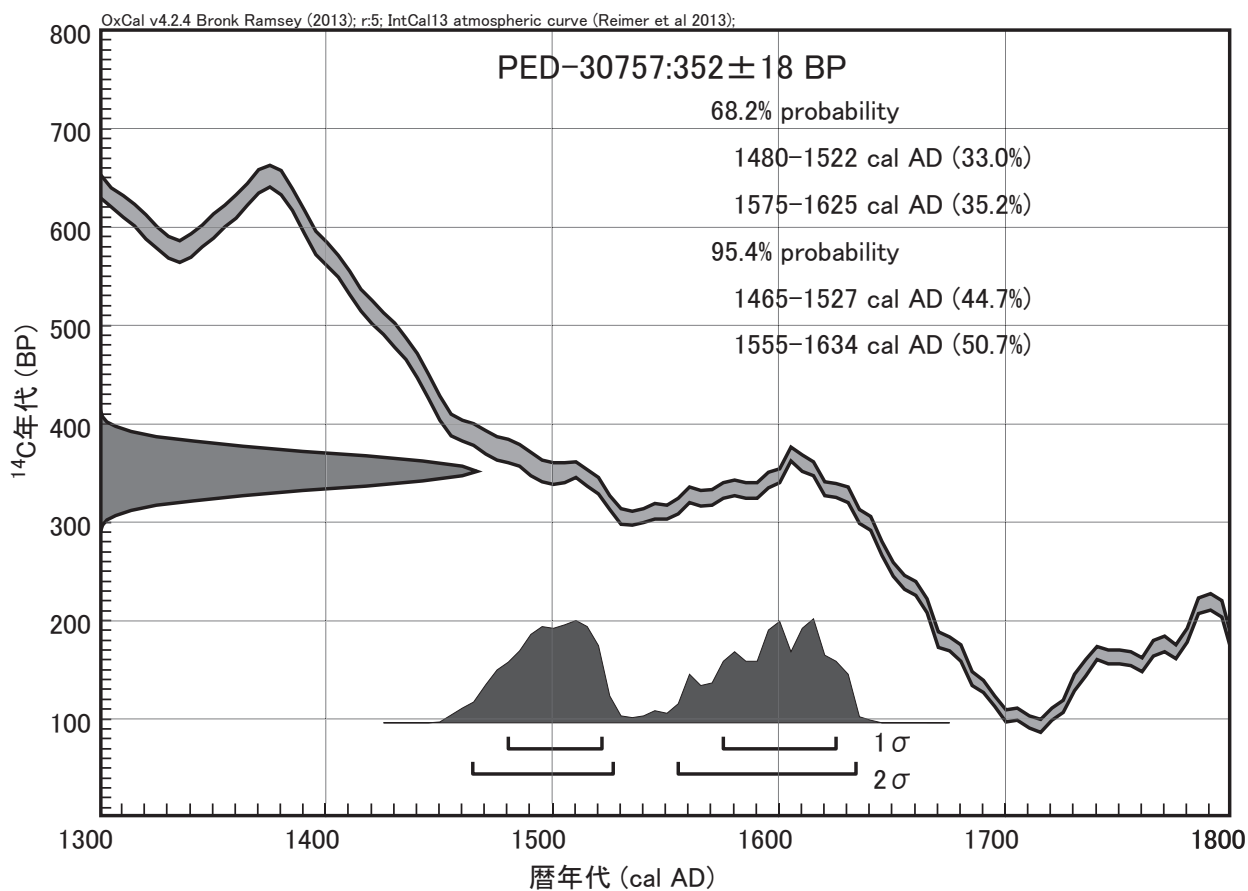
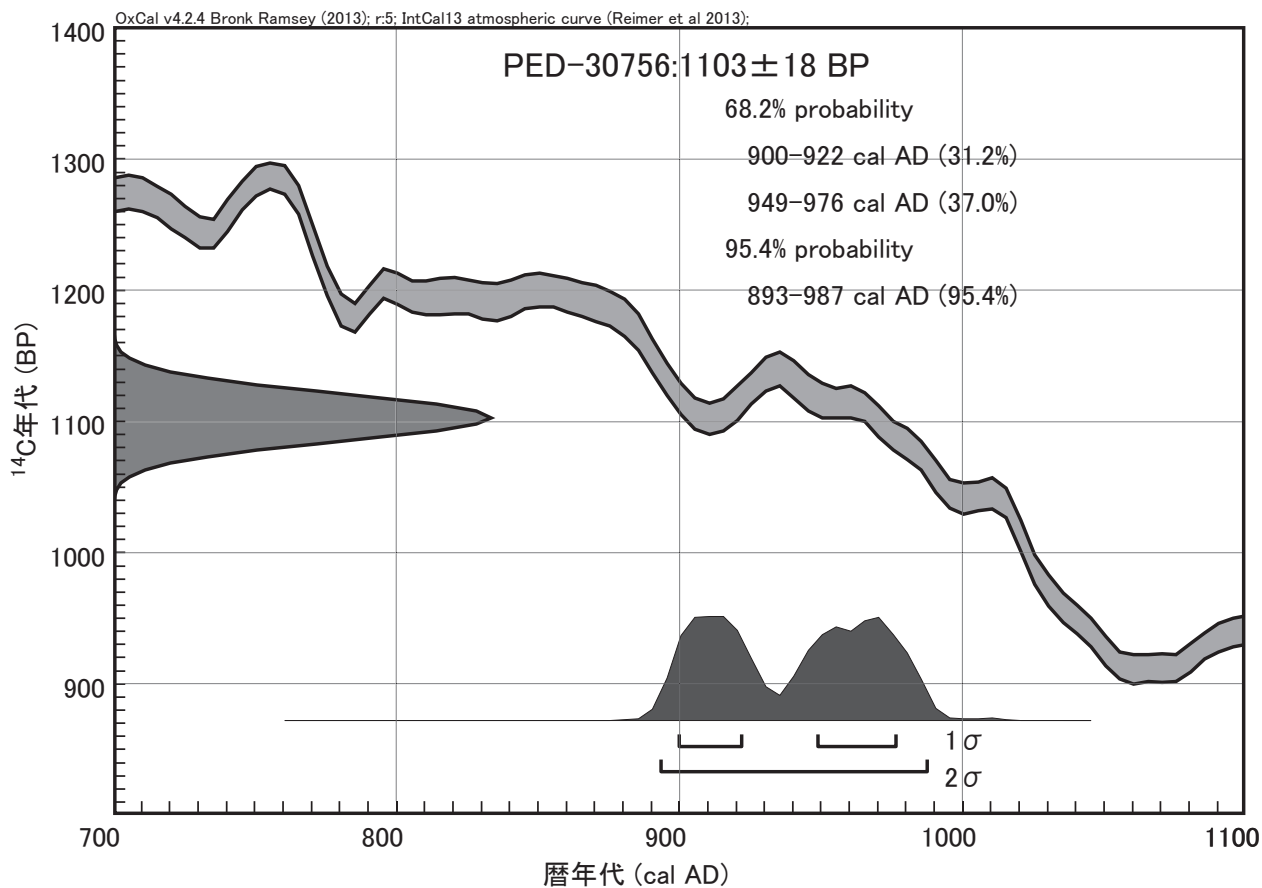
C 測定結果

表 8 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。また、第 7・8 図には暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (年 BP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す



第 7 図 曆年較正結果 (1)



第 8 图 曆年較正結果 (2)

ものである。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 ± 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

D 所 見

八幡一遺跡で出土した井戸跡等の年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法（AMS法）により放射性炭素年代測定を行った。

その結果、井戸SE75より出土した木片は、585 ± 20年BP（2σの暦年代でAD1306～1364年、AD1385～1411年）、井戸SE77より出土した井戸枠縦板（RW29）は、975 ± 20年BP（2σの暦年代でAD1017～1050年、AD1083～1126年、AD1136～1151年）、同（RW35）は、1105 ± 20年BP（2σの暦年代でAD893～987年）、柱穴SP147より出土した礎板（RW128）は、350 ± 20年BP（2σの暦年代でAD1465～1527年、AD1555～1634年）の年代値であった。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, p.355-363.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」, p.3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.

2 放射性炭素年代測定 (2)

株式会社加速器分析研究所

A 測定対象試料

測定対象試料は、八幡一遺跡の井戸跡等から出土した小枝片5点、井戸枠材の破片、柱痕片、樹皮片がそれぞれ1点ずつの計8点である。

B 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表9に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

C 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

D 算出方法

- 1) δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表9）。AMS装置による測定値を用い、表中に

「AMS」と注記する。

- 2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 9 に、補正していない値を参考値として表 10 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- 3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 9 に、補正していない値を参考値として表 10 に示した。
- 4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄

積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 10 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

E 測定結果

試料の測定結果を表 9・10 に示す。

試料の ^{14}C 年代は、1290 \pm 20yrBP (試料 2) から 190 \pm 20yrBP (試料 8) の間にあり、かなりの年代幅をもつ。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い試料 2 が 680 ~ 765cal AD の間に 2 つの範囲、最も新しい試料 8 が 1665 ~ 1803cal AD の間に 4 つの範囲と 1938cal AD 以降の範囲で示される。なお、試料 7・8 の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する (表 10 下の警告参照)。

試料 8 点のうち、試料 3 ~ 5 の 3 点は樹皮が確認された。それ以外の 5 点は樹皮が確認されていないことから、以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、

表 9 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-180614	1	土坑SK304	加工材の破片	AAA	-23.31 \pm 0.23	920 \pm 20	89.18 \pm 0.26
IAAA-180615	2	井戸SE311掘方	小枝片	AAA	-27.74 \pm 0.22	1,290 \pm 20	85.21 \pm 0.24
IAAA-180616	3	井戸SE316	小枝片	AAA	-26.11 \pm 0.2	660 \pm 20	92.11 \pm 0.26
IAAA-180617	4	井戸SE317	小枝片	AAA	-28.26 \pm 0.2	600 \pm 20	92.75 \pm 0.26
IAAA-180618	5	土坑SK318	小枝片	AAA	-23.85 \pm 0.21	640 \pm 20	92.36 \pm 0.26
IAAA-180619	6	土坑SK315	小枝片	AAA	-24.62 \pm 0.19	910 \pm 20	89.33 \pm 0.24
IAAA-180620	7	柱穴SP323	柱痕片	AAA	-29.15 \pm 0.18	270 \pm 20	96.74 \pm 0.26
IAAA-180621	8	柱穴SP330	樹皮片	AAA	-27.47 \pm 0.19	190 \pm 20	97.67 \pm 0.26

[IAA 登録番号 : #9153]

最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる(古木効果)。今回測定された8点のうち、5点の試料は樹皮が確認されていないことから、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は、52% (試料7) から 69% (試料4) の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55 (4), 1869-1887
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363

表 10 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值・暦年較正用 ^{14}C 年代・較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-180614	890 ± 20	89.49 ± 0.26	919 ± 23	1045calAD - 1095calAD (41.7%) 1120calAD - 1142calAD (17.8%) 1147calAD - 1158calAD (8.7%)	1033calAD - 1165calAD (95.4%)
IAAA-180615	1,330 ± 20	84.73 ± 0.24	1,286 ± 22	680calAD - 714calAD (40.4%) 744calAD - 765calAD (27.8%)	668calAD - 731calAD (59.5%) 736calAD - 770calAD (35.9%)
IAAA-180616	680 ± 20	91.91 ± 0.25	659 ± 22	1286calAD - 1305calAD (32.5%) 1364calAD - 1384calAD (35.7%)	1280calAD - 1318calAD (46.7%) 1353calAD - 1390calAD (48.7%)
IAAA-180617	660 ± 20	92.13 ± 0.25	604 ± 22	1306calAD - 1330calAD (27.5%) 1340calAD - 1363calAD (27.9%) 1385calAD - 1397calAD (12.9%)	1299calAD - 1370calAD (74.0%) 1379calAD - 1404calAD (21.4%)
IAAA-180618	620 ± 20	92.58 ± 0.25	638 ± 22	1296calAD - 1312calAD (24.6%) 1359calAD - 1387calAD (43.6%)	1286calAD - 1325calAD (39.1%) 1344calAD - 1394calAD (56.3%)
IAAA-180619	900 ± 20	89.39 ± 0.24	906 ± 21	1047calAD - 1089calAD (40.7%) 1122calAD - 1139calAD (13.8%) 1148calAD - 1164calAD (13.8%)	1039calAD - 1187calAD (95.4%)
IAAA-180620	330 ± 20	95.92 ± 0.26	266 ± 21	1530calAD - 1538calAD (7.1%)* 1635calAD - 1663calAD (61.1%)*	1523calAD - 1559calAD (22.1%)* 1631calAD - 1668calAD (68.6%)* 1783calAD - 1797calAD (4.7%)*
IAAA-180621	230 ± 20	97.18 ± 0.25	189 ± 21	1665calAD - 1681calAD (15.6%)** 1739calAD - 1745calAD (4.6%)** 1763calAD - 1785calAD (21.8%)** 1793calAD - 1803calAD (7.4%)** 1938calAD - ... (18.7%)**	1661calAD - 1684calAD (19.3%)** 1734calAD - 1807calAD (53.6%)** 1930calAD - ... (22.5%)**

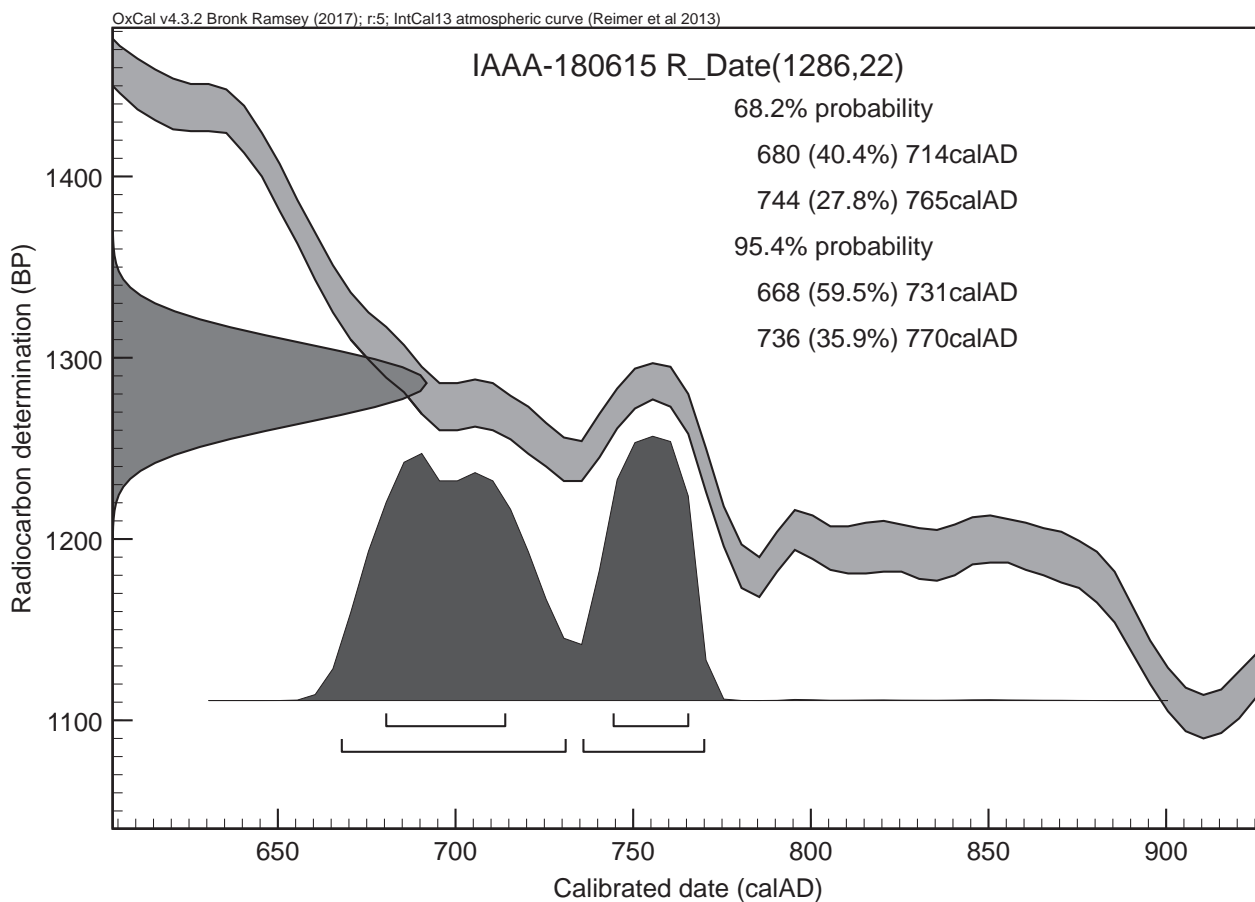
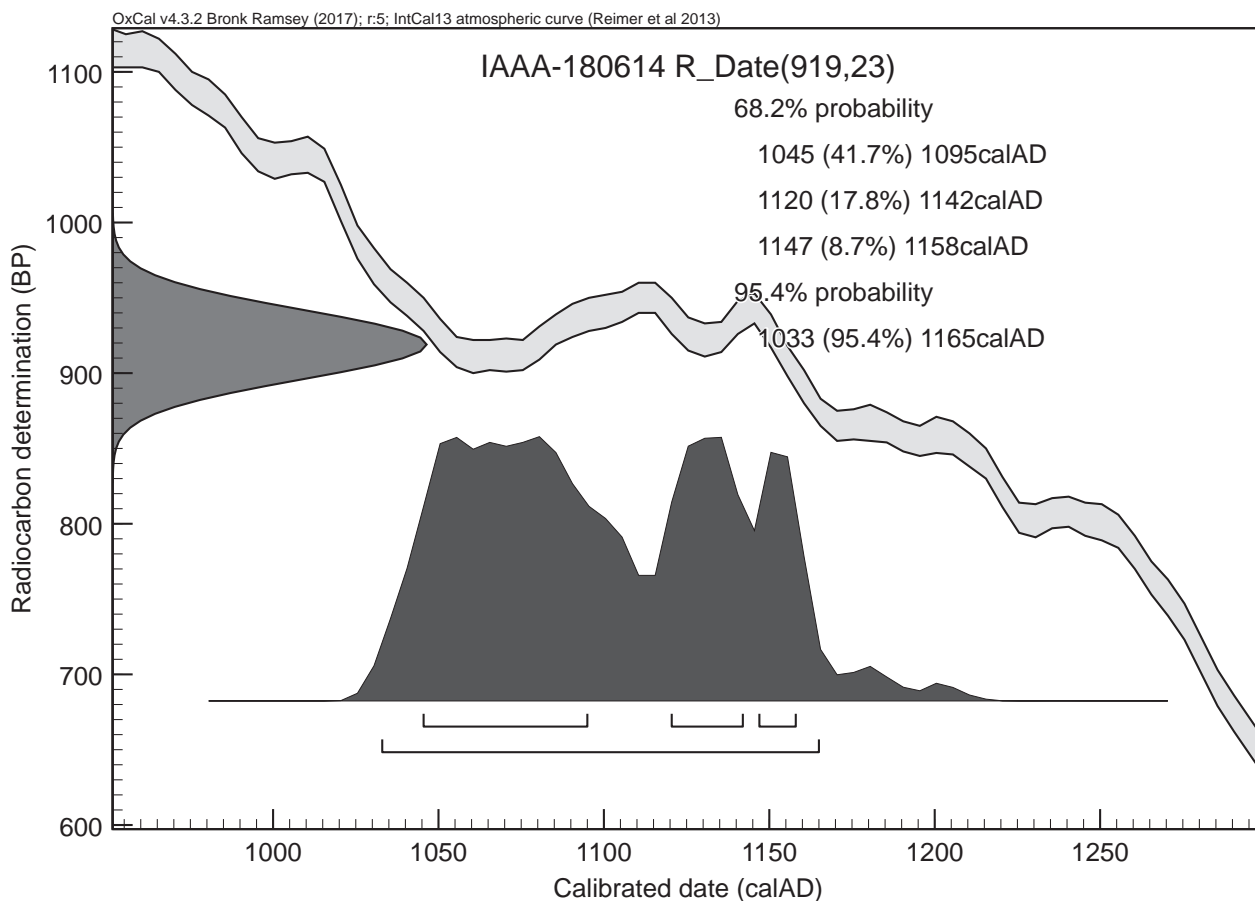
[参考値]

* Warning! Date may extend out of range

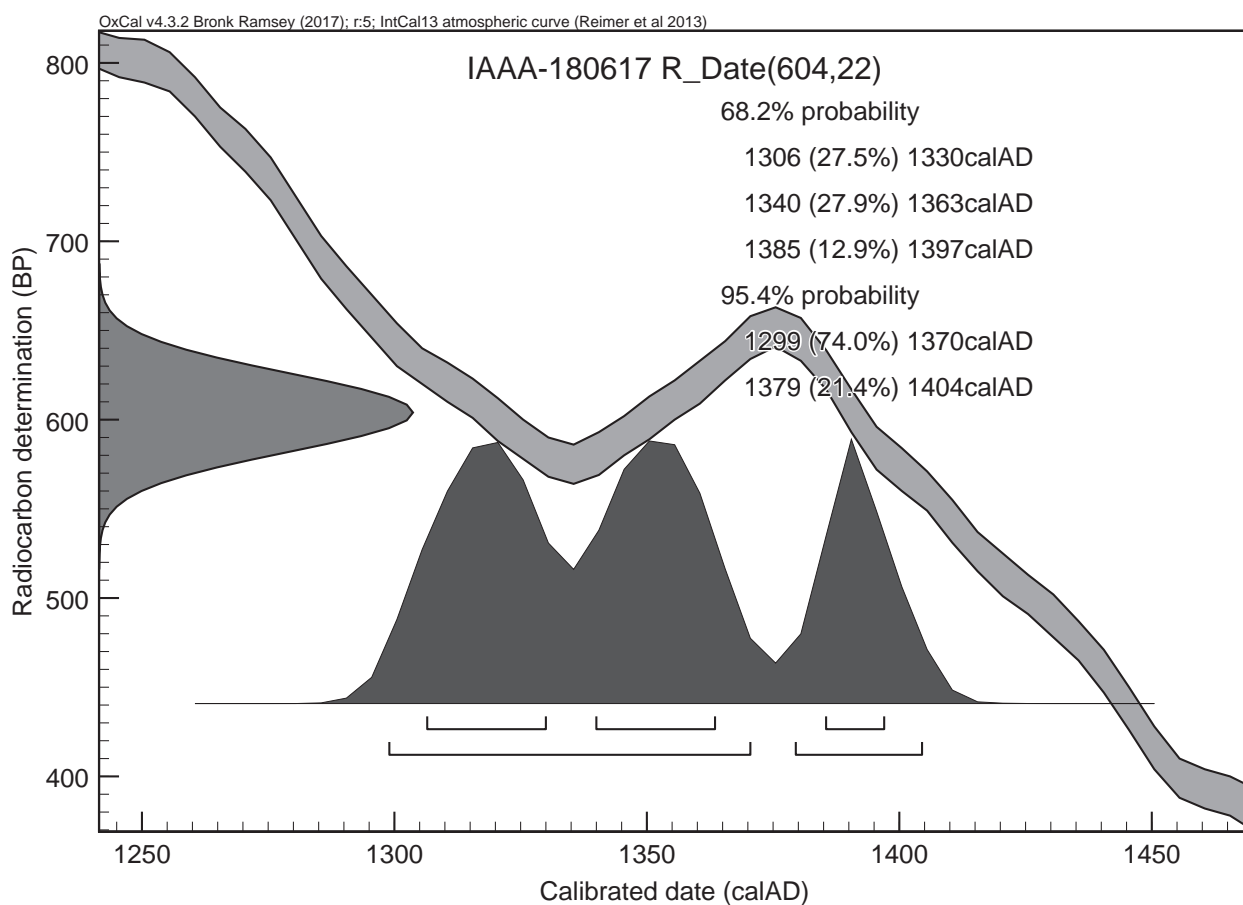
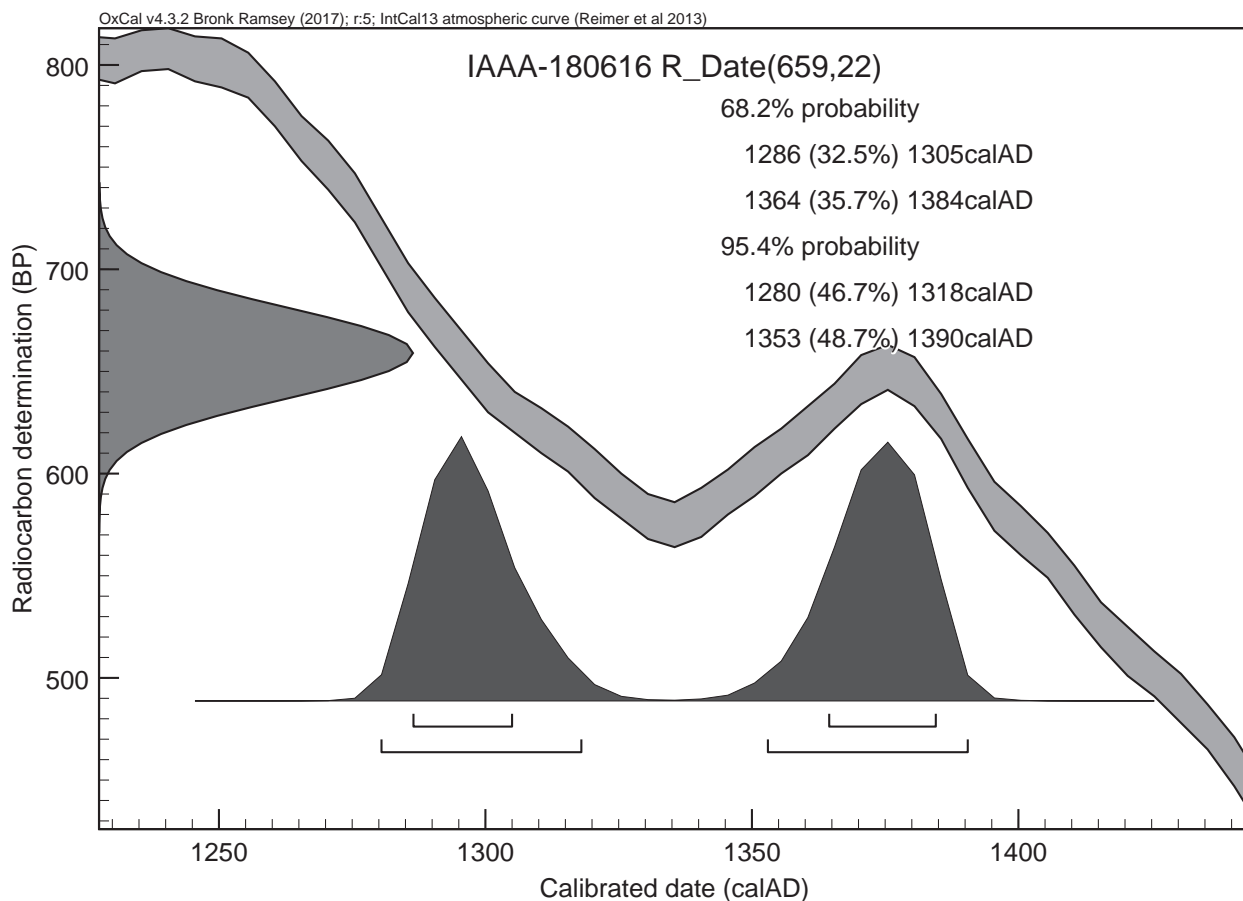
** Warning! Date may extend out of range

Warning! Date probably out of range

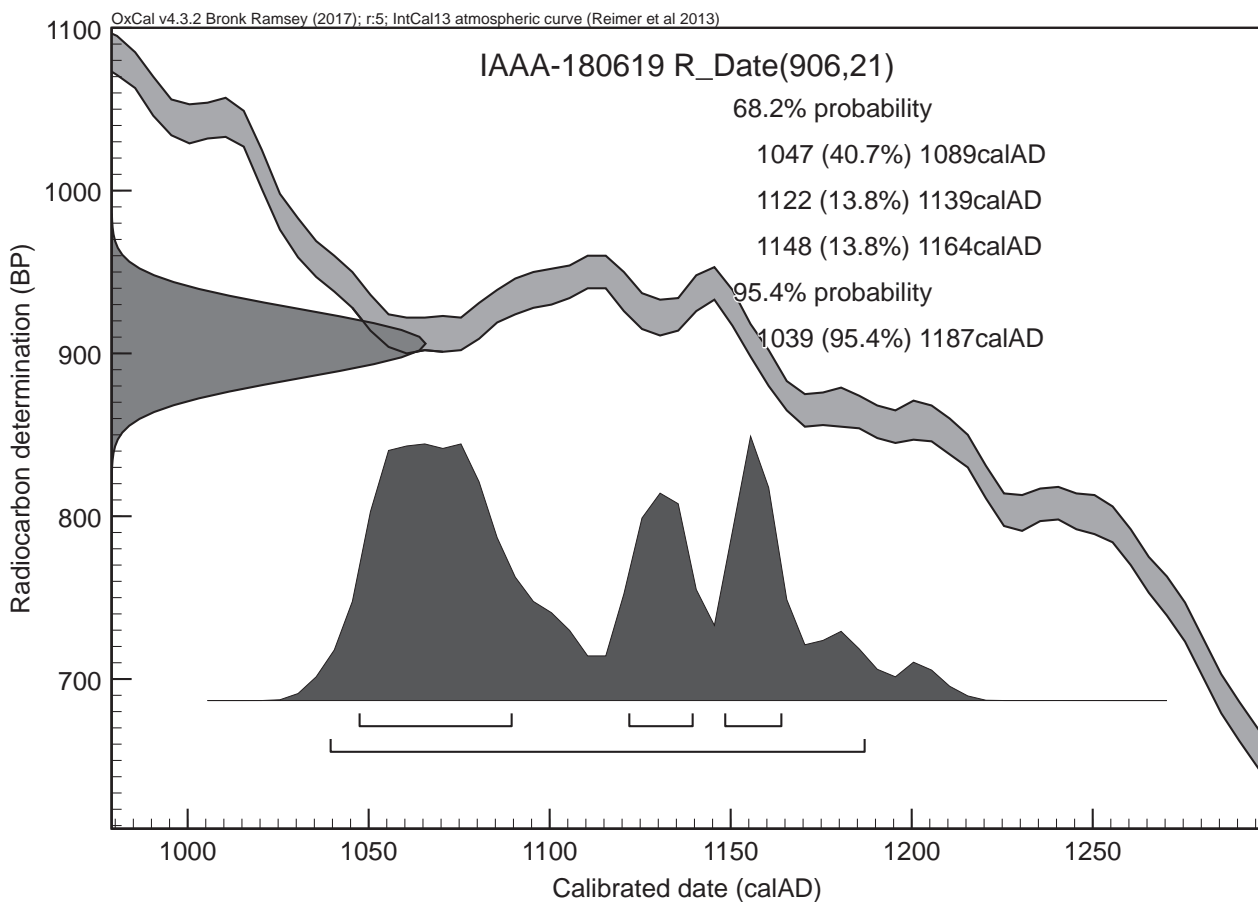
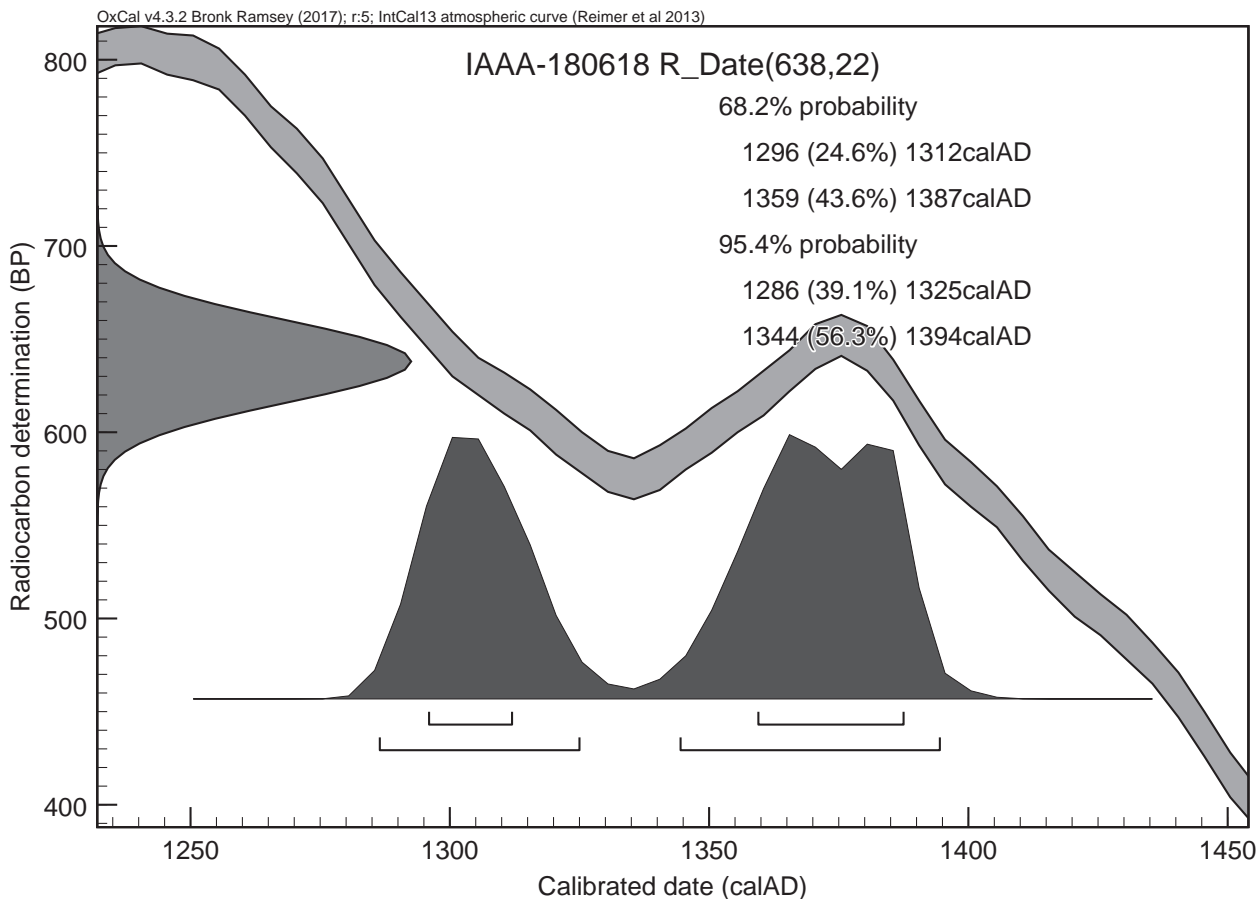
(この警告は較正プログラム OxCal が発するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。*、** の順にその可能性が高くなる。)



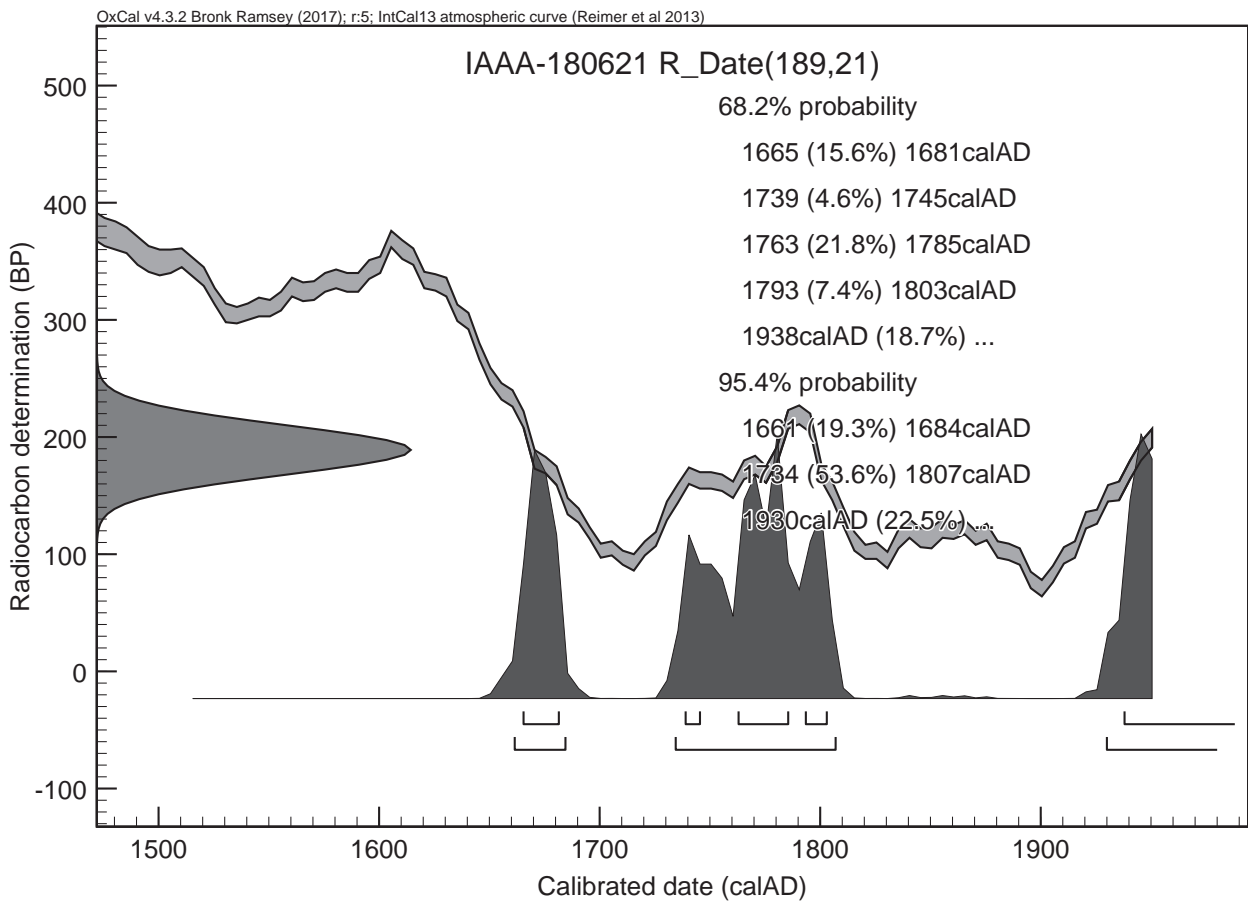
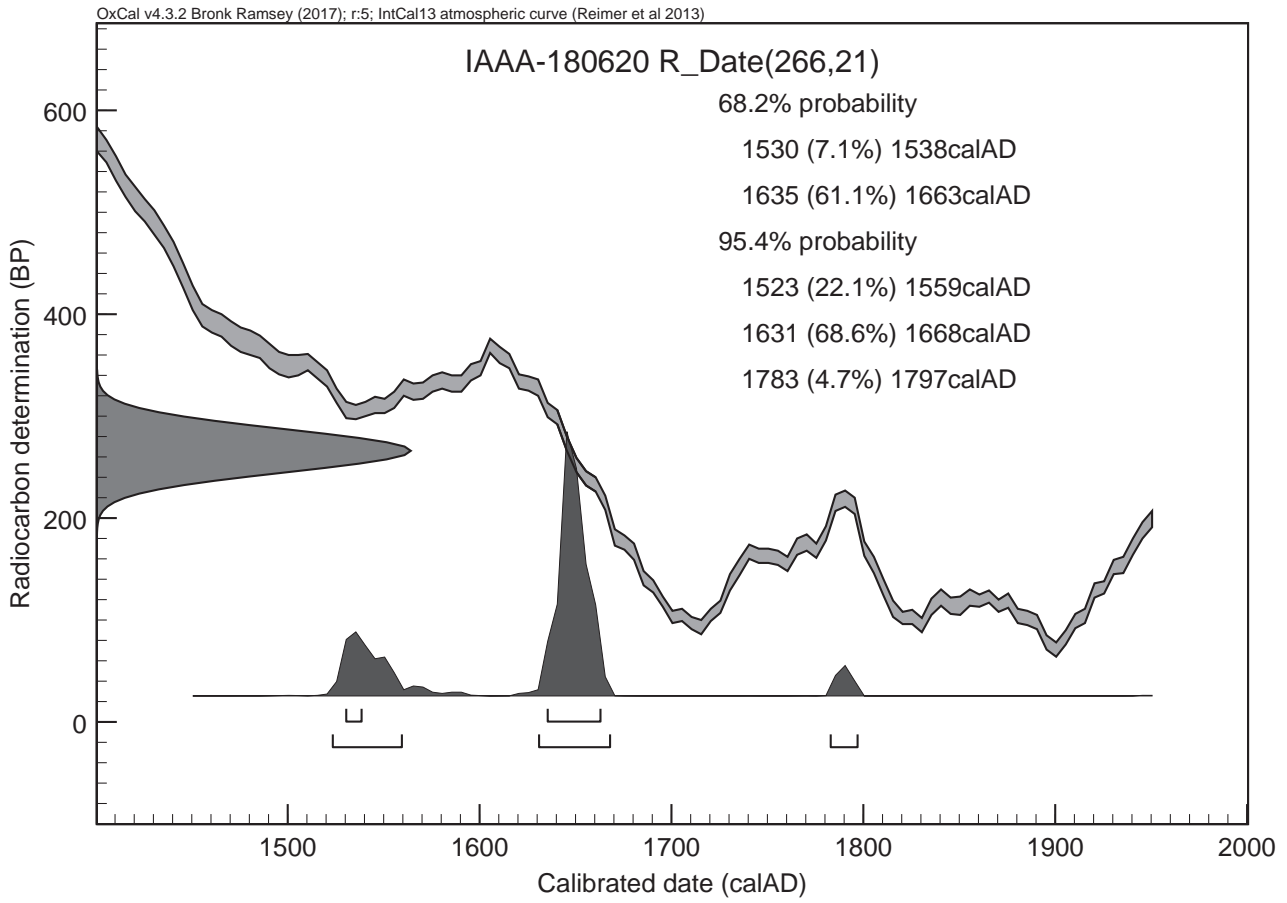
第 9 図 暦年較正年代グラフ (参考) ①



第 10 図 暦年較正年代グラフ (参考) ②



第 11 図 暦年較正年代グラフ (参考) ③



第 12 図 暦年較正年代グラフ (参考) ④

3 蛍光 X 線分析

株式会社古環境研究所

A はじめに

ここでは、山形県東置賜郡川西町大字西大塚字八幡一に所在する八幡一遺跡より出土したかわらけの付着物について、非破壊で蛍光 X 線分析を行い、その材質を検討した。

B 試料と方法

分析対象は、表土より出土したかわらけ 373 である（表 11、写真図版 116 ①）。かわらけには、口縁部に付着物があり、黒色付着物の上に金色の付着物が観察された。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV、1000 μ A のロジウムターゲット、X 線照射径が 8mm または 1mm、X 線検出器は SDD 検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することで S/N 比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム～ウランである。

測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが 15kV（一次フィルタ無し）・50kV（一次フィルタ Pb 測定用・Cd 測定用）の計 3 条件で、測定時間は各条件 500～1500s、管電流自動設定、照射径 8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、ファンダメンタル・パラメータ法（FP 法）による半定量分析を行った。写真図版 116 ①に測定箇所を示す。

表 11 分析対象

試料番号	器種	出土地点	重量(g)	備考	遺物番号	登録番号
6	かわらけ	表土	44.09	口縁部に付着物	373	RP310

表 12 かわらけ付着物の半定量分析結果 (mass%)

MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	Ga ₂ O ₃	As ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	Ag	BaO	Au	PbO
0.68	19.89	55.11	1.77	7.35	2.17	1.20	0.50	0.12	10.61	0.01	0.03	0.01	0.04	0.02	0.02	0.01	0.06	0.01	0.05	0.34	0.01

表 13 金・銀の組成比 (mass%)

Au	Ag
93.38	6.62

C 結果および考察

FP 法による半定量分析結果を表 12 に酸化物の形で示す。測定の結果、マグネシウム (MgO)、アルミニウム (Al₂O₃)、ケイ素 (SiO₂)、リン (P₂O₅)、硫黄 (SO₃)、カリウム (K₂O)、カルシウム (CaO)、チタン (TiO₂)、マンガン (MnO)、鉄 (Fe₂O₃)、銅 (CuO)、亜鉛 (ZnO)、ガリウム (Ga₂O₃)、ヒ素 (As₂O₃)、ルビジウム (Rb₂O)、ストロンチウム (SrO)、イットリウム (Y₂O₃)、ジルコニウム (ZrO₂)、銀 (Ag)、バリウム (BaO)、金 (Au)、鉛 (PbO) が検出された。

特徴として、金 (Au) が検出されたことで、かわらけには金を使用されていることが確認された。付着物には黒色物も観察されるため、漆等を使用して金箔を貼り付けていたと推定される。また、銀 (Ag) も同時に検出された。表 13 に、金 (Au) と銀 (Ag) のみの半定量分析結果を示す。組成比は厳密なものではないものの、金に数 % 程度の銀が含まれていると考えられる。

C まとめ

八幡一遺跡より出土したかわらけ口縁部の付着物について、蛍光 X 線分析を実施した結果、金が発見された。かわらけには金箔が貼られていたとみられる。

参考文献

- 村上 隆 2003 「金工技術」『日本の美術 443』98p 至文堂
中井 泉編 2005 『蛍光 X 線分析の実際』242p 朝倉書店

4 塗膜構造分析

株式会社古環境研究所

A はじめに

山形県東置賜郡川西町大字西大塚字八幡一に所在する八幡一遺跡より出土した漆器碗について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。

B 試料と方法

分析対象は、土坑 SK100 より出土した黒色の漆器碗 1 点である (表 14)。漆器内面を少量採取し、分析試料とした。

表 14 分析対象

試料番号	器種	出土地点	重量 (g)	備考
5	漆器碗	土坑SK100 6層	15.96	内外面黒色

表 15 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.534	
2	2854.13	36.217	
3	1710.55	42.035	
4	1633.41	48.833	
5	1454.06	47.195	
6	1351.86	50.803	ウルシオール
7	1270.86	46.334	ウルシオール
8	1218.79	47.536	ウルシオール
9	1087.66	53.843	
10	727.03	75.389	

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて塗膜の表面部分から薄く削り取った試料を、押し潰して厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光株式会社製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 FT/IR - 410、IRT - 30 - 16 を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

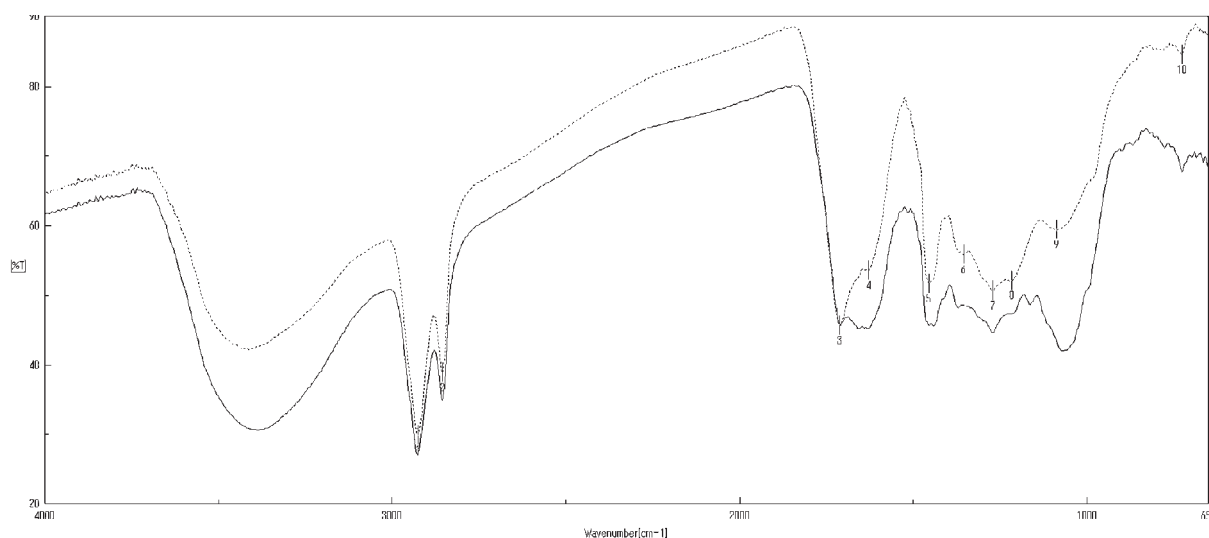
塗膜観察用薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム (#1000) を用いて厚さ約 50 μ m 前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡 (日本電子株式会社製 JSM - 5900LV) による反射電子像観察を行った。その後、再度精密研磨フィルム (#1000) を用いて厚さ約 20 μ m 前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

C 結果および考察

以下に、塗膜分析結果について述べる。なお、第 13 図の赤外吸収スペクトルは、縦軸は透過率 (%T)、横軸が波数 (Wavenumber (cm⁻¹); カイザー) である。また、各スペクトルはノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の主な赤外吸収位置を示す (表 15)。

表 16 塗膜分析結果

試料番号	採取塗膜	下地	塗膜層
5	碗内面黒色塗膜	炭粉漆下地	2層 透明漆層2層



第 13 図 漆器塗膜の赤外分光スペクトル図
※実線：塗膜試料，点線：生漆，数字：生漆の赤外吸収位置

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と漆からなる下地 b1 層と b2 層、透明漆層 c1 層と c2 層が観察された（写真図版 116 ②の 1-1a・1b）。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収（吸収 No.7 および No.8）が明瞭に認められ、漆と同定された（第 13 図）。塗膜の特徴を表 16 に示す。

D まとめ

八幡一遺跡から出土した黒色漆器碗について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、炭粉漆下地および透明漆層 2 層からなる塗膜構造が確認された。

5 樹種同定(1)

株式会社古環境研究所

A はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。自然木からは当時生育していた樹種がわかり、森林の復元につながる。加工材からは人々が何の目的にどの樹種を選択して利用していたかがわかり、推定される遺跡周辺の植生との比較から木材あるいは木製品の流通などがわかることもある。

八幡一遺跡は、山形県東置賜郡川西町大字西大塚字八幡一に所在する。遺跡は、最上川が形成した河岸段丘の北側に立地する。平成 26 年度に実施された発掘調査において、井戸梓縦板などの木製品が出土した。ここでは、これら木材の樹種を明らかにし、当時の木材利用を検討する目的で樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(第IV章第1節参照)。

B 試料と方法

試料は、井戸 SE75 から出土した木片 1 点（試料番号

1）、SE77 から出土した井戸梓縦板 2 点（試料番号 2・3）、柱穴 SP147 から出土した礎板 1 点（試料番号 4）の計 4 点の木材である。

放射性炭素年代測定の結果、試料番号 1 は 14 世紀初頭～15 世紀前半、試料番号 2 は 11 世紀前半～12 世紀中頃、試料番号 3 は 9 世紀末～10 世紀後半、試料番号 4 は 15 世紀後半～17 世紀前半の暦年代を示した。

樹種同定は次の方法で行った。材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡によって 50～1000 倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。なお、切片採取前に各試料について木取りの確認を行った。

C 結果

同定の結果、針葉樹のスギ 3 点と、広葉樹のクリ 1 点がみられた。木取りは、井戸梓板は 2 点ともに板目、柱根は芯持丸木、木片は割れであった。同定結果を表 17 に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に顕微鏡写真を示す。

1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科
写真図版 117 1a～1c, 2a～2c

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ 1～4 列となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に普通 2 個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

2) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科
写真図版 117 3a～3c

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では

表 17 八幡一遺跡出土木材の樹種同定結果一覧

試料番号	出土遺構	登録番号	器種	樹種	木取り	年代測定番号
1	井戸 SE75 7 層		木片	スギ	割れ	PLD-30754
2	井戸 SE77	RW29	井戸梓縦板	スギ	板目	PLD-30755
3	井戸 SE77	RW35	井戸梓縦板	スギ	板目	PLD-30756
4	柱穴 SP147	RW128	礎板	クリ	芯持丸木	PLD-30757

徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

D 考察

井戸跡である SE75 から出土した木片と、SE77 から出土した井戸枠縦板は、いずれもスギであった。スギは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良い樹種であるため（伊東ほか，2011）、井戸にはスギを利用していた可能性がある。

柱穴 SP147 から出土した礎板はクリであった。クリは堅硬で耐朽性の高い樹種である（伊東ほか，2011）。南陽市の上野遺跡では、中世の掘立柱建物跡から出土した柱材がいずれもクリであり（株式会社古環境研究所，2006）、傾向は一致する。

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂 2011 『日本有用樹木誌』238p 海青社
株式会社古環境研究所 2006 『上野遺跡における理化学分析』「上野遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 152 集) 91-95p 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター

6 樹種同定 (2)

株式会社吉田生物研究所

A 試料

試料は山形県八幡一遺跡から出土した木棺部材 1 点、曲物 1 点、井戸枠縦板 5 点の合計 7 点である。

B 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

D 結果

樹種同定結果(針葉樹 3 種)の表 18 と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科マツ属 [二葉松類] (Pinus sp.)

(遺物番号 10・写真図版 118)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で 1～15 細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属 [二葉松類] はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

2) スギ科スギ属スギ (Cryptomeria japonica D.Don)

(遺物番号 28・75・89・106・112)

(写真図版 118～120)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で 1 分野に 1～3 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

3) ヒノキ科アスナロ属 (Thujopsis sp.)

(遺物番号 20・写真図版 118)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で 1 分野に 2～4 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

※使用顕微鏡：Nikon DS-Fi1

参考文献

- 林 昭三 1991 『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
島地 謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版
北村四郎・村田 源 『原色日本植物図鑑木本編 I・II』保育社
奈良国立文化財研究所 1985 『奈良国立文化財研究所史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇』
奈良国立文化財研究所 1996 『奈良国立文化財研究所史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇』

表 18 樹種同定結果

遺物番号	品名	樹種	登録番号
10	木棺部材	マツ科マツ属[二葉松類]	RW543
20	曲物	ヒノキ科アスナロ属	RW3
28	井戸枠縦板	スギ科スギ属スギ	RW13
75	井戸枠縦板	スギ科スギ属スギ	RW95
89	井戸枠縦板	スギ科スギ属スギ	RW69
106	井戸枠隅柱	スギ科スギ属スギ	RW118
112	井戸枠横棧	スギ科スギ属スギ	RW115

7 樹種同定 (3)

株式会社上田墨縄堂

A 試料

試料は、曲物、板、工具等の木製品や施設を構成する井戸枠など 16 点である。このうち、曲物は、底板と側板があり、それぞれについて樹種同定を実施するため、合計点数は 17 点となる。

B 分析方法

剃刀を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の 3 断面の徒手切片を木製品から直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995・1996・1997・1998・1999)を参考にする。

C 結果

樹種同定結果を表 19 に示す。木製品は、針葉樹 1 分類群(スギ)と広葉樹 3 分類群(ヤナギ属・ケヤキ・サクラ属)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)

スギ科スギ属(写真図版 121 1a~1c)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2~4 個。放射組織は単列、1~10 細胞高。

・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

(写真図版 121 2a~2c)

散孔材で、道管は単独または 2、3 個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1~15 細胞高。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino)

ニレ科ケヤキ属(写真図版 121 3a~3c)

環孔材で、孔圏部は 1~2 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6 細胞幅、1~50 細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

表 19 樹種同定結果

遺物番号	遺構番号	遺物名	部位	種類	登録番号
116	井戸SE311	曲物	側板	スギ	RW721
			底板	スギ	
117	井戸SE311掘方	皿		ケヤキ	RW717
118	井戸SE311	棒状木製品		スギ	RW716
119	井戸SE311	挟入木製品		サクラ属	RW719
120	井戸SE311	板状木製品		スギ	RW715
121	井戸SE311	丸太材		ヤナギ属	RW720
122	井戸SE311	井戸枠縦板		スギ	RW729
123	井戸SE311	井戸枠縦板		スギ	RW723
124	井戸SE311	井戸枠縦板		スギ	RW724
125	井戸SE311	井戸枠横棧		スギ	RW718
126	井戸SE311	井戸枠横棧		スギ	RW726
127	井戸SE311	井戸枠横棧		スギ	RW728
128	井戸SE311	井戸枠横棧		スギ	RW725
129	井戸SE311	井戸枠横棧		スギ	RW727
132	井戸SE316	指物		スギ	RW713
135	土坑SK304	木製工具		スギ	RW714

・サクラ属 (Prunus) バラ科

(写真図版 122 4a ~ 4c)

散孔材で、道管は単独または 2 ~ 6 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1 ~ 5 細胞幅、1 ~ 30 細胞高。

引用文献

- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料 31』 p81-181 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料 32』 p66-176 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料 33』 p83-201 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料 34』 p30-166 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料 35』 p47-216 京都大学木質科学研究所
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編) 2006 『針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 p70 伊東隆夫・藤井智・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社 [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 p176 地球社
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 p122 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社 [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]

V 総括

1 はじめに

今回の発掘調査では、八幡一遺跡の主体となる部分は調査区内にはなかったようだ。検出された遺構は、調査区内に居住の実態があったことを示すようなものではなく、どちらかというと居住に付随する施設などが多かった。それでも出土した遺物には、近在に集落、あるいは特殊な施設などがあったことを裏付けるようなものも含まれており、大変興味深い。

2 遺構

A 中世

古代以前にさかのぼるような遺構は確認できなかった。古代の遺物を最新とする遺構は検出されてはいるが、その位置や形状から中世以降の遺構であったと判断している。

調査区の中央部北側、南東端、東側中央で井戸を7基検出した。川SG2を挟んだ北岸と南岸で見つかったことになる。

井戸の内訳は、井戸枠があるもの3基、素掘りのもの4基である。井戸枠があってもほとんど抜き取られていたものが2基（井戸SE75・311）で、井戸枠が埋設された状態を詳しく調査できたのは井戸SE77の1基だけであった。

いずれも地下の帯水層まで深さが達しており、湧水を確認した。また、井戸の周囲には井戸と類似した形状の土坑や円筒形の土坑が数多く見つかっている。特に調査区中央部北側ではよく目立つ。井戸とよく似た形状であっても、規模が小さく深さも浅い。よって帯水層まで達せず湧水がなかった。土坑の壁面は、開口部から底まで全面が粘土質の地山である。湧水が涸れてしまっているという可能性はないだろう。

これらの土坑は第三章第2節の中でも指摘しているが、井戸の試し掘りの痕跡だろうと考えている。ただなぜこれらの試し掘りの結果、井戸として完成にまで至らなかったのだろうか。

試し掘りの痕跡とした土坑の壁面には、泥炭層が部分的に露出しているものがあった。推測ではあるが、泥炭層から植物遺体などが流出して水がにごるのを嫌って、にごらない場所を探していたのではないだろうか。

泥炭層は帯水層より上位に一定の広がりを持って存在していると見られる。井戸でも試し掘りの土坑でもほとんどがこの泥炭層に到達する深さまで掘られている。どちらにしろ泥炭層を掘り抜かなければ帯水層には届かない。水がにごるかにごらないかは程度の差でしかなかっただろう。

井戸枠をもつ井戸であれば壁面からの植物遺体の流入は抑えられただろう。井戸や試し掘り痕跡の土坑が密集する調査区中央部北側にある井戸枠をもつ井戸SE311は、素掘り井戸では清浄な水が得られないとの最終的な判断を経て構築されたものかもしれない。

各井戸から出土している遺物から、14世紀を前後する時期に井戸や試し掘りの土坑が構築されたと考えられる。しかしこれらの遺構からの出土遺物は少なく、時期の特定は難しい。ここではより幅をもたせて中世に構築された遺構群としておきたい。

川SG2は黒色系の粘質シルトが主体となって埋没している。常に水が流れたような川ではなく、降水時に水が流れる流路のようなものであったと考えられる。滞留した水の中に、湿地性の植物の遺体などが堆積して埋没したのだろう。

B 近世以降

近世の遺構が川SG2を切り込んでいる。川SG2はおおよそ近世までの間にほとんど埋没し、集落の一部として利用されるようになったと言える。

近世の木棺墓SK101も川SG2をわずかに切り込んでいる。調査区北西部に集中する柱穴群・ピット群も近世のものと考えられ、やはり川SG2を切り込むものが多い。

中世までは川SG2の両岸に遺構を構築していたが、近世に至り、内部に入り込んできている。川SG2の状況の変化に応じて、土地の利用方法が変わってきたと理解でき

る。

現代まで利用された用水路だと考えられる溝が、各所で検出された。現在の用水路はおよそ東西南北の方位に沿った向きであるが、調査で見つかったこれらの溝はいずれも北で西にやや振れた向きであった。途切れている部分は、現在も利用されている用水路と繋がっていたと考えられる。現代に行った大規模な水田整備の際に、一部は埋められ、一部はそのまま利用されることになったのだろう。

近世から現代の間に墓地や柱穴が掘り込まれたような土地利用から、水田へと姿を変えたと言える。その時期がいつだったのか判断はできなかった。

3 遺物

遺物は縄文時代から現代のものまで、多種多様なものが出土した。八幡一遺跡では、各時代に人々のさまざまな営みが行われていた証左となる。

A 仏教に関連する遺物（第 67 図）

今回の発掘調査の成果で注目されることは、古代から近世にわたって仏教に関連する遺物が断続的に出土していることである。

古代においては須恵器の鉢 289、高坏 288、小型壺 290・115・291・353 などの仏具と考えられるものがある。おおよそ 9 世紀前半頃の所産のものである。特に小型壺 290 については、底部裏面に「佛法爲」という刻書が施されており、仏教との関わりを直接的に示している。その多くは川 SG2 の北岸付近から出土しているが、周囲に古代の遺構はない。調査区外から廃棄されたものが、川 SG2 付近に流れ込んだとみて良いだろう。そうすると調査区北側の微高地上に、これらの仏具が利用される何らかの施設があったと推測できる。それは寺院か、あるいは仏堂をもつ何らかの施設であろう。

山形県内では、「佛」と刻書された土器の出土例は、米沢市の横山 C 遺跡について 2 例目となる（山形県教育委員会 1991）。また、川西町の道伝遺跡からは「佛」と墨書された土器が出土している。横山 C 遺跡の例は 10 世紀中頃から後半、道伝遺跡のものは 9 世紀末頃の所産と報告されている。「佛」字が確認された例としては、当遺跡の例が県内最古となる。

中世における仏教に関連する遺物には、各種の石造

物がある。板碑 136・163・381・382、厨子型板碑 164・383、五輪塔火輪 384、相輪 385 などである。

これらの石造物が作られた時期ははっきりとは分からないが、板碑の形状などから室町時代を中心とする時期だと考えられる。五輪塔火輪や相輪もこれらに近い時期のものと考えておきたい。

出土地点は表土や溝 SD1、土坑 SK80 である。土坑 SK80 から出土した板碑 136 を除いては、現代に動かされた土層から出土している。つまり、現代に行われた水田整備の際に廃棄されたと考えられよう。水田整備前まではどこにあったかは分からないが、もしかすると路傍にひっそりとたたずんでいたのかもしれない。

これらの石造物も調査区の北側微高地を中心とする場所に、仏教に関連する施設が存在したことを示唆するものと言える。

近世では、木棺墓 SK101、かわらけ 373 などが仏教に関わるものと考えられる。木棺墓 SK101 からは六道銭 2～4、葬送儀礼に関わると推測される木製品 16～19 が出土した。六道銭は六地藏への賽銭、あるいは三途の川の渡し賃などと信じられて、棺に納められたと考えられる。花文付木製品 18・19 には蓮華文や唐草文とも言えそうな墨描が施されている。両者とも仏教に関わる文物に頻繁に用いられるモチーフである。

土師質土器のかわらけ 373 の口縁部には金が付着していることが確認されている。金泥を使って文字など書く際に使用したものと推測しており、金泥書で経典の書写が行われた可能性を指摘したい。

このように近世においても仏教との関わりを示す遺物が出土していることから、やはり寺院などが付近に存在していたと推測される。

断続的ではあるが、当遺跡からは古代から近世にかけて仏教に関わる遺物が出土している。調査区北側の微高地を調査する機会があれば、これらの様相がより明確に理解することができるだろう。

B 領主を示唆する遺物（第 67 図）

山形県内で滑石製石鍋が出土したのは、当遺跡を含めて 3 例のみであり、非常に貴重な遺物と言える。

長崎県西彼杵半島が主な生産地であり、福岡県や山口県でも作られている。10 世紀末から 16 世紀頃までの間

に作られていたとされる（松尾 2017）。石鍋は各地に流通するようになるが、西日本では数多く出土するものの、東日本では鎌倉以外では出土することは非常に少ないと言われている（高橋 2003）。

各地へ流通するようになるのが 13 世紀以降であり、当遺跡出土の石鍋 331 の年代と同じ頃である。一般的に使用された調理具ではなく、寺院・政治的中枢機関・地域の拠点集落などにおいて高価品として扱われたと言われる（松尾 2003）。

当遺跡の事情に当てはめれば、やはり遺跡北側の微高地にそれなりの施設が存在していたことを示唆するものであろう。

東日本においては鎌倉での出土例が多いことから、当時の政治的な中枢機関において、好んで使われていたと言えるだろう。第 II 章第 2 節でも触れたように、八幡一遺跡がある置賜郡は大江広元の二男（長井時広）が領有している。鎌倉から領地を管理・運営する役目を負った誰かが、石鍋を携えてきたと考えることもできるだろう。

源氏の氏神である八幡神を祀った八幡神社は、八幡一遺跡のすぐ西側にある。由緒は定かではないが、関連を想起せずにはいられない。

天授 3 年（1380）には、置賜は伊達宗遠の領地となった。以後、天正 19 年（1591）に蒲生氏の領地となるまでは伊達氏が治めることになる。

伊達氏の領地内で特徴的に出土する遺物として知られているのが、瓦質播鉢と内耳土鍋である。当遺跡で出土した瓦質播鉢 370 と内耳土鍋 369 は 16 世紀頃のものである。伊達氏の領地内であったことを物証として示すものと言える。

4 まとめ

遺構の配置、遺物の出土状況から推測すると、調査区の北側、および南東側に八幡一遺跡の本体となるべき集落、あるいは施設が存在したと言えよう。

今回の調査で見つかった遺構では特に目を見張るものはなかったが、遺物では貴重なものが出土した。周囲から流れ込んだものばかりであったが、この地域の歴史を雄弁に語るものがいくつもあった。

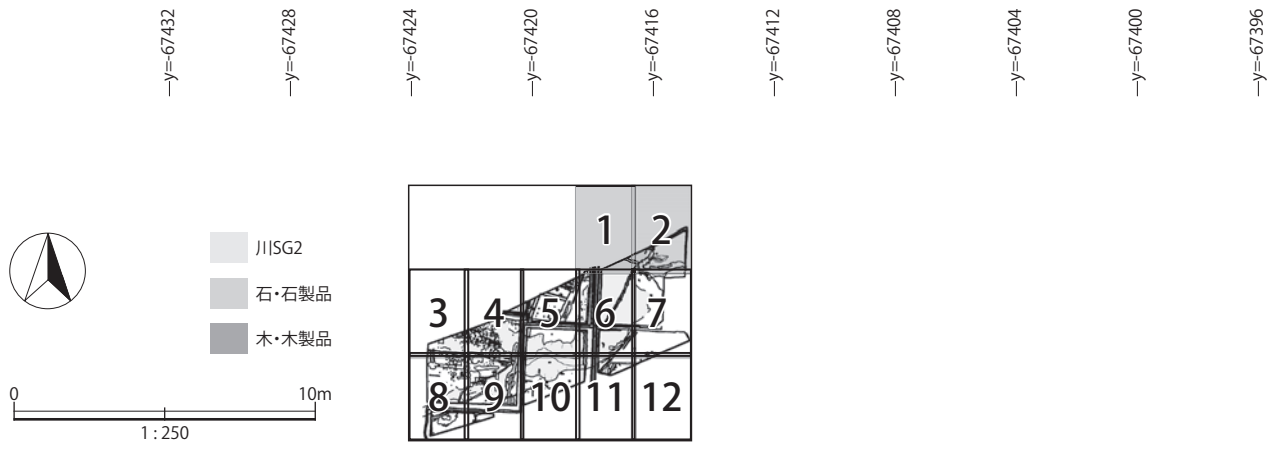
調査区のおよ半は低地であるため、遺跡の立地から推測するとあまり成果の望めない調査になることも予想された。しかし、いざ調査を開始すると、井戸や木棺墓のほか、思いもかけない刻書のある須恵器や石造物、滑石製石鍋、金泥の付いたかわらけなどが出土した。予想は外れて大きな調査成果があったと言える。

遺跡の立地に適した場所と言われなくとも、地域の歴史を解明する手がかりを数多く手に入れることができた稀有な調査事例であった。

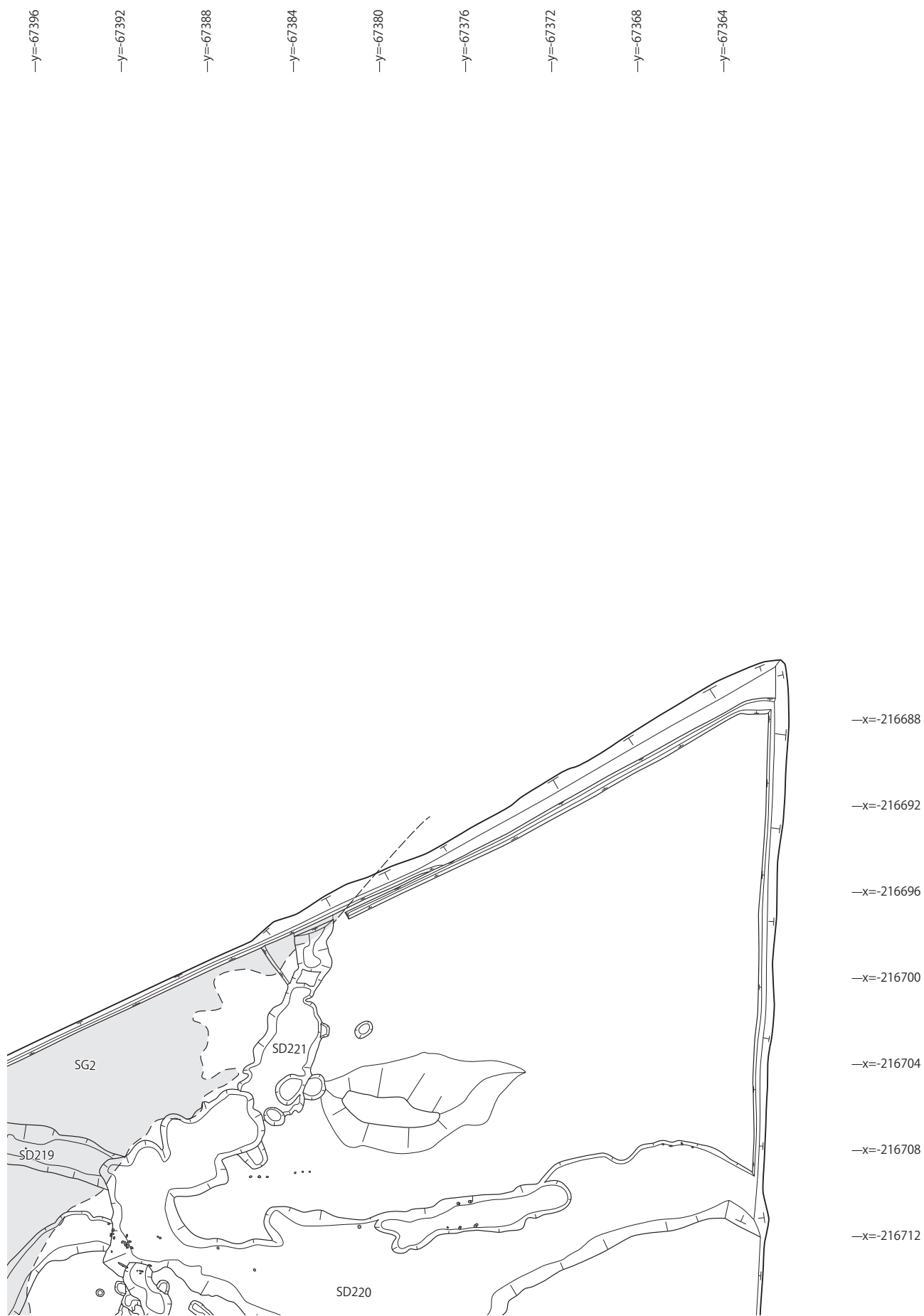
引用・参考文献

※ I～III・V 章に関するもの。IV 章のものは IV 章各節の末尾に記載した。

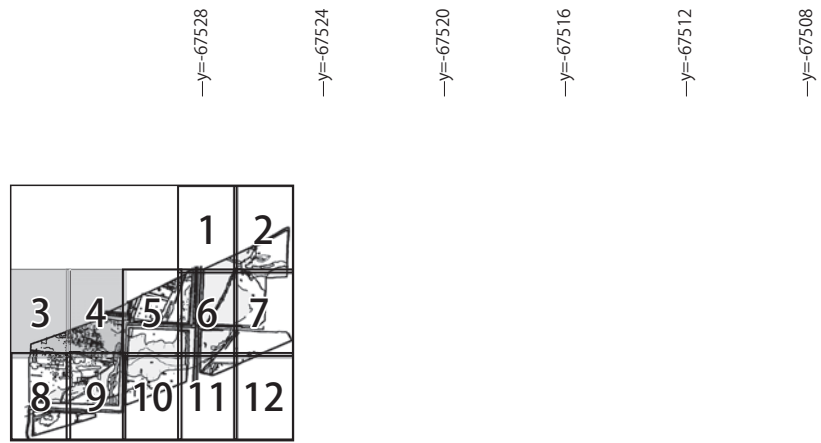
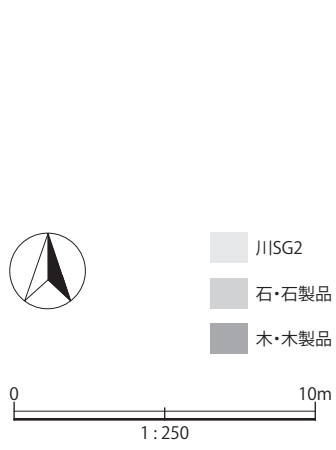
- 加藤和徳 2008 『厨子型板碑の栞 —山形県置賜路』（蓬萊波形山叢書第九集）村山民俗学会
 川崎利夫 2013 「石造物の時期判別について —板碑・五輪塔の編年を中心に—」『山形考古 第 43 号』山形考古学会
 川西町史編さん委員会 1979 『川西町史 上巻』川西町
 川西町教育委員会 1980 『千松寺遺跡発掘調査報告書』（川西町埋蔵文化財調査報告書第 1 集）
 川西町教育委員会 1981 『道伝遺跡発掘調査報告書』（川西町埋蔵文化財調査報告書第 2 集）
 川西町教育委員会 1999 『治兵衛館遺跡発掘調査報告書』（川西町埋蔵文化財調査報告書第 17 集）
 神原雄一郎 2011 『盛岡の地中から発見されたガラス瓶 明治から昭和にかけてのガラス瓶』（平成 23 年度遺跡の学び館学芸講座「発掘された盛岡のまち」1）盛岡市遺跡の学び館
 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 2015 『元宿北遺跡発掘体験報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 223 集）
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2001 『太夫小屋 1・2・3 遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 81 集）
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2006 『蛇崩窯跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 155 集）
 渋谷純子・高桑弘美 2004 「山形県の奈良・平安時代における信仰関連遺物集成」『研究紀要 第 2 号』財団法人山形県埋蔵文化財センター
 高橋 拓 2008 「山形県米沢市成島の近世窯業の研究 —表土採取陶片の分析から—」『米沢史学 第 24 号』山形県立米沢女子短期大学日本史学科・米沢史学会
 高橋 学 2003 「滑石製石鍋と山茶碗 —雄勝町館堀城跡出土の事例から—」『研究紀要 第 17 号』秋田県埋蔵文化財センター
 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧 1996 年版』兵庫埋蔵銭調査会
 松尾秀昭 2017 『石鍋が語る中世 ホゲット石鍋製作遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」122）新泉社
 山形県教育委員会 1991 『横山 C 遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第 168 集）
 山川 均 2006 『石造物が語る中世職能集団』（日本史リブレット 29）山川出版社
 吉田江美子 2004 「山形県の井戸」『研究紀要 第 2 号』財団法人山形県埋蔵文化財センター



第 14 図 調査区全体図 1



第 15 図 調査区全体図 2



x=-216732-

x=-216736-

x=-216740-

x=-216744-

x=-216748-

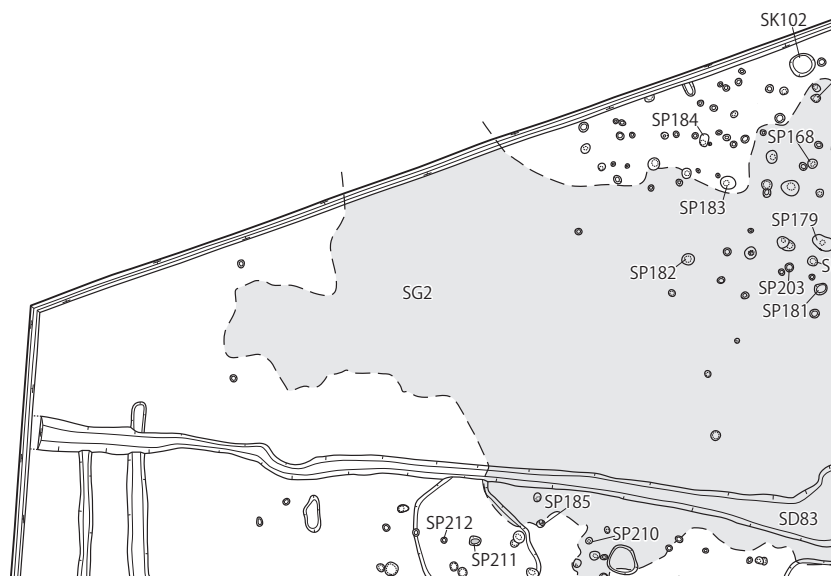
x=-216752-

x=-216756-

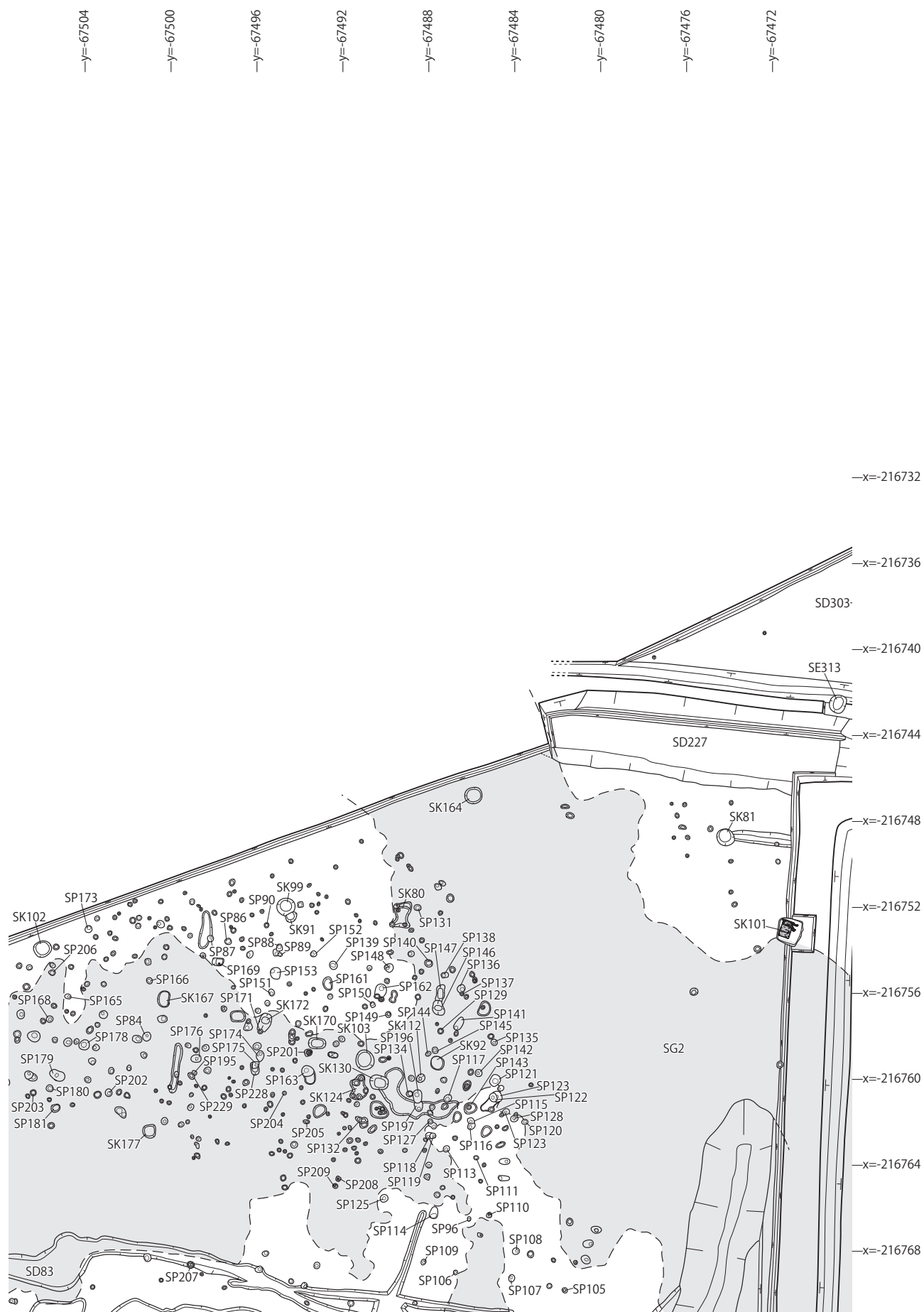
x=-216760-

x=-216764-

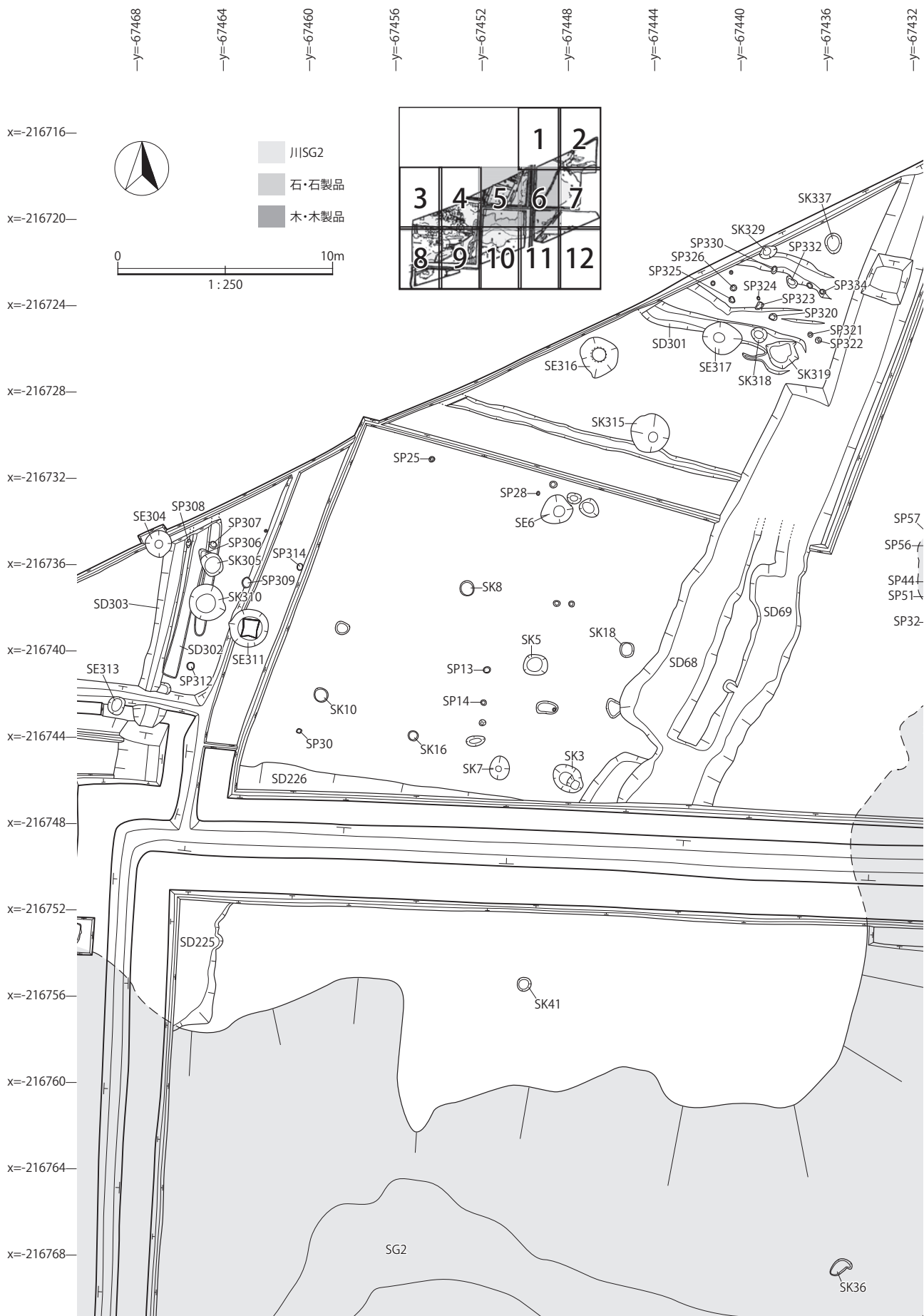
x=-216768-



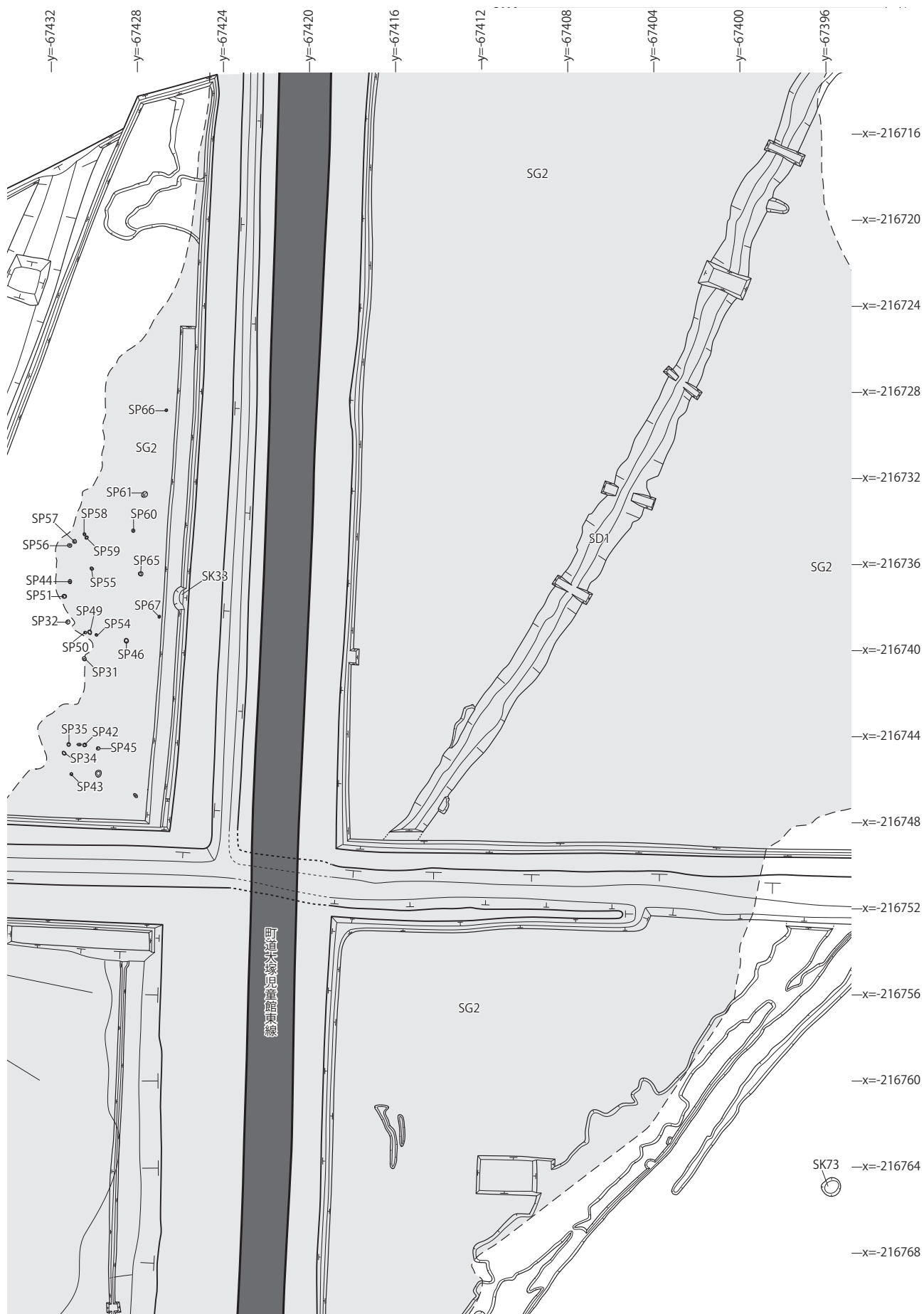
第16図 調査区全体図3



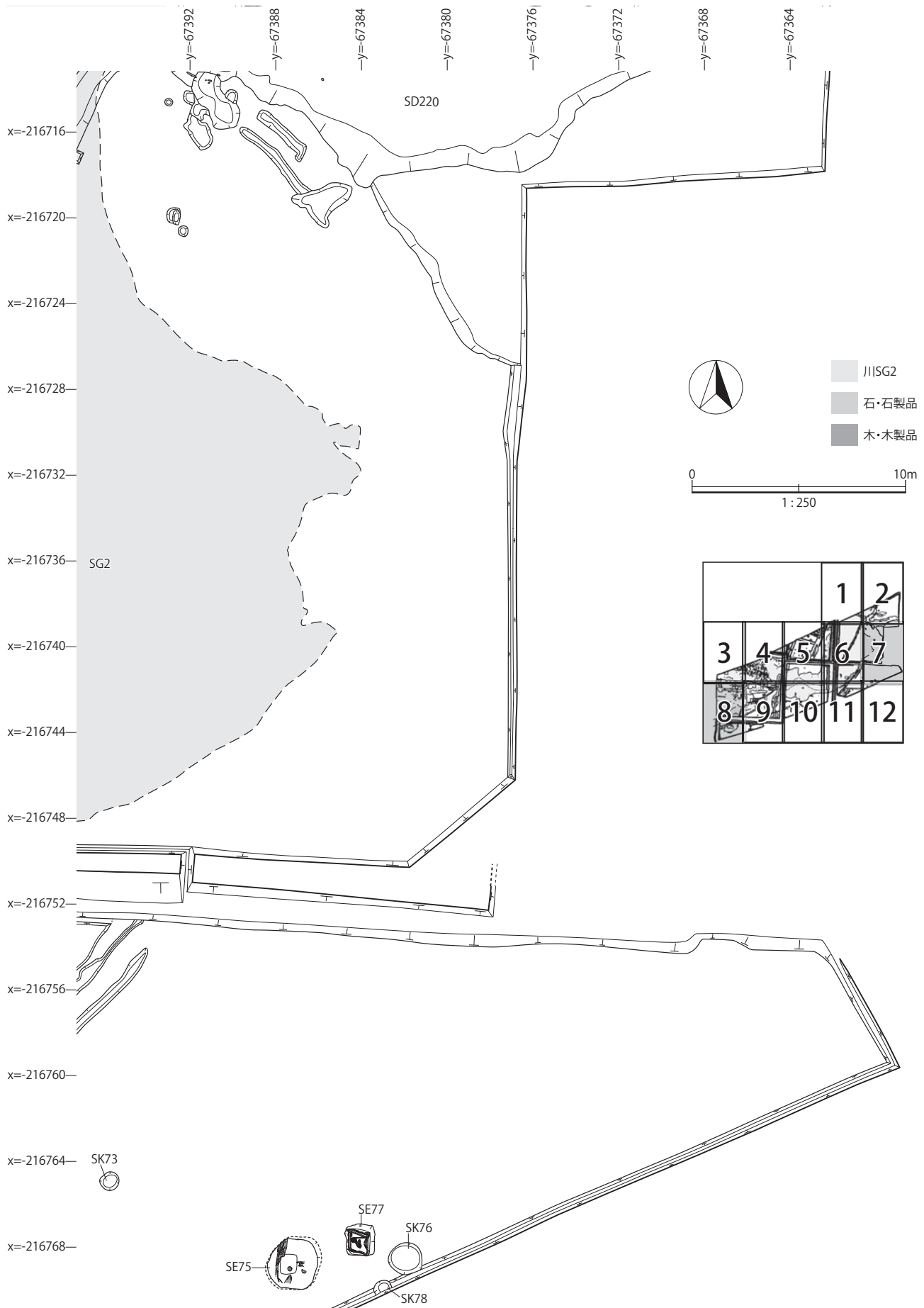
第 17 図 調査区全体図 4



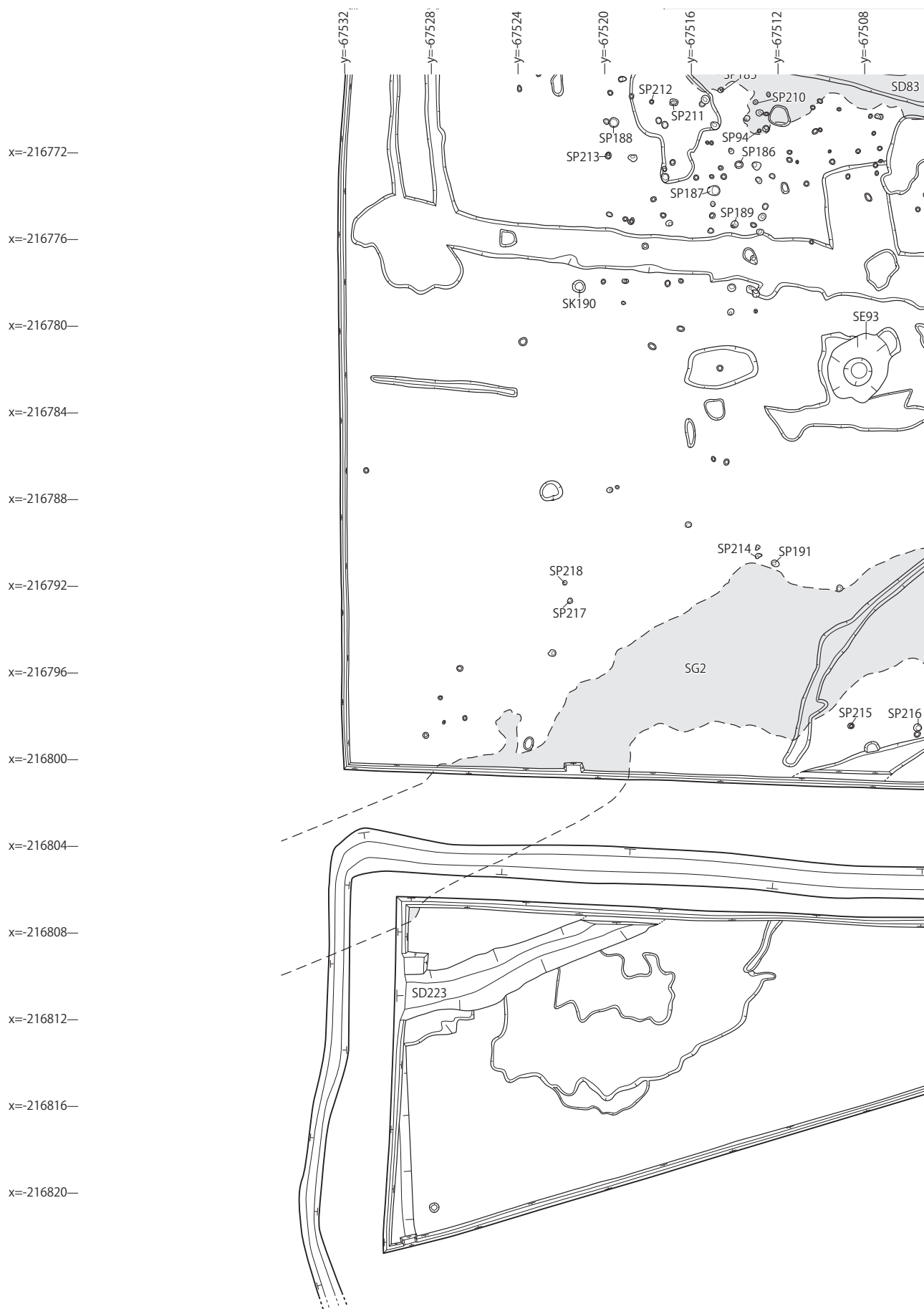
第 18 図 調査区全体図 5



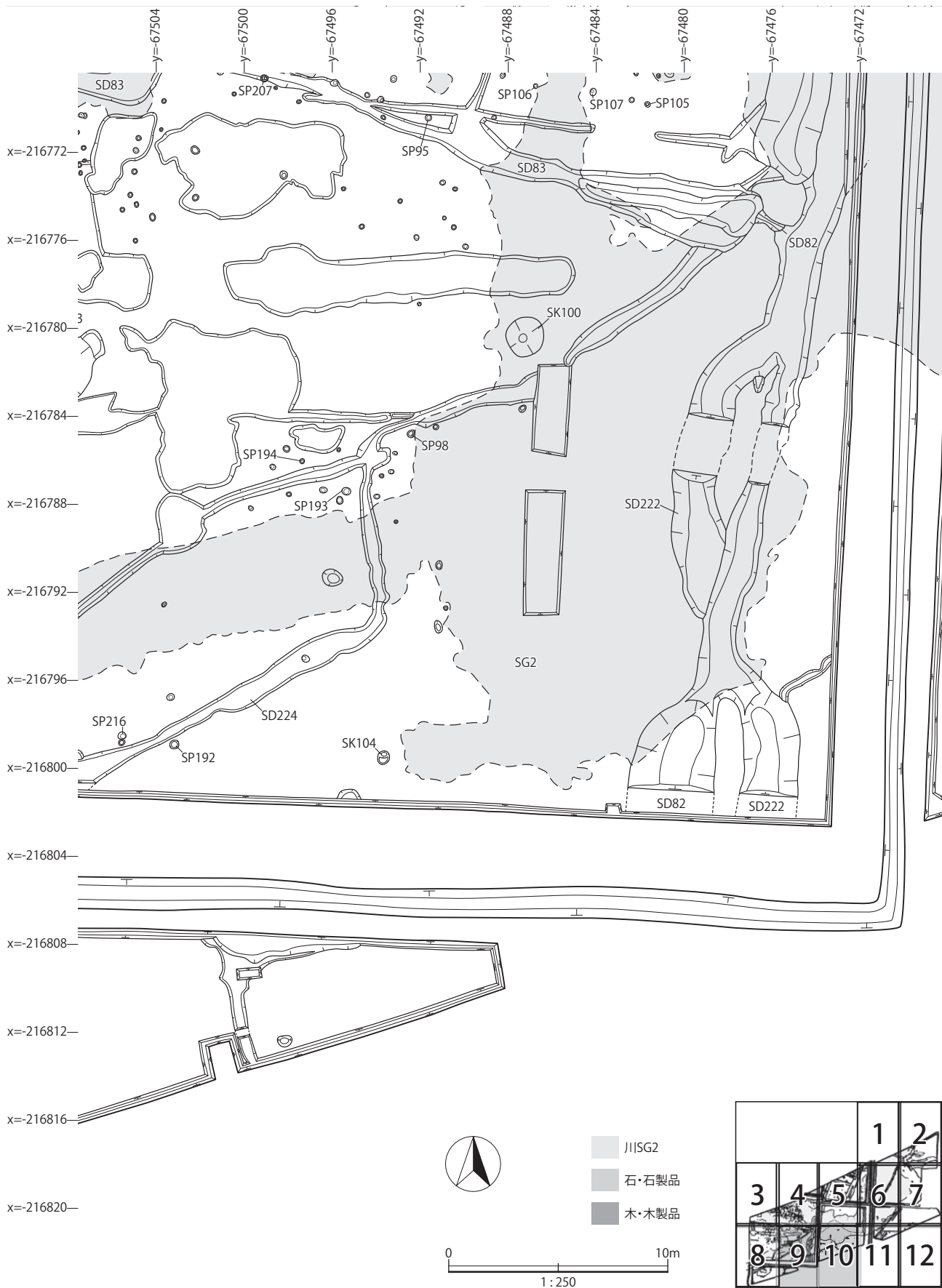
第 19 図 調査区全体図 6



第 20 図 調査区全体図 7



第 21 図 調査区全体図 8



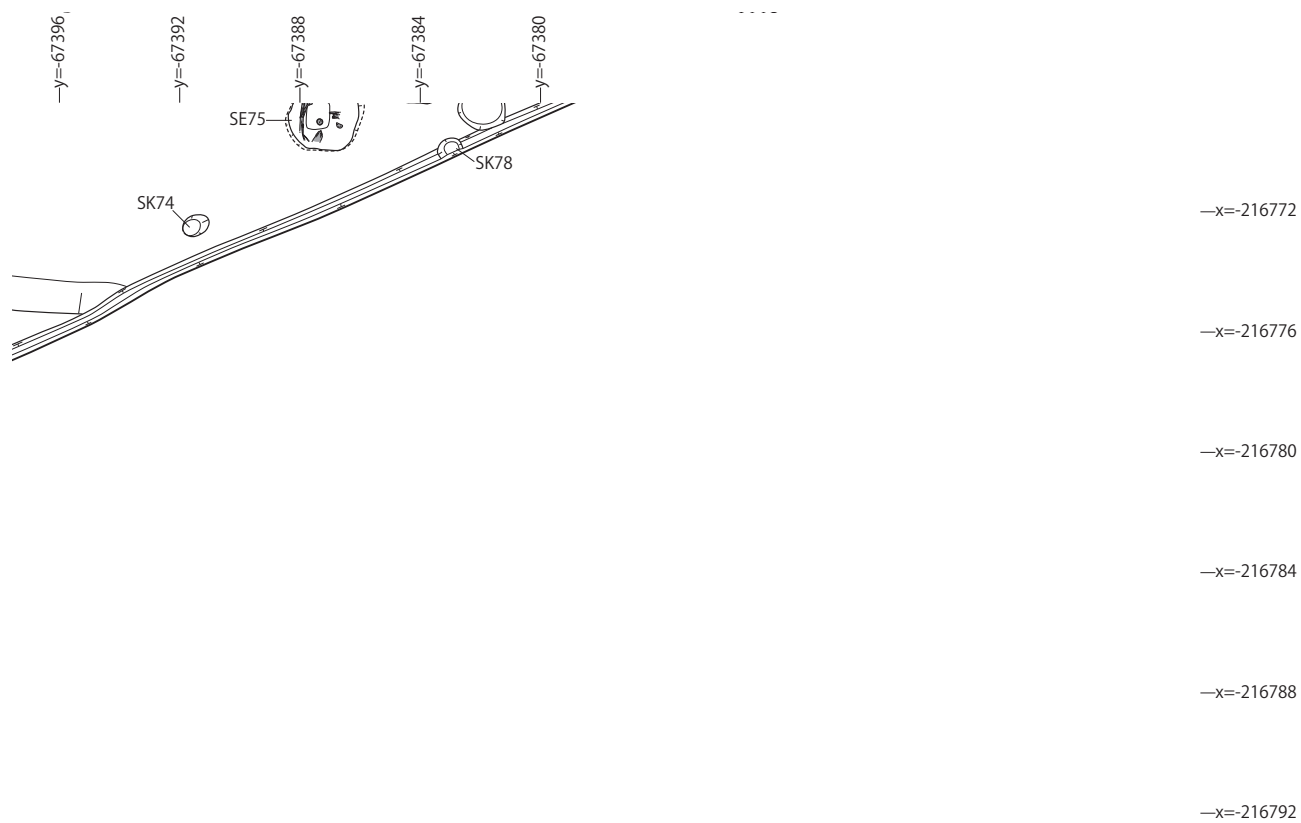
第22図 調査区全体図9



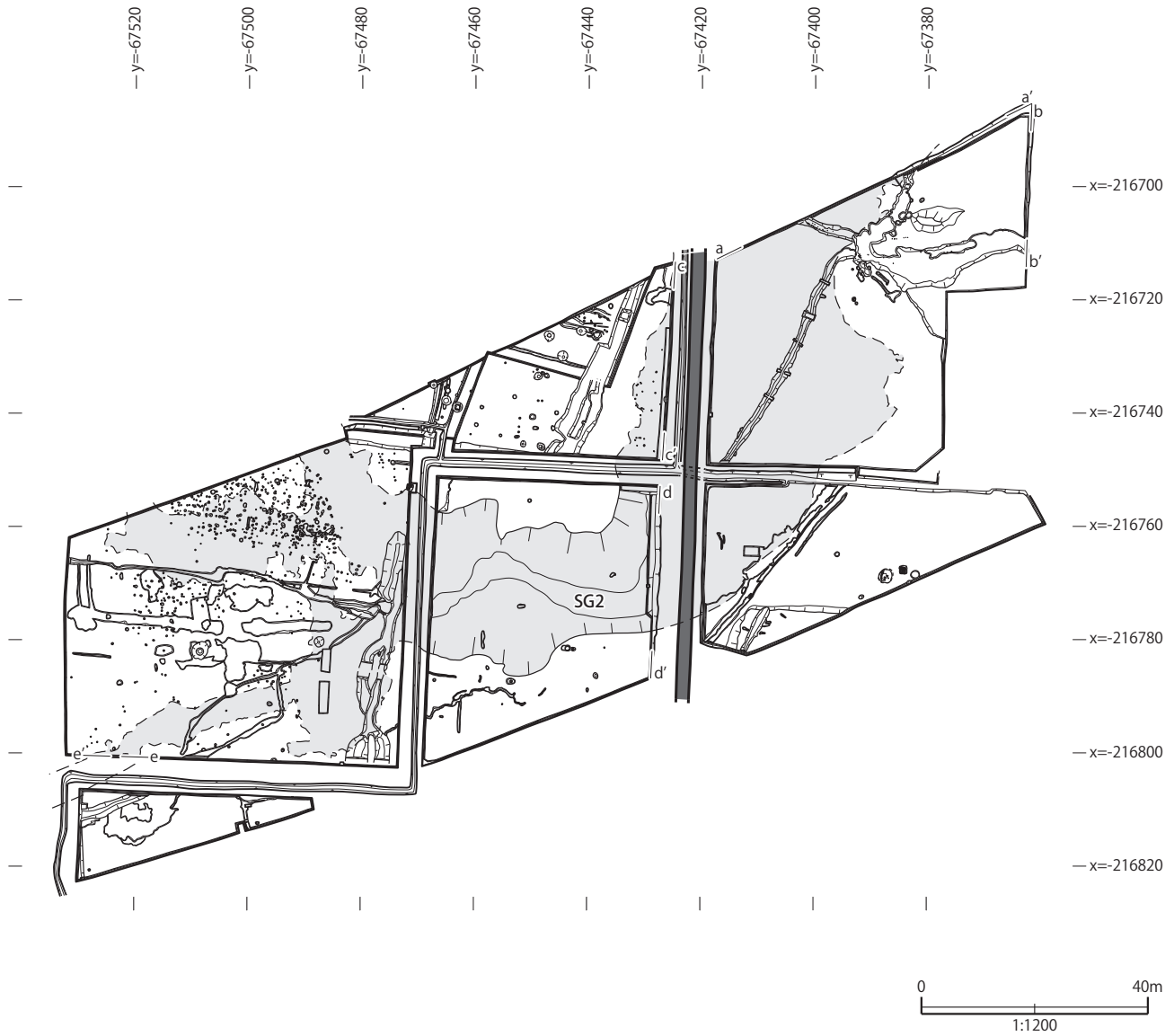
第 23 図 調査区全体図 10



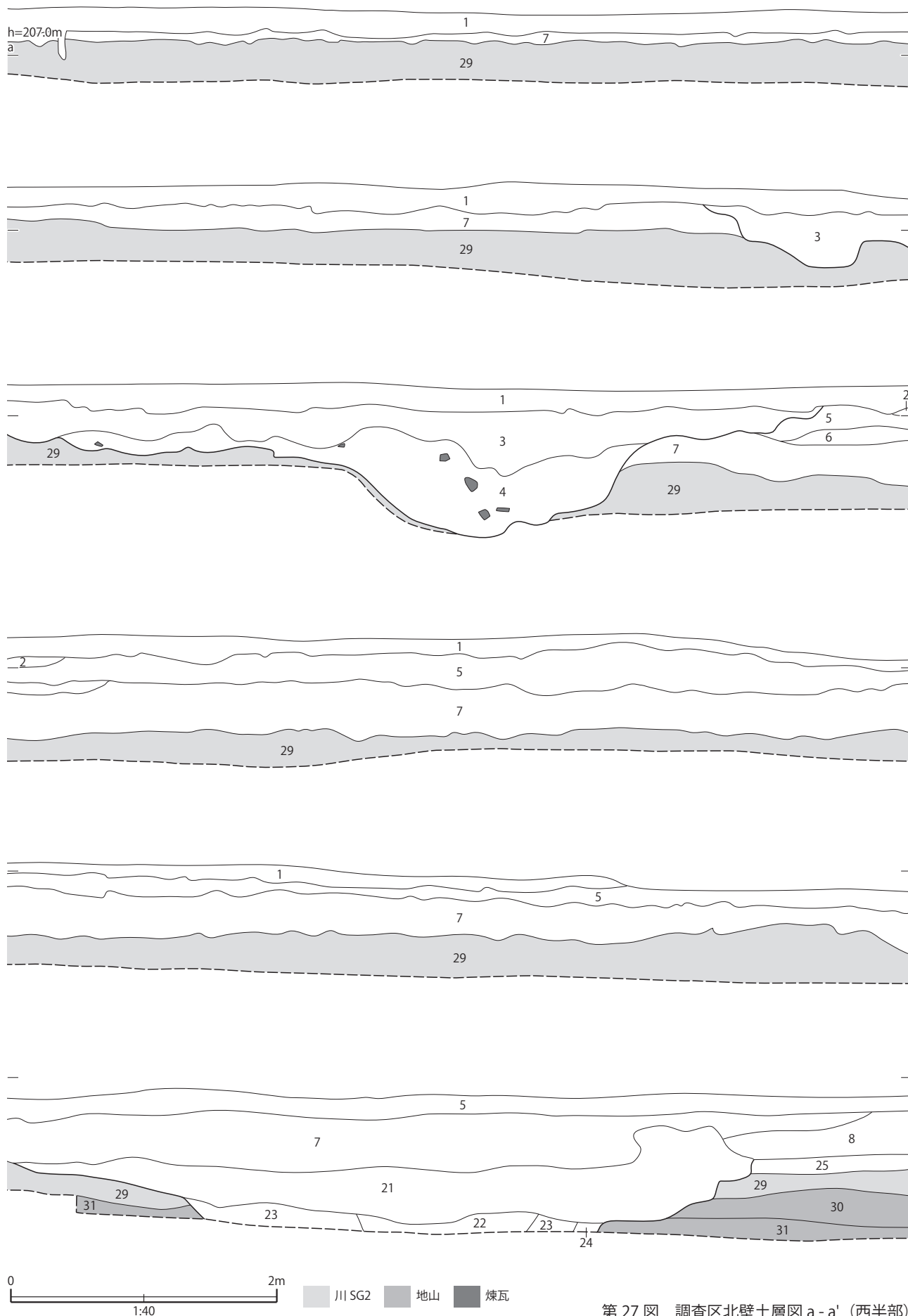
第 24 図 調査区全体図 11



第 25 図 調査区全体図 12

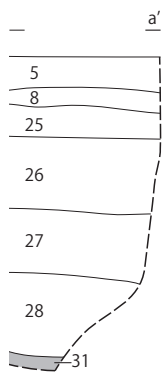
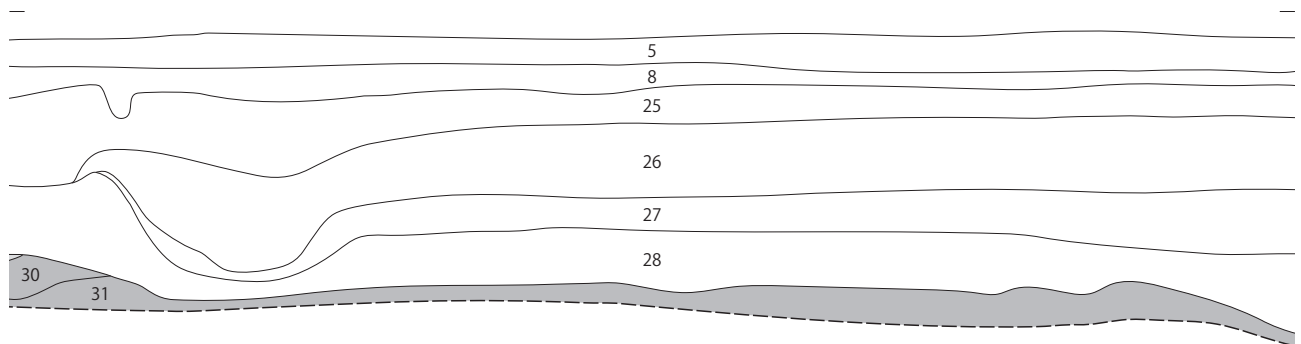
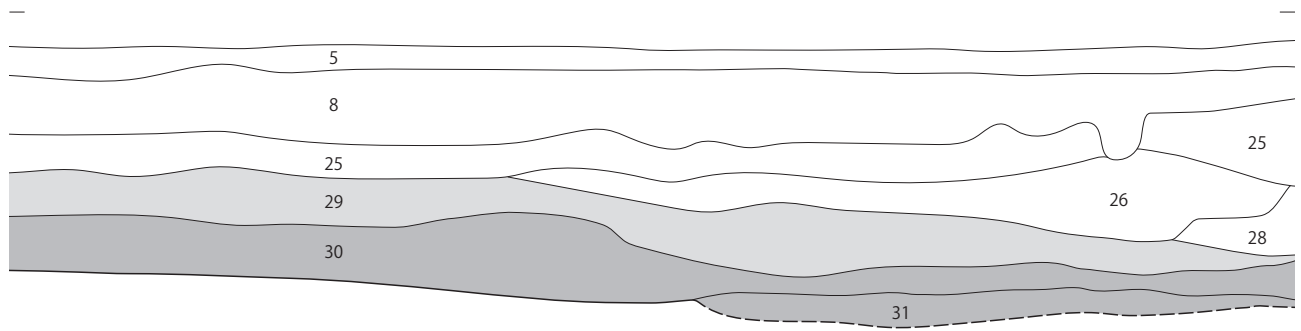
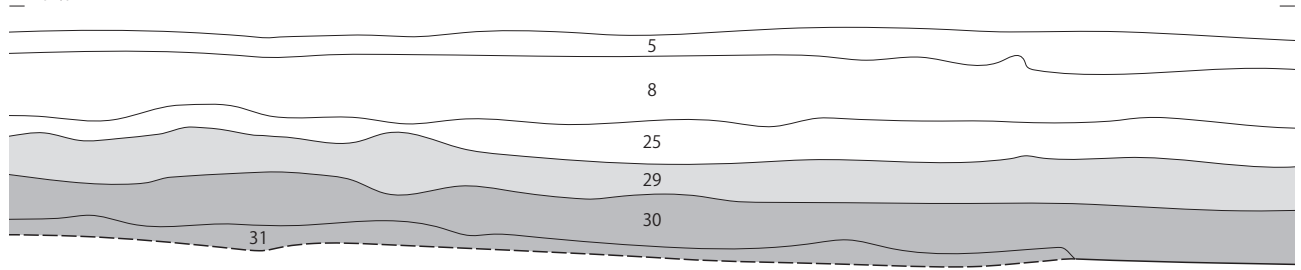


第 26 図 調査区壁土層図と川 SG2 のセクションポイント配置図

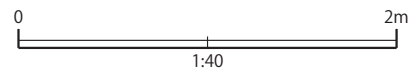


第27図 調査区北壁土層図 a-a' (西半部)

h=207.0m



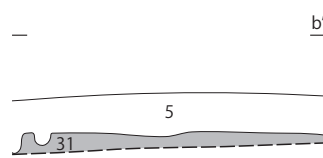
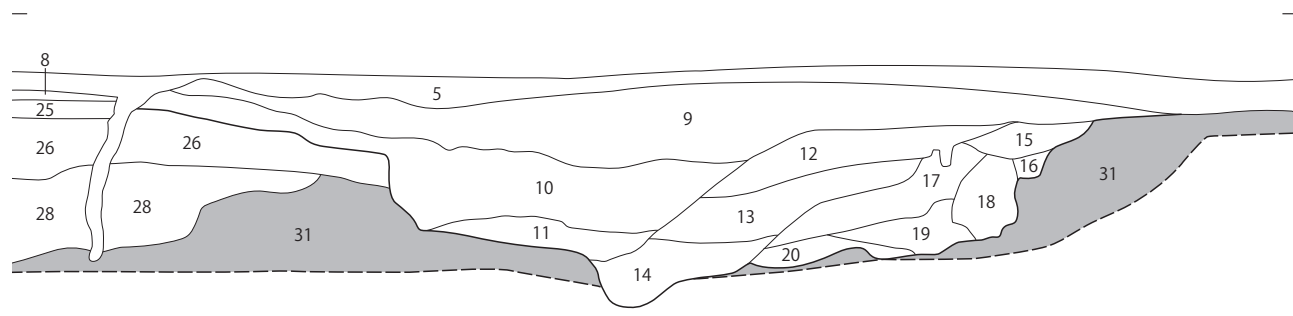
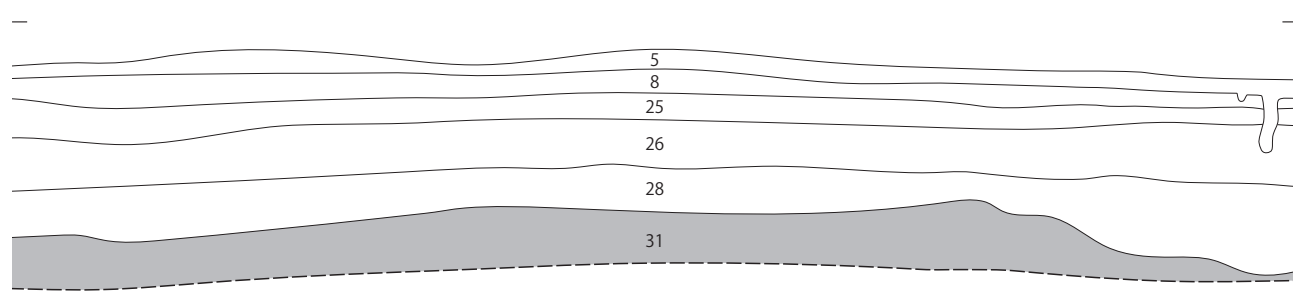
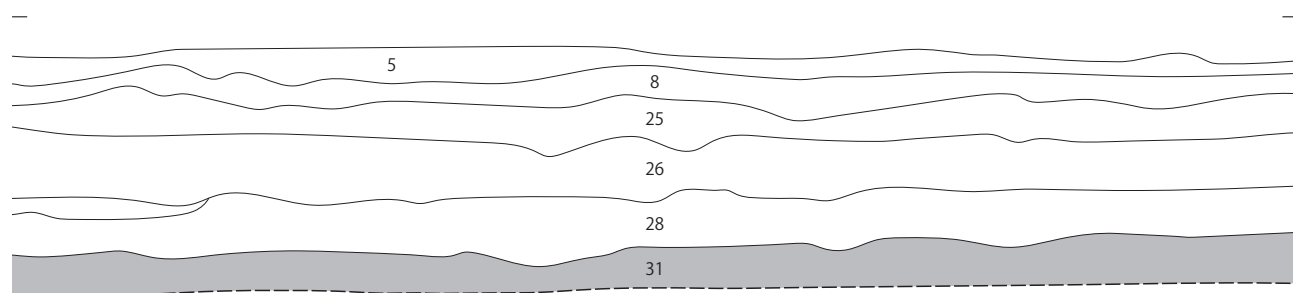
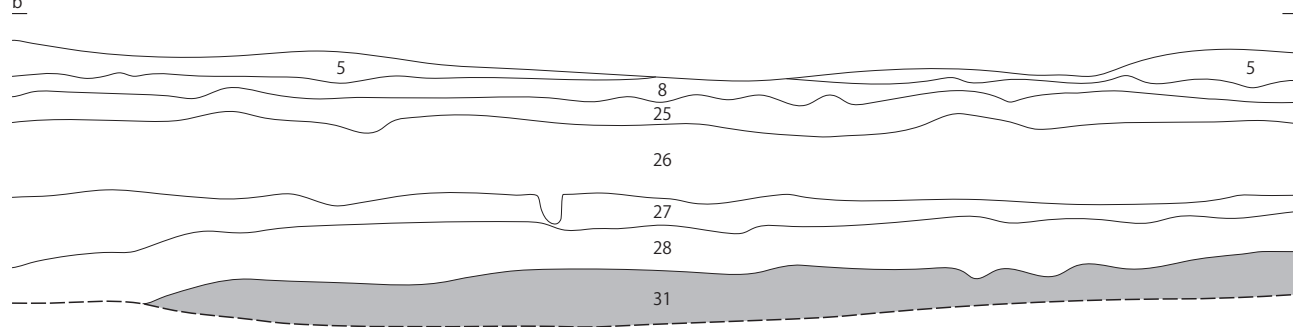
川SG2 地山



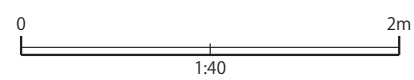
第28図 調査区北壁土層図 a - a' (東半部)

h=207.0m

b



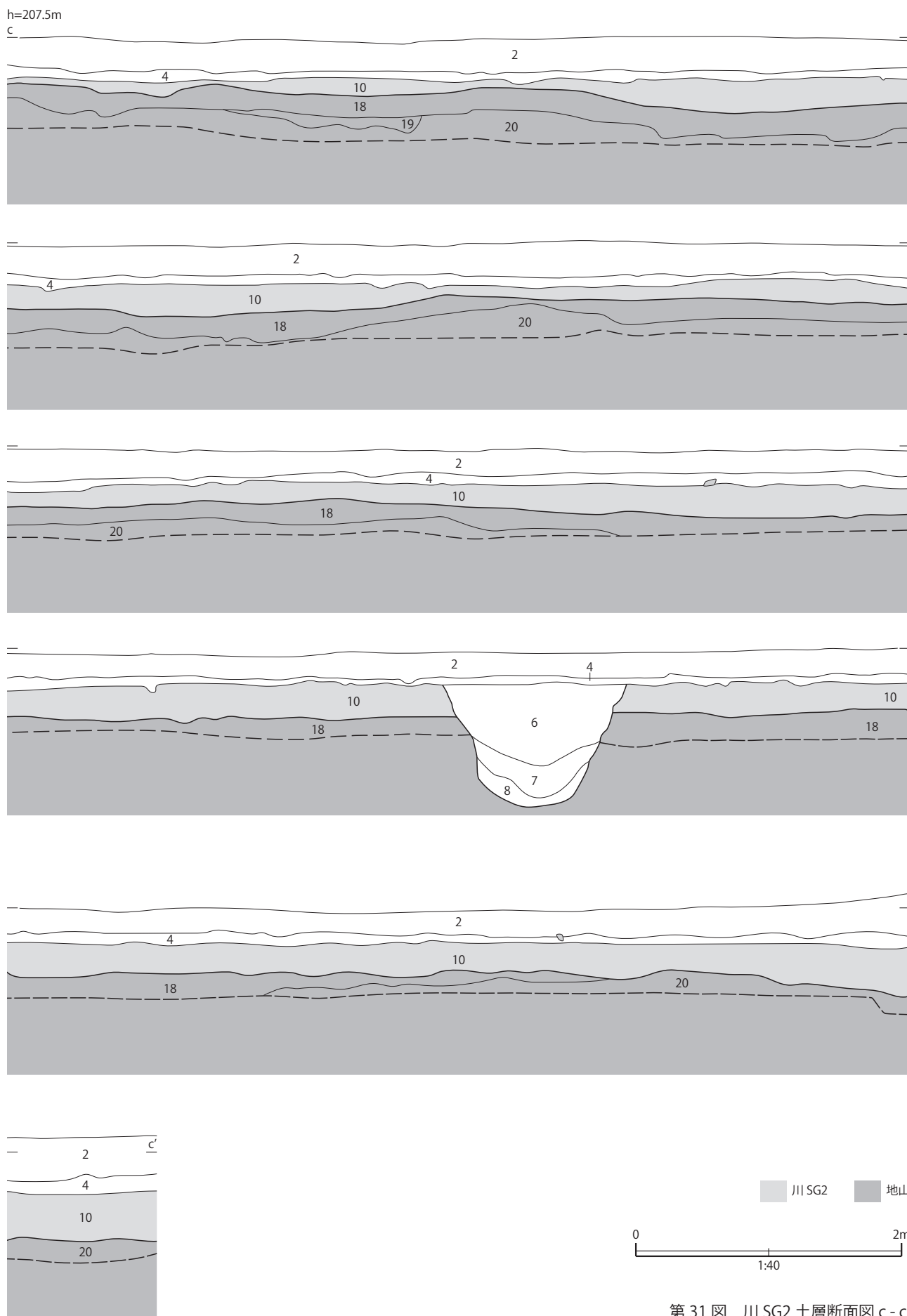
■ 地山



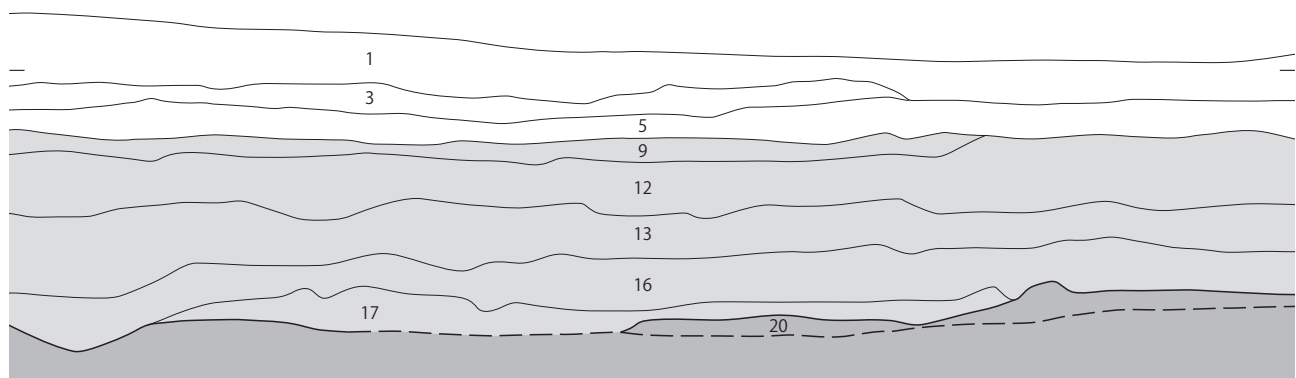
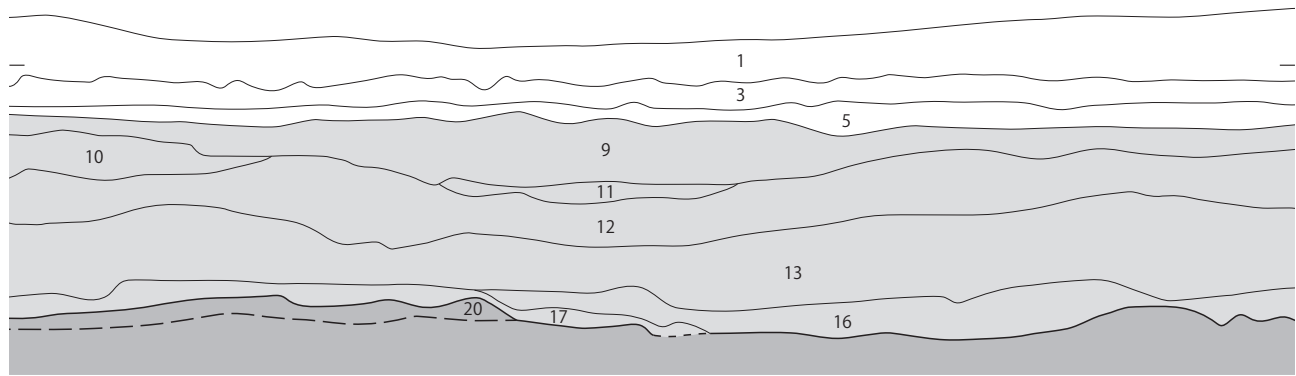
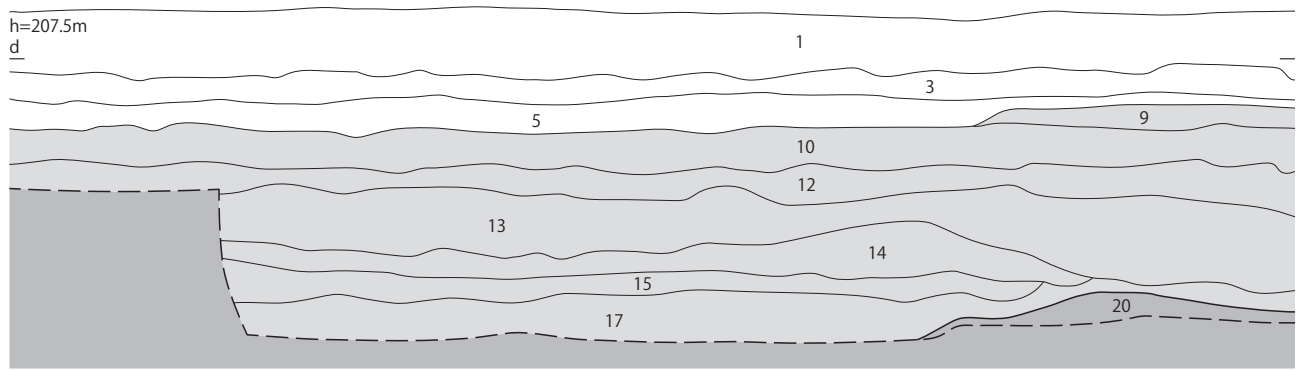
第 29 図 調査区東壁土層図 b - b'

調査区北・東壁土層図 a - a'・b - b'

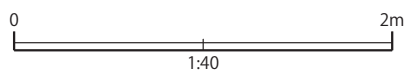
- 1 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト, 耕土
- 2 10YR6/1 褐灰色シルト
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト, 10YR3/1 黒褐色シルト土を多く含む, 以下 4 層まで溝 SD219
- 4 2.5Y5/1 黄灰色シルト, 10YR3/1 黒褐色シルト土を少し含む, 5 ~ 10mm の円礫を多く含む, 煉瓦を含む
- 5 10YR6/2 灰黄褐色シルト
- 6 2.5Y4/1 黄灰色シルト, 2 ~ 5mm の円礫を多く含む
- 7 10YR4/1 褐灰色シルト
- 8 10YR3/1 黒褐色シルト, 粒状の炭を少し含む
- 9 10YR2/1 黒色シルト, 10YR6/2 灰黄褐色シルトを多く含む, 10YR7/3 にぶい黄橙色砂を含む, 以下 20 層まで溝 SD220
- 10 10YR5/1 褐灰色シルト, 塊状の 10YR7/3 にぶい黄橙色砂を少し含む
- 11 10YR5/2 灰黄褐色シルト, 5 ~ 10mm の礫を多く含む
- 13 7.5YR5/1 褐灰色粘質シルト, 塊状の砂を含む
- 14 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト, 粒状の炭を少し含む
- 15 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト
- 16 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト, 粒状の炭を少し含む
- 17 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト, 砂を多く含む
- 18 10YR5/4 にぶい黄褐色砂
- 19 10YR3/2 黒褐色粘質シルト, 粒状の炭を含む
- 20 7.5YR5/2 灰褐色砂, 5 ~ 10mm の礫を多く含む
- 21 2.5Y3/1 黒褐色シルト, 炭を含む, 以下 24 層まで溝 SD221
- 22 2.5Y3/1 黒褐色シルト, 風化礫を少し含む, 10Y7/4 にぶい黄橙色砂を多く含む, 2 ~ 5mm の礫を少し含む, 以下 24 層まで溝 SD221
- 23 10YR4/1 褐灰色粘質シルト, 10YR7/1 灰白色砂を底部に含む
- 24 10YR5/1 褐灰色シルト, 10YR4/1 褐灰色シルトを含む
- 25 10YR5/1 褐灰色シルト, 粒状の炭を含む
- 26 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト, 7.5YR4/2 灰褐色シルト土を板状に含む, 粒状の炭を少し含む
- 27 7.5YR5/2 灰褐色シルト
- 28 7.5YR5/1 褐灰色粘質シルト
- 29 10YR1.7/1 黒色シルト, 一部に 10YR6/1 褐灰色土を板状に含む, 炭を含む, 川 SG2
- 30 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト, 以下地山
- 31 5YR5/1 褐灰色砂質シルト
- 32 10YR7/2 にぶい黄橙色砂質シルト



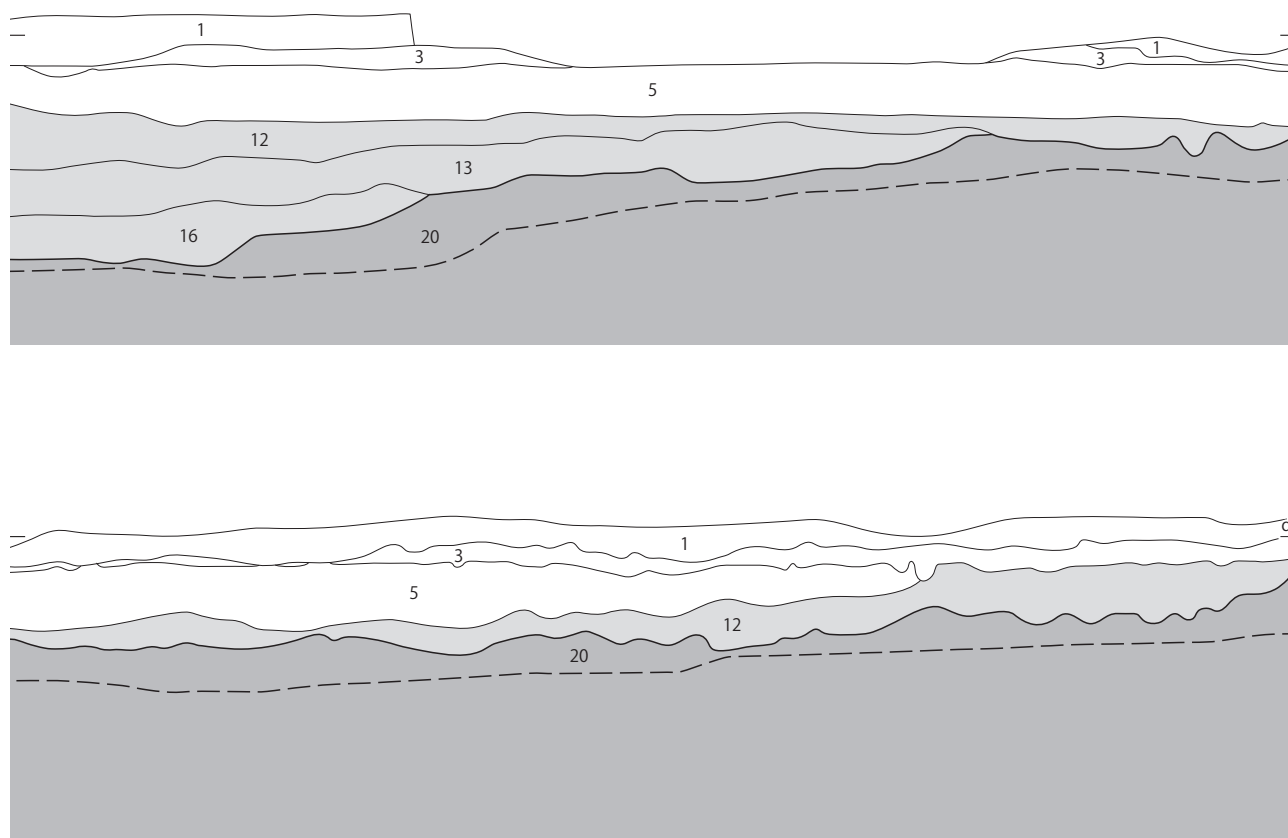
第31図 川SG2土層断面図 c-c'



川 SG2 地山



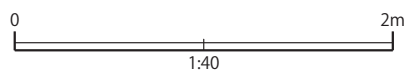
第 32 図 川 SG2 土層断面図 d - d' (北半部)



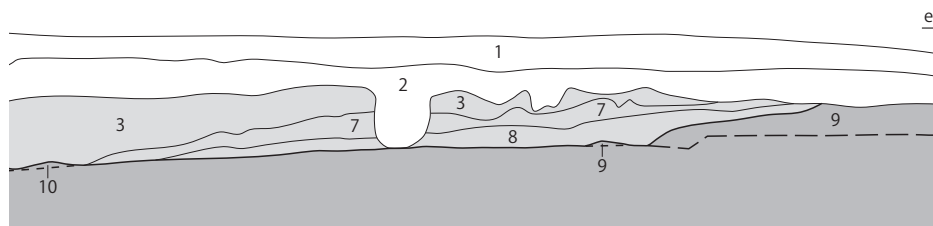
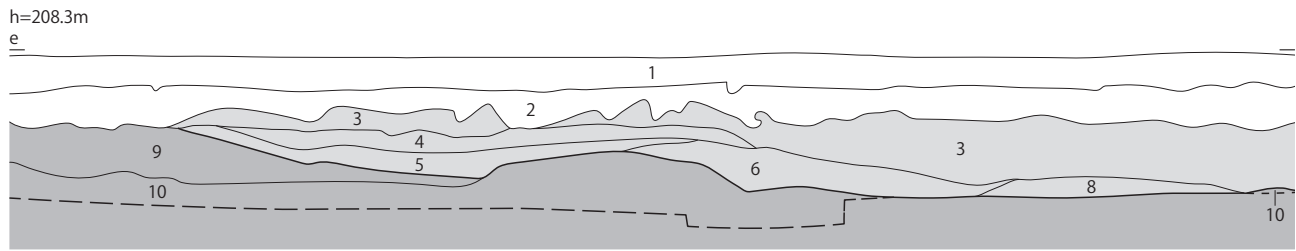
川 SG2 : c-c', d-d'

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト, 以下 5 層まで耕土
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト, 10mm 以上の円礫を少し含む
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 4 10YR5/2 灰黄褐色シルト, 10YR3/2 黒褐色粘質シルト土を多く含む
- 5 10YR2/2 黒褐色シルト, 0.5 ~ 30mm の粗砂・礫を少し含む, 0.5 ~ 1mm の炭粒を少し含む
- 6 10YR1.7/1 黒色シルト, 以下 8 層まで土坑 SK33
- 7 10YR2/1 黒色シルト, 10YR3/2 黒褐色粘質シルト土を多く含む
- 8 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 塊状の 2.5Y8/3 淡黄色粘土を多く含む
- 9 10YR1.7/1 黒色シルト, 10 ~ 30mm の礫を含む, 粒状の炭を少し含む, 湿地・河川層, 以下 12 層まで川 SG2
- 10 10YR2/1 黒色粘質シルト, 20mm の礫を少し含む, 粒状の炭を少し含む
- 11 5Y2/1 黒色粘質シルト, 0.5 ~ 30mm の粗砂・礫を多く含む
- 12 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 10YR4/1 褐灰色粘質シルト, 粒状の炭をわずかに含む, 南面地山土の巻き上げ土混入
- 13 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト, 30mm 程度の礫をわずかに含む, 粒状の炭を含む
- 14 10YR2/2 黒褐色粘質シルト, 2 ~ 5mm 程度の炭を少し含む
- 15 10YR2/1 黒色粘質シルト, 粒状の炭をわずかに含む
- 16 2.5Y2/1 黒色粘質シルト, 下層に 1 ~ 8mm の炭を多く含んだ 2.5Y5/2 暗灰黄色土(地山混入土)を縞状に含む
- 17 2.5Y3/1 黒褐色砂, 2.5Y7/3 浅黄色砂粒を含む, 1 ~ 3mm の炭塊を少し含む, 11 層と 13 層土を塊状に含む
- 18 10YR4/1 褐灰色シルト, 以下地山
- 19 7.5YR5/1 褐灰色シルト
- 20 5Y6/1 灰色粘質シルト, 1 ~ 30mm の 10YR2/1 黒色シルト塊を多く含む

川 SG2 地山



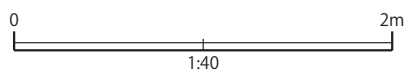
第 33 図 川 SG2 土層断面図 d-d' (南半部)



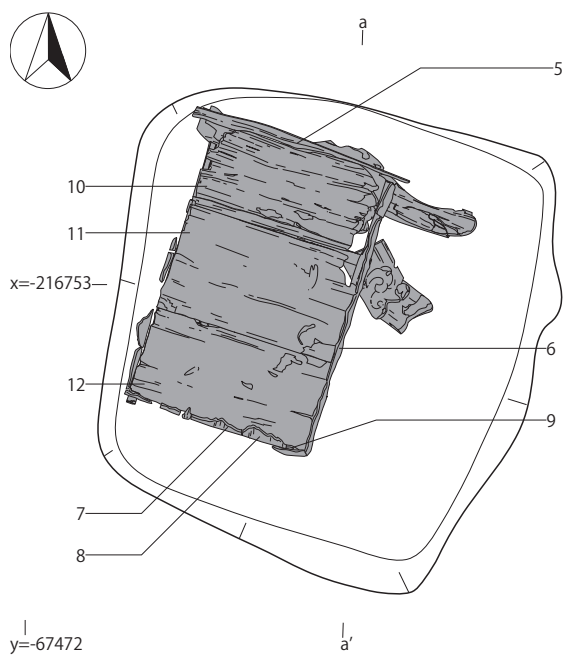
川 SG2 : e - e'

- 1 2.5Y3/2 黒褐色シルト, 耕土
- 2 2.5Y2/1 黒色シルト, 耕土
- 3 2.5Y2/1 黒色粘質シルト, 以下 8 層まで SG2
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 5 10YR2/1 黒色粘質シルト, 下層に 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルトを縞状に含む, 植物遺体を多く含む
- 6 10YR3/1 黒褐色砂質シルト, 植物遺体を含む
- 7 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト, 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルトを含む
- 8 2.5Y2/1 黒色粘質シルト
- 9 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト, 以下地山
- 10 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 植物遺体を多く含む

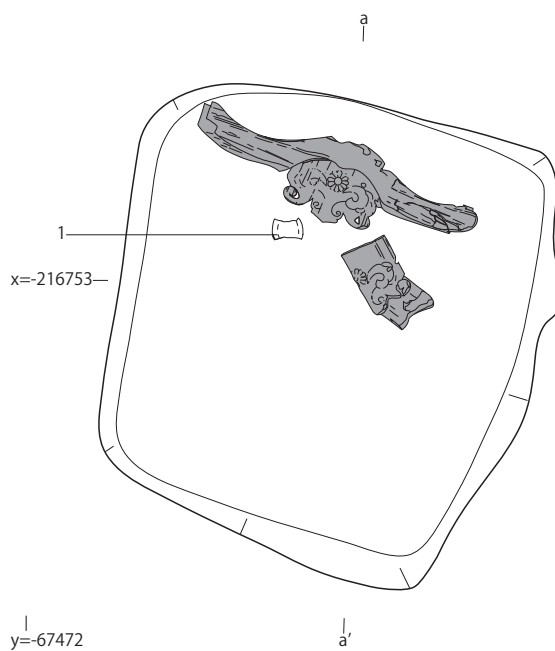
川 SG2 地山



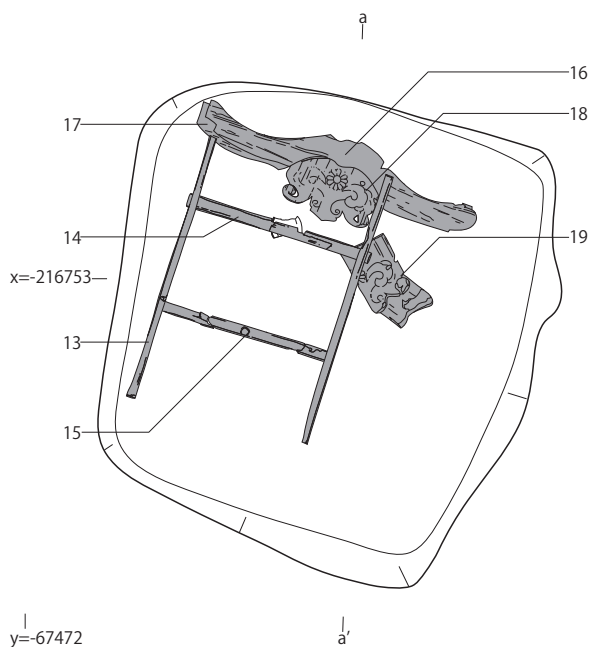
第 34 図 川 SG2 土層断面図 e - e'



木棺出土状況

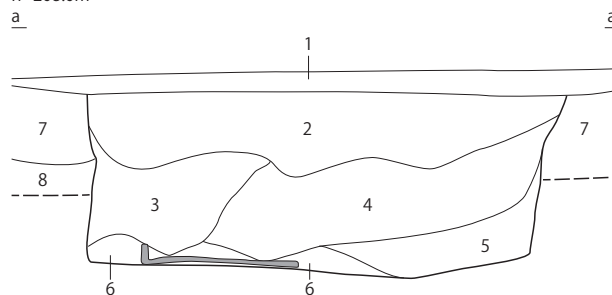


磁器・木製品出土状況



木棺下枠等出土状況

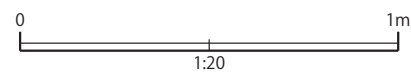
SK101
h=208.0m



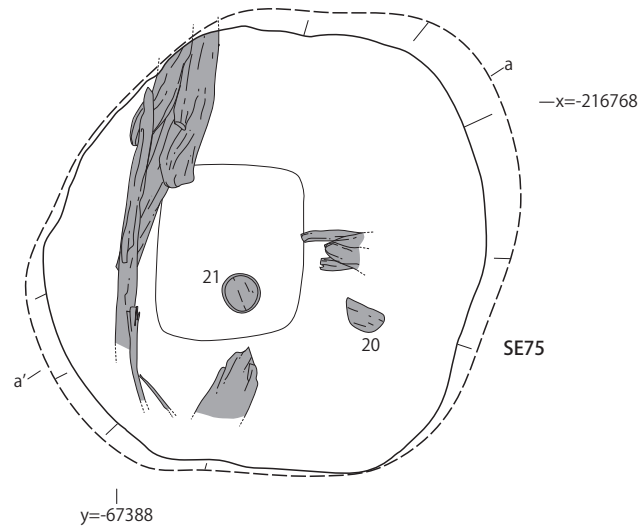
木棺墓 SK101

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト, 耕土
- 2 10YR2/1 黒色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを多く含む, 以下 SK101
- 3 7.5YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを少し含む
- 4 10YR5/2 灰黄褐色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトと 7.5YR3/1 黒褐色シルトを多く含む
- 5 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを含む
- 6 10YR8/2 灰白色粘質シルト, 塊状の 10YR3/1 黒褐色シルトを多く含む
- 7 地山
- 8 地山

■ 木・木製品



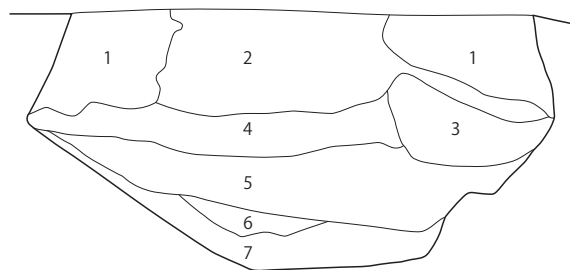
第 35 図 木棺墓 SK101



SE75

a
h=207.6m

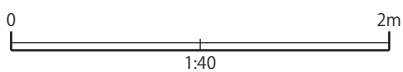
a'



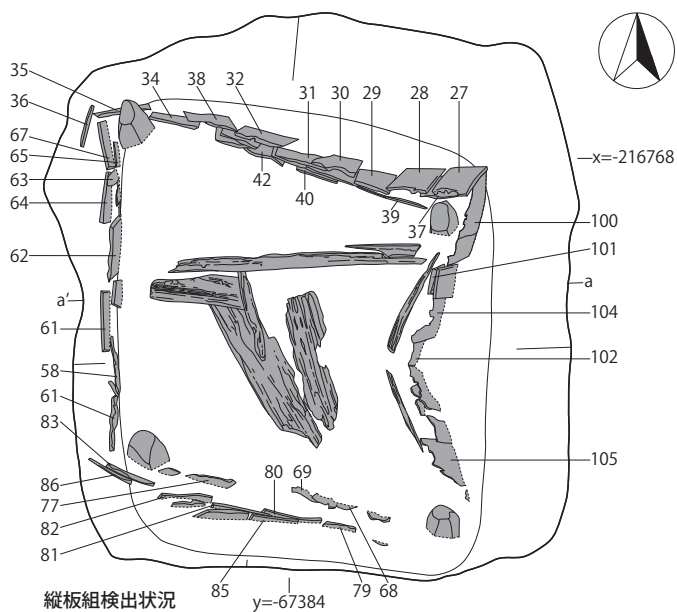
井戸 SE75

- 1 5Y6/3 オリーブ黄色砂質シルト
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト, 塊状の 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトを多く含む
- 3 7.5GY5/1 緑灰色砂質シルト
- 4 2.5Y2/1 黒色シルト, 塊状の 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルトを多く含む, 10YR2/3 黒褐色シルトを縞状に含む, 植物遺体を含む
- 5 2.5Y3/1 黒褐色シルト, 塊状の 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルトを多く含む
- 6 5GY5/1 オリーブ灰砂質シルト
- 7 2.5GY2/1 黒色粘質シルト, 7.5GY5/1 緑灰色砂質シルトを多く含む

■ 木・木製品

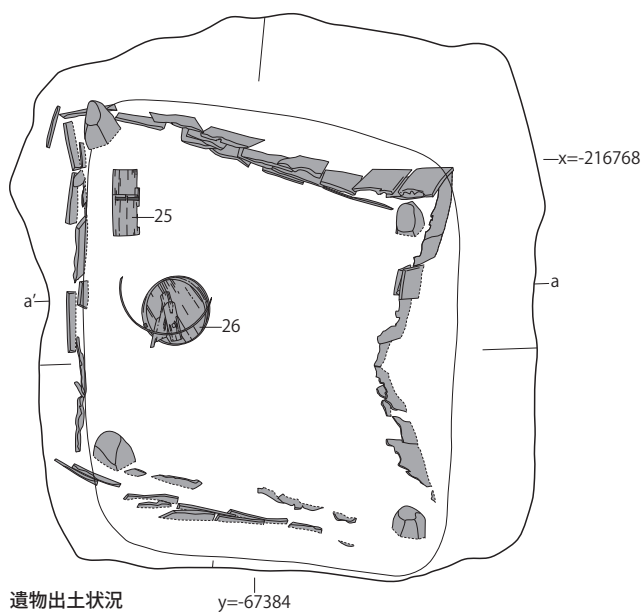
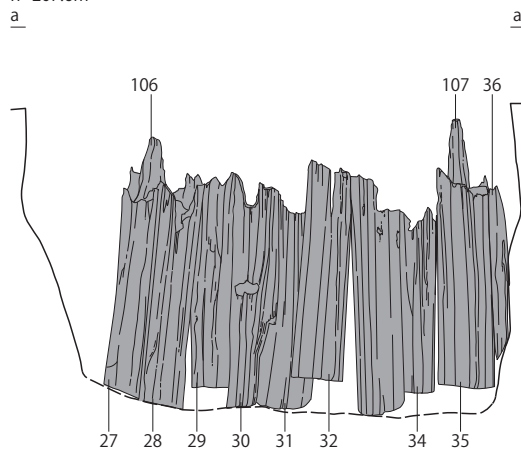


第36図 井戸 SE75



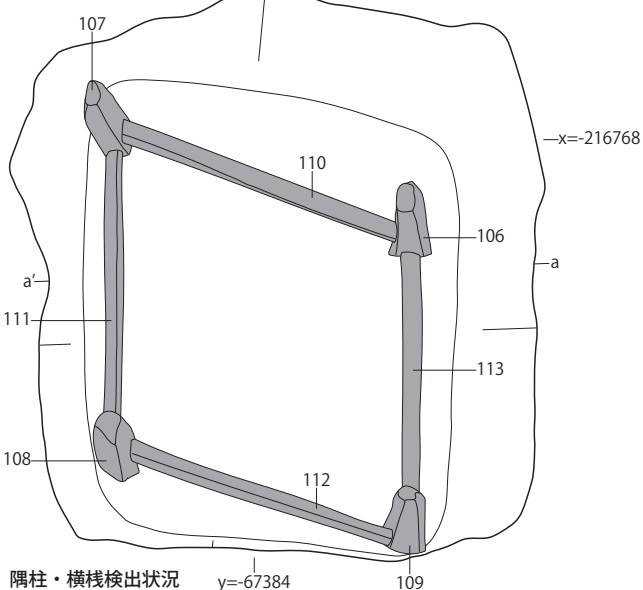
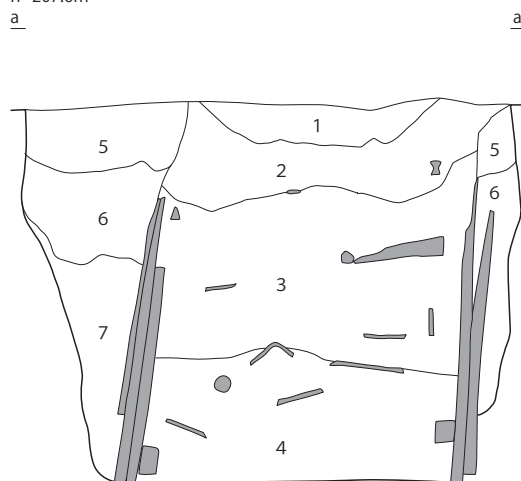
縦板組側面図(北面)

h=207.6m



土層断面図

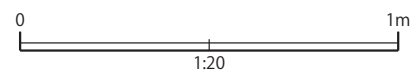
h=207.6m



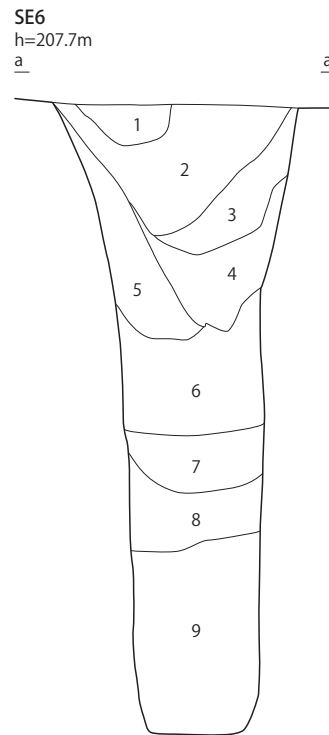
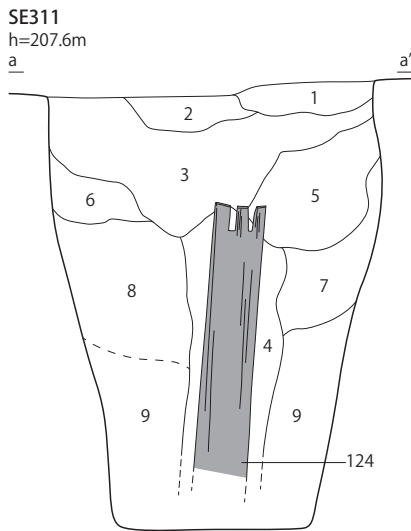
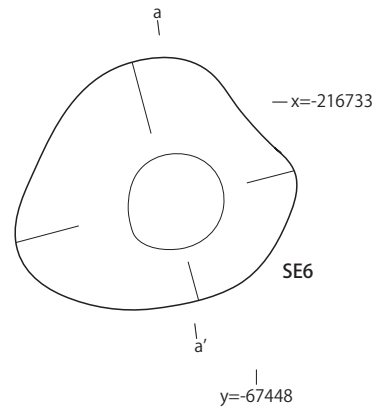
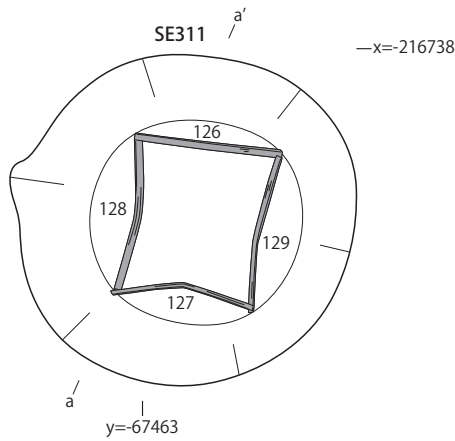
井戸 SE77

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト,塊状の 10YR6/4 にぶい黄褐色シルトを多く含む, 20 ~ 40mm の礫を含む, 以下 4 層まで井戸内覆土
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト,塊状の 10YR7/4 にぶい黄褐色シルトを多く含む, 30 ~ 40mm の礫を含む, 井戸碎片を含む
- 3 10YR2/1 黒色シルト,塊状の 10YR4/4 褐色のシルトを含む, 10 ~ 20mm の礫を含む, 井戸枠底部
- 4 10YR2/2 黒色粘質シルト, 40mm の礫を含む, 木製品を含む
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト,塊状の 2.5Y8/4 淡黄色シルトを多く含む, 以下裏込土
- 6 10YR2/1 黒色シルト,塊状の 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトを多く含む, 30mm 程度の礫を含む
- 7 2.5Y6/1 オリーブ灰色砂質シルト, 2.5Y3/2 黒褐色シルトを含む

■ 木・木製品



第 37 図 井戸 SE77



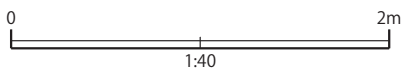
井戸 SE311

- 1 10YR2/1 黒色シルト, 10YR8/2 灰白色粘土を多く含む, 以下3層まで埋め立て土
- 2 10YR8/2 灰白色粘土, 10YR2/1 黒色シルトと 10YR7/3 にぶい黄橙色粘土を多く含む
- 3 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土, 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土と 10YR1.7/1 黒色シルトと 7.5Y8/2 灰白色中粒砂を多く含む
- 4 7.5Y8/2 灰白色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルトを多く含む, 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土を少し含む, 井戸内覆土
- 5 10YR1.7/1 黒色シルト, 7.5Y8/2 灰白色粘土と 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土を含む, 以下裏込め土
- 6 7.5Y8/2 灰白色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルトを多く含む
- 7 10YR1.7/1 黒色シルト, 7.5Y8/2 灰白色粘土を多く含む
- 8 7.5Y8/2 灰白色粘土, 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土を多く含む, 10YR1.7/1 黒色シルトを少し含む
- 9 7.5Y8/2 灰白色粘土, 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土を多く含む

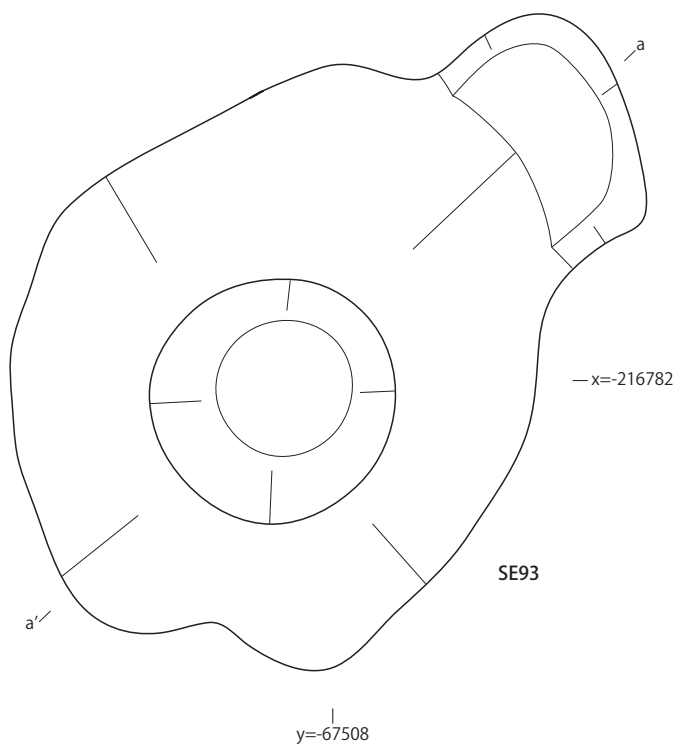
井戸 SE6

- 1 10YR7/2 にぶい黄褐色シルト, 炭を含んだ 10YR4/1 褐灰色シルト土を多く含む
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト, 5~10mmの塊状の 10YR7/2 にぶい黄褐色シルトを含む, 2~5mmの炭を少し含む
- 3 10YR7/1 灰白色粘質シルト, 10YR3/1 黒褐色シルト土を含む
- 4 10YR4/1 褐灰色粘性シルト, 10YR7/1 灰白色粘質シルト土を多く含む, 1~2mmの炭を多く含む
- 5 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト, 10YR3/1 黒褐色シルト土を多く含む
- 6 10YR1.7/1 黒色シルト, 2~mmの地山礫を多く含む
- 7 5Y7/1 灰白色粘土, 10YR5/1 褐灰色粘土を多く含む
- 8 7.5Y6/1 灰色粘土, 2~5mmの円礫を少し含む, 炭を含む
- 9 7.5Y5/1 灰色粘土, 炭を少し含む

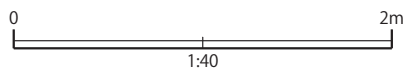
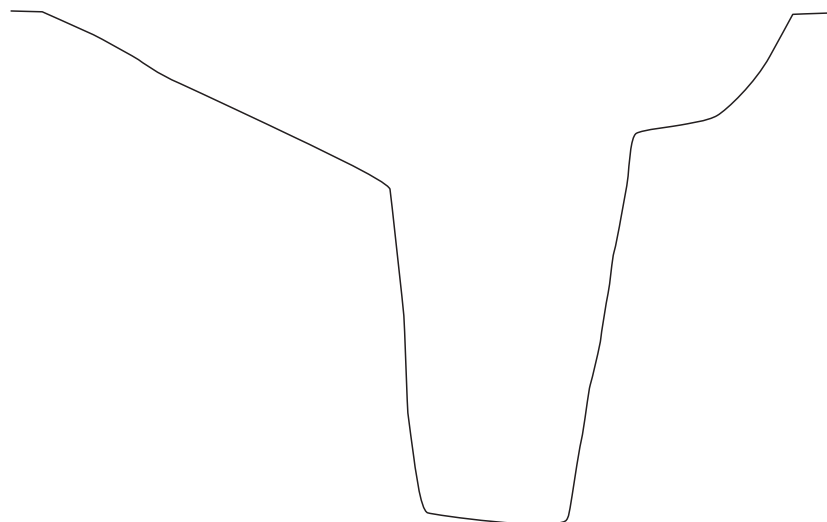
■ 木・木製品



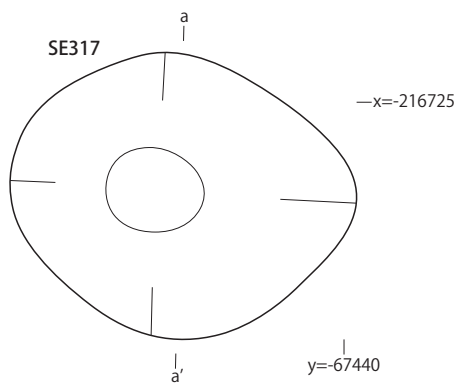
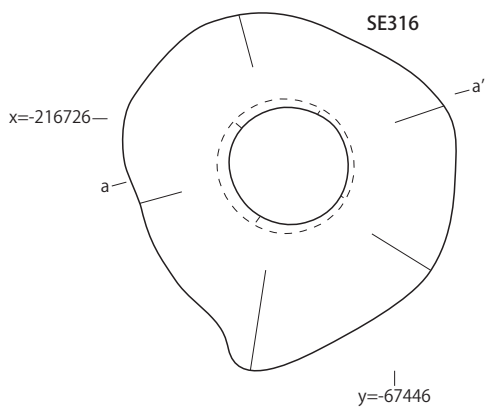
第38図 井戸 SE311・6



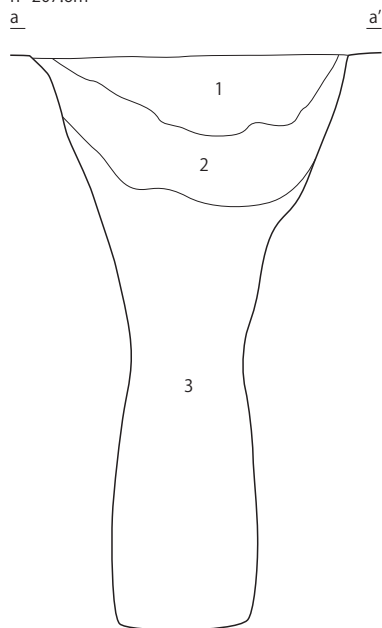
SE93
h=207.8m
a



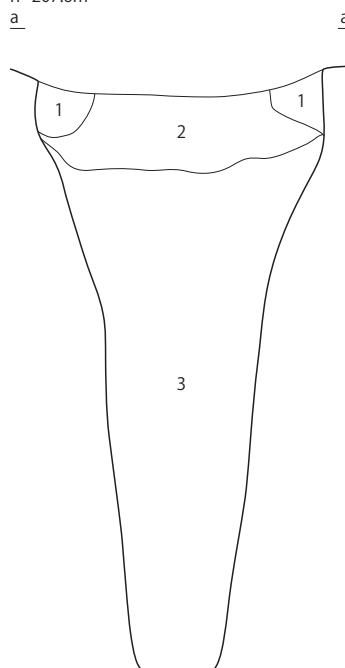
第 39 図 井戸 SE93



SE316
h=207.6m



SE317
h=207.6m



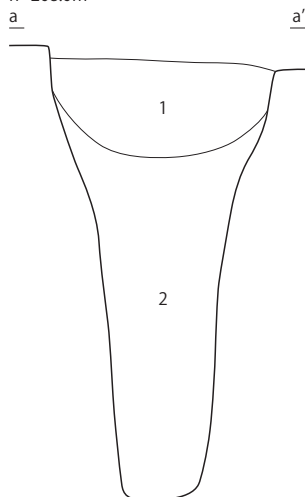
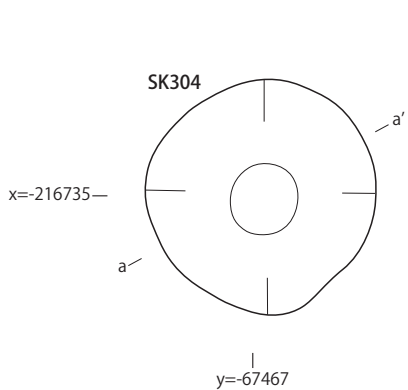
井戸 SE316

- 1 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR2/1 黑色シルトを多く含む
- 2 10YR2/1 黑色シルト, 10YR3/4 暗褐色シルトと 10YR8/3 浅黄橙色粘土を含む
- 3 10YR2/1 黑色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を少し含む

井戸 SE317

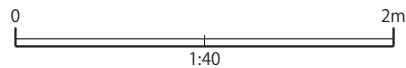
- 1 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR1.7/1 黑色シルトを少し含む
- 2 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR1.7/1 黑色シルトを多く含む
- 3 10YR1.7/1 黑色シルト, 10YR2/3 黒褐色シルトと腐植土を多く含む

SK304
h=208.0m

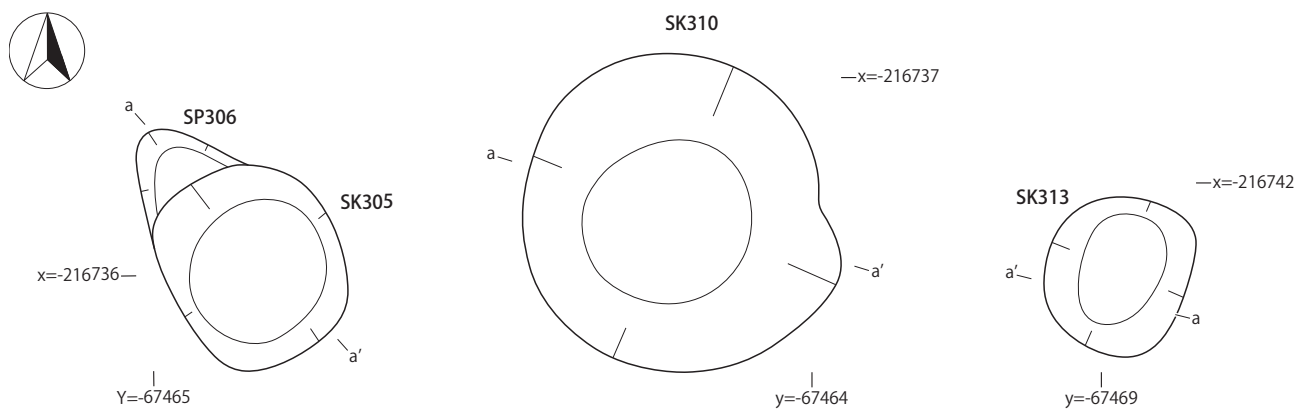


土坑 SK304

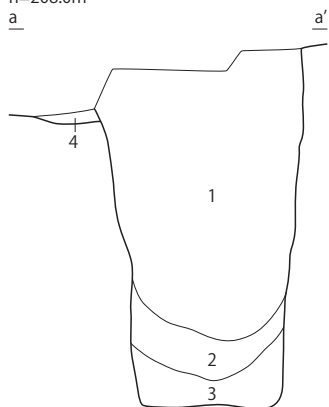
- 1 10YR1.7/1 黑色シルト, 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土と 10YR5/1 褐灰色を多く含む
- 2 10YR1.7/1 黑色シルト, 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土を少し含む



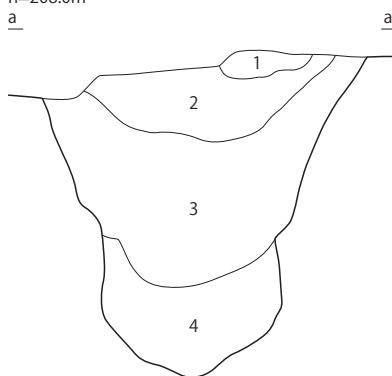
第 40 図 井戸 SE316・317, 土坑 SK304



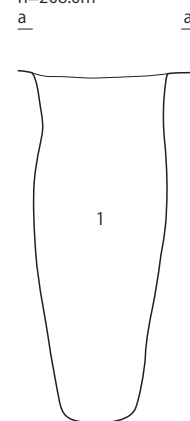
SK305, SP306
h=208.0m



SK310
h=208.0m



SK313
h=208.0m



土坑 SK305, ピット SP306

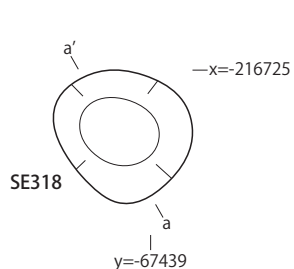
- 1 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルトと 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土を多く含む, 以下 3 層まで SK305
- 2 10YR1.7/1 黒色シルト, 5GY8/1 灰白色粘土を少し含む
- 3 5GY8/1 灰白色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルトを少し含む
- 4 10YR7/3 にぶい黄橙色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルトを含む, SP306

土坑 SK310

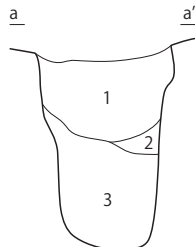
- 1 10YR7/6 明黄褐色粘土, 10YR2/2 黒褐色シルトを多く含む
- 2 10YR1.7/1 黒色シルト, 10YR7/3 にぶい黄橙色粘土を少し含む, 炭を多く含む
- 3 10YR8/4 浅黄橙色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルトを多く含む
- 4 10GY7/1 明緑灰色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルトを少し含む

土坑 SK313

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト, 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土を少し含む

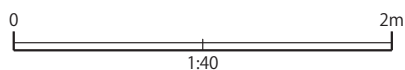


SK318
h=207.4m

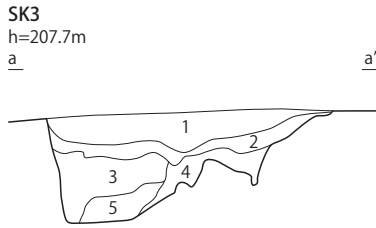
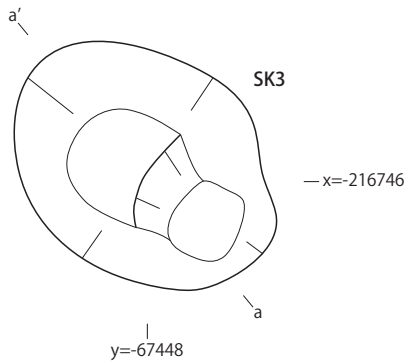


土坑 SK318

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト, 5GY8/1 灰白色粘土と 10YR6/1 褐灰色粘土を多く含む
- 2 10YR1.7/1 黒色シルト, 5GY8/1 灰白色粘土を多く含む
- 3 10YR1.7/1 黒色シルト, 5GY8/1 灰白色粘土を少し含む

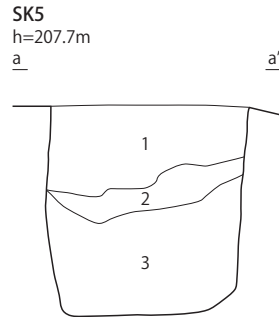
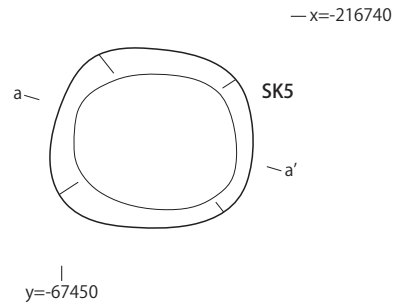


第 41 図 土坑 SK305・310・313・318, ピット SP306



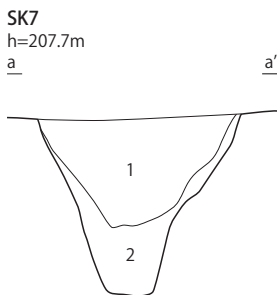
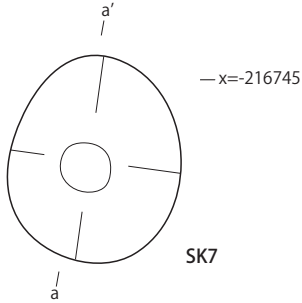
土坑 SK3

- 1 10YR2/1 黒色シルト, 10YR7/3 にぶい黄橙色の風化礫を下部に層状に含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト, 塊状の 10YR8/2 灰白色シルトの地山を両端に含む
- 3 10YR8/2 灰白色シルト, 10YR4/2 灰黄褐色シルト土を多く含む
- 4 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR8/2 灰白色シルトの地山を少し含む
- 5 10YR6/2 灰黄褐色シルト, 10YR3/1 黒褐色シルト土を少し含む



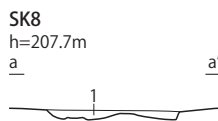
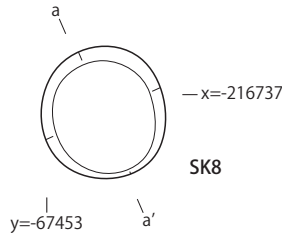
土坑 SK5

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを多く含む
- 2 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト, 10YR3/1 黒褐色シルト土を少し含む
- 3 10YR7/1 灰白色シルト, しまりのない 10YR2/1 黒色土を多く含む



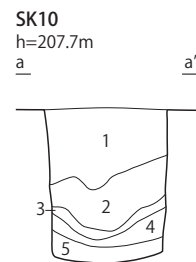
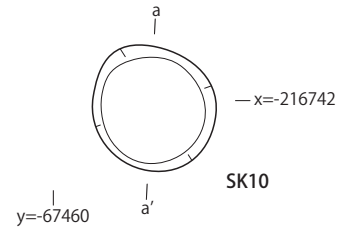
土坑 SK7

- 1 2.5Y7/2 灰黄色シルト, 10YR2/1 黒色シルト土を多く含む
- 2 10YR2/1 黒色シルト, 2.5Y7/2 灰黄色シルト土を含む



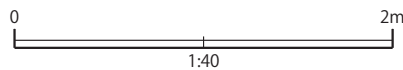
土坑 SK8

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト, 2 ~ 3mm の 10YR7/3 にぶい黄橙色の風化礫を多く含む

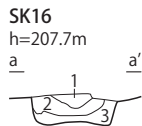
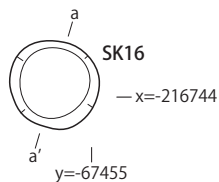


土坑 SK10

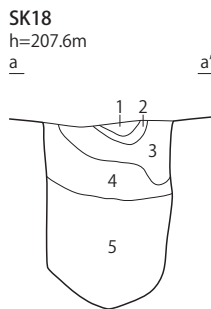
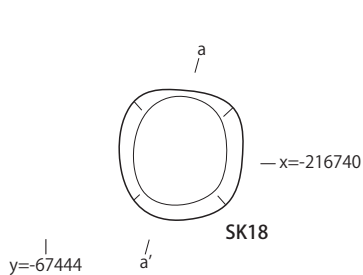
- 1 10YR8/3 浅黄橙色砂質シルト, 10YR3/1 黒褐色シルト土を多く含む
- 2 10YR8/6 黄橙色粘質シルト, 10YR3/1 黒褐色シルトを両端に多く含む
- 3 10YR2/1 黒色シルト, 塊状の 10YR8/6 黄橙色シルトを少し含む
- 4 2.5Y6/2 灰黄色シルト
- 5 10YR2/1 黒色シルト, 2.5Y6/2 灰黄色シルト土を多く含む



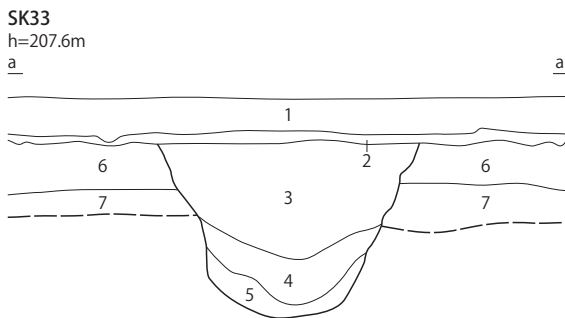
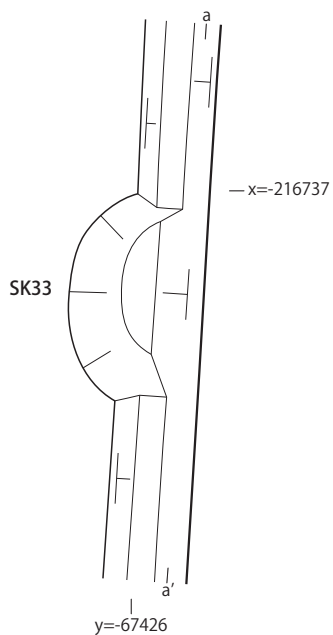
第 42 図 土坑 SK3・5・7・8・10



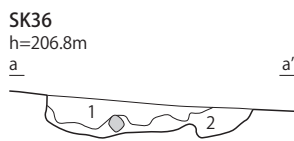
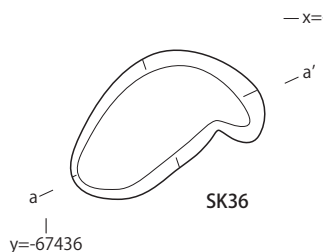
- 土坑 SK16**
- 1 10YR4/1 褐灰色シルト, 粒状の炭を含む
 - 2 10YR2/2 黒褐色シルト, 1mm 以下の塊状の 10YR8/2 灰白色シルトを多く含む
 - 3 10YR2/1 黒色シルト, 粒状の炭を含む



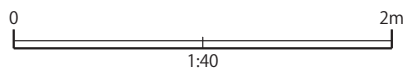
- 土坑 SK18**
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト
 - 2 10YR7/2 にぶい黄橙色シルト, 10YR3/1 黒褐色シルト土を少し含む
 - 3 10YR1.7/1 黒色シルト, 3 ~ 4mm の塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを少し含む
 - 4 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質シルト, 10YR1.7/1 黒色シルト土を含む
 - 5 10YR5/1 褐灰色粘質シルト, 10YR1.7/1 黒色シルト土を多く含む, 3 ~ 4mm の塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを少し含む



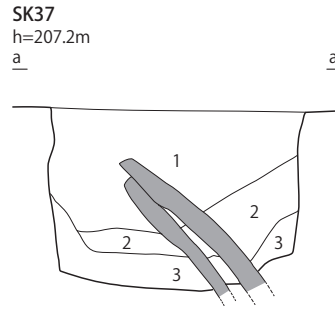
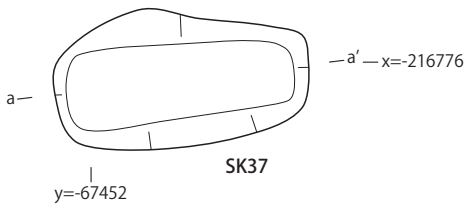
- 土坑 SK33**
- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト, 10mm 以上の円礫を少し含む, 耕土
 - 2 10YR5/2 灰黄褐色シルト, 10YR3/2 黒褐色粘質シルト土を多く含む, 耕土
 - 3 10YR1.7/1 黒色シルト, 以下 5 層まで SK33
 - 4 10YR2/1 黒色シルト, 10YR3/2 黒褐色粘質シルト土を多く含む
 - 5 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 塊状の 2.5Y8/3 淡黄色粘土を多く含む
 - 6 10YR2/1 黒色シルト, 川 SG2
 - 7 10YR4/1 褐灰色シルト, 地山



- 土坑 SK36**
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 2 ~ 5mm の 10YR7/8 黄橙色シルト土を多く含む
 - 2 10YR2/1 黒色シルト, 10YR4/6 褐色砂を含む, 10mm 以上の円礫を多く含む

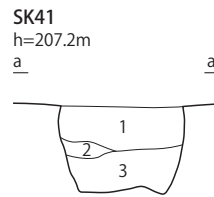
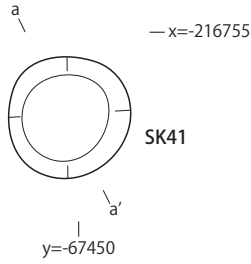


第 43 図 土坑 SK16・18・33・36



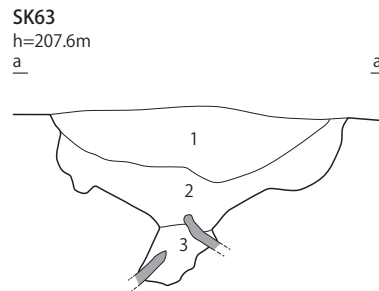
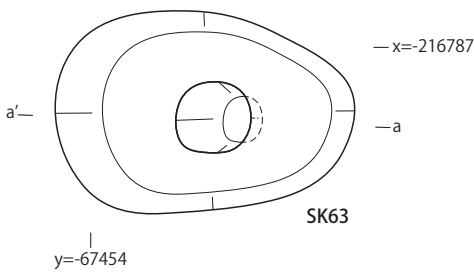
土坑 SK37

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト, 1 ~ 2mm の 10YR7/2 にぶい黄褐色風化土を多く含む, 10YR4/1 褐灰色粘土を多く含む
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR7/1 灰白色粘土を多く含む, 炭を含む
- 3 10YR5/2 灰黄褐色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルト土を多く含む



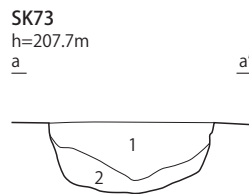
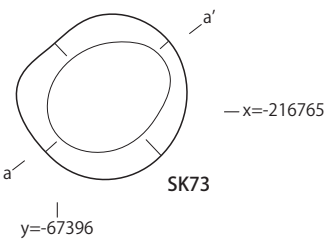
土坑 SK41

- 1 10YR2/1 黒色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄褐色シルトを含む
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR7/1 灰白色シルト土を多く含む
- 3 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト, 10Y7/1 灰白色粘質シルト土を多く含む, 炭を含む



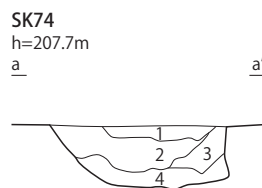
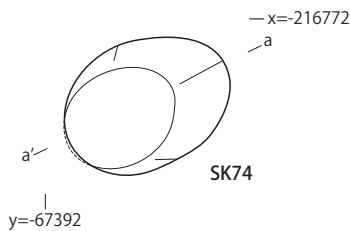
土坑 SK63

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR7/2 にぶい黄褐色の風化土を含む
- 2 10YR2/1 黒色粘質シルト, 10YR7/2 にぶい黄褐色の風化土を多く含む, 10YR3/2 黒褐色粘土を多く含む
- 3 10YR4/1 褐灰色粘質シルト, 10YR6/1 褐灰色粘土を少し含む, 炭を含む



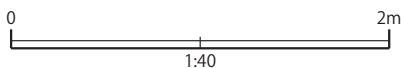
土坑 SK73

- 1 2.5Y2/1 黒色シルト, 2.5Y5/1 黄灰色粘土を少し含む
- 2 10YR1.7/1 黒色シルト, 10YR6/6 明黄褐色シルト土を含む, 2.5Y5/1 黄灰色粘土を少し含む



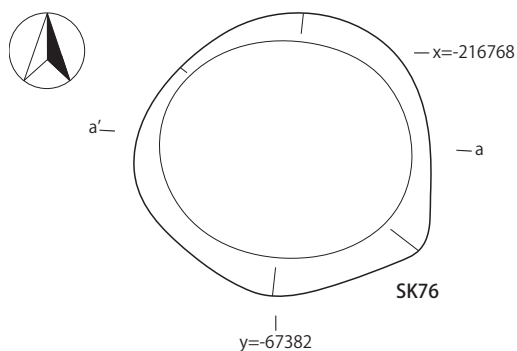
土坑 SK74

- 1 7.5YR2/1 黒色シルト, 2 ~ 5mm の塊状の 10YR7/6 明黄褐色シルトを含む
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト, 5 ~ 10mm の塊状の 10YR7/3 にぶい黄褐色シルトを多く含む
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR7/3 黄褐色シルトを含む
- 4 7.5YR4/1 褐灰色シルト, 10YR6/6 明黄褐色砂を多く含む

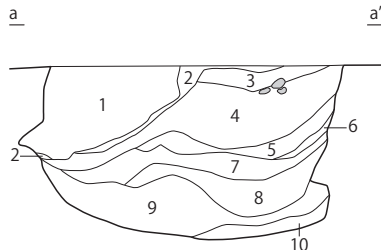


■ 木・木製品

第 44 図 土坑 SK37・41・63・73・74

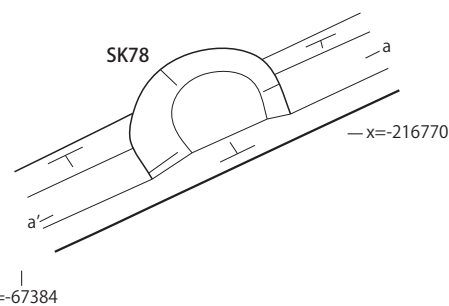


SK76
h=207.6m

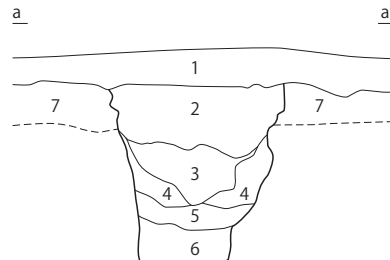


土坑 SK76

- 1 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト, 10YR3/2 黒褐色シルトを少し含む
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 5Y6/4 オリーブ黄色シルトを少し含む, 炭を少し含む
- 3 2.5Y7/4 浅黄色シルト, 塊状の 10YR2/1 黒色シルトを多く含む, 礫を含む
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト, 塊状の 2.5Y6/3 にぶい黄色シルトを多く含む, 礫を含む
- 5 2.5Y6/6 明黄褐色粘質シルト, 塊状の 2.5Y7/3 浅黄色粘質シルトを多く含む, 10YR2/2 黒褐色シルトを含む
- 6 5Y2/1 黒色粘質シルト
- 7 5G7/1 明緑灰色シルト, 塊状の 2.5Y2/1 黒色シルトを多く含む
- 8 2.5Y2/1 黒色粘質シルト
- 9 7.5GY6/1 緑灰色砂質シルト
- 10 5Y2/1 黒色シルト, 7.5GY6/1 緑灰色砂質シルトを含む

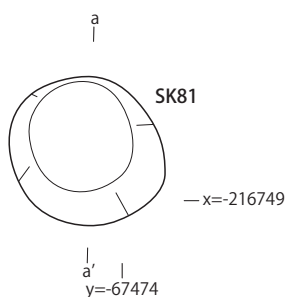


SK78
h=207.6m

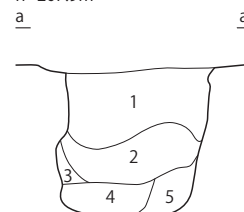


土坑 SK78

- 1 表土
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 2.5YR4/6 褐色シルトを多く含む
- 3 10YR2/1 黒褐色粘質シルト, 塊状の 7.5YR4/6 褐色シルトを少し含む
- 4 2.5Y5/1 黄灰粘質シルト, 10YR2/1 黒色シルトを縞状に含む
- 5 5Y4/2 灰オリーブ色粘土, 下部に 7.5Y4/1 灰色砂を多く含む
- 6 7.5GY7/1 明緑灰色粘質シルト, 7.5Y4/1 灰色砂を多く含む
- 7 地山

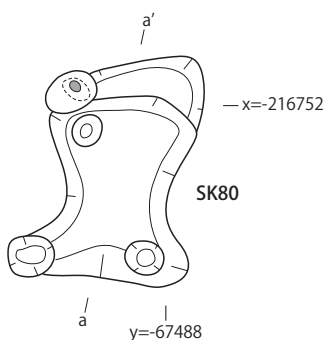


SK81
h=207.9m

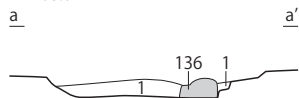


土坑 SK81

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト, 炭を少し含む
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色シルト, 塊状の 10YR8/2 灰白色粘土を多く含む
- 3 10YR7/1 灰白色シルト
- 4 10YR8/1 灰白色粘土, 塊状の 10YR4/1 褐灰色シルトを多く含む
- 5 2.5Y2/1 黒色シルト, 塊状の 5Y8/2 灰白色シルトを少し含む



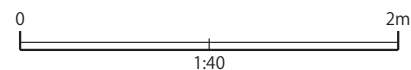
SK80
h=208.0m



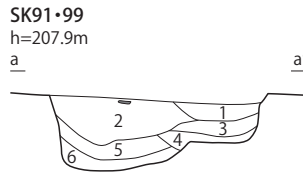
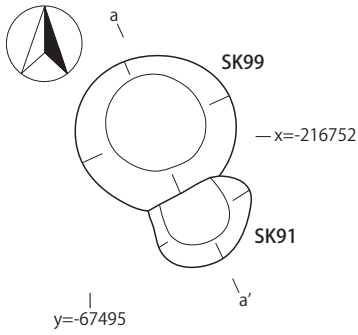
土坑 SK80

- 1 10YR2/1 黒色シルト, 10mm 以上の円礫と炭を多く含む

■ 石・石製品 ■ 木・木製品

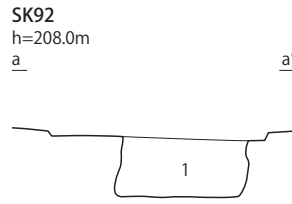
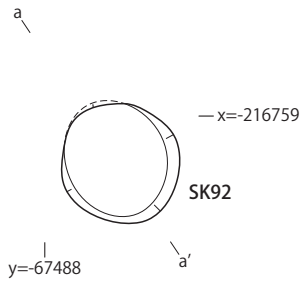


第 45 図 土坑 SK76・78・80・81



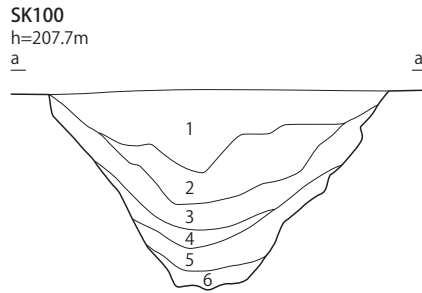
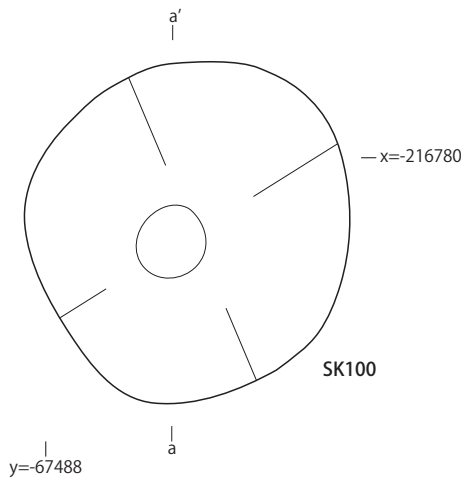
土坑 SK91・99

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト
- 2 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト, 10YR3/1 黒褐色シルト土を多く含む
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト, 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト土を多く含む
- 4 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト, 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト土を含む
- 5 2.5Y3/1 黒褐色シルト
- 6 5Y5/1 灰色砂質シルト, 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト土を含む



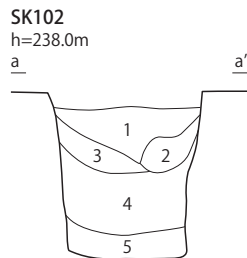
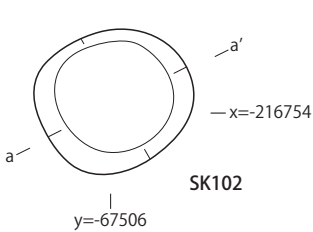
土坑 SK92

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の地山と炭を少し含む



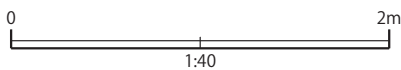
土坑 SK100

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト
- 2 7.5YR1.7/1 黒色シルト, 有機物を含む
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト, 有機物を含む
- 4 2.5Y2/1 黒色シルト, 1~2mm の塊状の 2.5Y7/1 灰白色シルトを少し含む
- 5 2.5Y4/1 黄灰色シルト, 1~2mm の塊状の 2.5Y7/1 灰白色シルトを多く含む
- 6 5Y4/1 灰色シルト, 有機物を含む



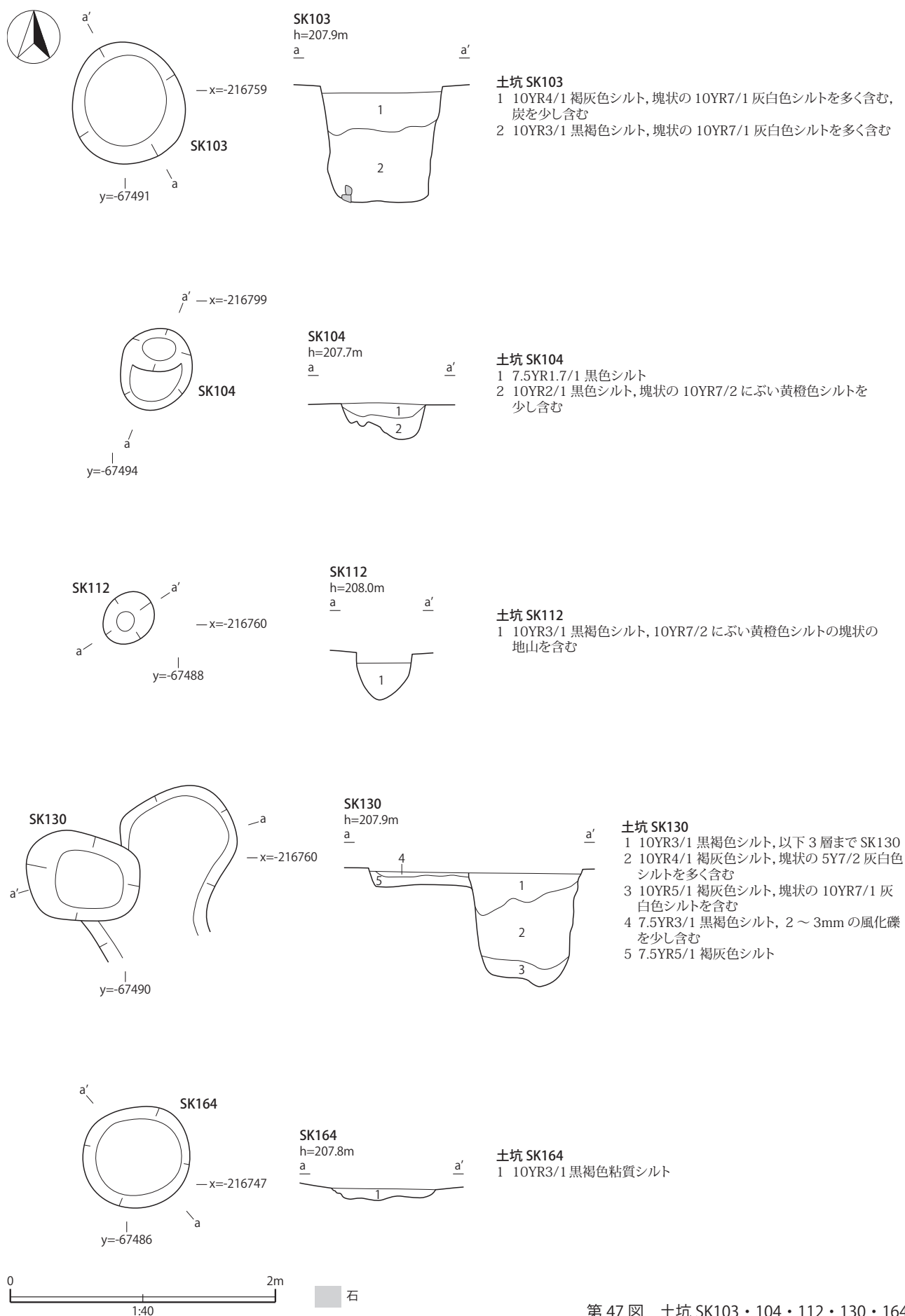
土坑 SK102

- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト, 10YR4/1 褐灰色粘土を多く含む, 炭を少し含む
- 2 10YR4/1 褐灰色粘土, 10YR3/1 黒褐色シルト土を多く含む
- 3 10YR1.7/1 黒色シルト
- 4 2.5Y4/1 黄灰色シルト, 7.5Y7/1 灰白色シルト土を多く含む
- 5 2.5Y2/1 黒色シルト

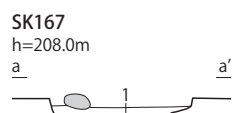
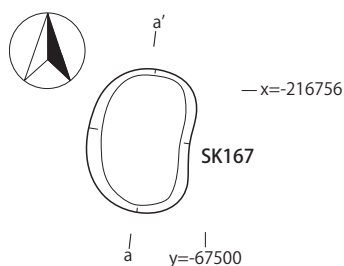


■ 土器

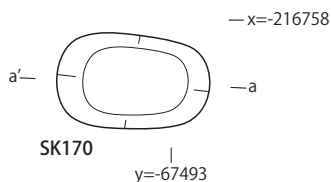
第 46 図 土坑 SK91・92・99・100・102



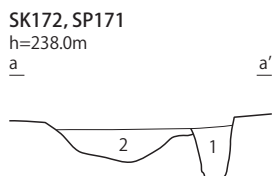
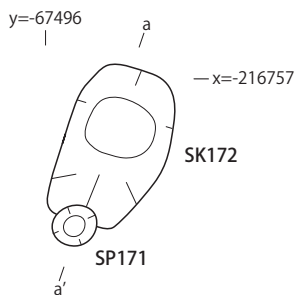
第 47 図 土坑 SK103・104・112・130・164



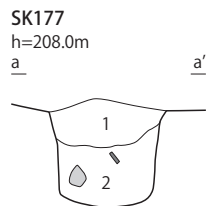
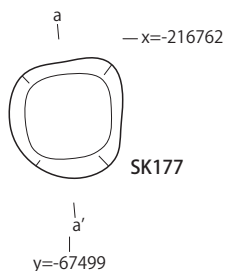
土坑 SK167
1 10YR1.7/1 黒色シルト, 炭を少し含む



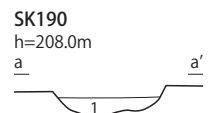
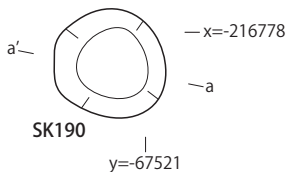
土坑 SK170
1 10YR3/1 黒褐色シルト, 炭を少し含む



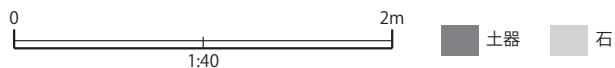
土坑 SK172, ピット SP171
1 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR7/1 灰白色シルトを多く含む, SP171
2 7.5YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR7/1 灰白色シルトを含む, SK172



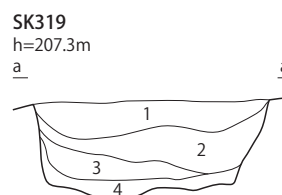
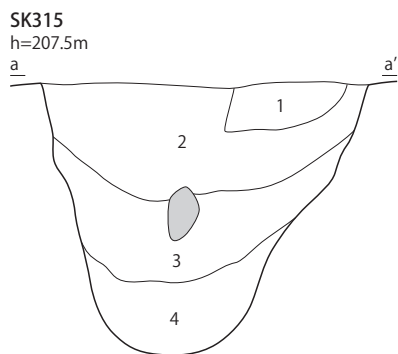
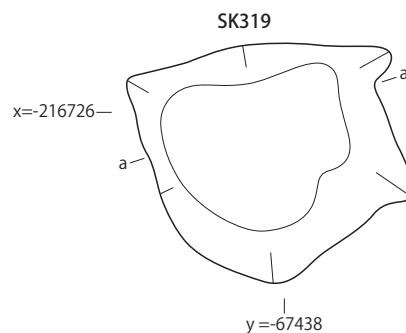
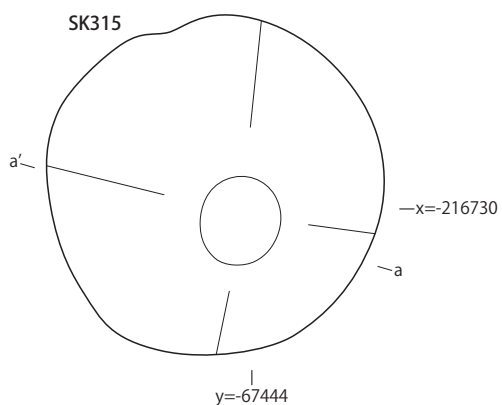
土坑 SK177
1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 炭を含む
2 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト, 塊状の 10YR8/1 灰白色粘土を多く含む, 遺物を含む



土坑 SK190
1 10YR4/1 褐灰色シルト, 炭を少し含む



第 48 図 土坑 SK167・170・172・177・190, ピット SP171

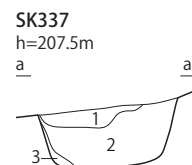
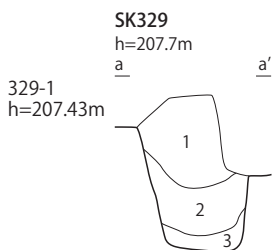
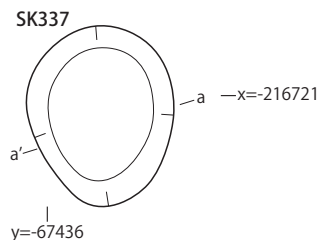
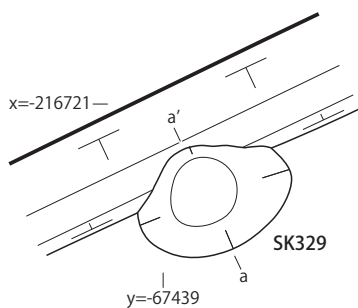


SK315

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を少し含む
- 2 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルトを多く含む
- 3 10YR1.7/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を多く含む
- 4 5GY8/1 灰白色粘土, 10YR1.7/1 黒色粘土を含む

SK319

- 1 10YR1.7/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を少し含む
- 2 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルトと 5GY8/1 灰白色粘土を多く含む
- 3 10YR1.7/1 黒色シルト, 5GY8/1 灰白色粘土を含む
- 4 5GY8/1 灰白色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルトを少し含む



SK329

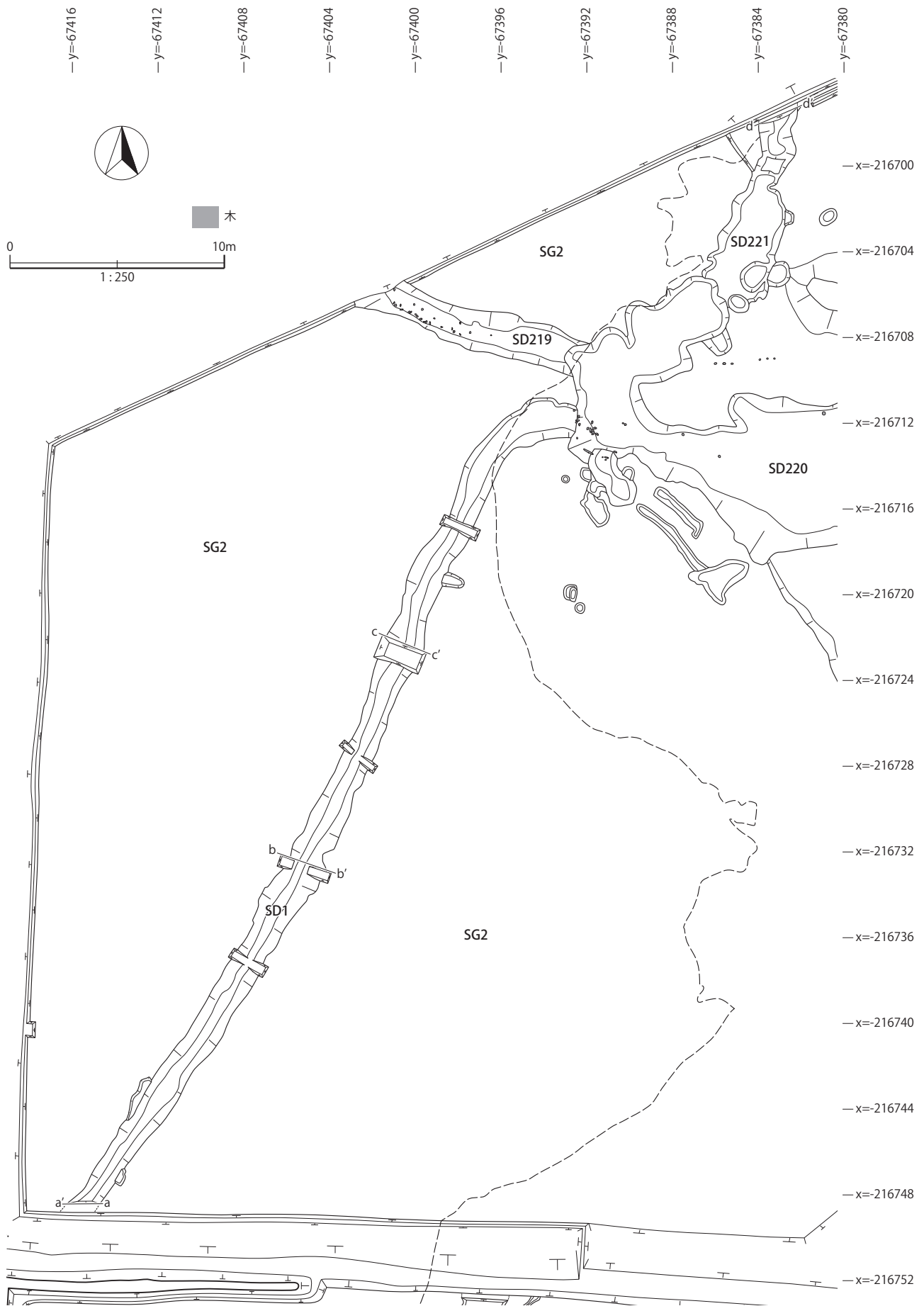
- 1 10YR2/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を含む
- 2 10YR1.7/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を多く含む
- 3 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR1.7/1 黒色シルトを多く含む

SK337

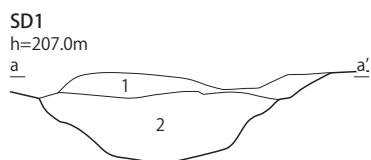
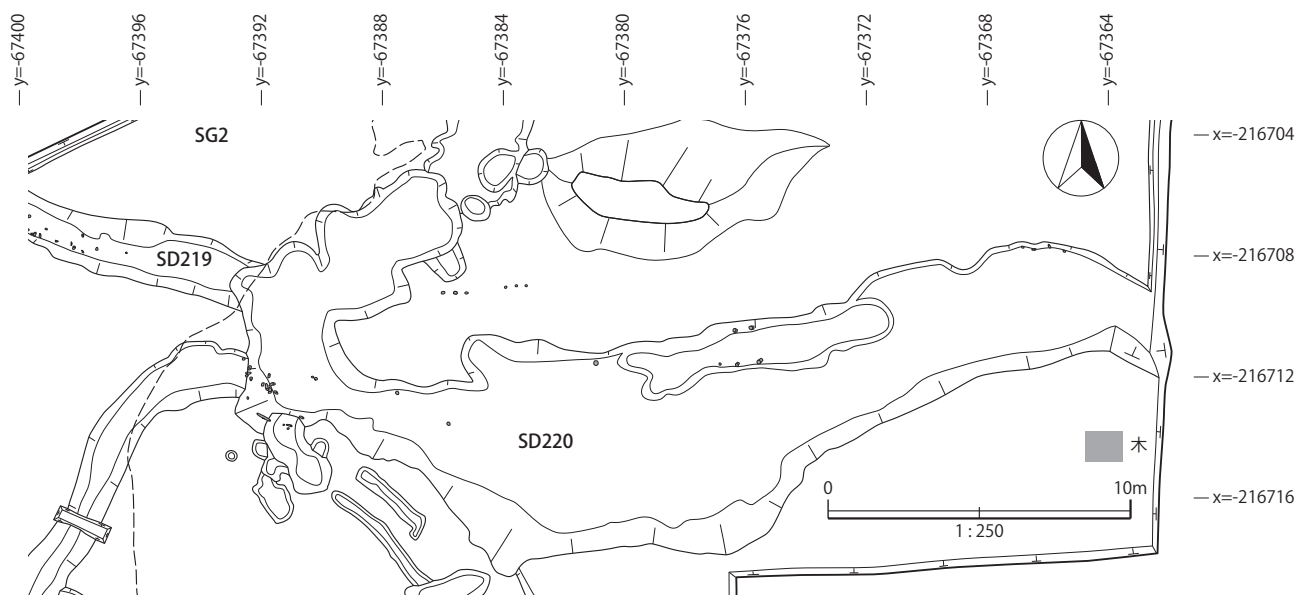
- 1 10YR2/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土と 10YR3/3 暗褐色シルトを多く含む
- 2 10YR2/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土と 10YR3/3 暗褐色シルトを少し含む
- 3 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR2/1 黒色シルトを含む



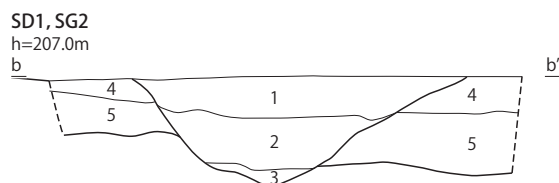
第 49 図 土坑 SK315・319・329・337



第50図 溝SD1・219・220・221, 川SG2



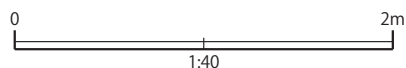
- 溝 SD1, a - a'
- 1 10YR4/1 褐灰色シルト, 炭を少し含む
 - 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 炭を含む



- 溝 SD1, 川 SG2, b - b'
- 1 10YR4/1 褐灰色シルト, 1 ~ 2mm 粗砂を多く含む, 炭を含む, 以下 3 層まで SD1
 - 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 炭を含む
 - 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 10YR7/8 黄橙色砂を多く含む, 2mm ~ 5mm の礫を多く含む
 - 4 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト, 以下 SG2
 - 5 10YR1.7/1 黒色シルト

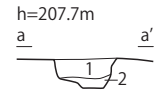
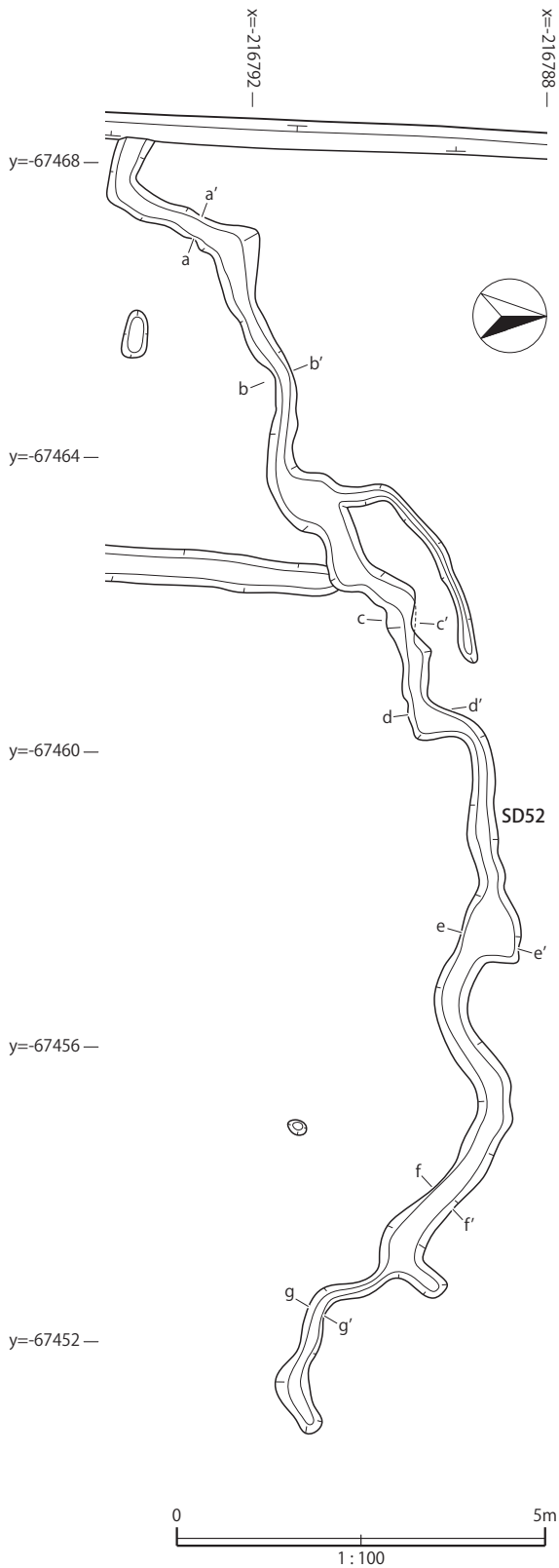


- 溝 SD1, 川 SG2, c - c'
- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 以下 2 層まで SD1
 - 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 10YR7/8 黄橙色砂を多く含む, 2 ~ 5mm の礫を多く含む
 - 3 10YR1.7/1 黒色シルト, 以下 5 層まで SG2
 - 4 10YR2/1 黒色粘質シルト
 - 5 10YR3/2 黒褐色粘質シルト

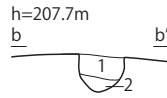


- 溝 SD221, d - d'
- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト, 風化礫を少し含む, 10Y7/4 にぶい黄橙色砂を多く含む, 2mm ~ 5mm の礫を少し含む
 - 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルト, 10YR7/1 灰白色砂を底部に含む
 - 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト, 10YR7/4 にぶい黄橙色砂を多く含む
 - 4 10YR5/1 褐灰色シルト, 10YR4/1 褐灰色シルト土を含む

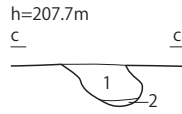
第 51 図 溝 SD1・219 ~ 221, 川 SG2



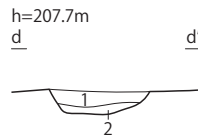
- a - a'**
- 1 10YR4/1 褐灰色シルト, 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト土を多く含む
 - 2 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト土を少し含む



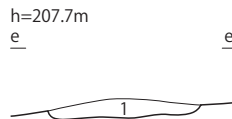
- b - b'**
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト土を多く含む
 - 2 10YR1.7/1 黒色シルト, 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト土を多く含む



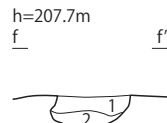
- c - c'**
- 1 10YR4/1 褐灰色シルト, 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト土を多く含む
 - 2 10YR2/1 黒色シルト, 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト土を少し含む



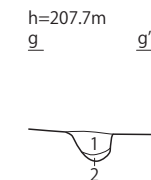
- d - d'**
- 1 7.5YR5/1 褐灰色シルト, 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト土を多く含む
 - 2 10YR2/1 黒色シルト, 炭を少し含む



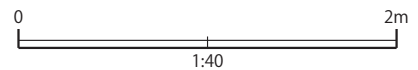
- e - e'**
- 1 10Y5/1 褐灰色シルト, 10YR7/1 灰白色シルトを多く含む



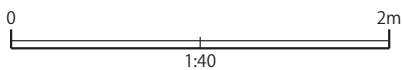
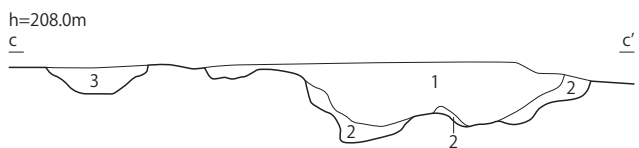
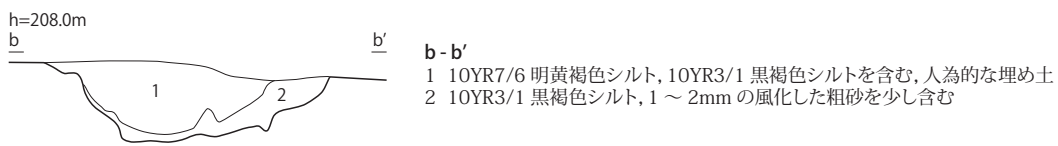
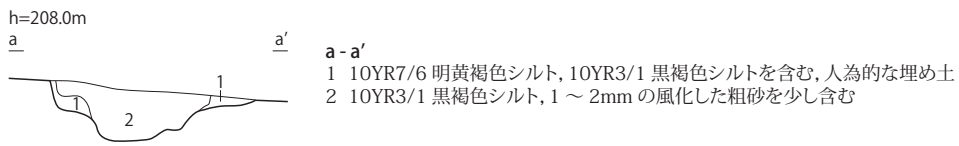
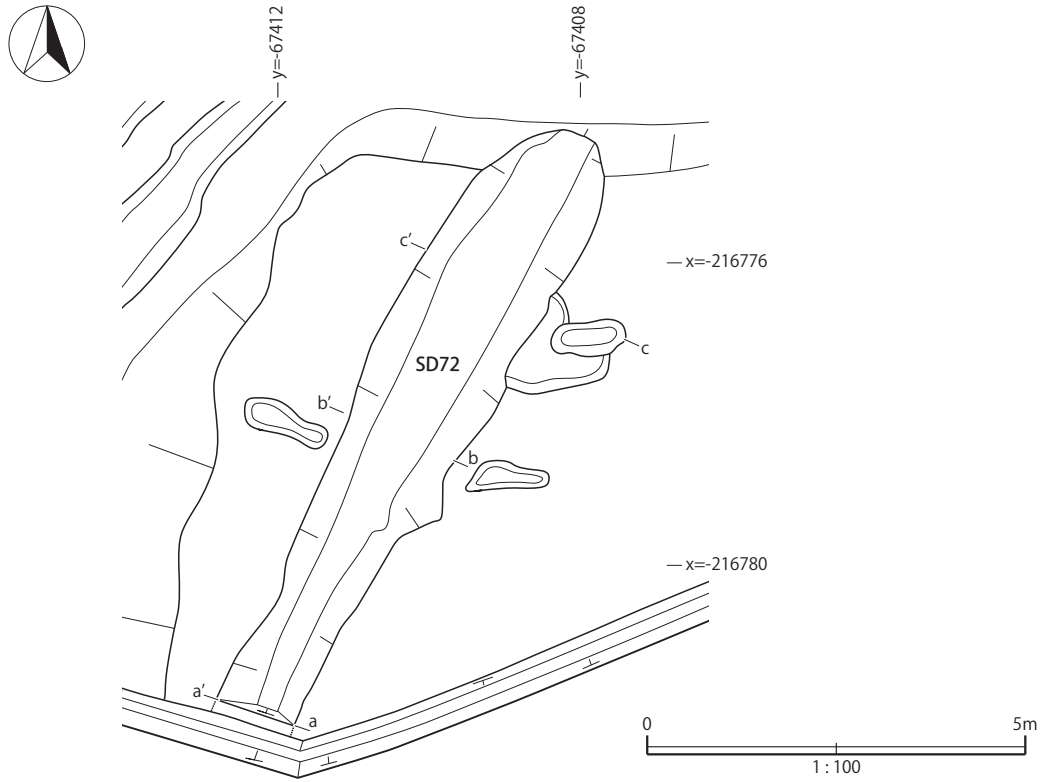
- f - f'**
- 1 2.5Y3/2 黒褐色シルト, 炭粒を含む
 - 2 5Y3/1 オリーブ黒色シルト, 中層に 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを含む



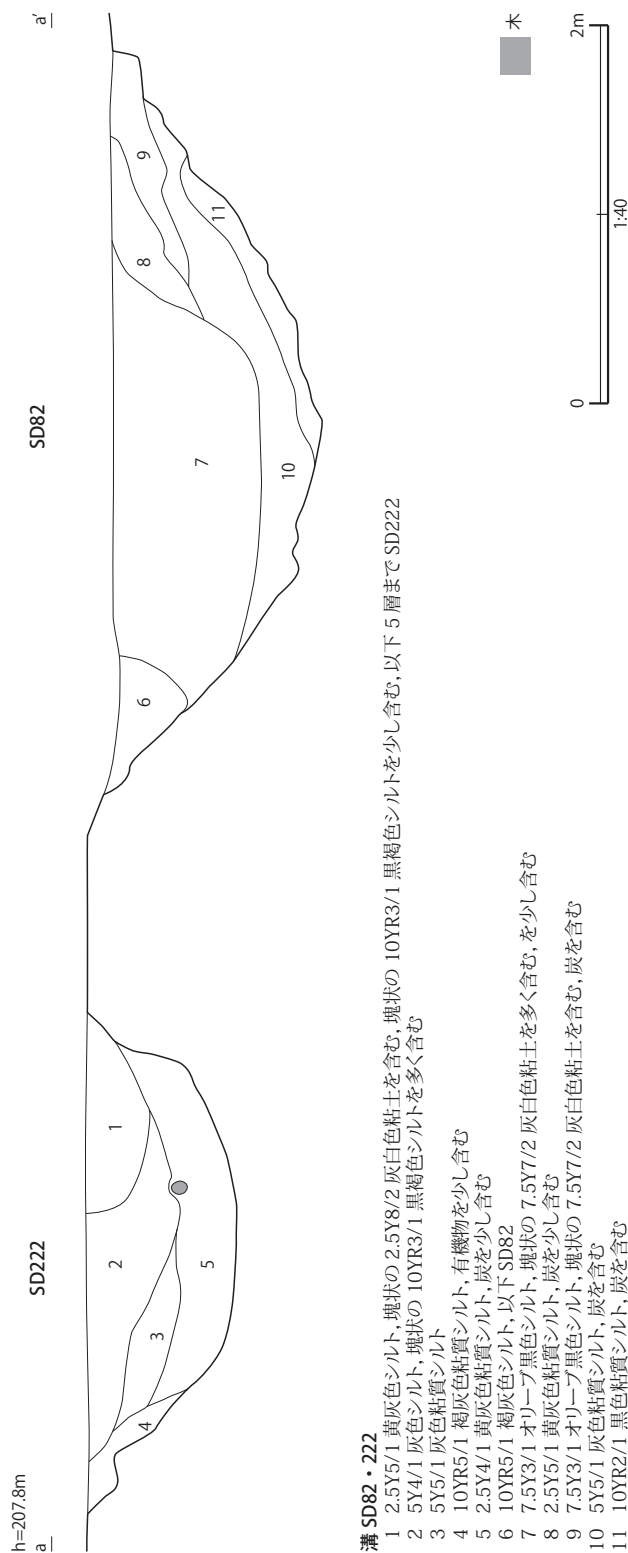
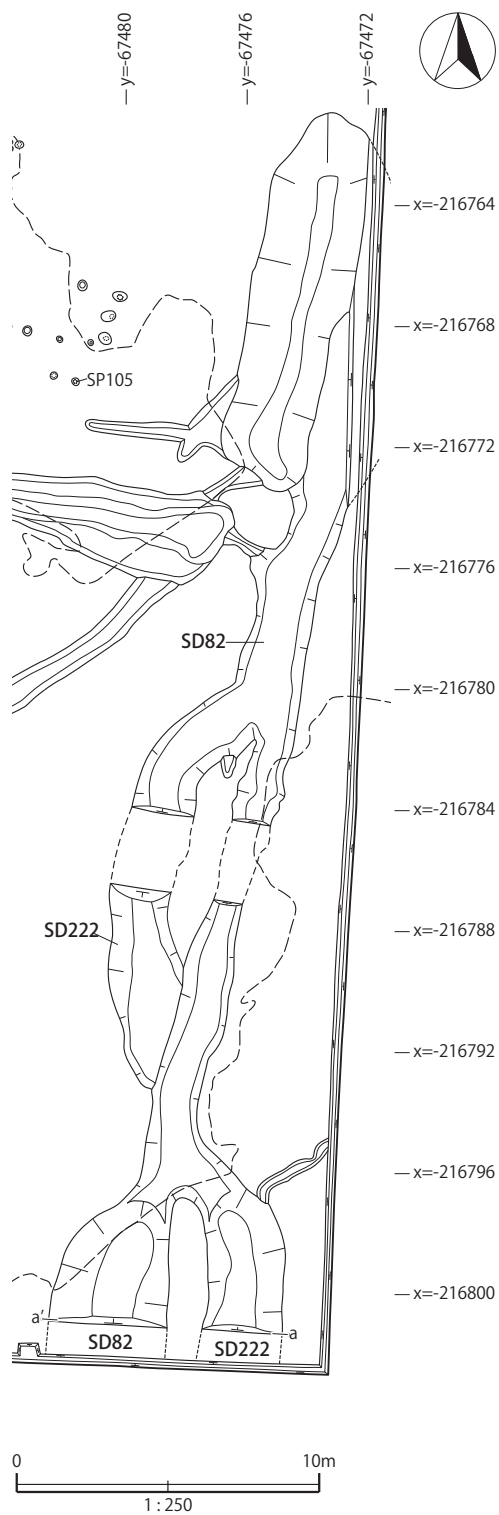
- g - g'**
- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを多く含む, 下層に炭粒を含む
 - 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルト, 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルトを多く含む



第 52 図 溝 SD52

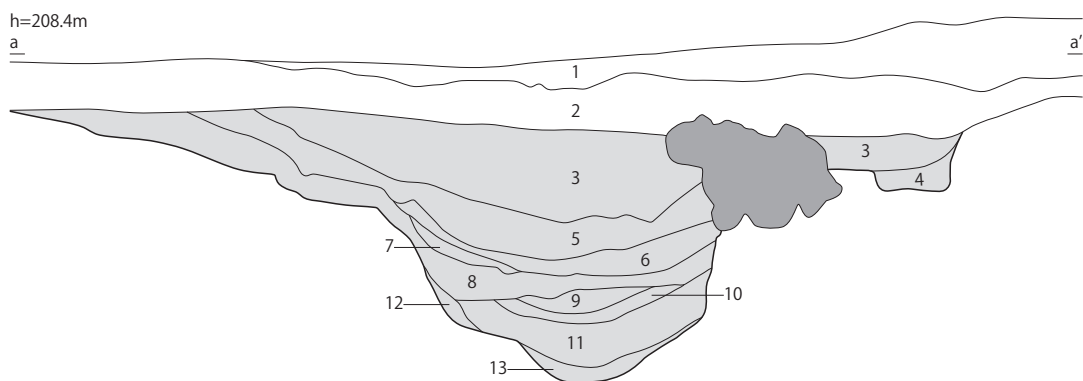
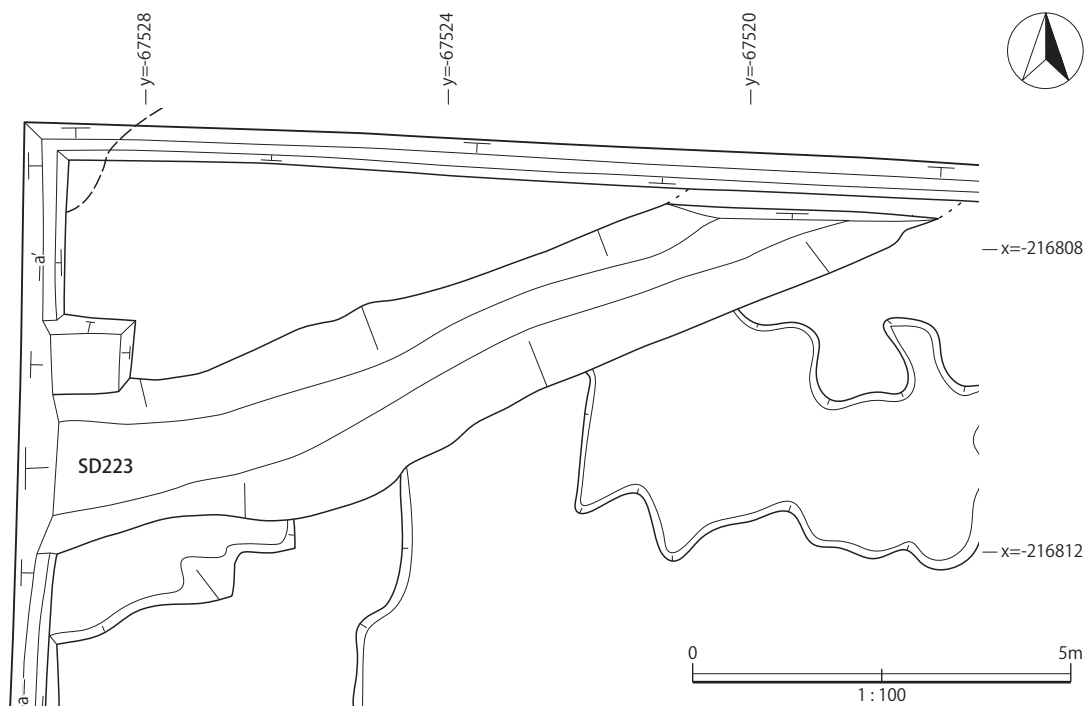


第 54 図 溝 SD72



- 溝 SD82・222**
- 1 2.5Y5/1 黄灰色シルト、塊状の 2.5Y8/2 灰白色粘土を含む、塊状の 10YR3/1 黒褐色シルトを少し含む、以下 5 層まで SD222
 - 2 5Y4/1 灰色シルト、塊状の 10YR3/1 黒褐色シルトを多く含む
 - 3 5Y5/1 灰色粘質シルト
 - 4 10YR5/1 褐灰色粘質シルト、有機物を少し含む
 - 5 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、炭を少し含む
 - 6 10YR5/1 褐灰色シルト、以下 SD82
 - 7 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト、塊状の 7.5Y7/2 灰白色粘土を多く含む、炭を少し含む
 - 8 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト、炭を少し含む
 - 9 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト、塊状の 7.5Y7/2 灰白色粘土を含む、炭を含む
 - 10 5Y5/1 灰色粘質シルト、炭を含む
 - 11 10YR2/1 黒色粘質シルト、炭を含む

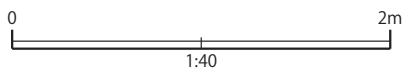
第 55 図 溝 SD82・222



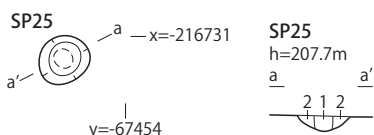
溝 SD223

- 1 10YR6/2 灰黄褐色シルト, 耕土
- 2 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト, 塊状の 7.5Y7/2 灰白色粘土を多く含む, 炭を少し含む, 耕土
- 3 10YR6/1 灰褐色シルト, 炭を少し含む, 以下 SD223
- 4 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト, 2.5Y3/1 黒褐色シルト土を含む
- 5 10YR4/1 褐灰色粘質シルト, 5GY7/1 明オリーブ灰色粘土を多く含む
- 6 10YR5/1 褐灰色砂質シルト
- 7 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト, 炭を含む
- 8 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
- 9 7.5GY7/1 明緑灰色粘土, 炭を多く含む
- 10 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト, 炭を少し含む
- 11 10GY7/1 明緑灰色粘土, 炭を多く含む
- 12 7.5YR5/1 褐灰色粘土, 炭を含む
- 13 7.5YR6/1 褐灰色粘土 15 2.5Y3/1 黒褐色シルト

SD223
木

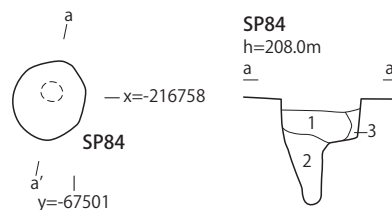


第 56 図 溝 SD223



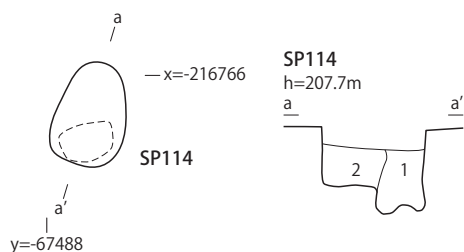
柱穴 SP25

- 1 柱痕, 10YR2/1 黒色シルトを多く含む
- 2 10YR8/2 灰白色シルト, 10YR2/1 黒色シルトを多く含む, 掘方



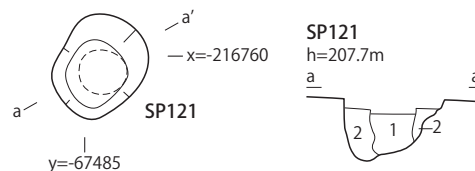
柱穴 SP84

- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを多く含む, 抜き取り痕
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 1~2mm の地山粗砂を少し含む, 柱痕
- 3 10YR5/1 褐灰色砂質シルト, 炭を少し含む, 掘り方



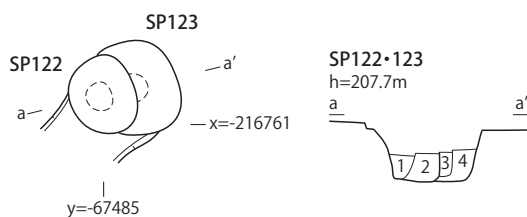
柱穴 SP114

- 1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト, 柱痕
- 2 10YR6/1 褐灰色粘質シルト, 10YR3/1 黒褐色シルトを多く含む, 掘方



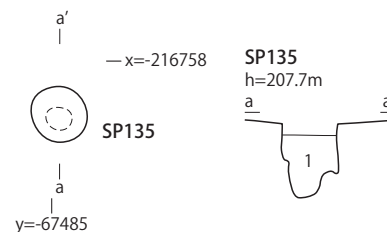
柱穴 SP121

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを多く含む, 柱痕
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト, 10YR8/2 灰白色シルトを含む, 掘方



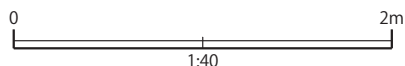
柱穴 SP122・123

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 炭を少し含む, 以下 2 層まで SP122, 柱痕
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト, 塊状の 10YR6/2 灰黄褐色シルトを多く含む, 掘方
- 3 2.5YR4/1 黄灰色シルト, 塊状の 10YR6/2 灰黄褐色シルトを含む, 以下 SP123, 柱痕
- 4 2.5Y3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR6/2 灰黄褐色シルトを多く含む, 掘方

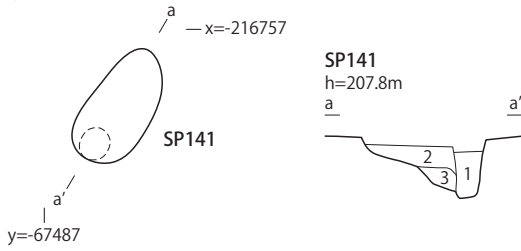


柱穴 SP135

- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 炭を少し含む, 抜き取り痕

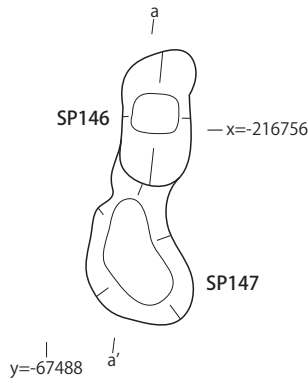


第 57 図 柱穴 SP25・84・114・121～123・135



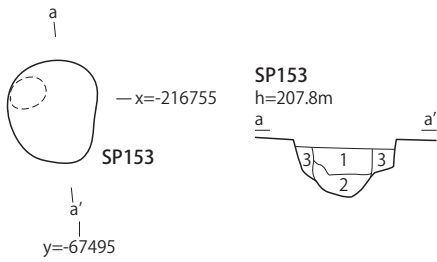
柱穴 SP141

- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 炭を少し含む, 柱痕
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR6/1 褐灰色シルトを多く含む, 以下掘方
- 3 5Y4/1 灰色粘質シルト, 風化礫を含む



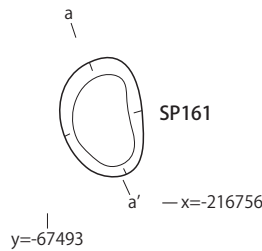
柱穴 SP146・147

- 1 10YR2/1 黒色シルト, 以下 2 層まで SP146, 抜き取り痕
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR8/2 灰白色シルトを含む, 掘方
- 3 2.5Y3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR8/2 灰白色シルトを多く含む, 以下 SP147, 抜き取り痕
- 4 7.5YR4/1 褐灰色シルト, 掘方



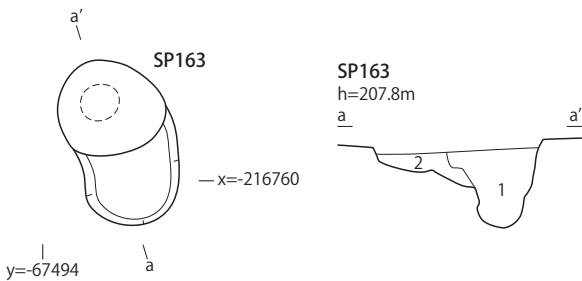
柱穴 SP153

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 2.5Y7/2 灰黄色粘土を多く含む, 以下 2 層まで抜き取り痕
- 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルト, 塊状の 2.5Y7/2 灰黄色粘土を少し含む
- 3 10YR8/3 浅黄橙色シルト, 10YR3/1 黒褐色シルト土を多く含む, 掘方



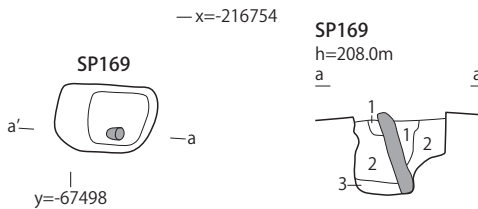
柱穴 SP161

- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト, 塊状の 2.5Y6/3 にぶい黄色シルトを多く含む, 抜き取り痕



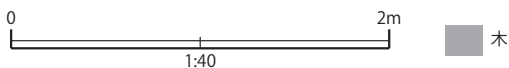
柱穴 SP163

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR8/2 灰白色粘土を多く含む, 抜き取り痕
- 2 2.5Y4/1 黄灰色シルト, 2mm 以下の風化礫を少し含む, 掘方

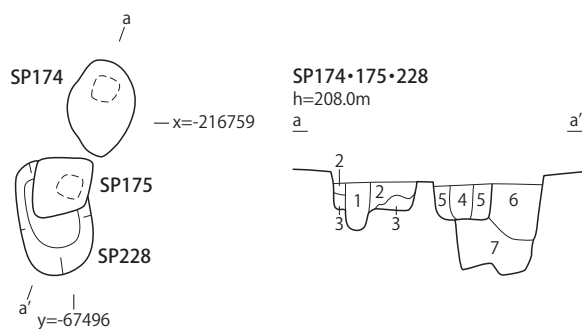


柱穴 SP169

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR8/1 灰白色シルトを少し含む, 以下掘方
- 2 2.5Y4/1 黄灰色シルト, 塊状の 10YR8/2 灰白色シルトを多く含む
- 3 10YR4/1 褐灰色粘質シルト

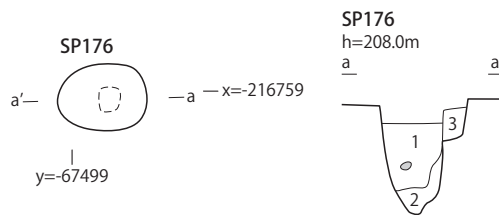


第 58 図 柱穴 SP141・146・147・153・161・163・169



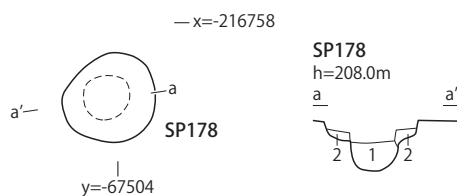
柱穴 SP174・175・228

- 1 10YR8/2 灰白色粘土, 10YR5/1 褐灰色シルト土を多く含む, 以下3層まで SP174, 柱痕
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR7/1 灰白色シルトを多く含む, 以下3層まで掘方
- 3 10YR5/2 灰黄褐色シルト, 塊状の 10YR3/1 黒褐色シルトを含む
- 4 10YR2/1 黒色シルト, 塊状の 10YR7/1 灰白色シルトを少し含む, 以下3層まで SP175, 柱痕
- 5 10YR4/1 褐灰色シルト, 塊状の 10YR7/1 灰白色シルトを多く含む, 掘方
- 6 2.5Y2/1 黒色シルト, 以下 SP228 の掘方
- 7 2.5Y3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR7/1 灰白色シルトを多く含む



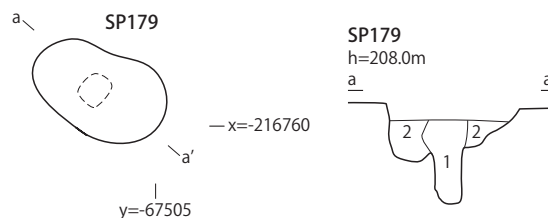
柱穴 SP176

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 2~3mm の礫と炭を少し含む, 以下2層まで抜き取り痕
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト, 2~3mm の礫を少し含む
- 3 5Y2/1 黒色シルト, 掘方



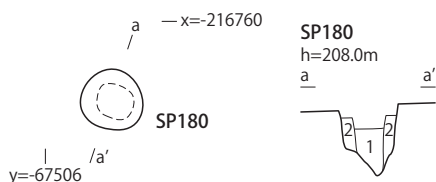
柱穴 SP178

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 柱痕
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを含む, 1~2mm の粗砂を多く含む, 掘方



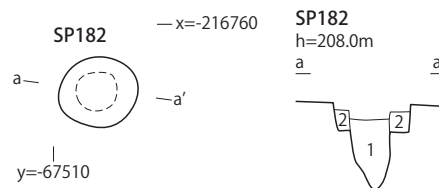
柱穴 SP179

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR8/1 灰白色シルトを少し含む, 柱痕
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを少し含む, 掘方



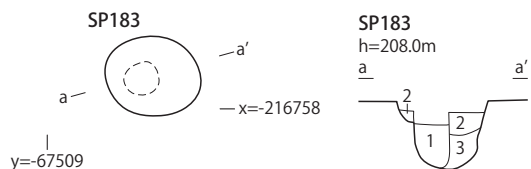
柱穴 SP180

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを多く含む, 柱痕
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを含む, 掘方



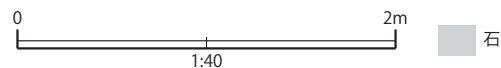
柱穴 SP182

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 炭を少し含む, 柱痕
- 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト, 掘方

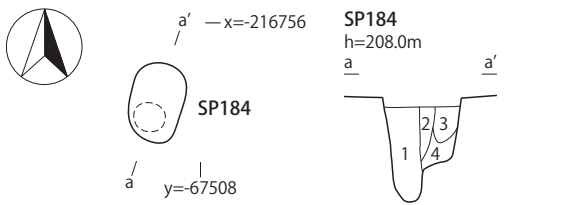


柱穴 SP183

- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを多く含む, 柱痕
- 2 10YR2/1 黒色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを少し含む, 以下掘方
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト, 炭を少し含む

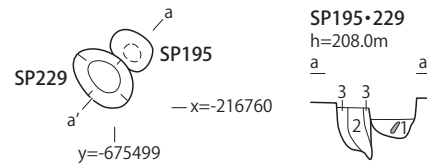


第 59 図 柱穴 SP174 ~ 176・178・179・180・182・183・228



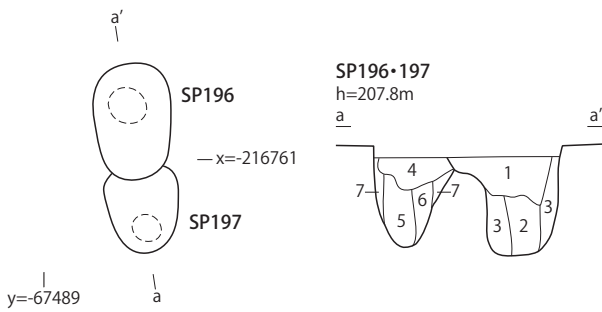
柱穴 SP184

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト, 塊状の 10YR8/2 灰白色シルトを多く含む, 柱痕
- 2 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト, 塊状の 10YR8/2 灰白色シルトを含む, 以下掘方
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 塊状の 10YR8/2 灰白色シルトを少し含む
- 4 5Y4/1 灰色粘質シルト, 塊状の 10YR8/2 灰白色シルトを含む



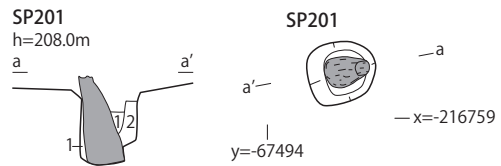
柱穴 SP195, ピット SP229

- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト, 1 ~ 2mm の粗砂を含む, SP229
- 2 2.5Y6/1 黄灰色シルト, 1 ~ 2mm の粗砂を含む, 以下 SP195, 柱痕
- 3 2.5Y2/1 黒色シルト, 掘方



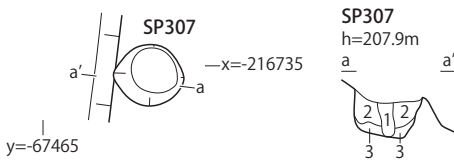
柱穴 SP196・197

- 1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト, 塊状の 10YR7/1 灰白色シルトを多く含む, 以下 3 層まで SP196, 抜き取り痕
- 2 2.5Y4/1 黄灰色シルト, 塊状の 10YR5/1 褐灰色シルトを含む, 柱痕
- 3 10YR5/1 褐灰色シルト, 塊状の 10YR7/1 灰白色シルトを多く含む, 掘方
- 4 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 塊状の 10YR7/1 灰白色シルトを多く含む, 以下 SP197, 抜き取り痕
- 5 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト, 塊状の 10YR5/1 褐灰色シルトを含む, 柱痕
- 6 7.5YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを少し含む, 以下掘方
- 7 10YR6/1 褐灰色シルト, 塊状の 10YR3/1 黒褐色シルトを含む



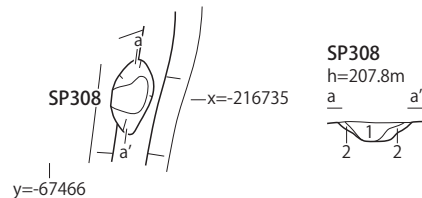
柱穴 SP201

- 1 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト, 木片を多く含む, 以下掘方
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト, 塊状の 10YR7/1 灰白色シルトを多く含む



SP307

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト, 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土を少し含む
- 2 10YR2/1 黒色シルト, 10YR7/3 にぶい黄橙色粘土を少し含む
- 3 10YR7/3 にぶい黄橙色粘土, 10YR2/1 黒色シルトを少し含む

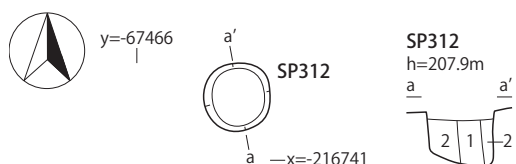


SP308

- 1 10YR6/1 褐灰色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を少し含む
- 2 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR6/1 褐灰色シルトを少し含む

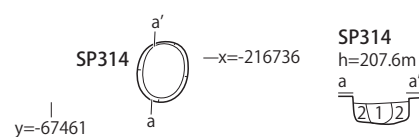


第 60 図 柱穴 SP184・195 ~ 197・201・307・308, ピット SP229



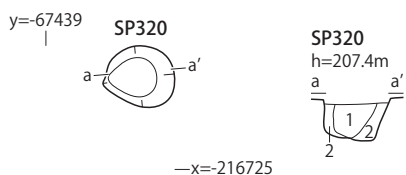
SP312

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト, 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土を少し含む, 柱痕
- 2 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土, 10YR2/2 黒褐色シルトを含む, 掘方



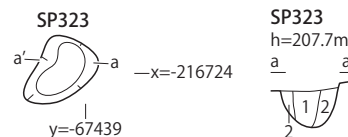
SP314

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR2/1 黒色シルトと 10YR7/3 にぶい黄橙色粘土を多く含む
- 2 10YR7/3 にぶい黄橙色粘土, 10YR3/1 黒褐色シルトと 10YR2/1 黒色シルトを少し含む



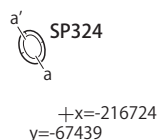
SP320

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を多く含む
- 2 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR3/1 黒褐色シルトを含む



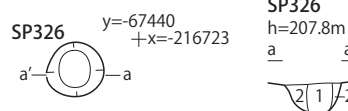
SP323

- 1 10YR2/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を少し含む, 柱痕
- 2 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR2/1 黒色シルトを多く含む, 掘方



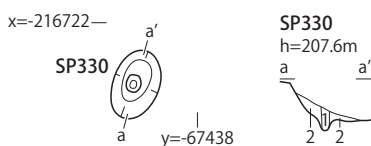
SP324

- 1 10YR2/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を少し含む, 柱痕
- 2 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR2/1 黒色シルトを多く含む, 掘方



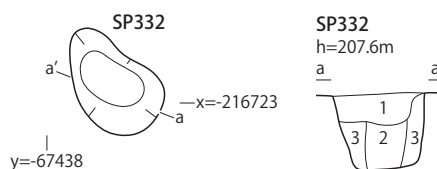
SP326

- 1 10YR2/1 黒色シルト, 10YR4/1 褐灰色シルトと 10YR8/3 浅黄橙色粘土を含む, 柱痕
- 2 10YR2/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を多く含む, 掘方



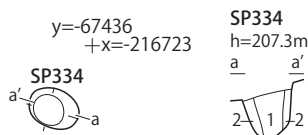
SP330

- 1 10YR2/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を少し含む, 柱痕
- 2 10YR2/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を多く含む, 掘方



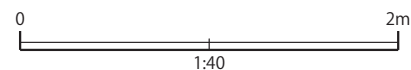
SP332

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を少し含む, 抜き取り穴
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を多く含む, 柱痕
- 3 10YR8/3 浅黄橙色粘土, 10YR3/1 黒褐色シルトを多く含む

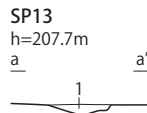
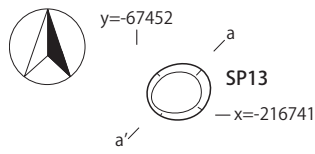


SP334

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を少し含む, 柱痕
- 2 10YR2/1 黒色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を多く含む, 掘方

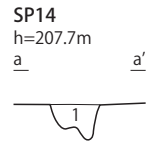
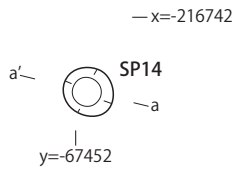


第 61 図 柱穴 SP312・314・320・323・324・326・330・332・334



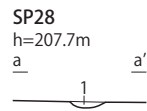
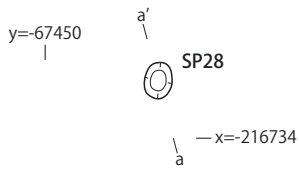
ピット SP13

1 10YR4/1 褐灰色シルト,塊状の 10YR7/3 にぶい黄橙色シルトを多く含む



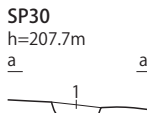
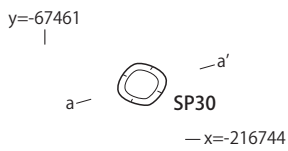
ピット SP14

1 10YR3/1 黒褐色シルト,塊状の 10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルトを多く含む



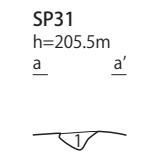
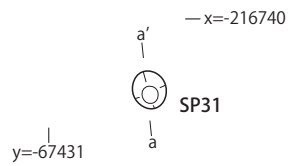
ピット SP28

1 10YR5/1 褐灰色シルト,塊状の 10YR8/2 灰白色シルトを少し含む



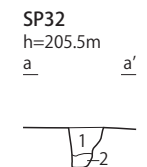
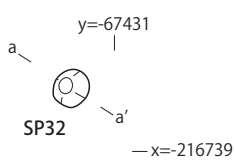
ピット SP30

1 10YR1.7/1 黒色シルト,塊状の 10YR7/1 灰白色シルトを含む



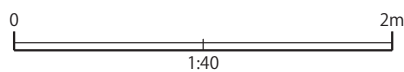
ピット SP31

1 10YR2/1 黒色シルト,炭粒を含む, 10YR4/2 灰黄褐色シルトを含む

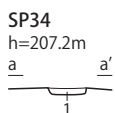
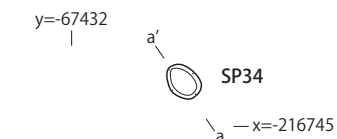


ピット SP32

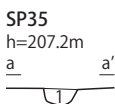
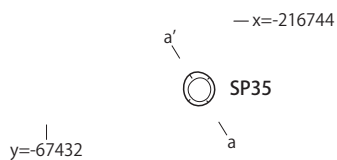
1 10YR3/3 暗黒色シルト,炭粒を少し含む
2 10YR3/1 黒褐色シルト,炭粒を含む



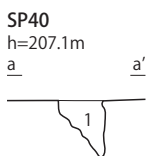
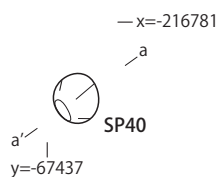
第 62 図 ピット SP13・14・28・30～32



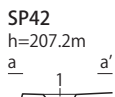
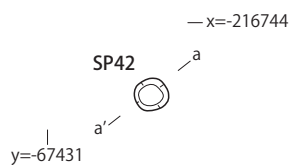
ピット SP34
1 10YR2/1 黒色シルト



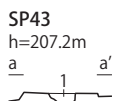
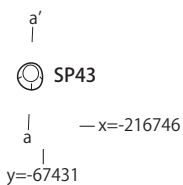
ピット SP35
1 10YR3/1 黒褐色シルト



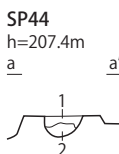
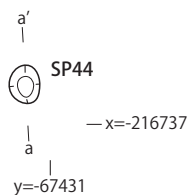
ピット SP40
1 10YR3/1 黒褐色シルト, 炭を含む



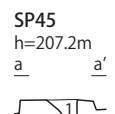
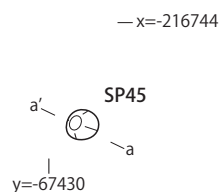
ピット SP42
1 10YR2/1 黒色シルト, 塊状の 10YR7/2 にぶい黄橙色シルトを少し含む



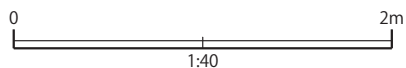
ピット SP43
1 10YR5/1 褐灰色シルト



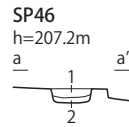
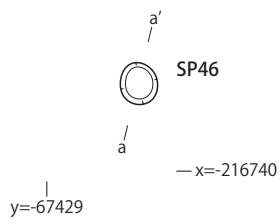
ピット SP44
1 10YR2/1 黒色シルト, 炭を少し含む



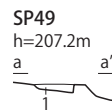
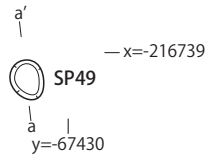
ピット SP45
1 10YR3/1 黒褐色シルト



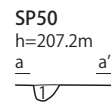
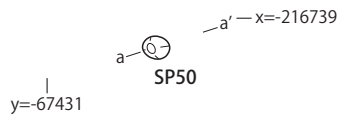
第 63 図 ピット SP34・35・40・42～45



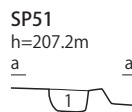
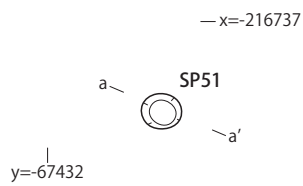
ピット SP46
 1 10YR3/1 黒褐色シルト
 2 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト, 10YR3/1 黒褐色シルト土を含む



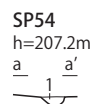
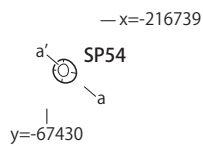
ピット SP49
 1 10YR3/1 黒褐色シルト



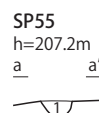
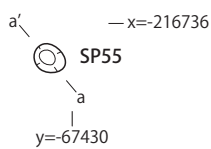
ピット SP50
 1 10YR3/1 黒褐色シルト



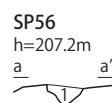
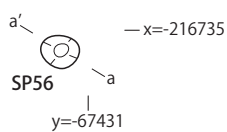
ピット SP51
 1 10YR3/1 黒褐色シルト



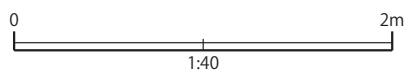
ピット SP54
 1 10YR2/1 黒色シルト



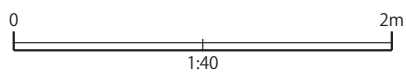
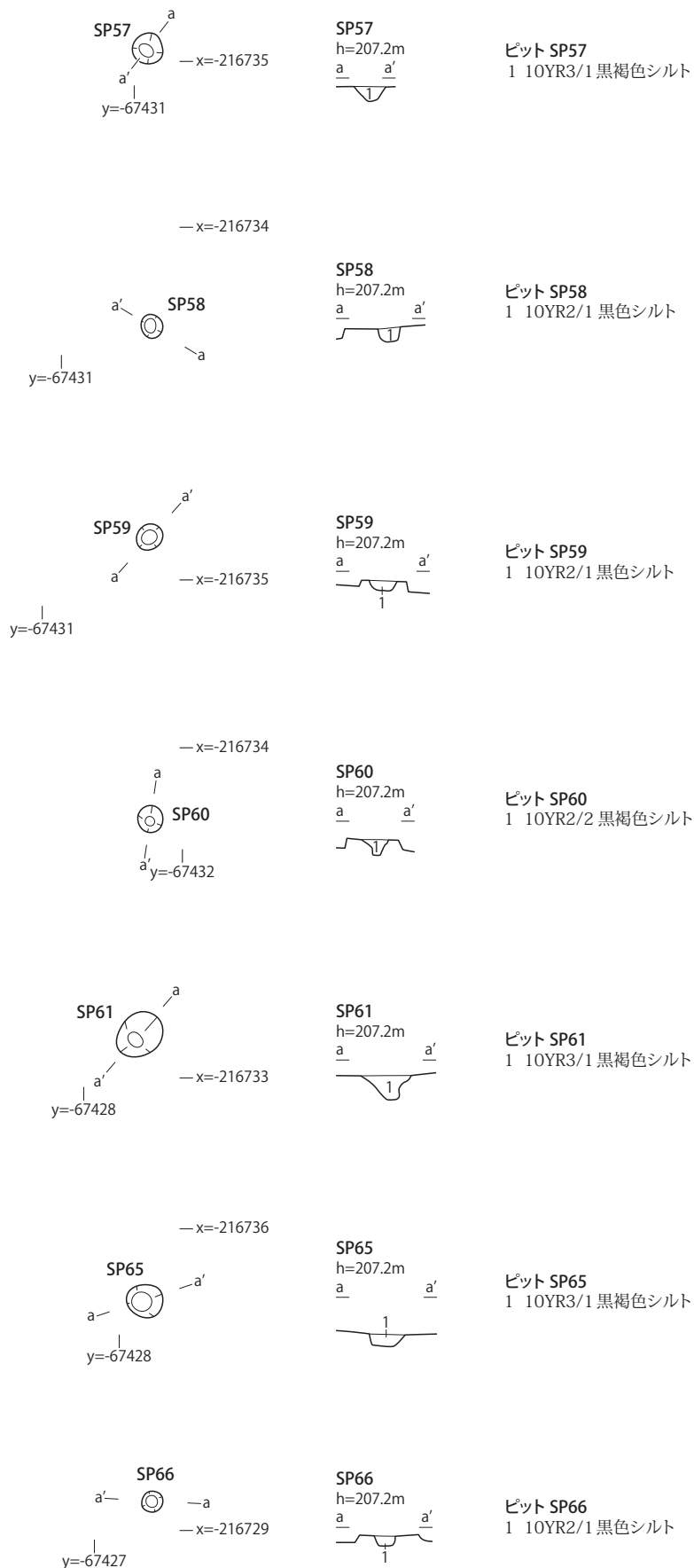
ピット SP55
 1 10YR2/1 黒色シルト



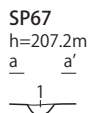
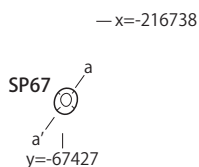
ピット SP56
 1 10YR2/1 黒色シルト



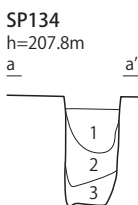
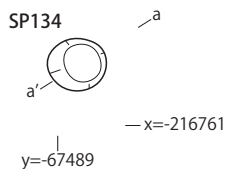
第 64 図 ピット SP46・49～51・54～56



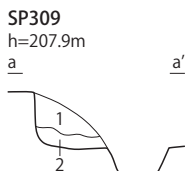
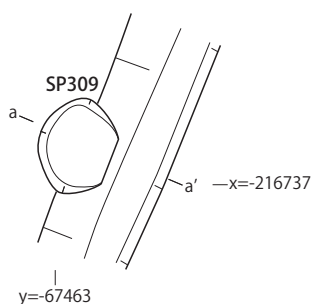
第 65 図 ピット SP57 ~ 61・65・66



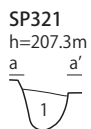
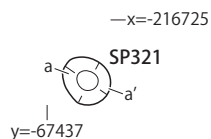
ピット SP67
1 10YR3/1 黒褐色シルト



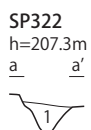
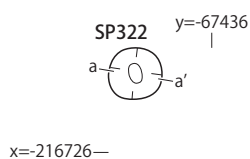
ピット SP134
1 10YR3/1 黒褐色シルト, 塊状の 10YR6/2 灰黄褐色シルトを多く含む
2 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト
3 10YR4/1 褐灰色粘質シルト, 炭を含む



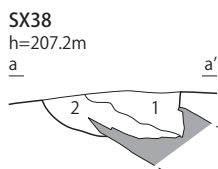
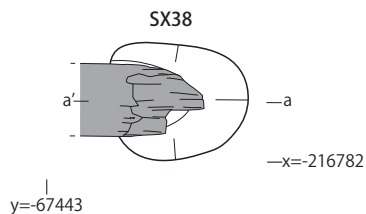
SP309
1 10YR2/1 黒色シルト, 10YR8/2 灰白色粘土を多く含む
2 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土, 10YR2/2 黒褐色シルトを多く含む



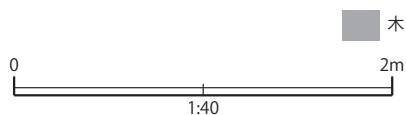
SP321
1 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を少し含む



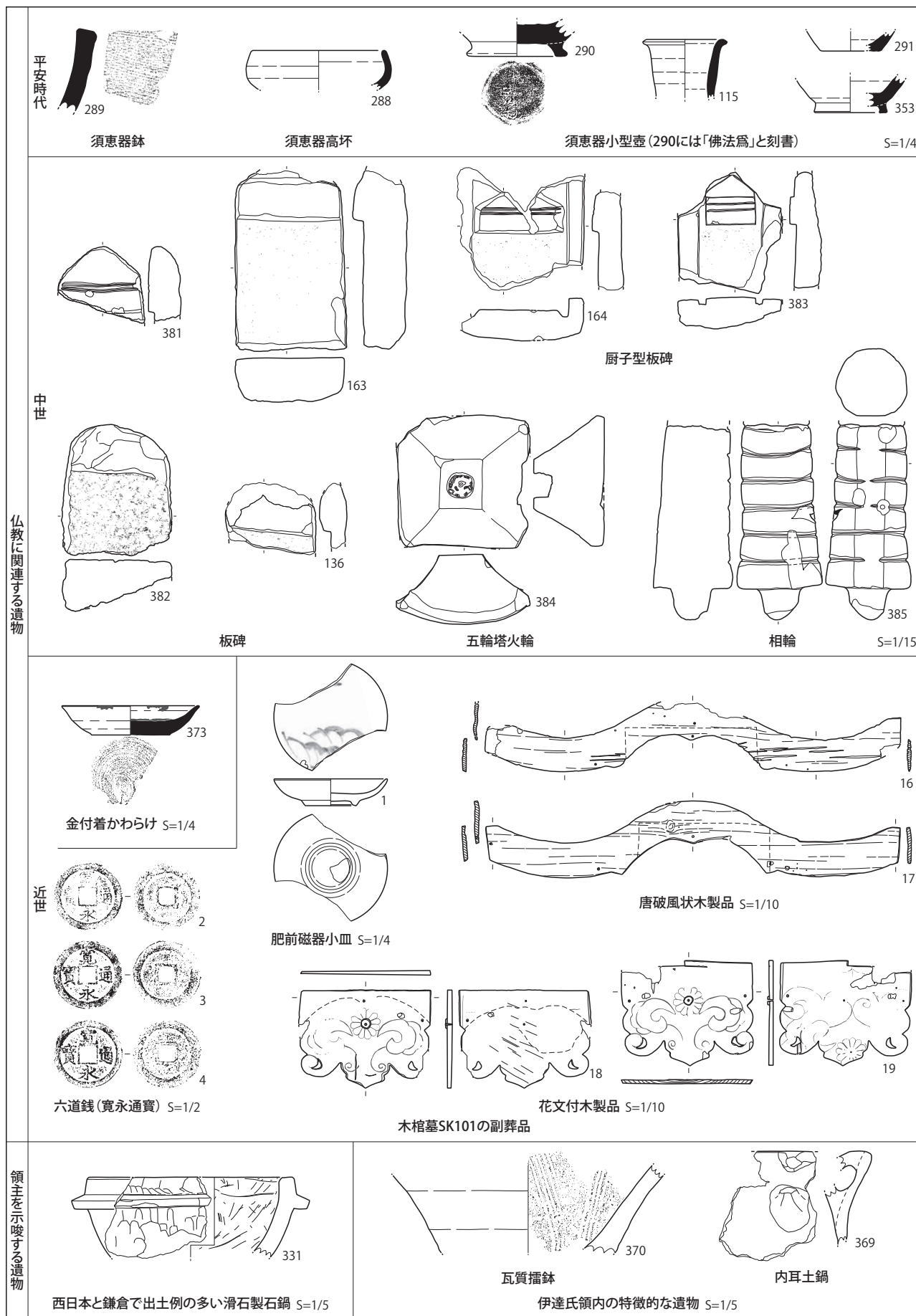
SP322
1 10YR3/1 黒褐色シルト, 10YR8/3 浅黄橙色粘土を多く含む



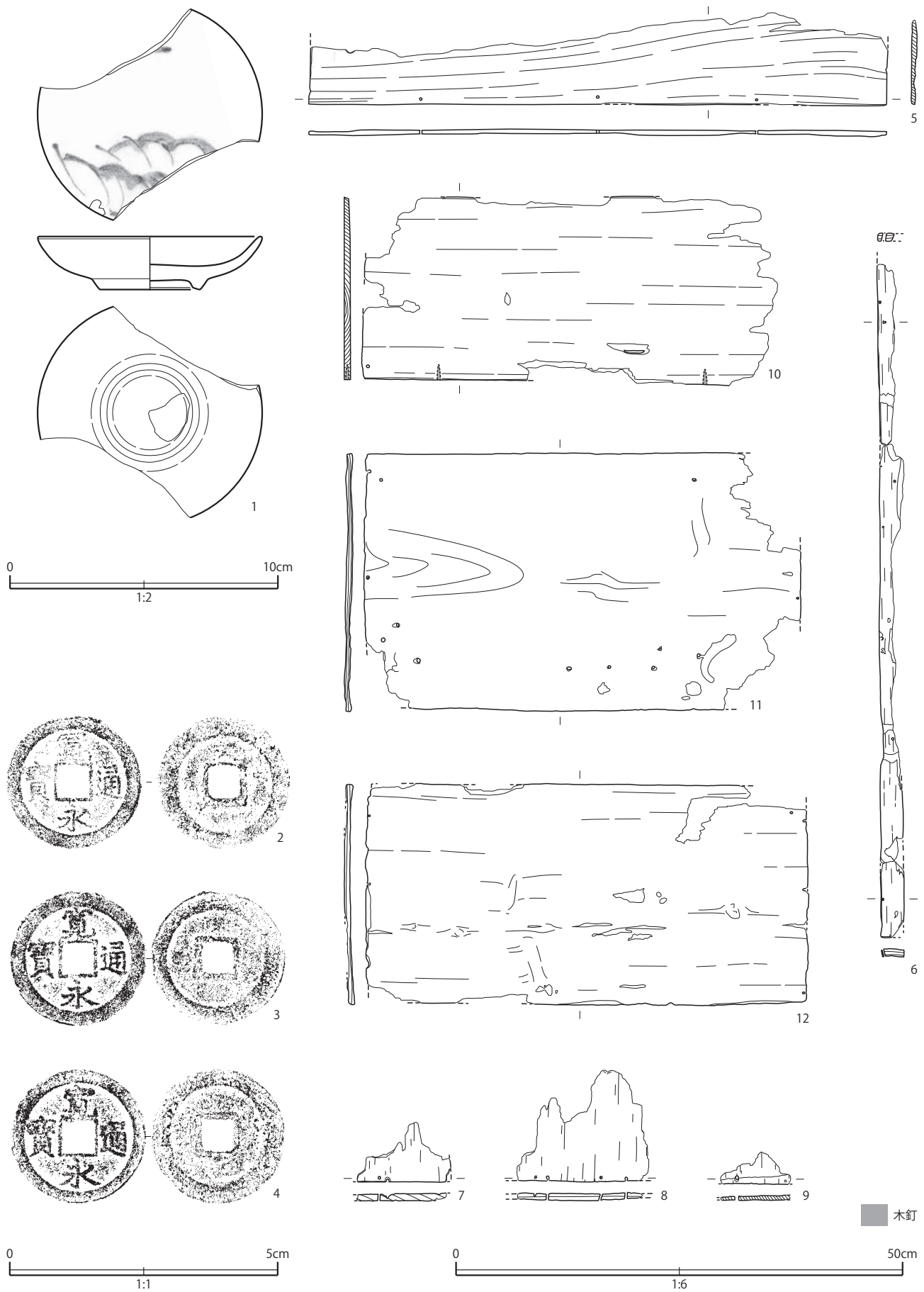
埋没樹 SX38
1 10YR5/1 褐灰色シルト, 10YR3/1 黒褐色シルトを多く含む
2 10YR4/1 褐灰色シルト



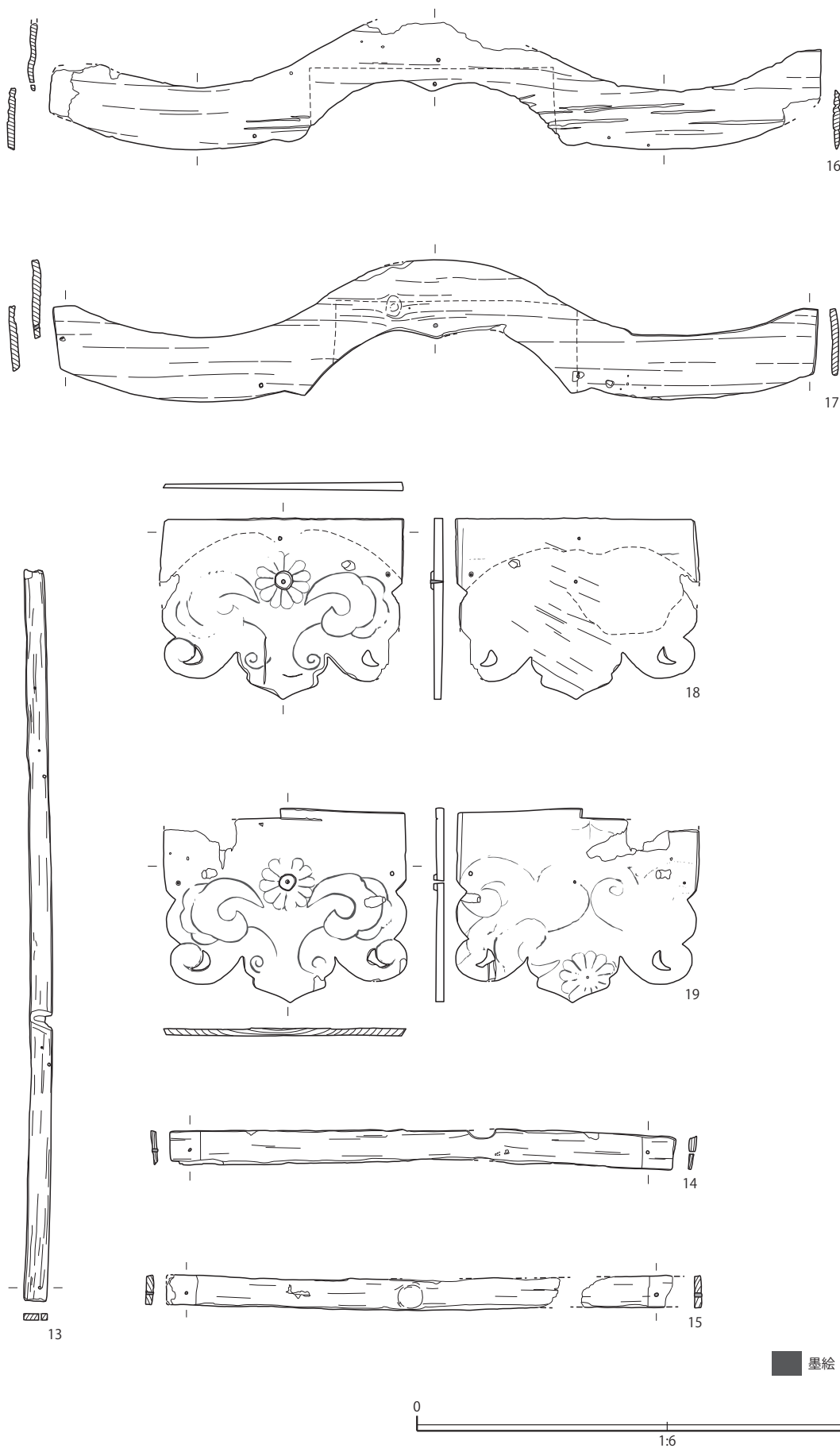
第 66 図 ピット SP67・134・309・321・322, 埋没樹 SX38



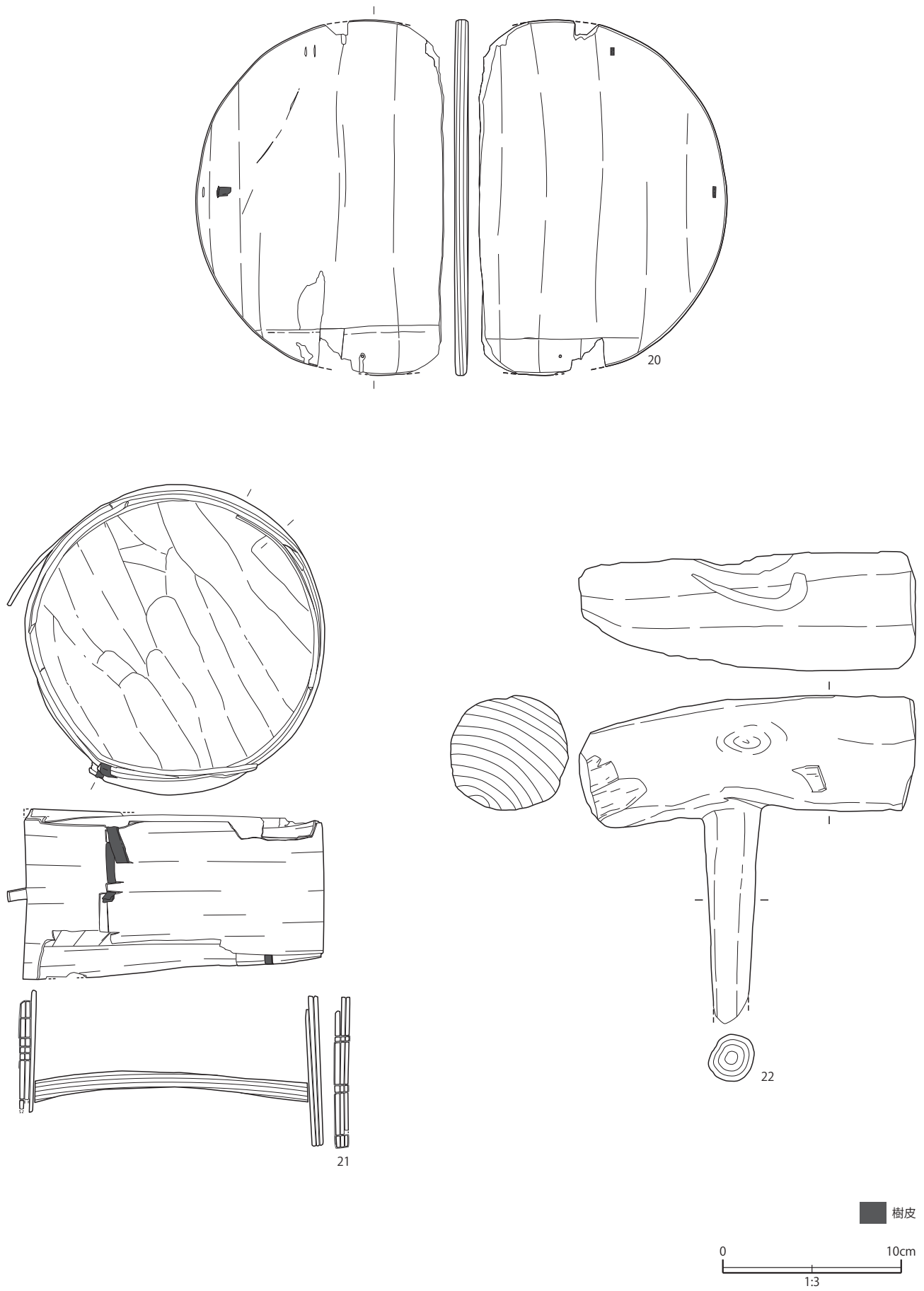
第67図 仏教に関する遺物および領主を示唆する遺物の集成図



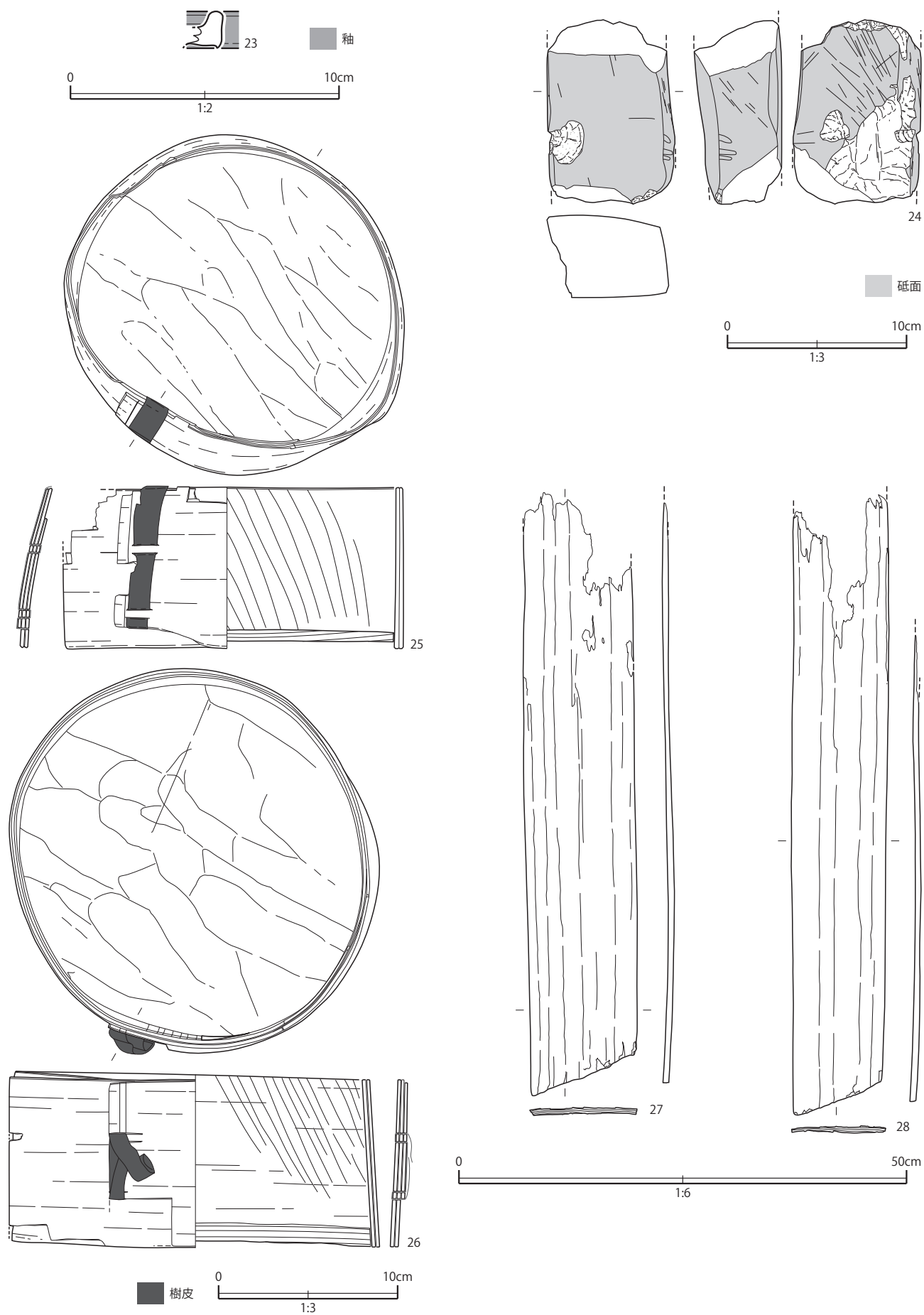
第 68 図 木棺墓 SK101 出土の肥前磁器小皿 (1), 寛永通寶 (2~4), 木棺側板 (5~9), 木棺底板 (10~12)



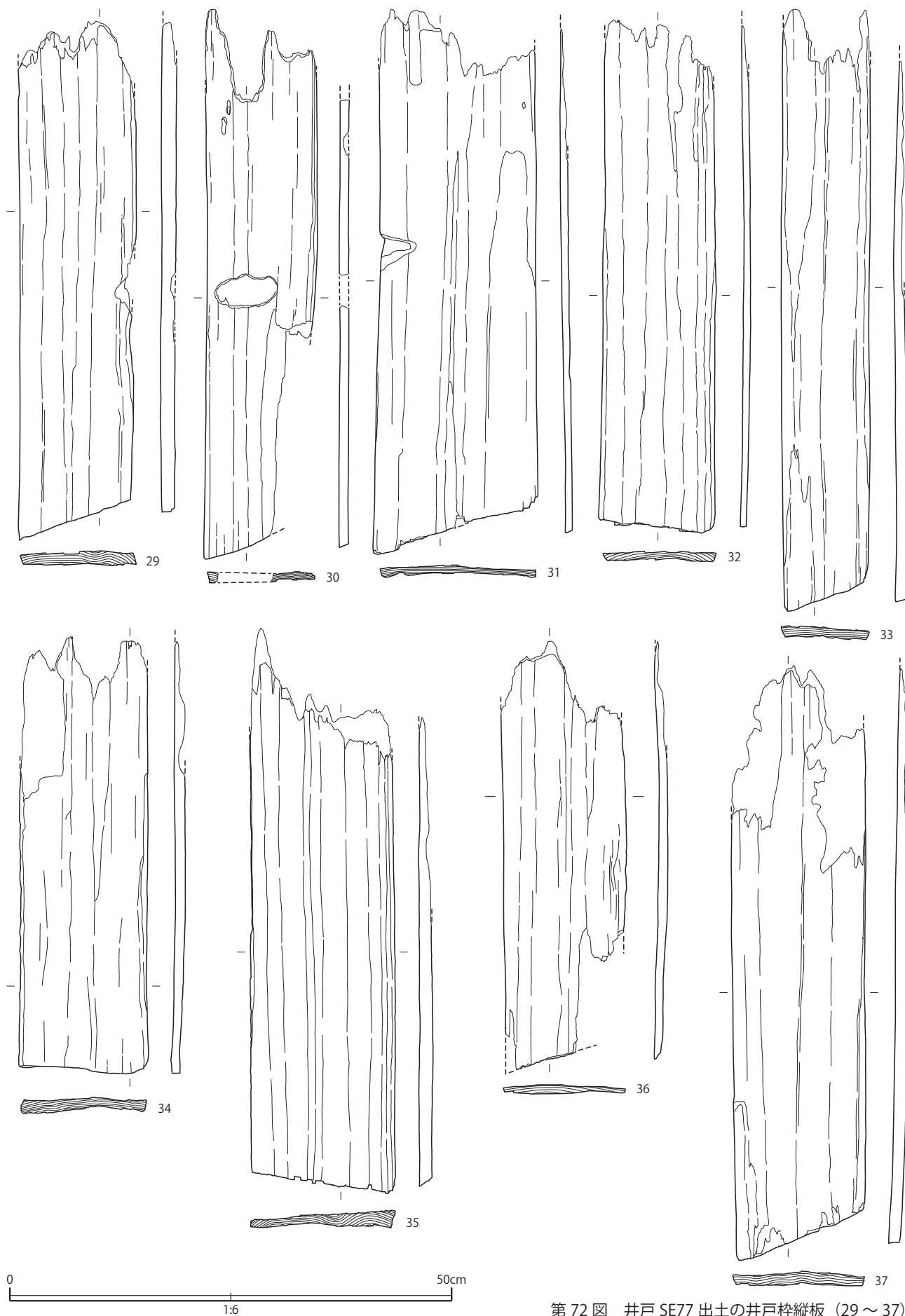
第 69 図 木棺墓 SK101 出土の木棺下枠 (13～15), 唐破風状木製品 (16・17), 花文付木製品 (18・19)



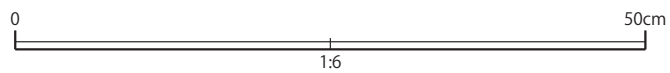
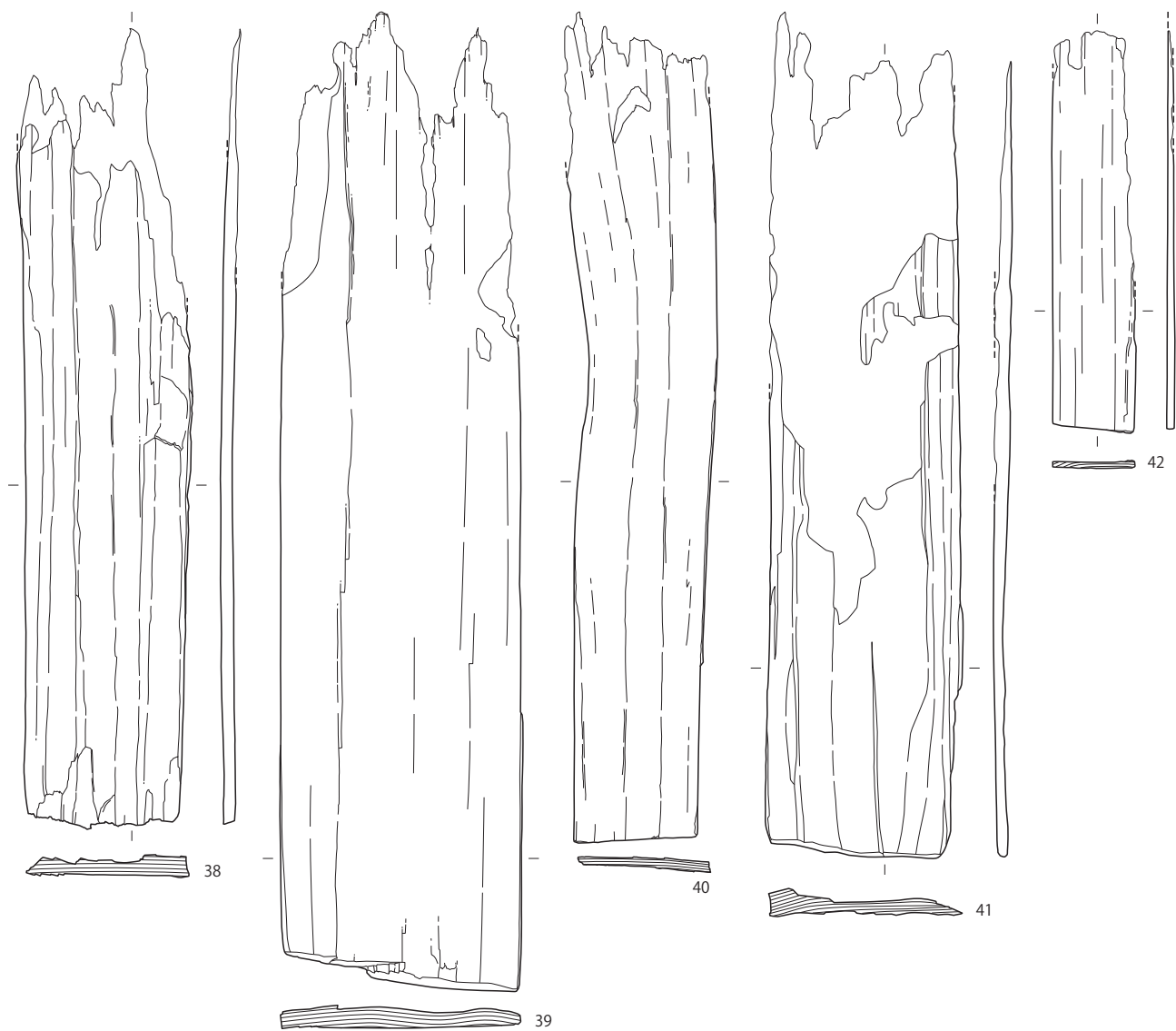
第70図 井戸SE75出土の曲物(20・21), 木槌(22)



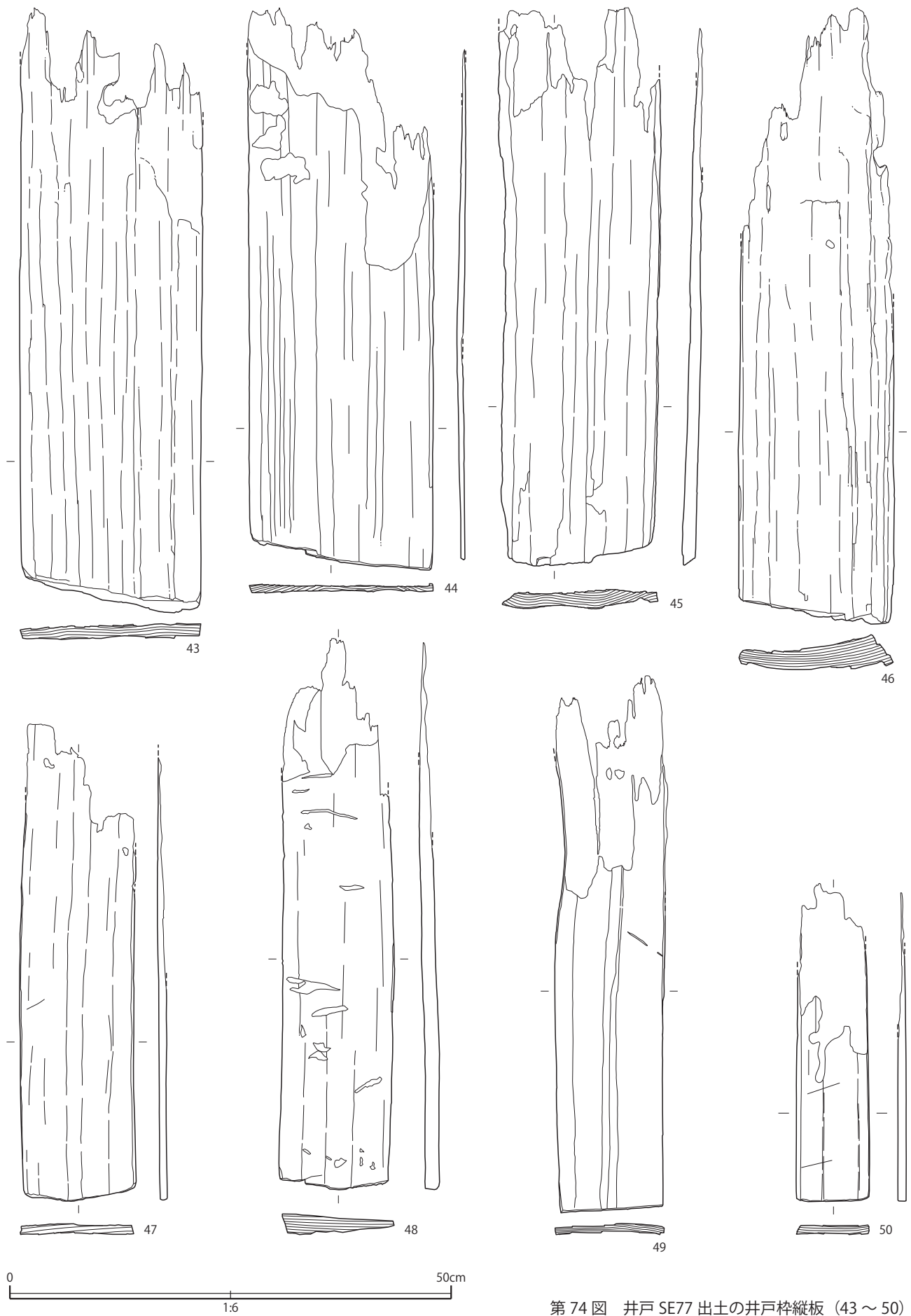
第71図 井戸SE77出土の陶器甕(23), 砥石(24), 曲物(25・26), 井戸枠縦板(27・28)



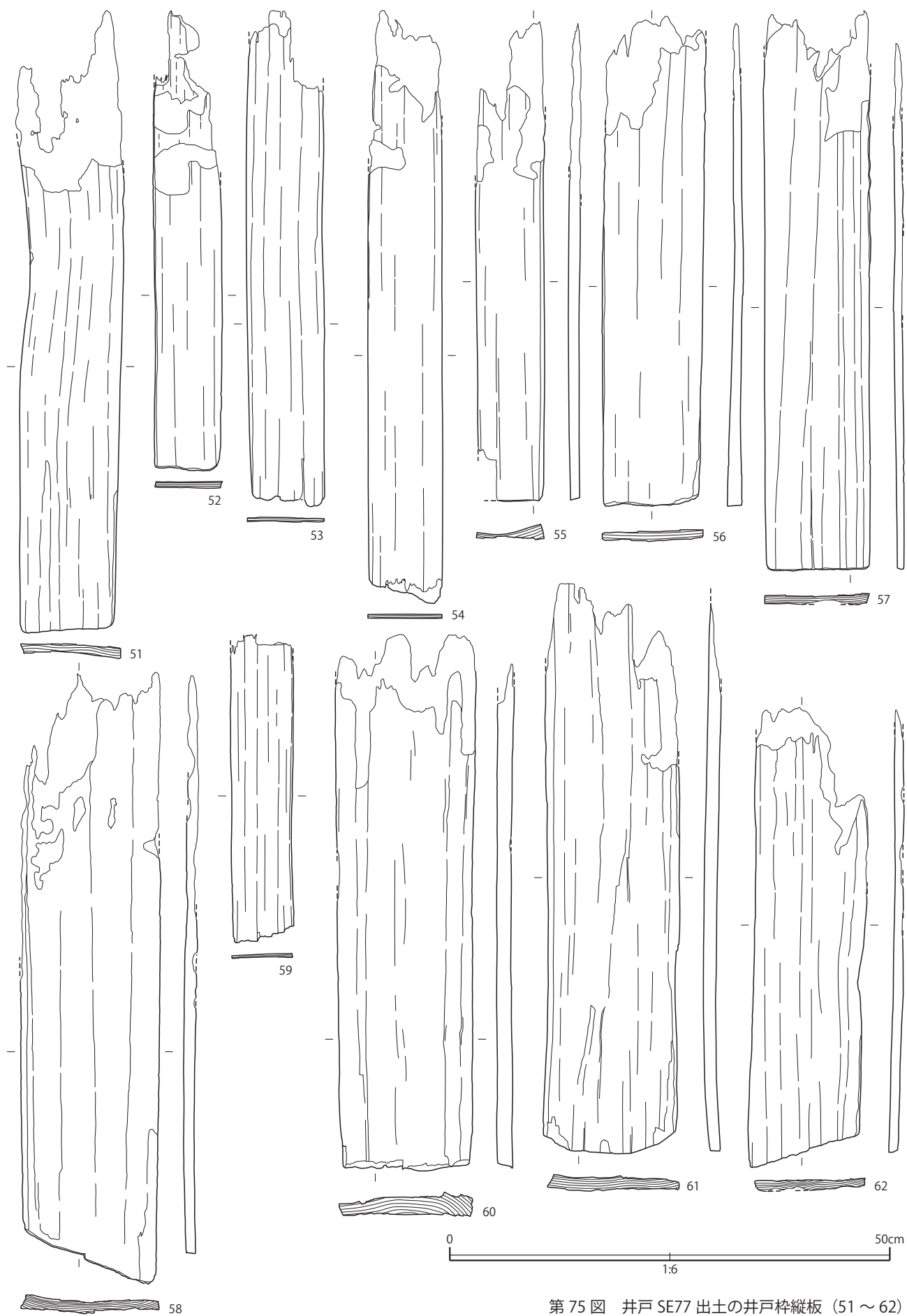
第 72 図 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 (29～37)



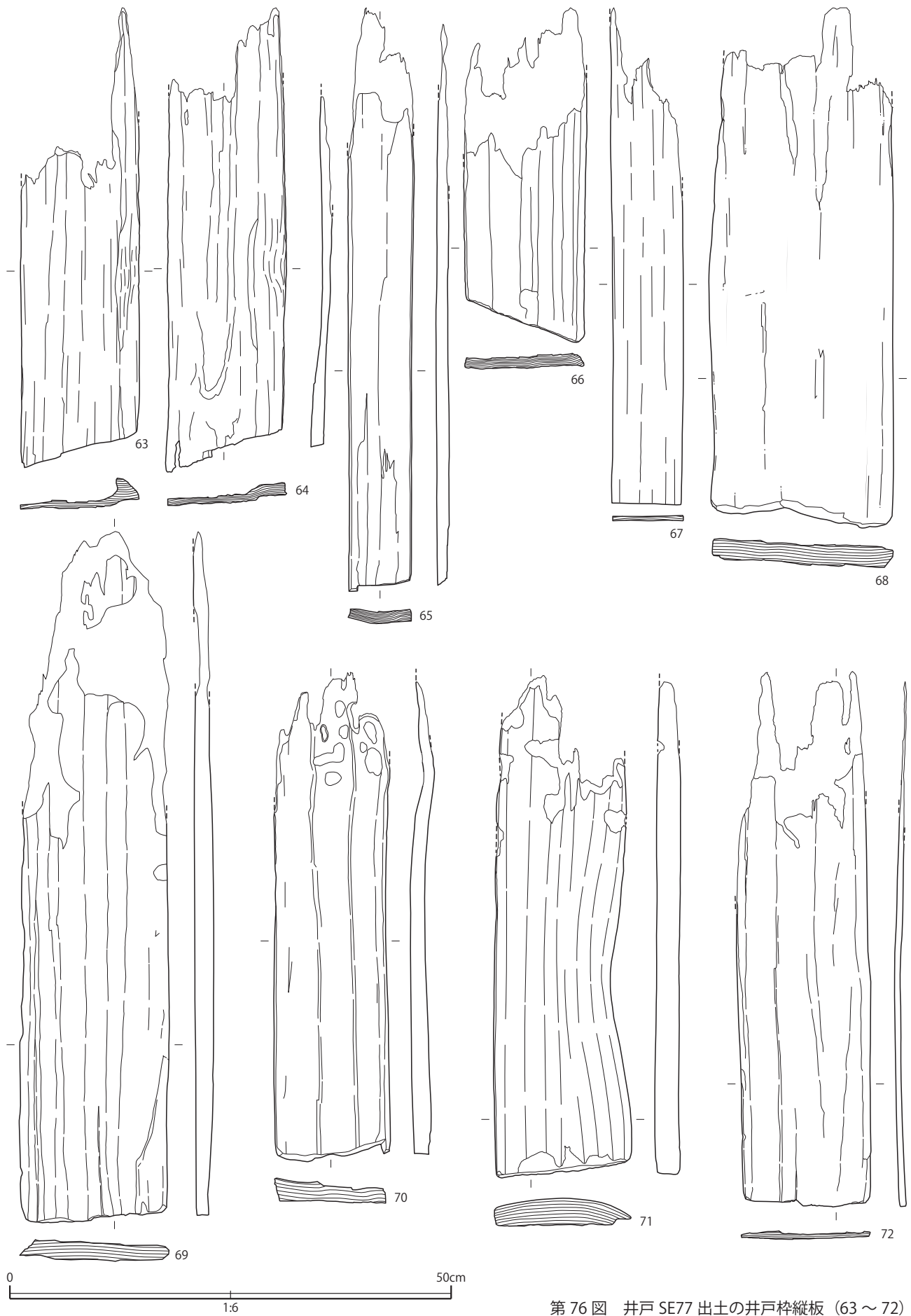
第73図 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 (38～42)



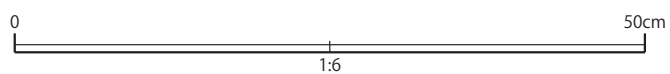
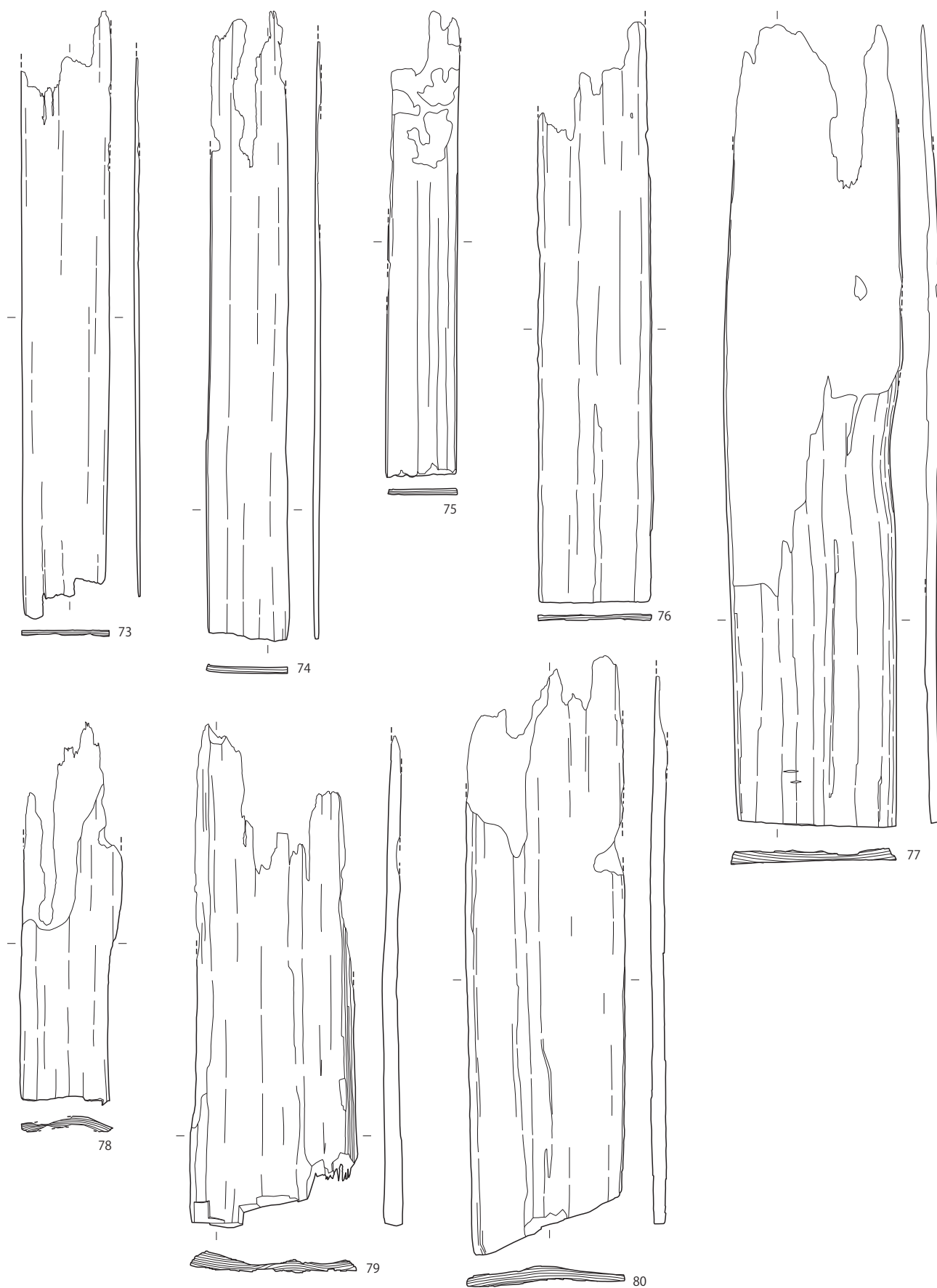
第74図 井戸SE77出土の井戸枠縦板(43～50)



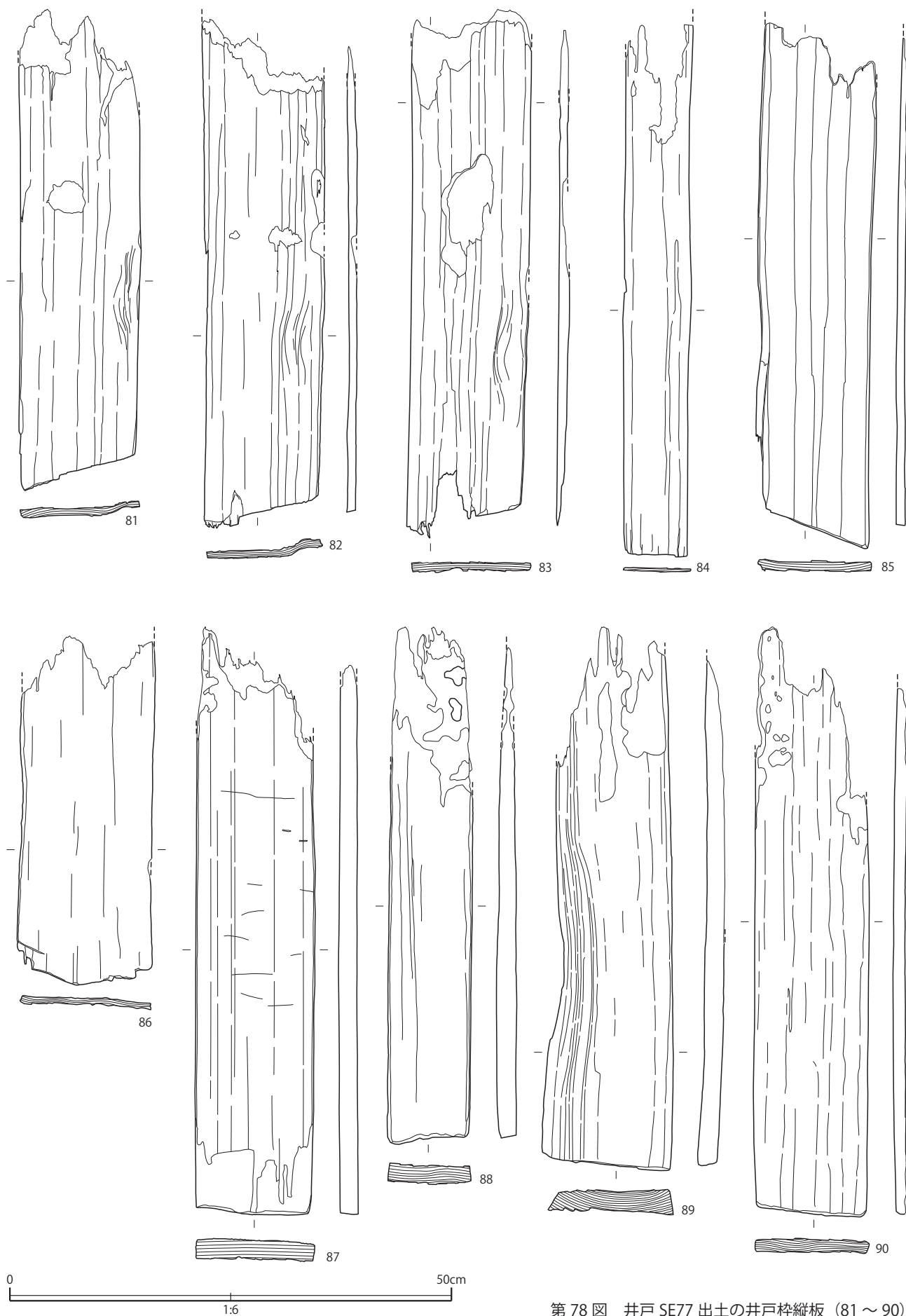
第75図 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 (51～62)



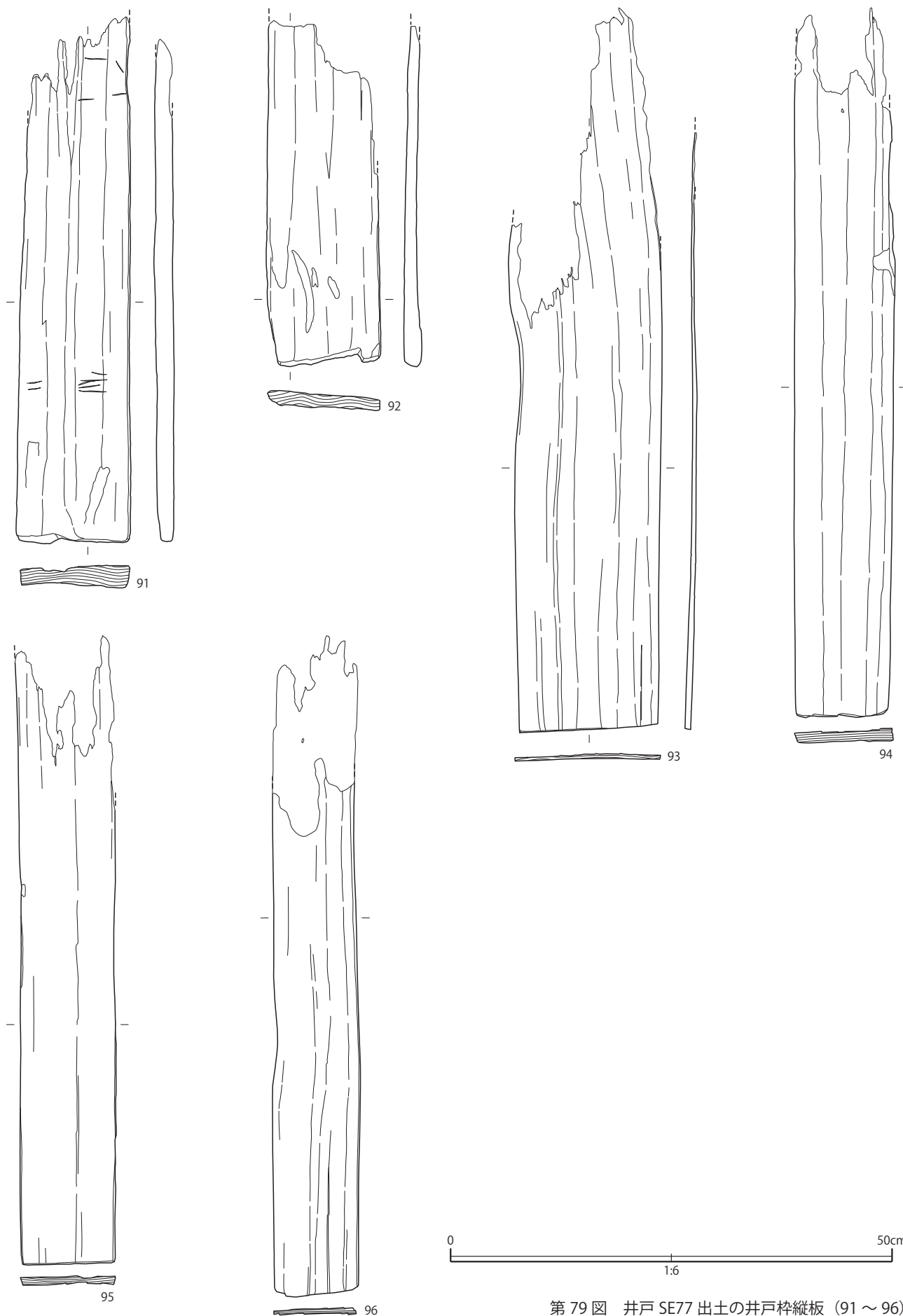
第76図 井戸SE77出土の井戸枠縦板(63~72)



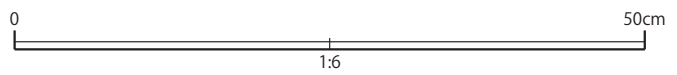
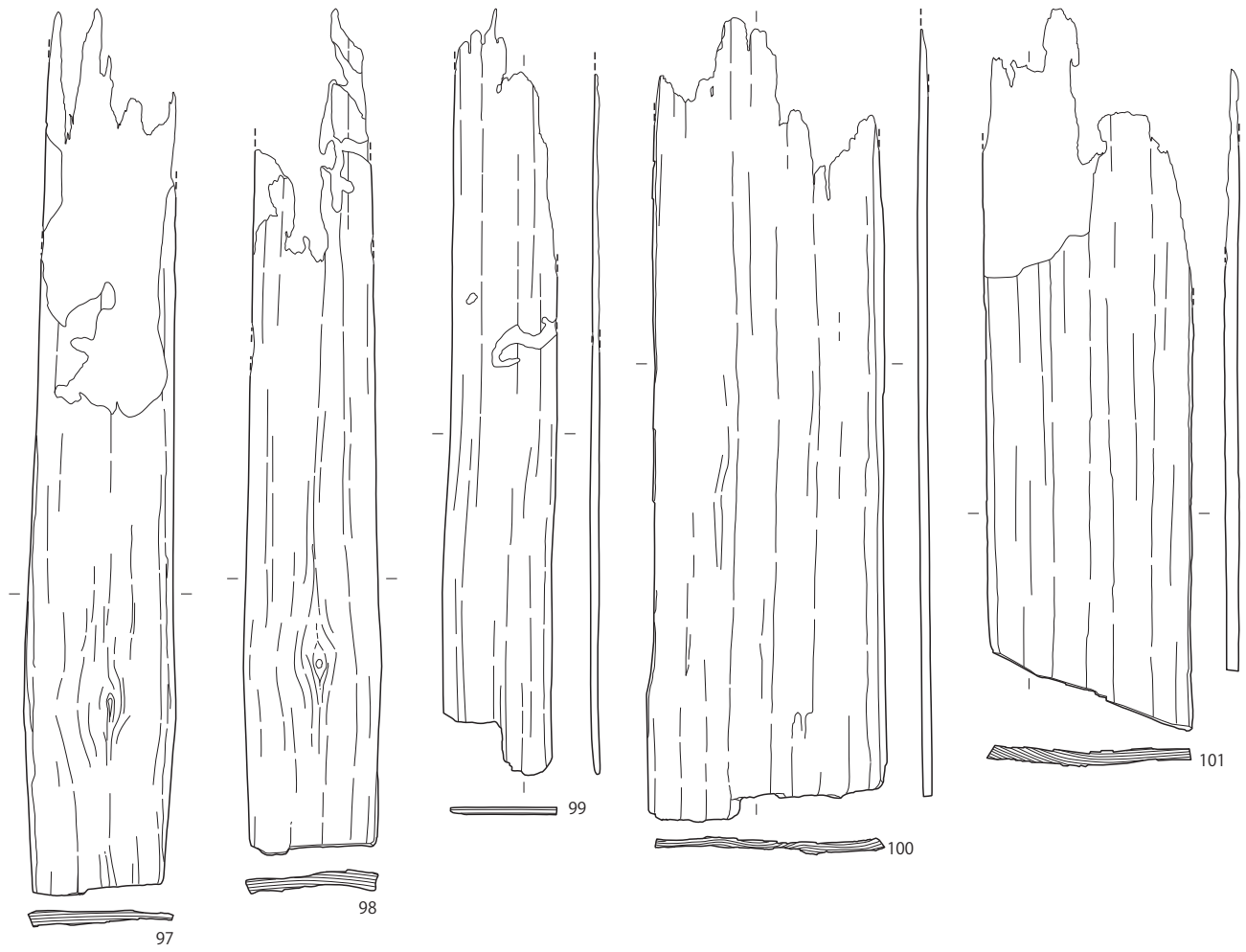
第 77 図 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 (73 ~ 80)



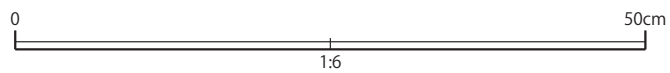
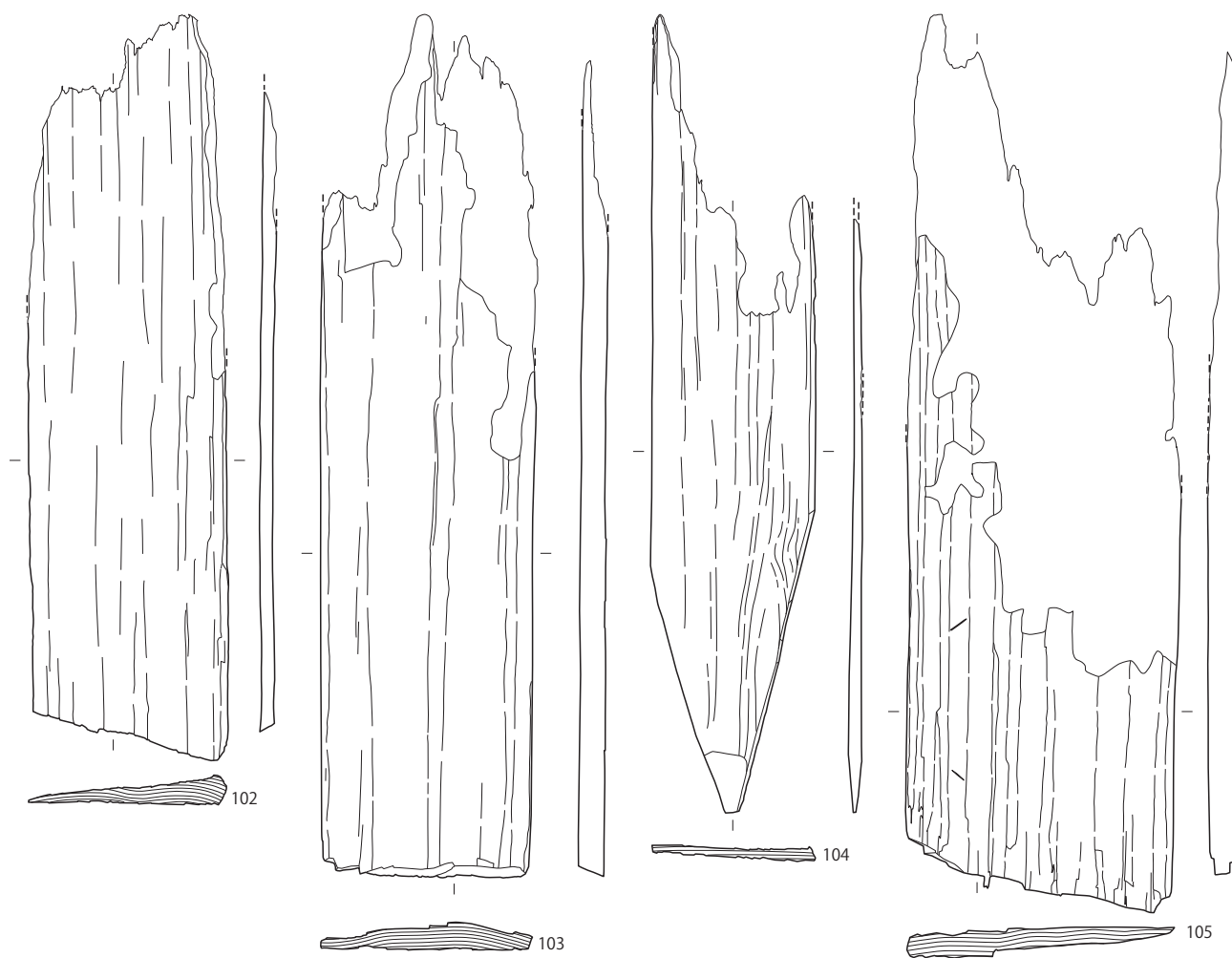
第 78 図 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 (81 ~ 90)



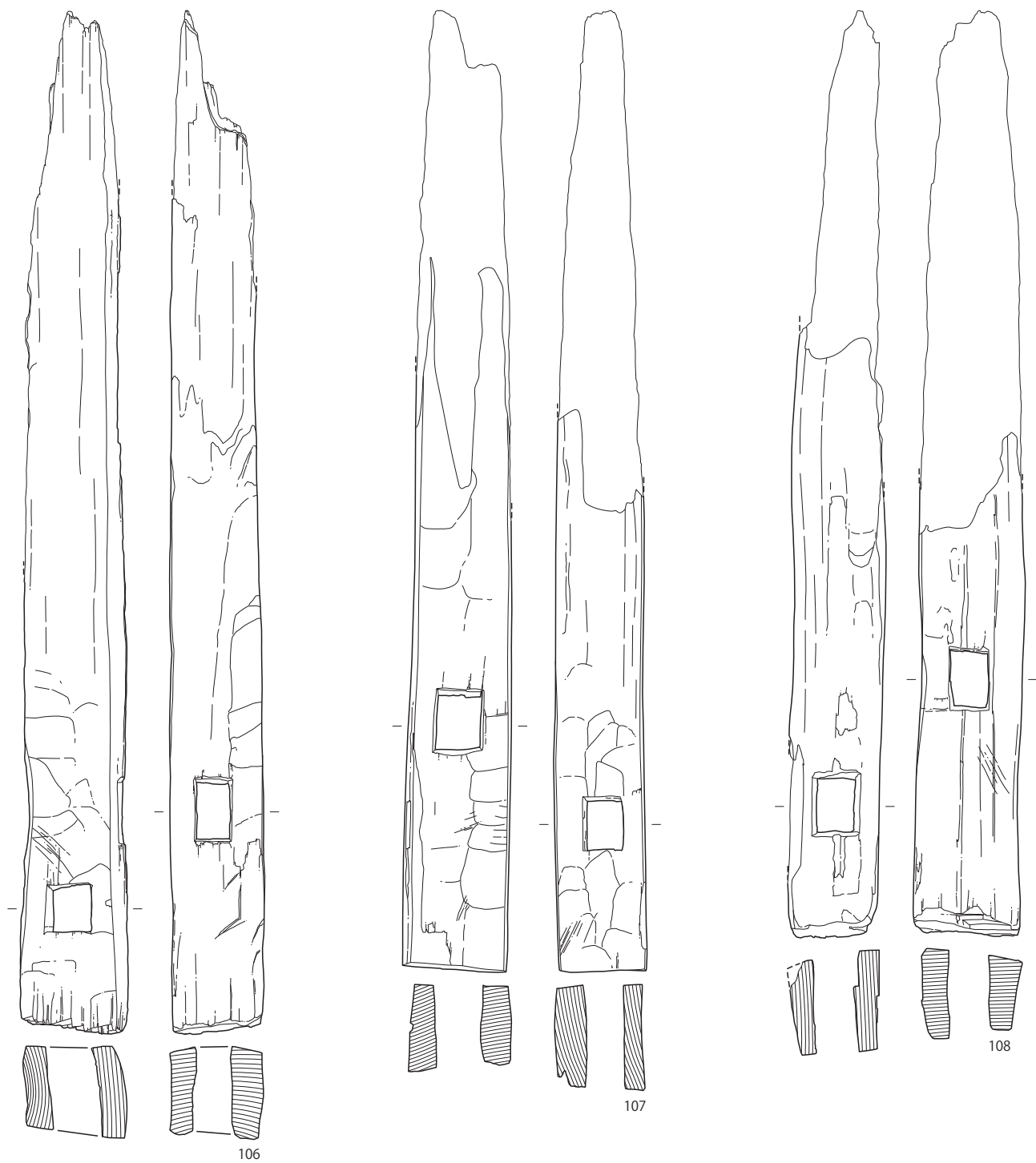
第 79 図 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 (91 ~ 96)



第 80 図 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 (97 ~ 101)

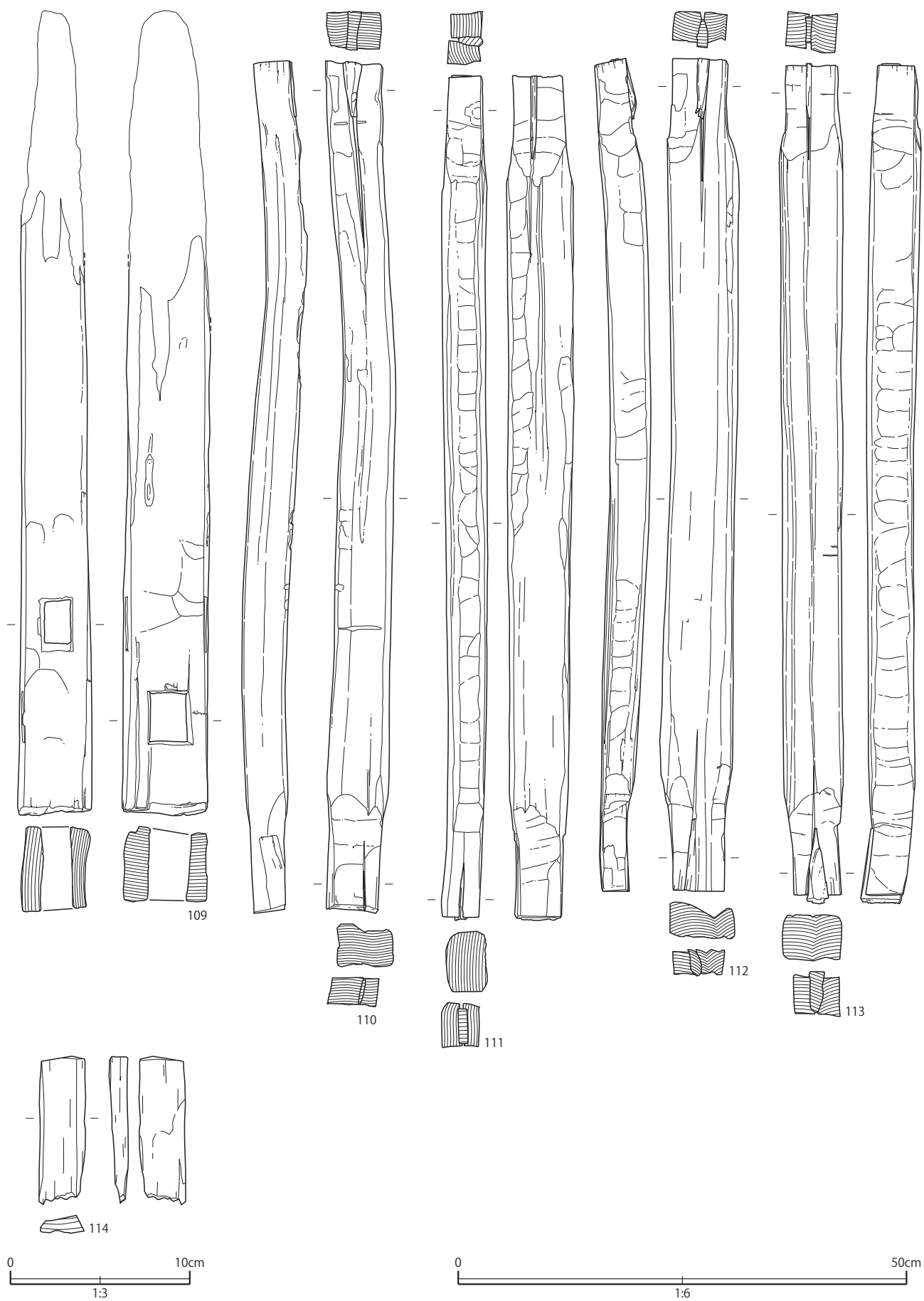


第 81 図 井戸 SE77 出土の井戸枠縦板 (102 ~ 105)

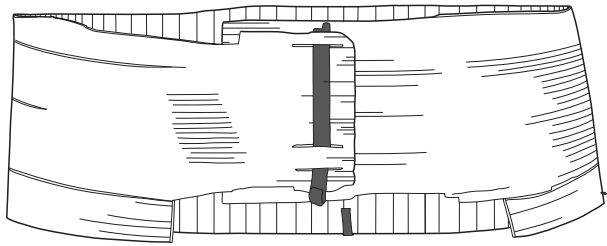
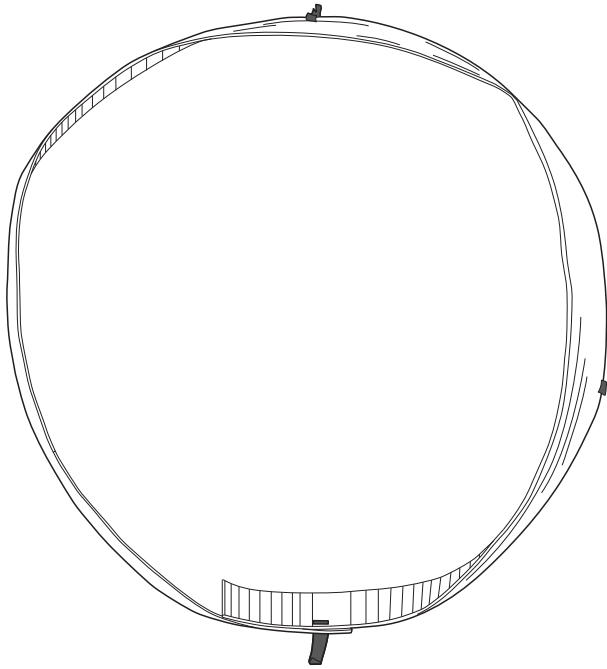
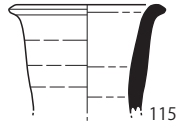


0 50cm
1:6

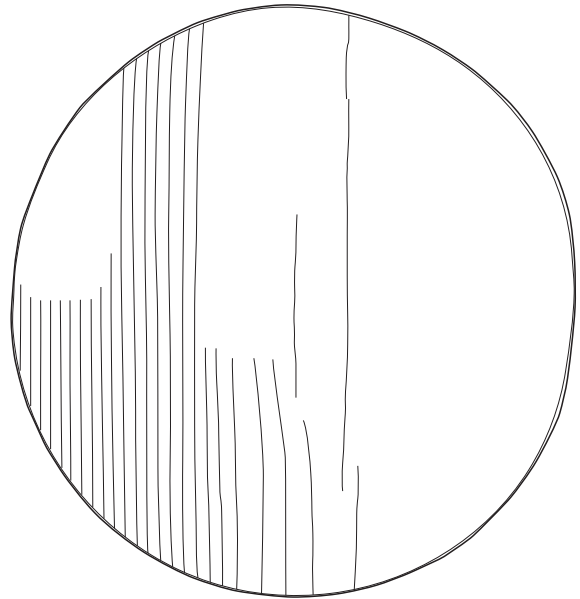
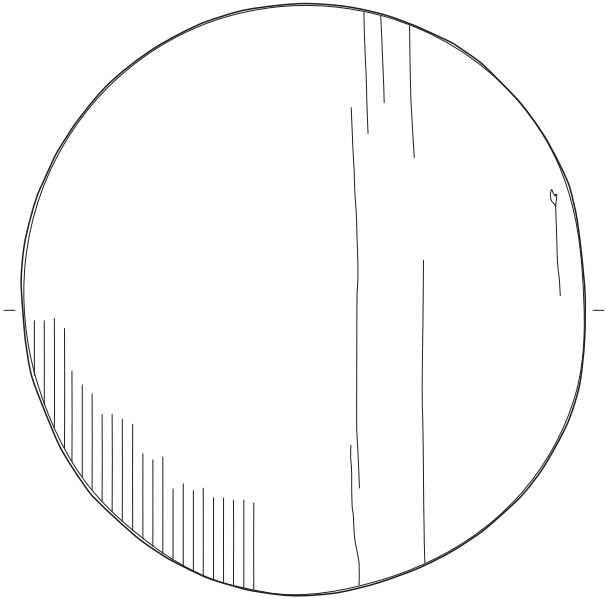
第 82 図 井戸 SE77 出土の井戸枠隅柱 (106 ~ 108)



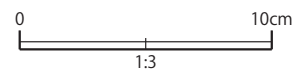
第 83 図 井戸 SE77 出土の井戸枠隅柱 (109), 横棧 (110 ~ 113), くさび (114)



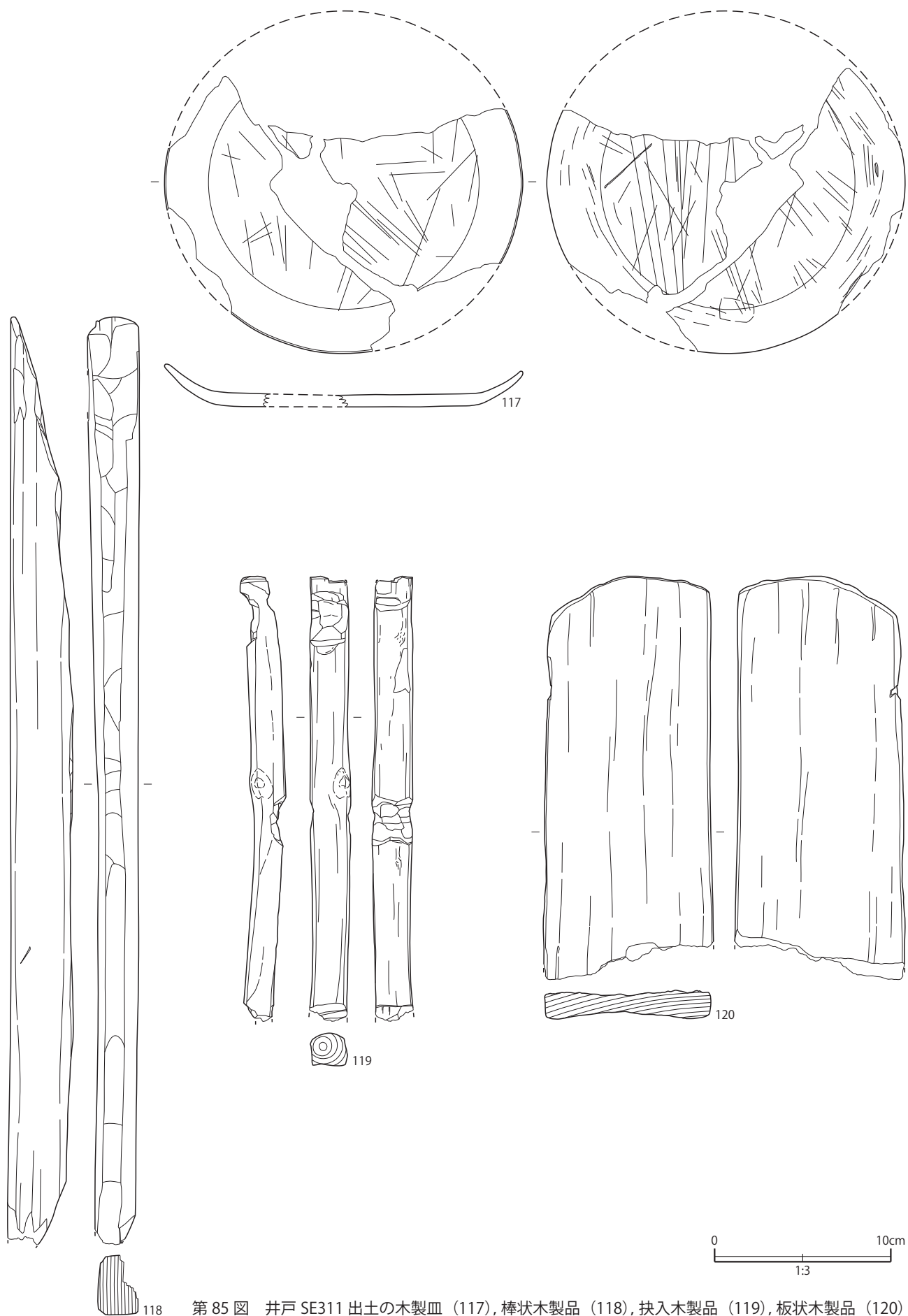
116 (側板)



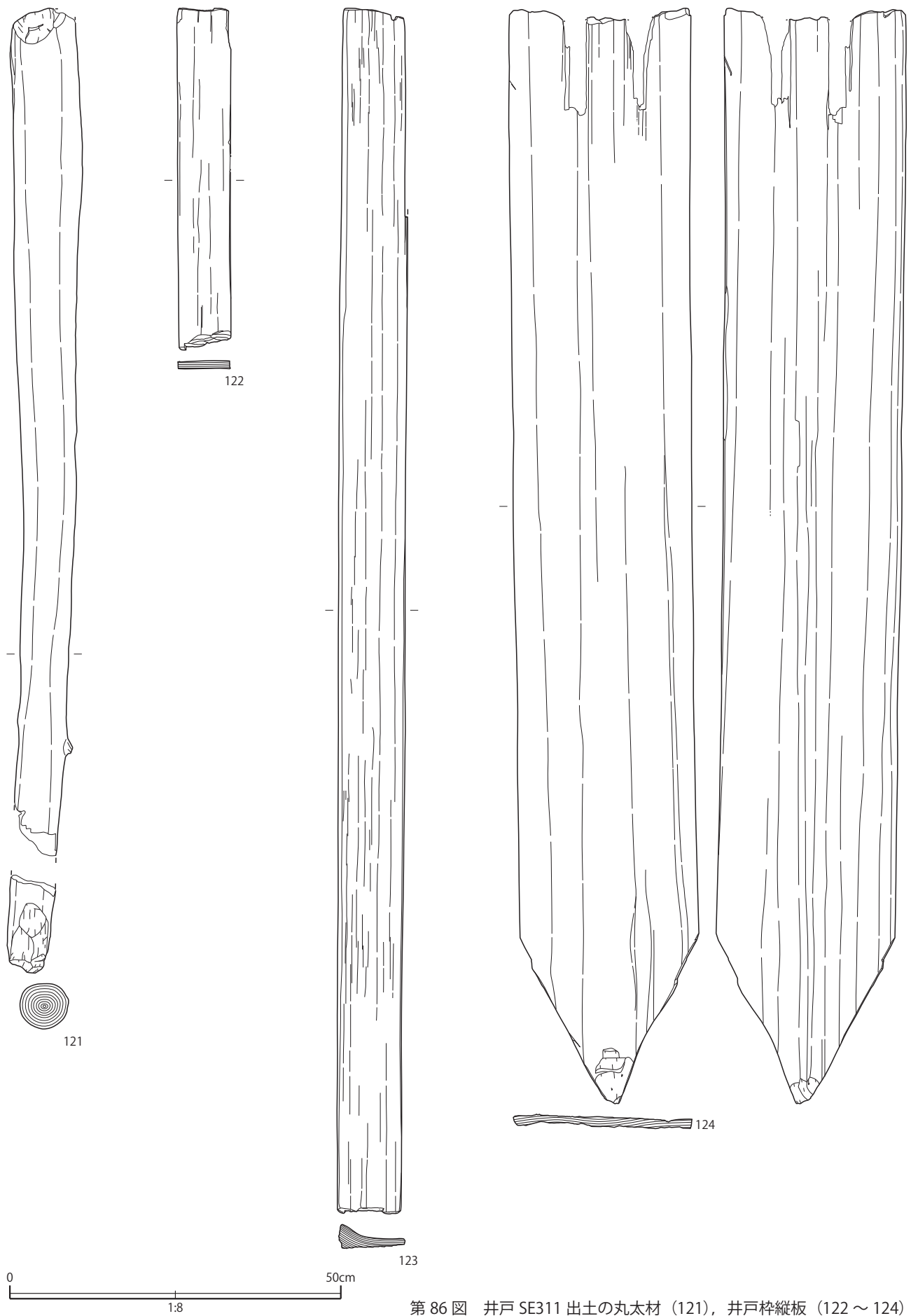
116 (底板)



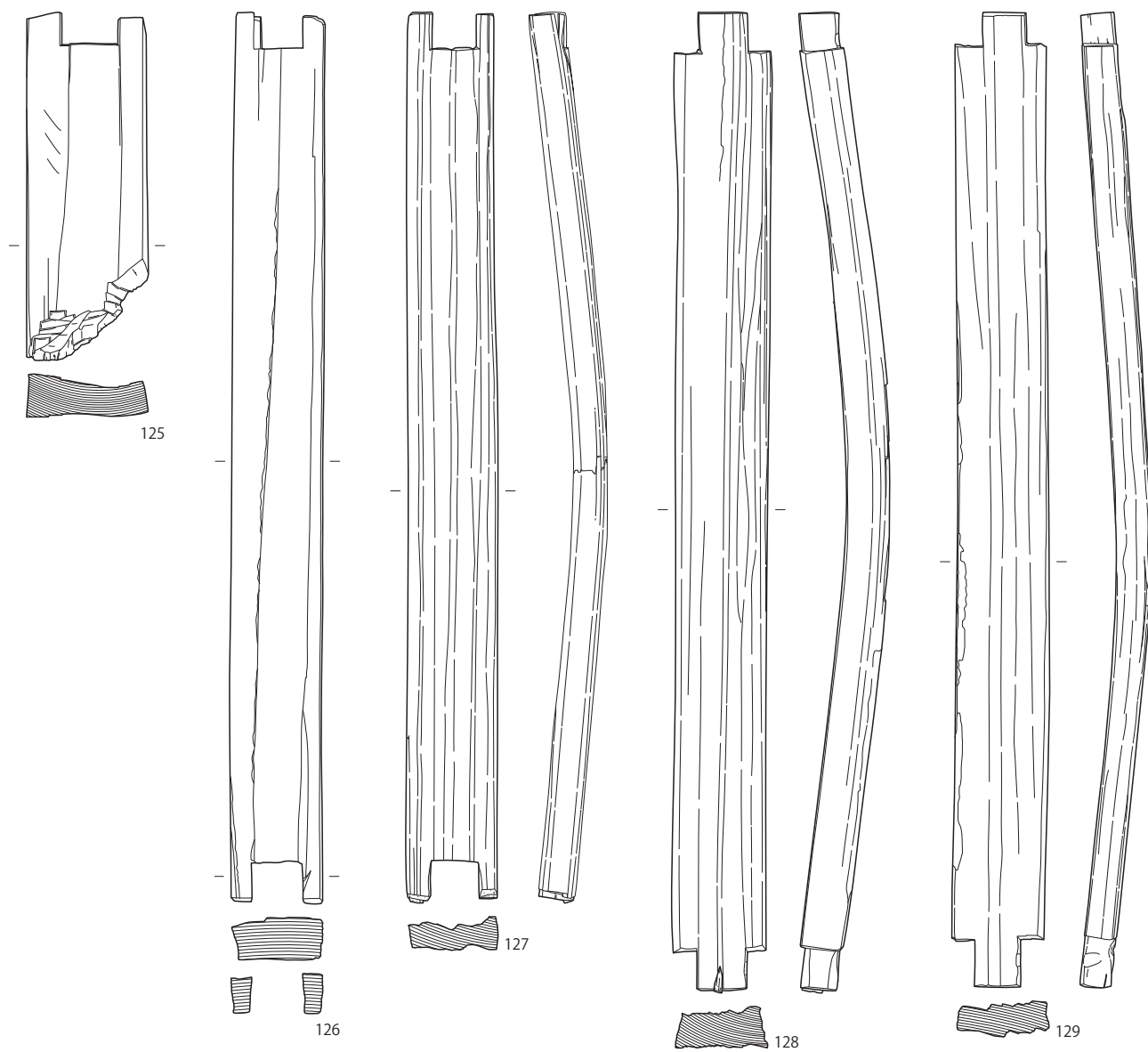
第 84 図 井戸 SE311 出土の須恵器小型壺 (115), 曲物 (116)



第 85 図 井戸 SE311 出土の木製皿 (117), 棒状木製品 (118), 挟入木製品 (119), 板状木製品 (120)



第86図 井戸SE311出土の丸太材(121), 井戸枠縦板(122~124)

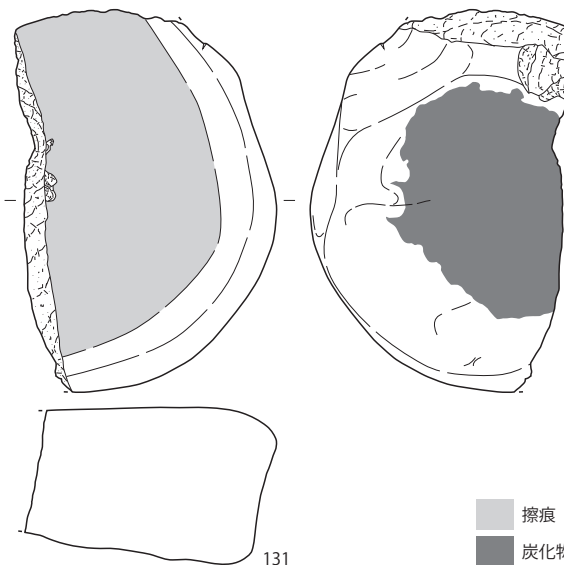


第 87 図 井戸 SE311 出土の井戸枠横棧 (125 ~ 129)

SE6



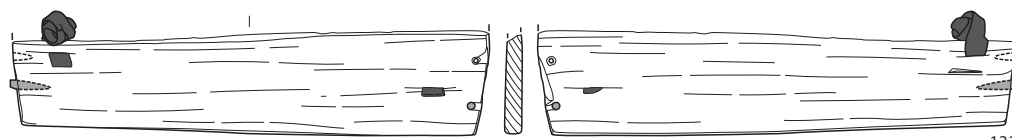
130



131

■ 擦痕
■ 炭化物

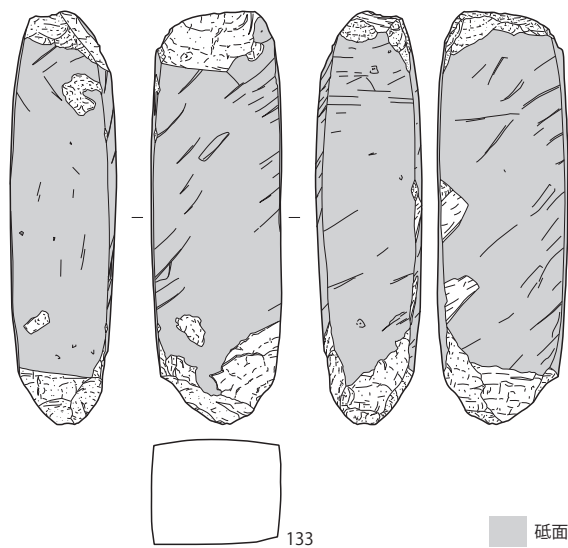
SE316



132

■ 木釘 ■ 樹皮

SE317



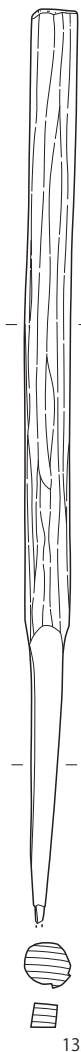
133

■ 砥面

SK304

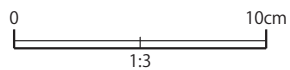


134

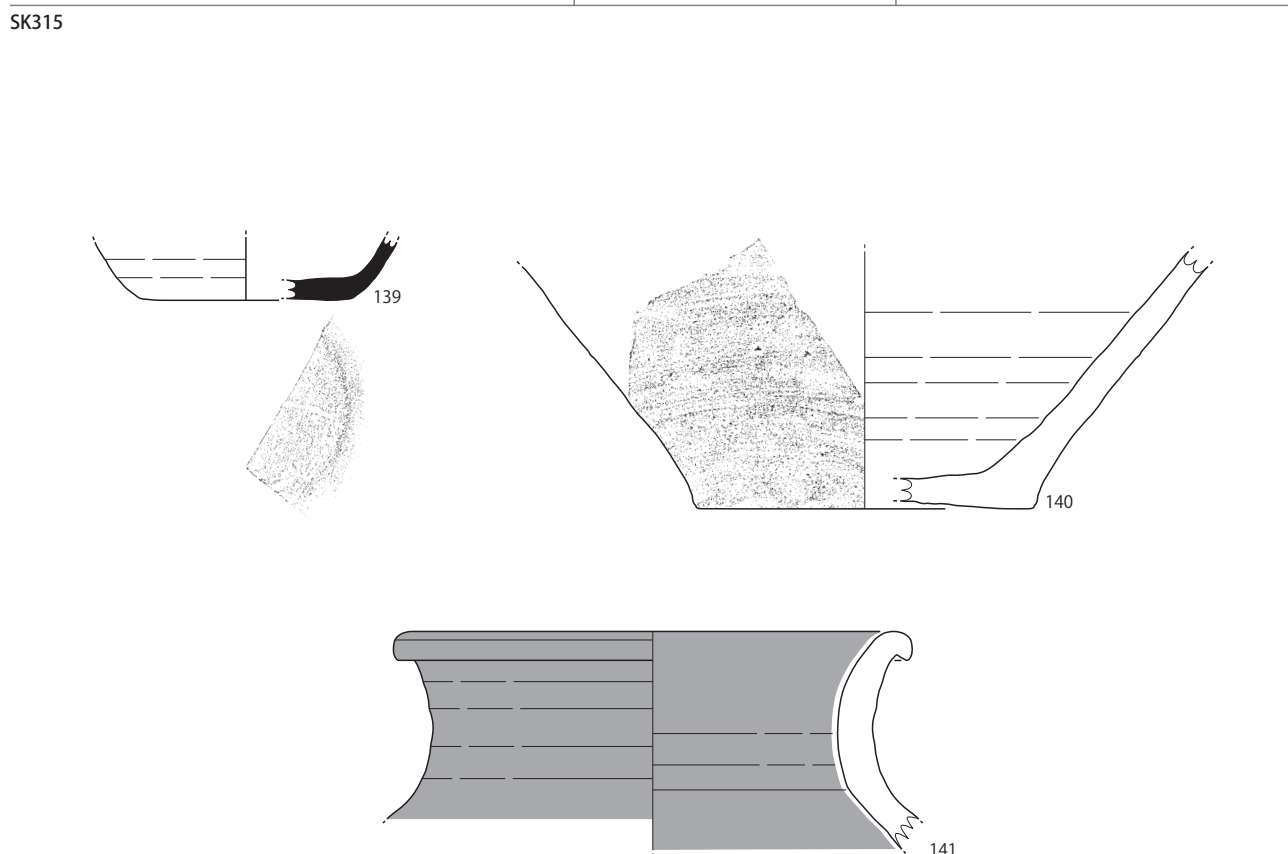
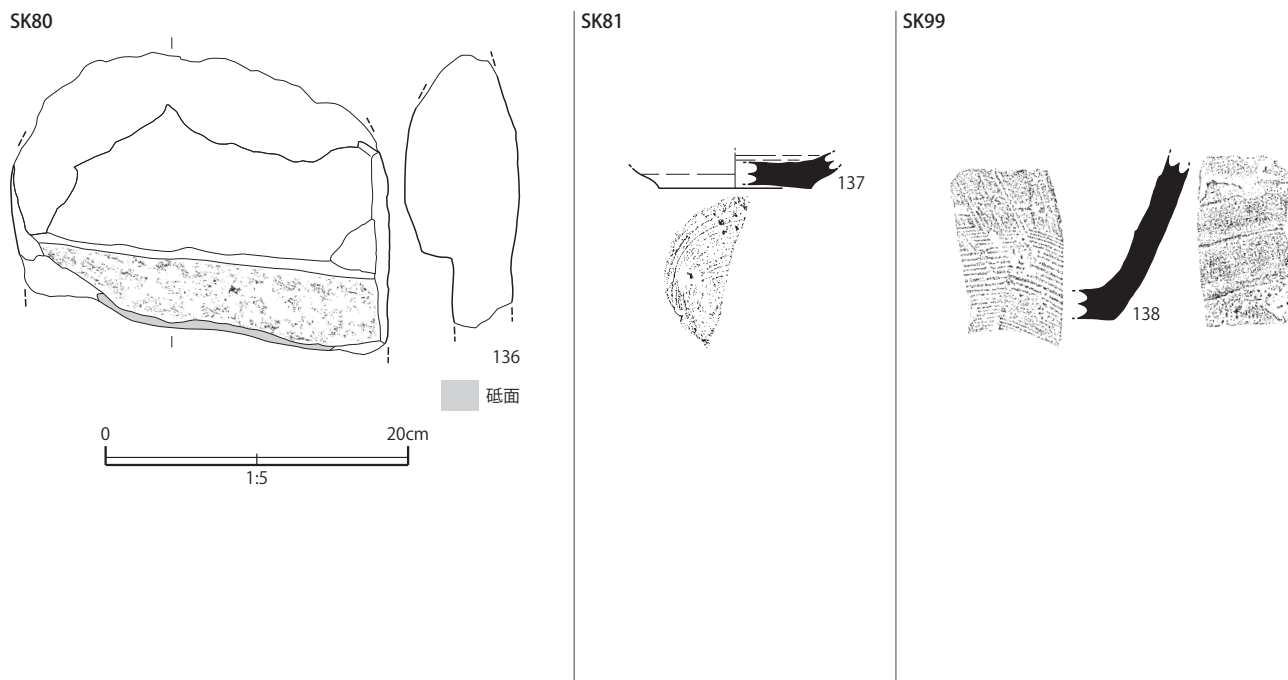


135

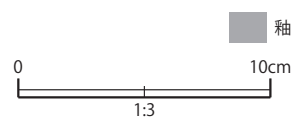
- 130 SE6 須恵器 蓋
- 131 SE316 台石
- 132 " 指物
- 133 SE317 砥石
- 134 SK304 須恵器 無台坏
- 135 " 木製工具



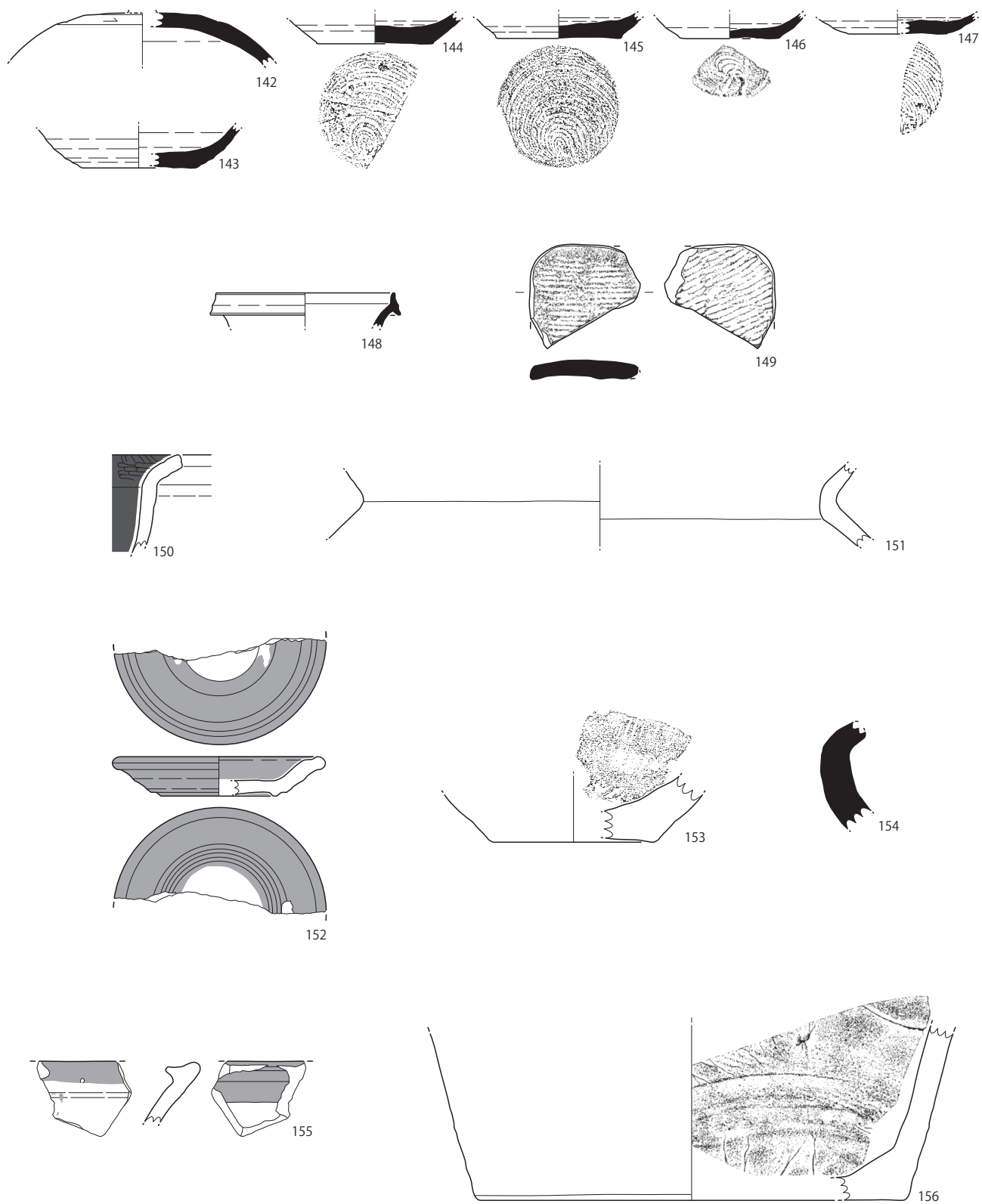
第 88 図 井戸 SE6・316・317, 土坑 SK304 の須恵器, 石製品, 木製品



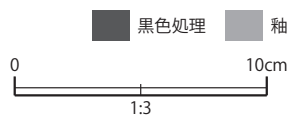
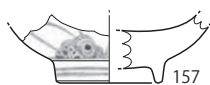
- 136 SK80 板碑
- 137 SK81 須恵器 無台坏
- 138 SK99 須恵器系陶器 壺
- 139 SK315 須恵器 無台坏
- 140 " 陶器 搗鉢
- 141 " 信楽焼陶器 壺



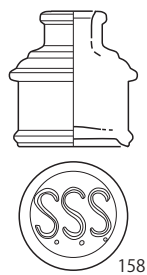
第 89 図 土坑 SK80・81・99・315 の板碑，須恵器，陶器



- 142 須恵器 蓋
- 143~147 須恵器 無台坏
- 148 須恵器 長頸壺
- 149 須恵器 盤状土製品
- 150・151 土師器 甕
- 152 瀬戸美濃陶器 折縁皿
- 153 瓷器系陶器 播鉢
- 154 瓷器系陶器 甕
- 155 岸窯産 播鉢
- 156 陶器 甕
- 157 肥前磁器 碗



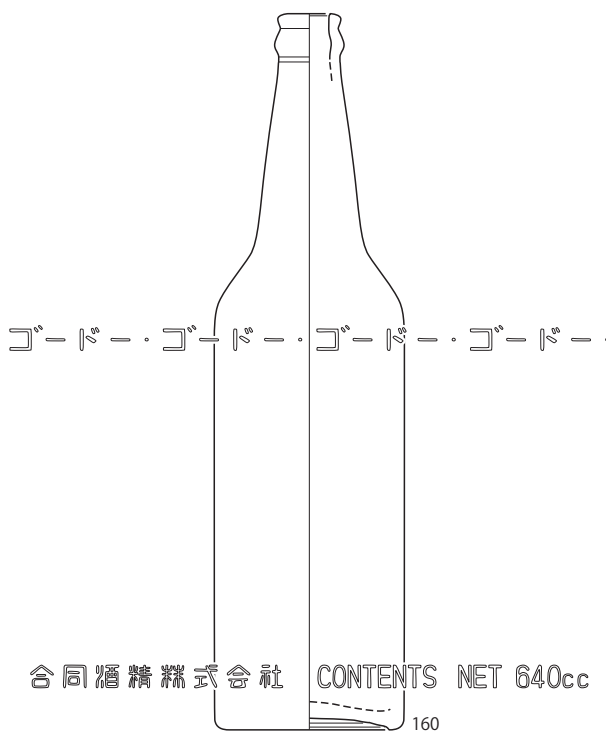
第90図 溝SD1出土の須恵器，土師器，陶磁器



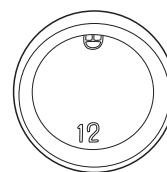
158



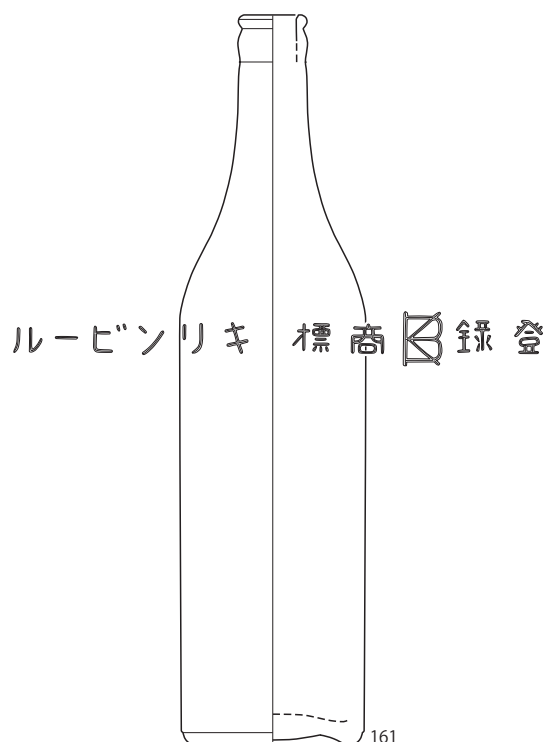
159



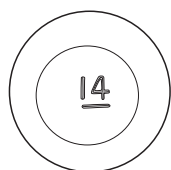
160



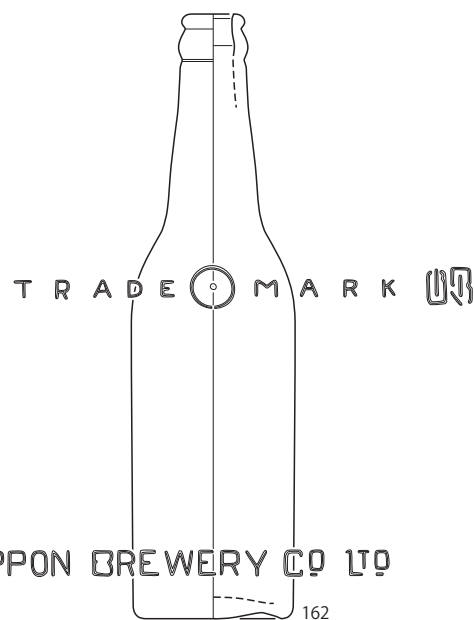
12



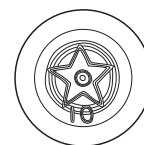
161



14

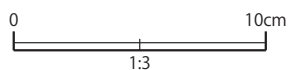


162

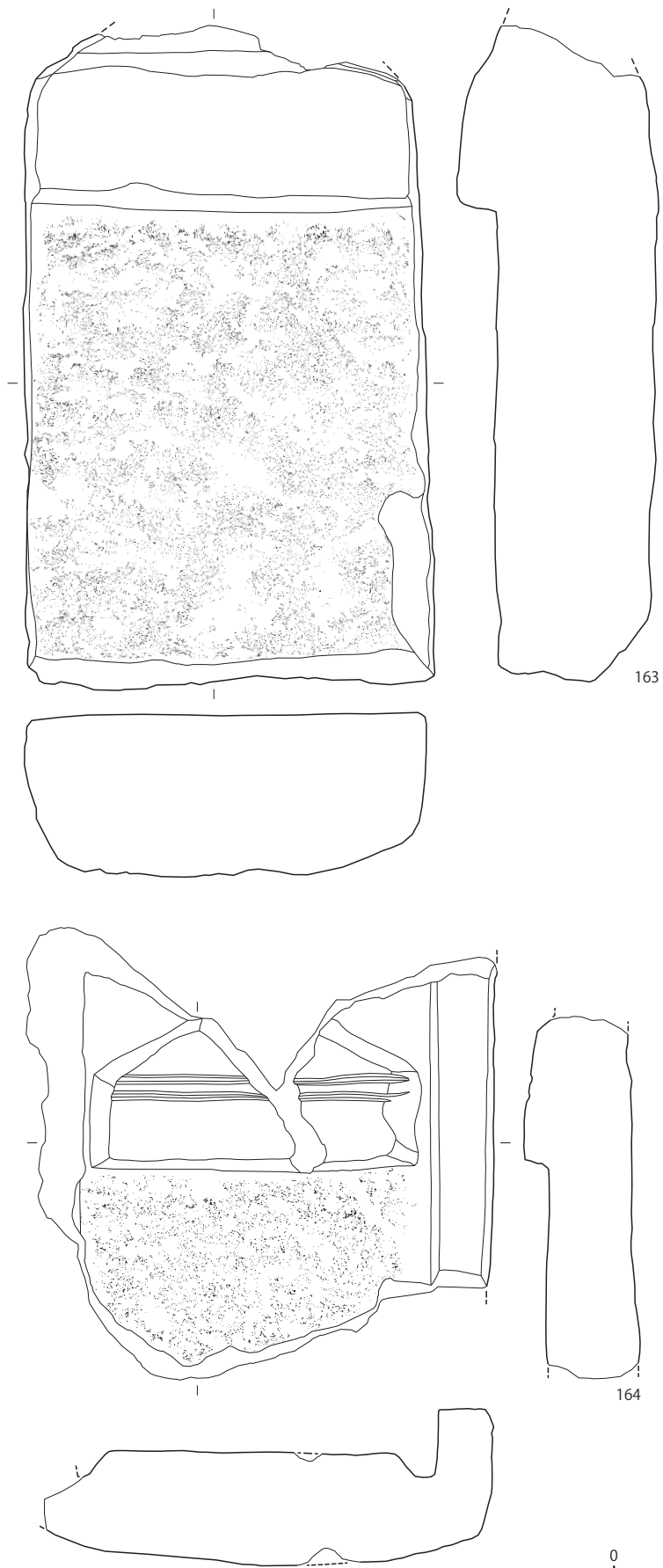


16

- 158 インク瓶
- 159 薬瓶
- 160・161 大瓶
- 162 中瓶



第 91 図 溝 SD1 出土のガラス製品

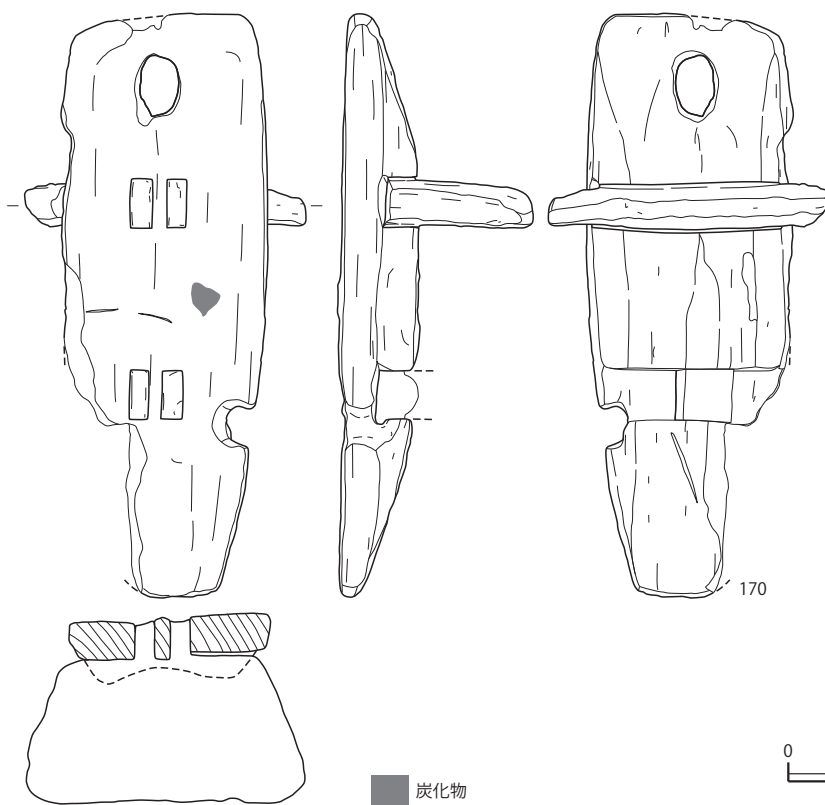
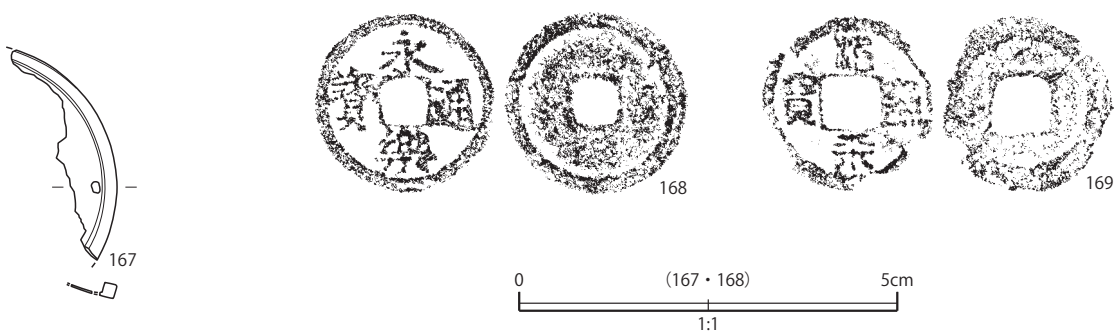
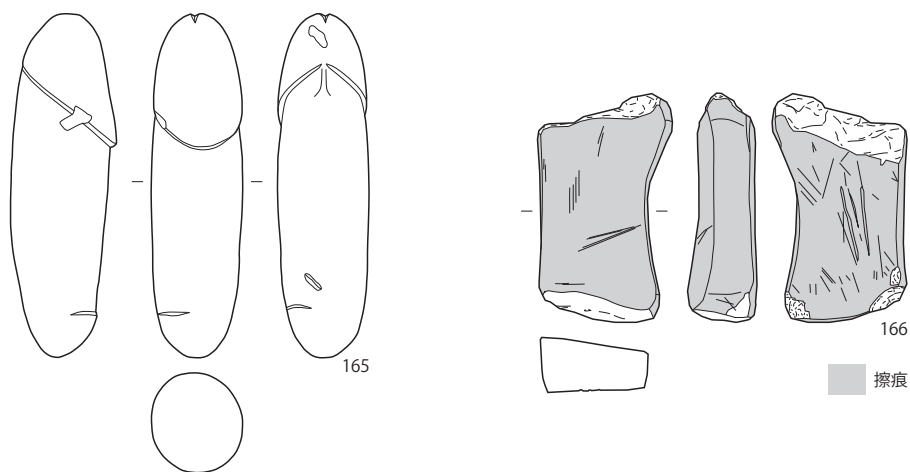


163

164

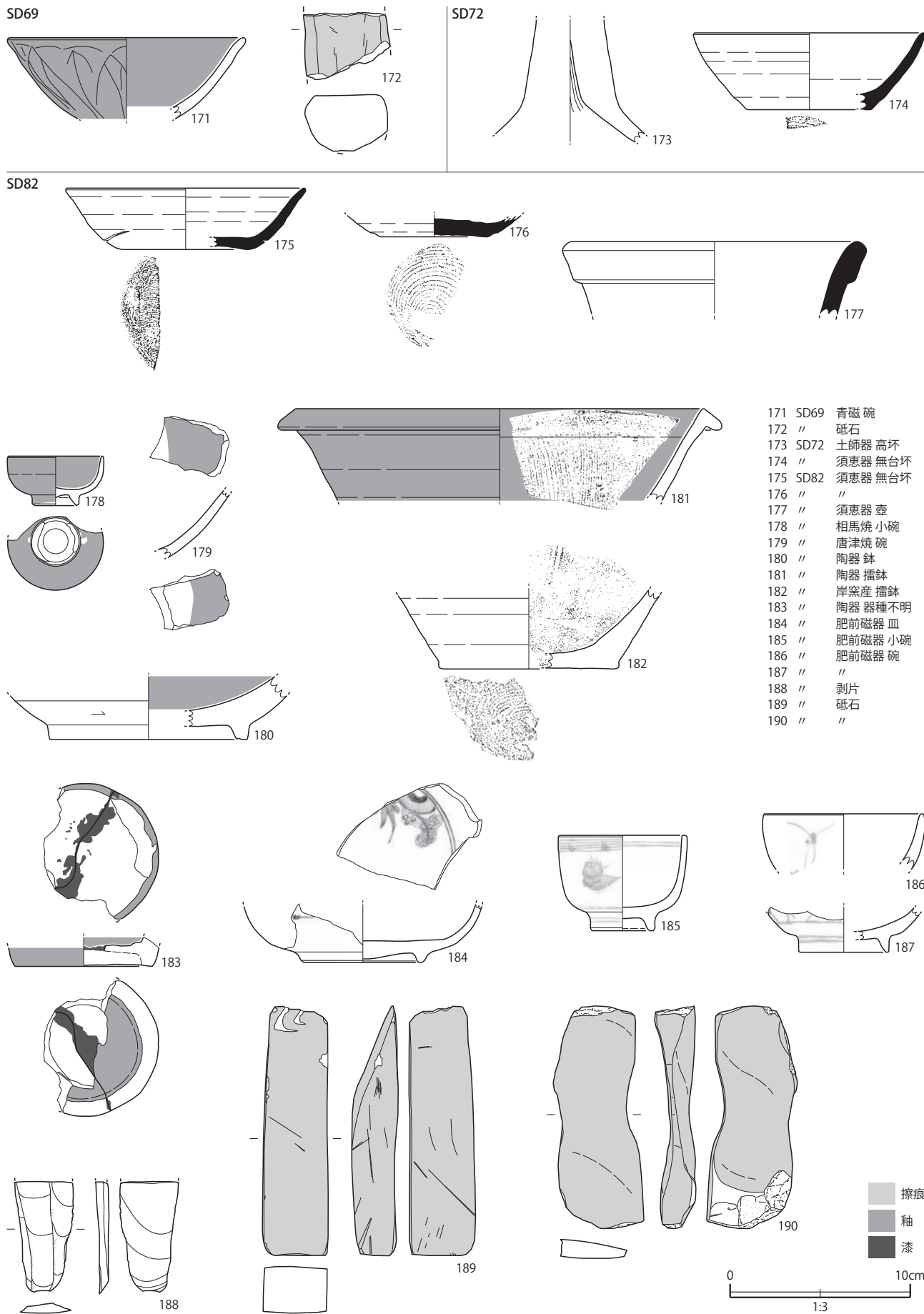
0 20cm
1:5

第92図 溝SD1出土の板碑



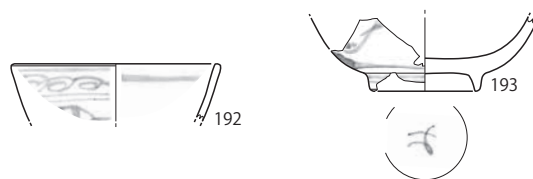
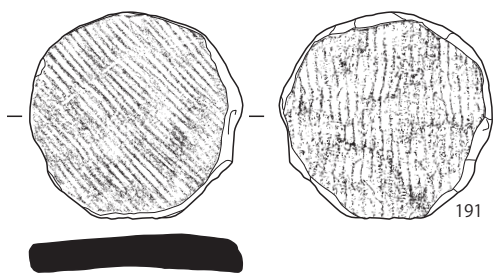
- 165 陽物
- 166 砥石
- 167 柄鏡
- 168 永樂通寶
- 169 治平通寶
- 170 差齒下駄

第 93 図 溝 SD1 出土の石製品, 金属製品, 木製品

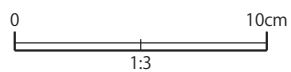
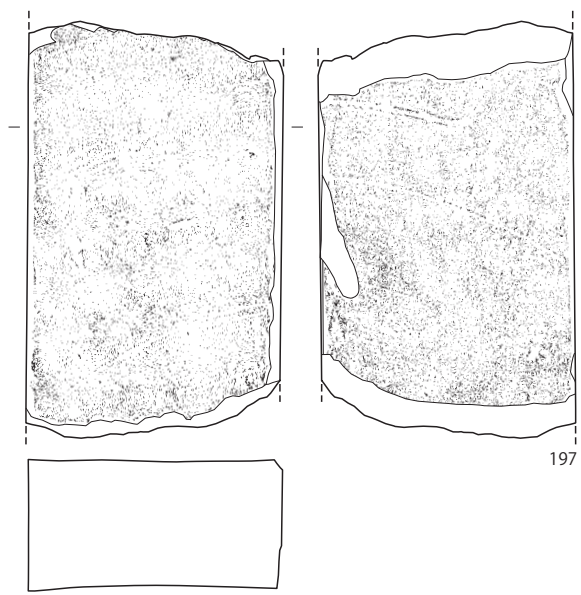
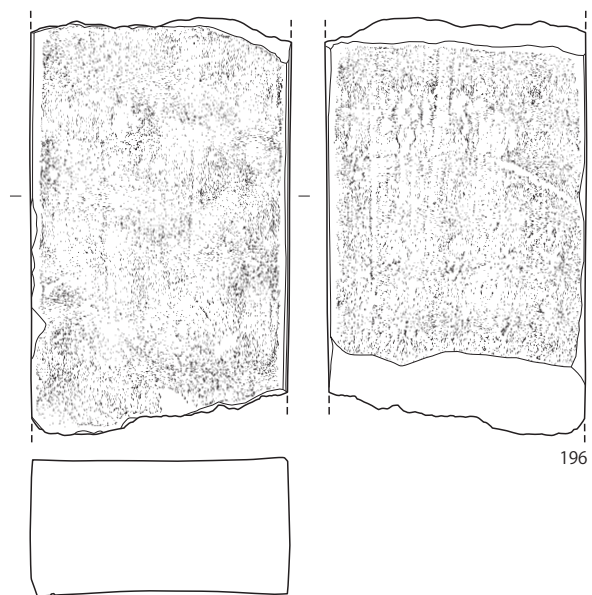
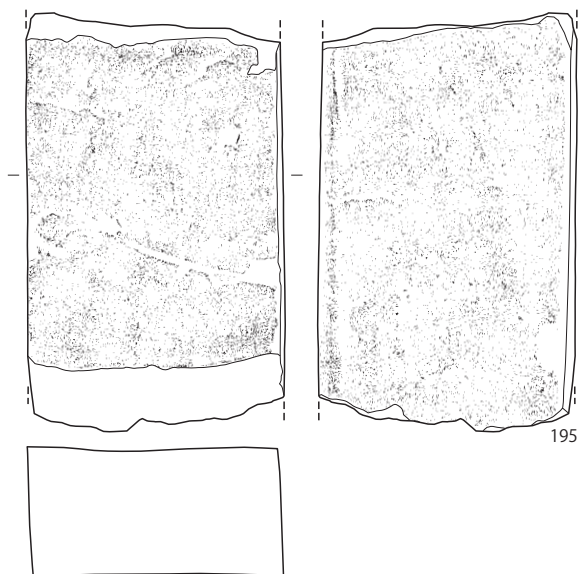
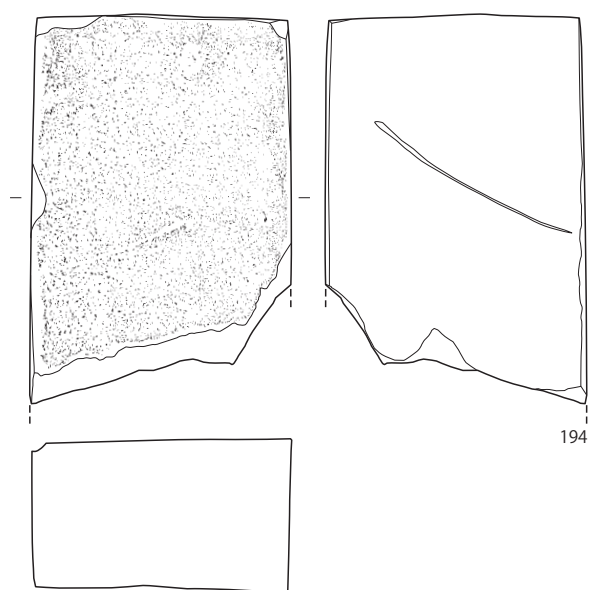


第 94 図 溝 SD69・72・82 出土の土師器，須恵器，陶磁器，石器，石製品

SD83

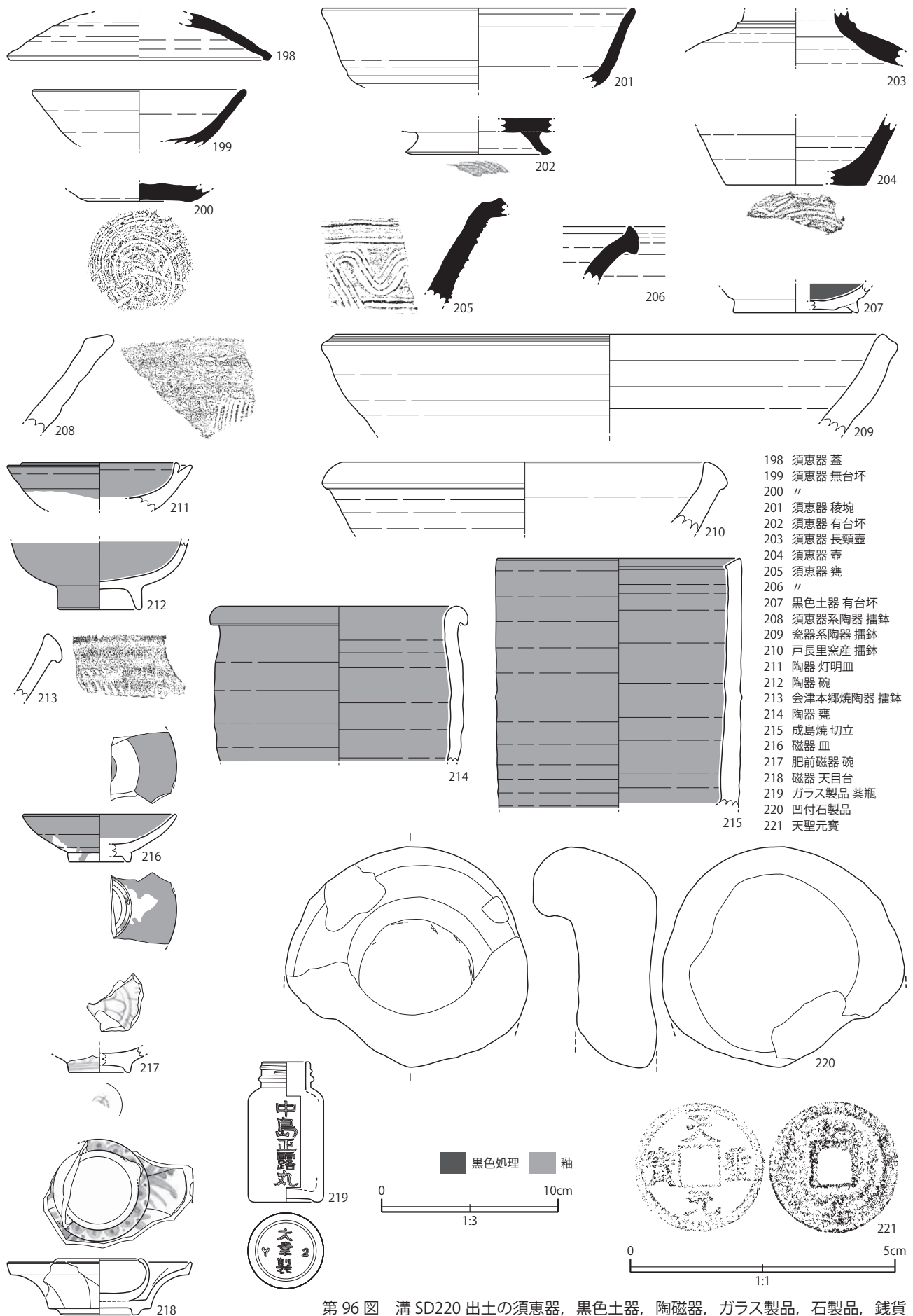


SD219

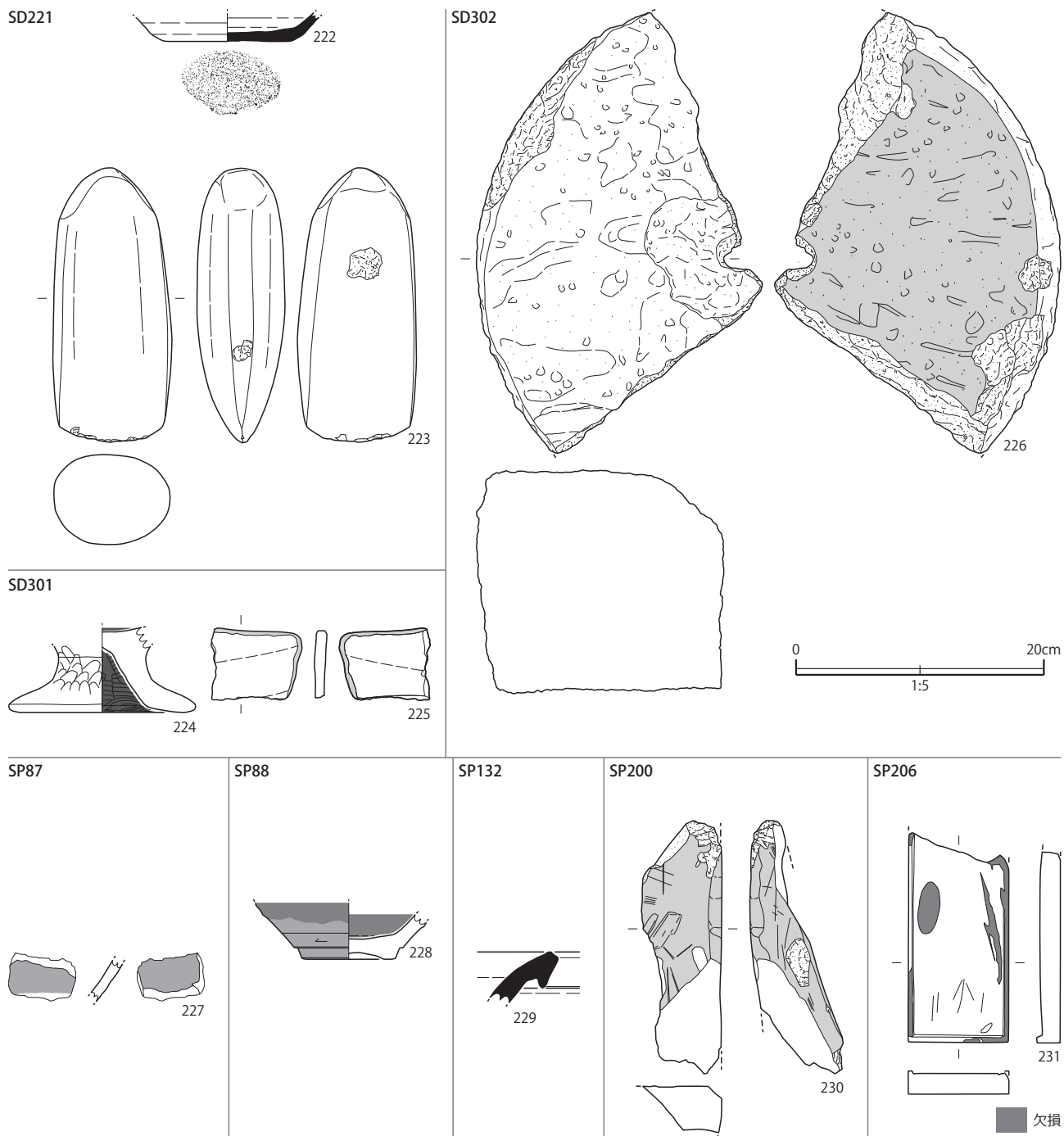


- 191 SD83 須恵器円盤状土製品
- 192 " 中国産磁器碗
- 193 " 肥前磁器碗
- 194~197 SD219 レンガ

第95図 溝SD83・219出土の須恵器、磁器、レンガ



第96図 溝SD220出土の須恵器，黑色土器，陶磁器，ガラス製品，石製品，銭貨



- 222 SD221 須恵器 無台坏
- 223 " 大型蛤刃石斧
- 224 SD301 土師器 高坏
- 225 " 須恵器 転用砥
- 226 SD302 石白
- 227 SP87 陶器 平碗
- 228 SP88 瀬戸美濃陶器 天目茶碗
- 229 SP132 須恵器 壺
- 230 SP200 砥石
- 231 SP206 硯

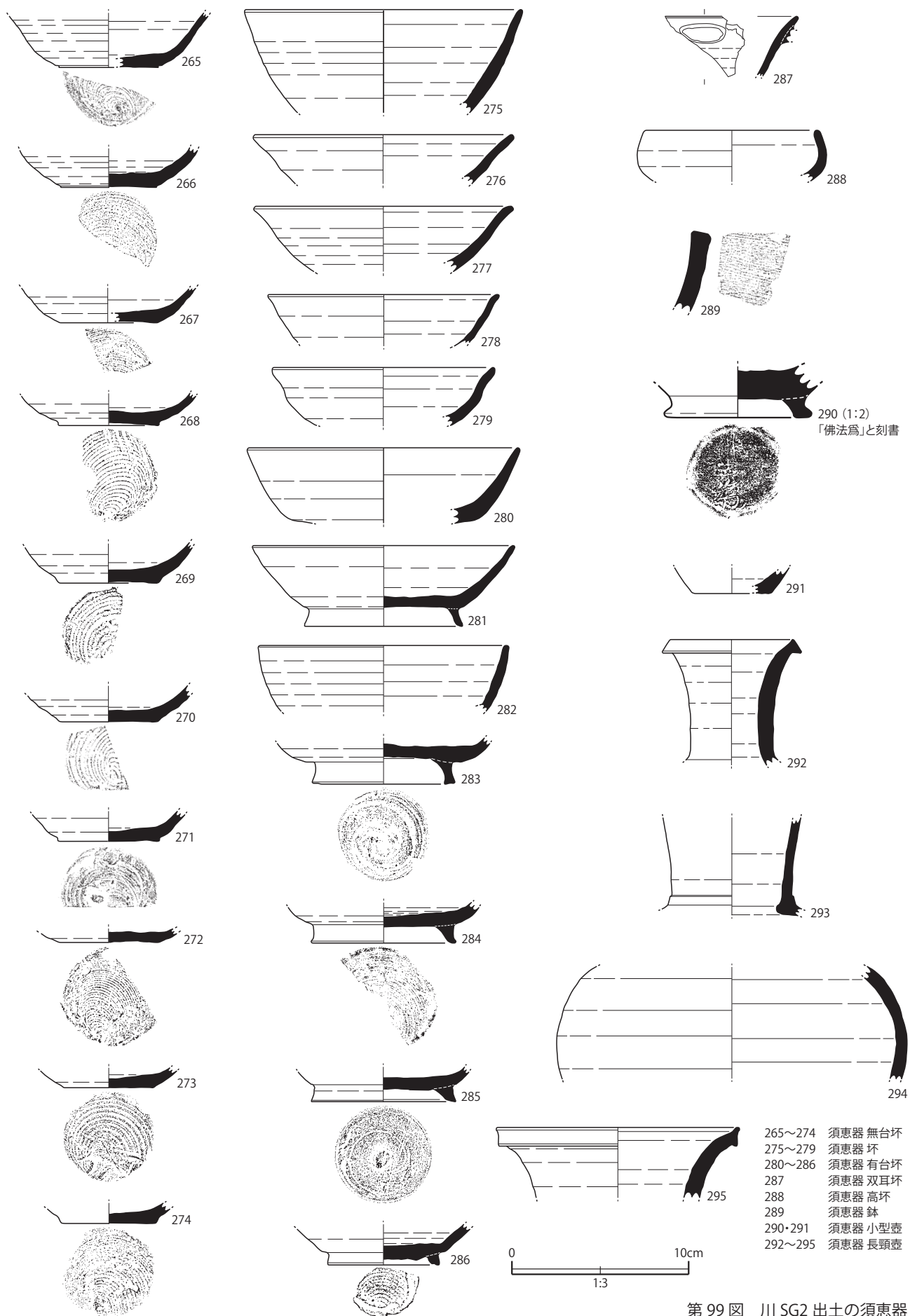
黑色処理
 擦痕 釉 鉄釉

0 10cm
 1:3

第 97 図 溝 SD221・301・302, ピット SP87・88・132・200・206 出土の土師器, 須恵器, 陶器, 石器, 石製品

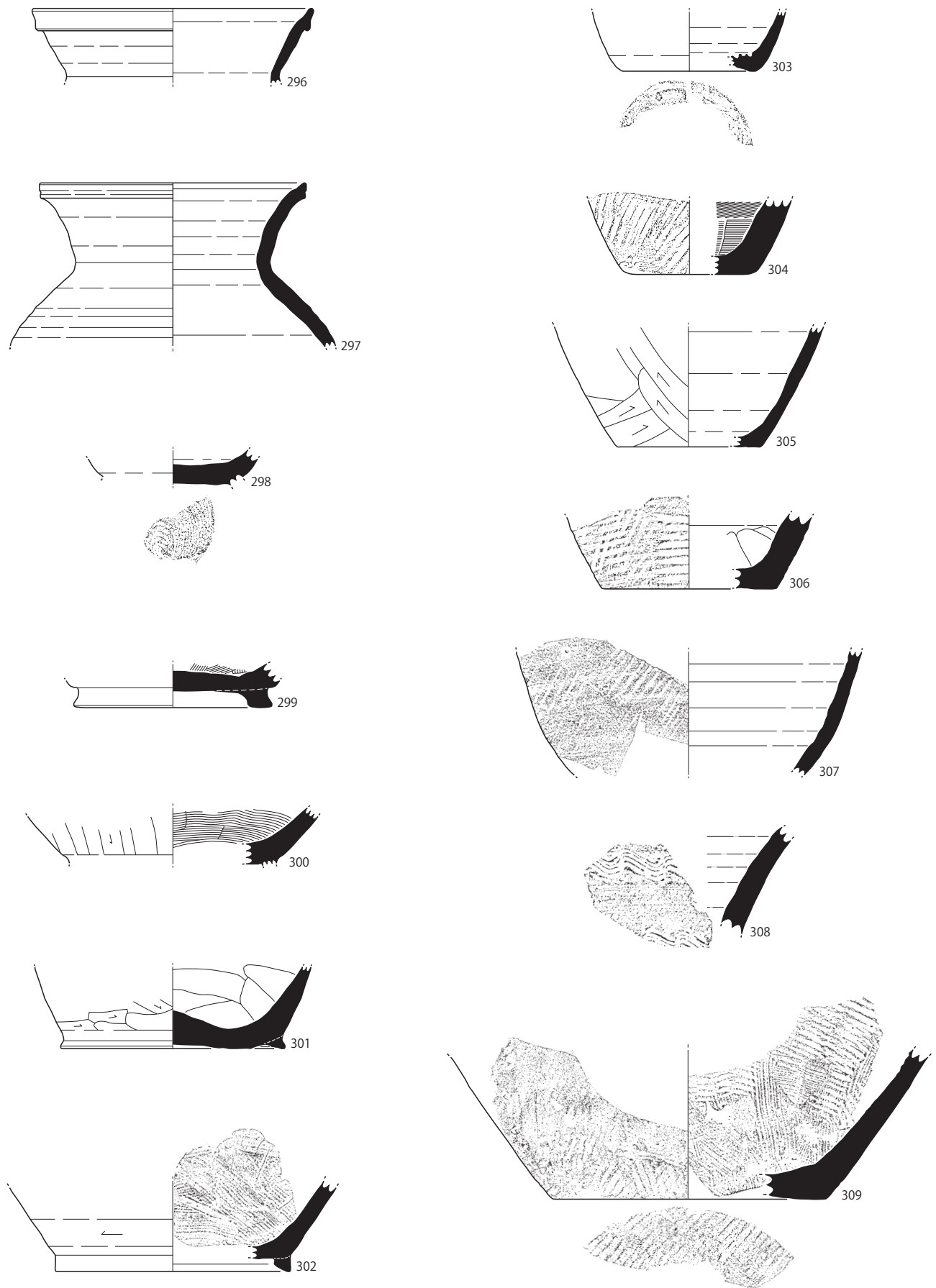


第 98 図 川 SG2 出土の土師器，須恵器

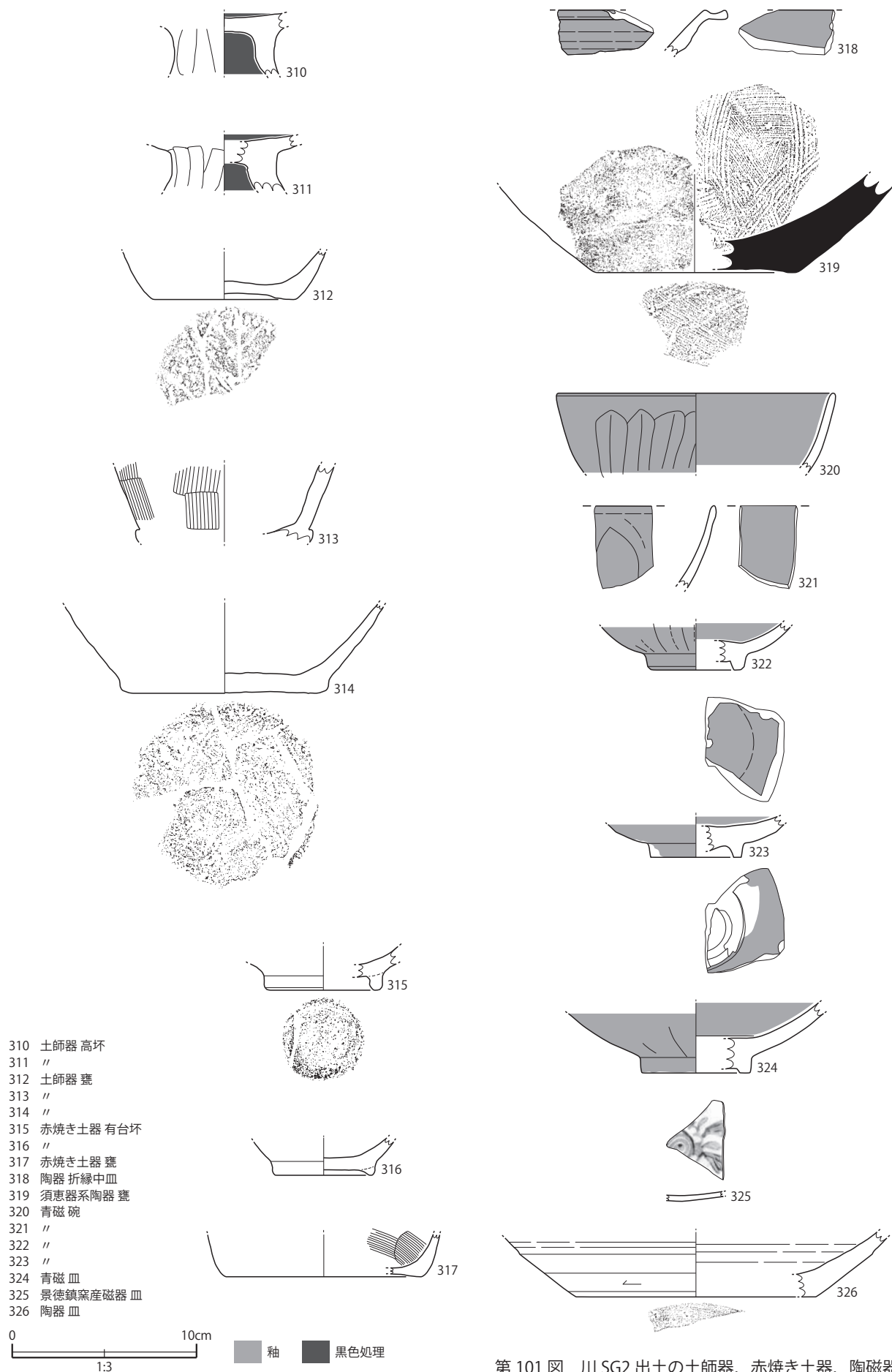


- 265~274 須恵器 無台坏
- 275~279 須恵器 坏
- 280~286 須恵器 有台坏
- 287 須恵器 双耳坏
- 288 須恵器 高坏
- 289 須恵器 鉢
- 290・291 須恵器 小型壺
- 292~295 須恵器 長頸壺

第 99 図 川 SG2 出土の須恵器



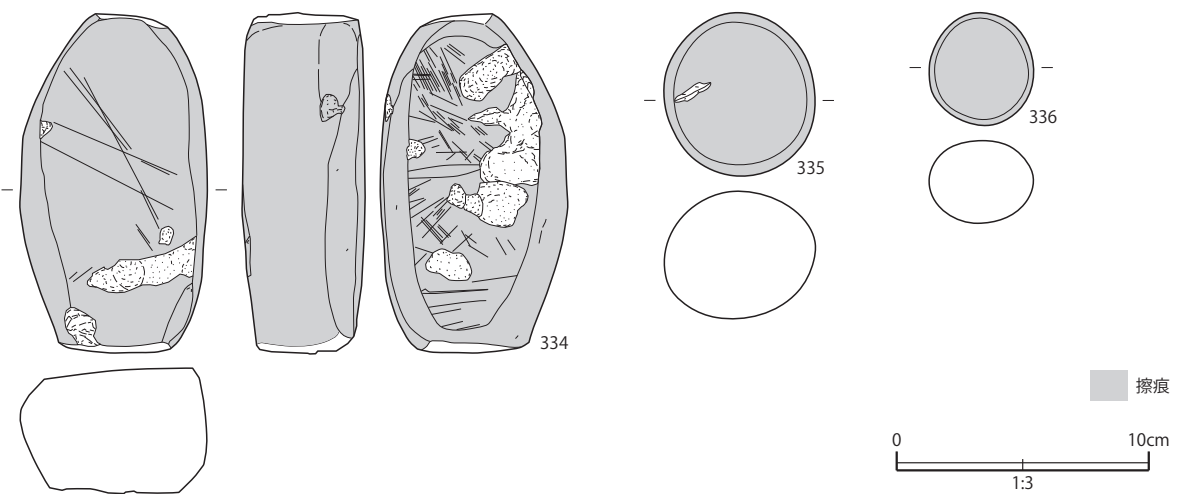
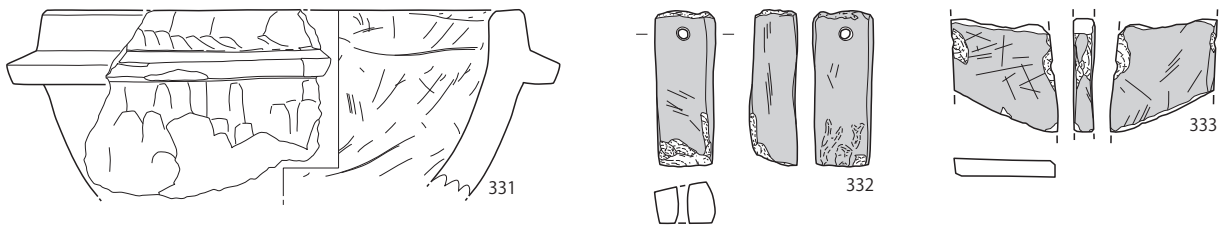
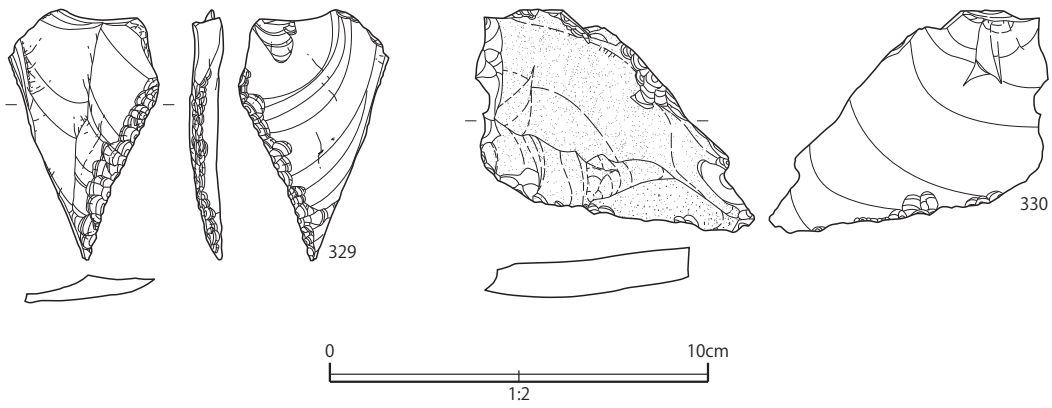
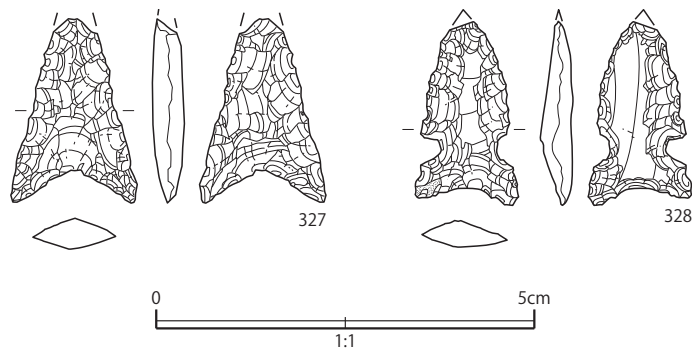
第 100 図 川 SG2 出土の須恵器壺 (296 ~ 307) ・甕 (308 ・ 309)



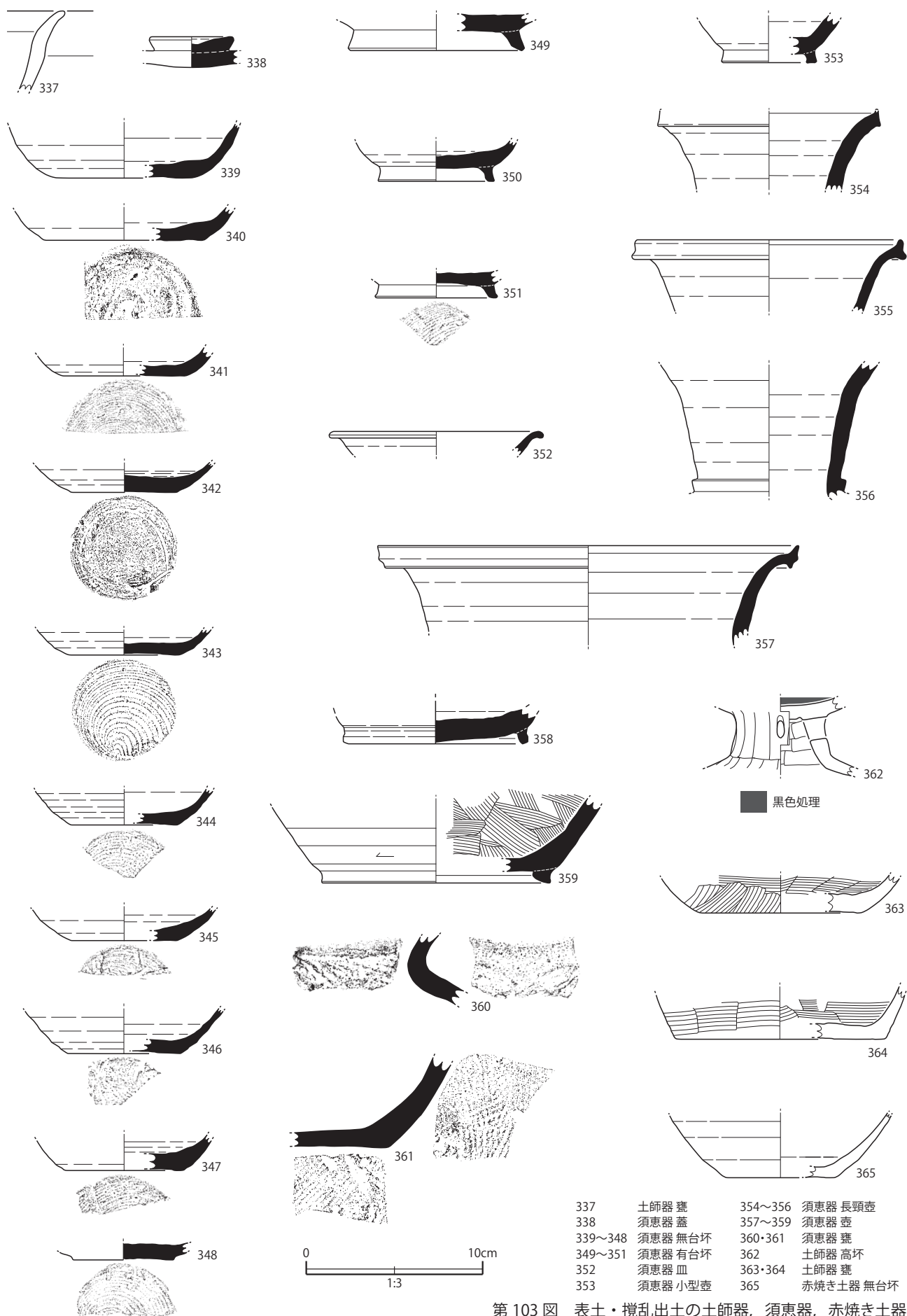
- 310 土師器 高坏
- 311 "
- 312 土師器 甕
- 313 "
- 314 "
- 315 赤焼き土器 有台坏
- 316 "
- 317 赤焼き土器 甕
- 318 陶器 折縁中皿
- 319 須恵器系陶器 甕
- 320 青磁 碗
- 321 "
- 322 "
- 323 "
- 324 青磁 皿
- 325 景德鎮窯産磁器 皿
- 326 陶器 皿

第 101 図 川 SG2 出土の土師器，赤焼き土器，陶磁器，青磁

- 327 凹基無茎鏃
- 328 アメリカ式石鏃
- 329 石錐
- 330 剥片
- 331 石鍋
- 332~334 砥石
- 335~336 球状石製品

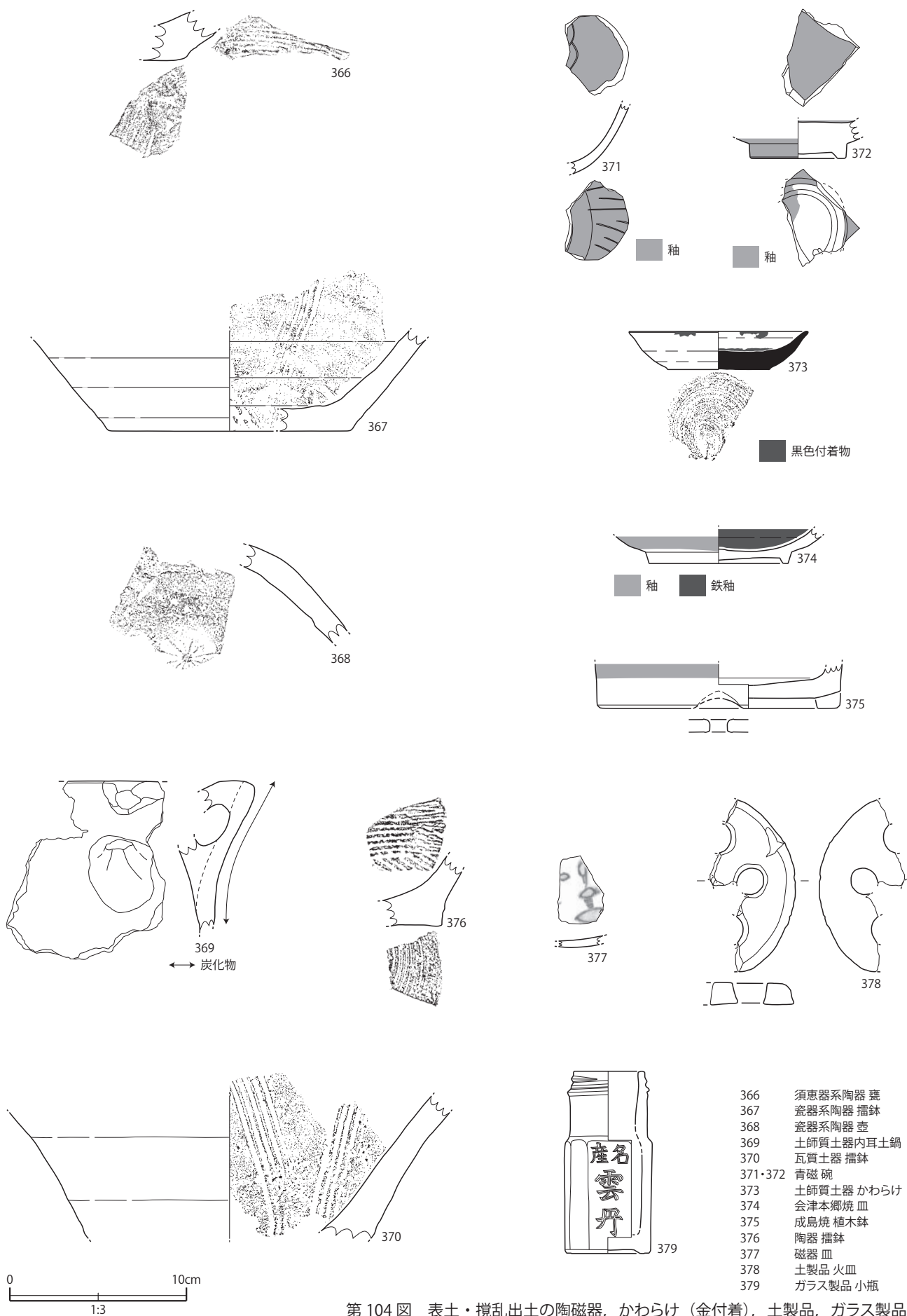


第102図 川SG2出土の石器，石製品



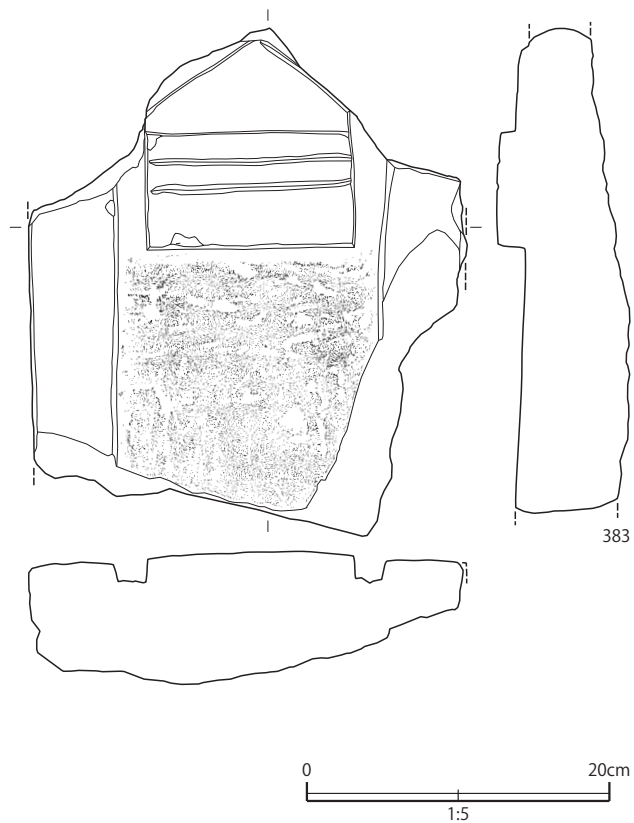
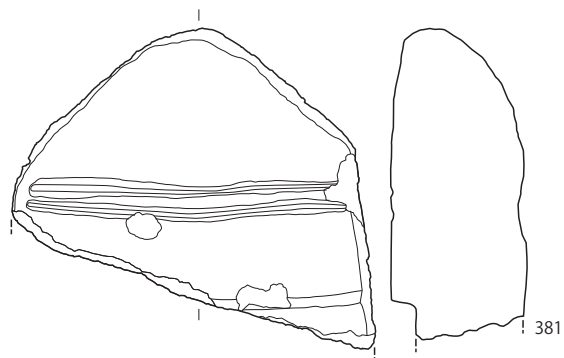
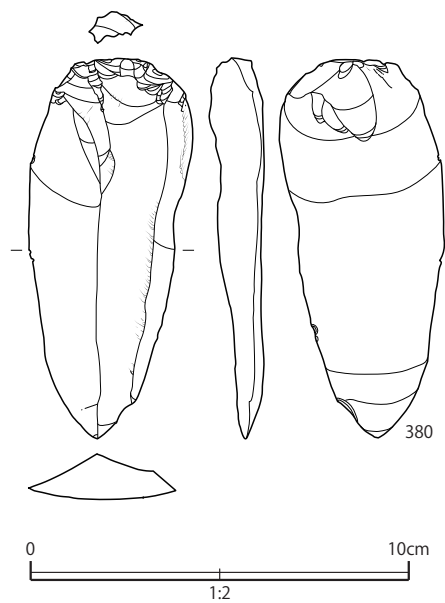
- | | |
|-----------------|-----------------|
| 337 土師器 甕 | 354~356 須恵器 長頸壺 |
| 338 須恵器 蓋 | 357~359 須恵器 壺 |
| 339~348 須恵器 無台坏 | 360・361 須恵器 甕 |
| 349~351 須恵器 有台坏 | 362 土師器 高坏 |
| 352 須恵器 皿 | 363・364 土師器 甕 |
| 353 須恵器 小型壺 | 365 赤焼き土器 無台坏 |

第 103 図 表土・攪乱出土の土師器，須恵器，赤焼き土器

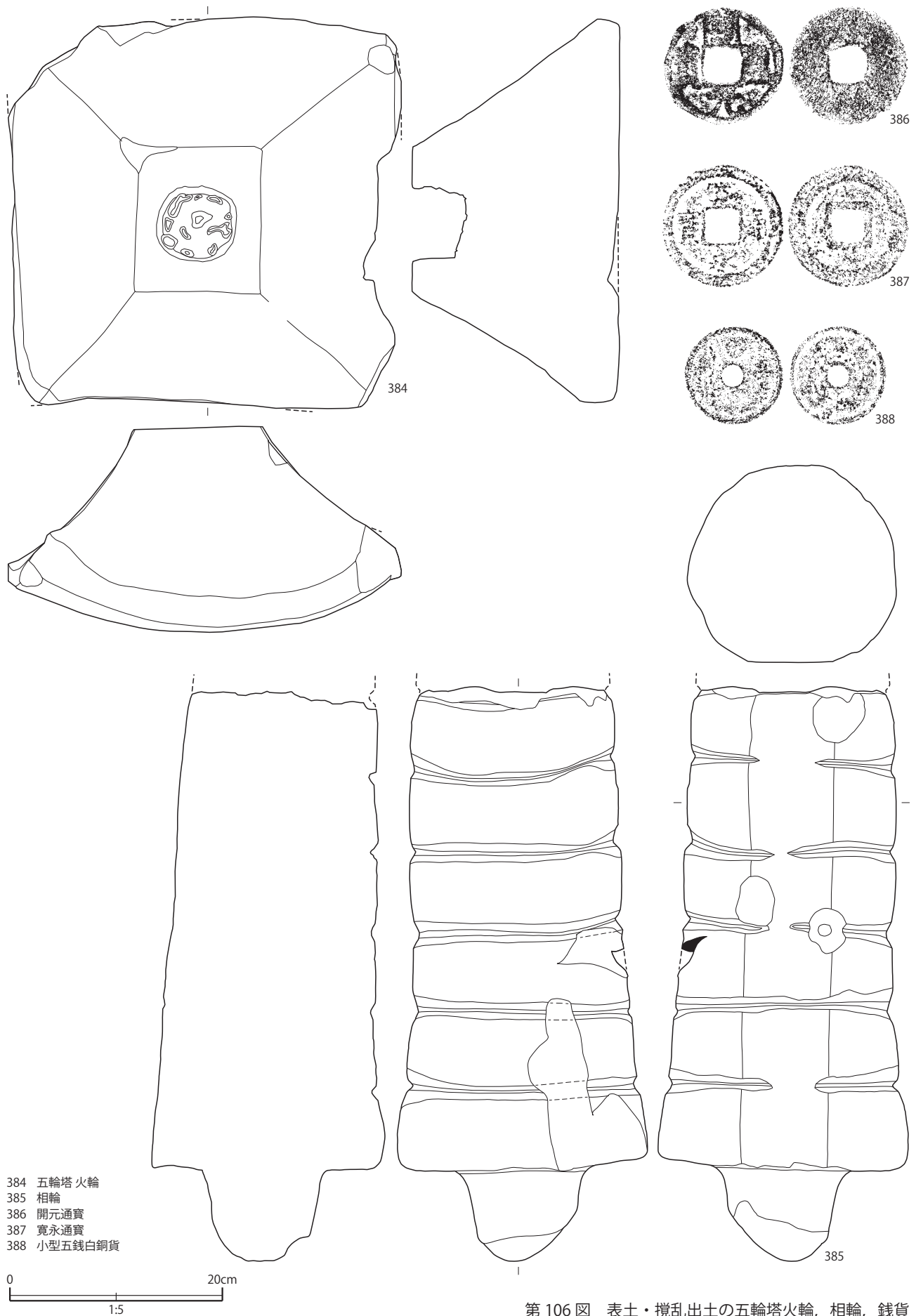


- 366 須恵系陶器 壺
- 367 瓷器系陶器 播鉢
- 368 瓷器系陶器 壺
- 369 土師質土器内耳土鍋
- 370 瓦質土器 播鉢
- 371-372 青磁碗
- 373 土師質土器 かわらけ
- 374 会津本郷焼 皿
- 375 成島焼 植木鉢
- 376 陶器 播鉢
- 377 磁器 皿
- 378 土製品 火皿
- 379 ガラス製品 小瓶

第104図 表土・攪乱出土の陶磁器，かわらけ（金付着），土製品，ガラス製品



第105図 表土・攪乱出土の剥片(380), 板碑(381~383)



- 384 五輪塔 火輪
- 385 相輪
- 386 開元通寶
- 387 寛永通寶
- 388 小型五錢白銅貨

第106図 表土・攪乱出土の五輪塔火輪，相輪，銭貨